治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可
治四十年七月五日発行（毎月一回五日発行）

# 女學世界



第七巻
第十號

博文館發行



旅行用品一式
鞄、化粧函、洋傘、ステツキ、空氣枕、毛布、羽根布團、携帶食器を始め、旅行に必要なる品々、種々取揃置申候間、御注文被下度願上候
倘、夏季流行品を圖解せる美麗なる夏衣裳の卷と題する、御注文案内書印刷出來候間、御一報次第御送呈可申上候
（振替貯金口座番號三〇〇〇番）
東京日本橋駿河町
三越呉服店

# 女學世界 目次

第七巻第拾號


THE BEST POCKET MEDICINE
SEIKAIGAN

# 大西白牡丹

東京市南傳馬町　　電話本局三十番

イ



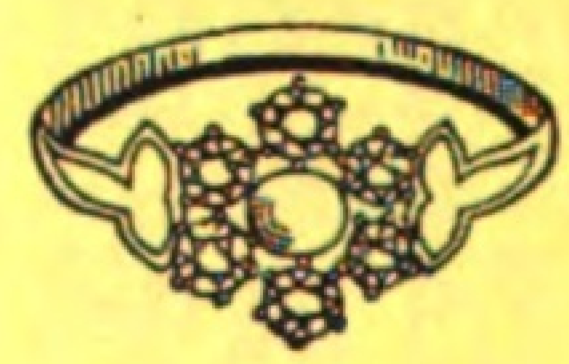
イ號　十八金眞珠三個入指輪　甲價拾五圓　乙價拾二圓

ニ



ニ號　廿金櫻の圖ルビー入彫刻指輪　價拾二圓

ロ



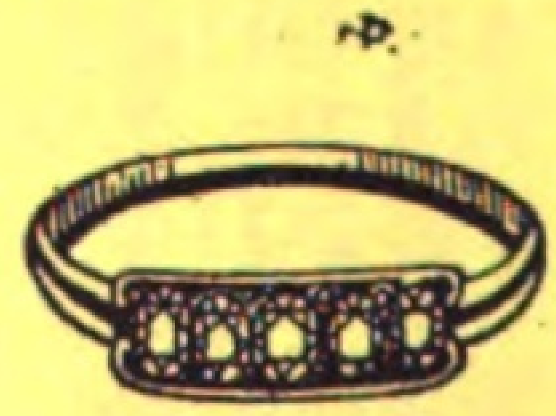
ロ號　十八金眞珠ルビー六個入指輪　價貳拾五圓

ホ



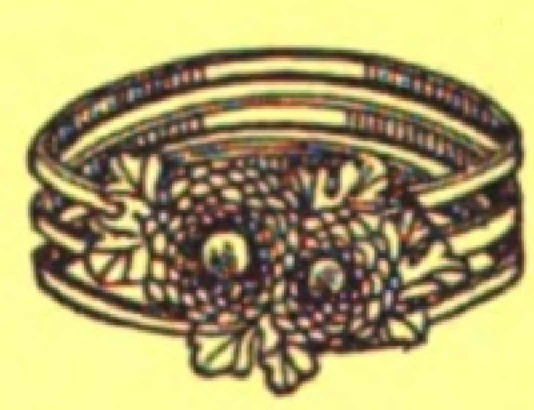
ホ號　廿金及白金百合の圖ルビー入指輪　價貳拾三圓

ハ



ハ號　十八金ルビー又ハサフハヤ五個入指輪　價拾八圓

ヘ



ヘ號　純金及十八金亮菊の圖・眞珠入指輪　價貳拾三圓

ト



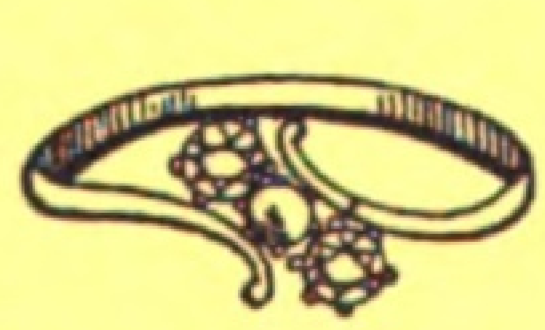
ト號　十八金ルビー眞珠入指輪　甲價拾六圓　乙價拾三圓

チ



チ號　十八金眞珠ルビー入　甲價貳拾圓　乙價拾五圓

リ



リ號　十八金眞珠ルビー入　甲價拾五圓　乙價拾二圓

(いの一)

## 大西白牡丹營業案内

送料郵券四錢御送付次第發送す




# ヘヤロール

## 束髪前髪じん

今回忝くも高貴令鳳の御用命を蒙りし夏氣衛生品

○一大注意　ヘヤロールは今や歐米に流行しつゝある束髪前髪じんなり、從來の毛製品は彼の忌むべき癩病患者又は肺病患者の遺髪の交りある憂ひありて衛生上恐るべきは勿論、常に欝陶しく頭部に痒みを起し果ては禿げる心配等ありて知らず〳〵一生の不幸を來す恐あり。

○本品の特長　ヘヤロールは細微なる金線にて製し軽きこと鳥羽の如く空氣の流通よければフケを生ぜず伸縮自在なれば大小の前髪になづみ　腦病又頭痛　の方には衛生上最有益の新輸入品です。

○類似の他品　ヘヤロールに僞し近頃針金のみにて製したる粗品あれど、本品は外部を優美なる絲網にて覆ひあれば毛を損じ又はスベリ出す憂ひなく最も上品の容姿を装ふべし。

○時季は來れり　今や追日酷暑の候、頭腦の清涼を欲し衛生を重ぜらるゝの御婦人方は一度本品を用ひて　幸　に満足を　得玉　はらんことを　希　ふ。

●定價一個三十八錢（送料八錢）●説明書は往復ハガキにて申込あれ

輸入元　東京々橋區鎗屋町一　日加商店　振替貯金八六六九

特約店　東京日本橋區橘町四 御園おしろい本舗 丸見屋商店
大阪東區南久寶寺町三 婦人小間物問屋 小栗小三郎

女（いの二）

七月一日より同十五日まで

# 景品附中元大賣出し

弊店今回東京勸業博覽會の開催に附ては勸業の主旨に基き誠意に出品は第壹號館内化粧品部第參號館内に半襟部貳陳列呉服部貳陳列織物部等の各部へ六陳列致し有之候御觀覽の節は何卒御留意被遊御觀評を下し給り度候出品之内御意に相叶ひ候得ば御高需の御求に應じ渾て出品物は何回にても御賣約の御受け可仕候出品物は本店に豫備致し有之候　敬具

登録商標

夏季節　嶄新柄

## 半襟帶揚類

魁嶄　新柄　特色　案出

夏季節柄は草花鳥水景模樣染刺繡絞り柄

○本季節用肩掛　レースショール獨特製　數類有

○長襦袢染模樣絞り模樣○羽折肩裏友染絞り形

○片側帶染模樣絞り模樣○各本場單帶地○丸帶

○兵兒帶絞り形嶄新染色○裾模樣染け出し裾除

○廣ダービーチクタイ○本場博多伊達卷下〆

○嶄新別染 **浴衣地** 木綿縮　絽眞岡

○生粹高尙　明石縮　絹紅梅

**本店は**　新橋竹川町十二　電話二〇一七　**ゑり治**

**支店は**　神田表神保町壹　電話本局九五二　**ゑり治**

博覽會賣店　池之端雪見橋寄り　ゑり治即賣店

**出店は二ヶ所**　新橋際　博品館内階下　ゑり治店　麹町區内山下町五二館内ゑり治店

---

農商務省實用新案登録允請

輕便自用

# 新案美顏器

## 夏季の化粧は是に限る

大流行の美容具

## 顏の美しくなる器械

本器は近來上流社會及花柳界に於て大流行せる最新式美顏具にして發賣以來各新聞紙及實驗者の賞賛を博せる事は爰に喋々を要せず使用法頗る簡易輕便にして婦女子兒童と雖も隨意に即席に應用し得て如何ほど色黒き醜き人にても忽ちに艶美白色驚くべき佳麗の美顏に變化す所謂烏を鷺に變ずとは本器の効能ならん論より證據一度試用せば奏効の奇絶瞬速なる眞に驚くの外なし

器械　美顏コップ壹　美顏ロール組　壹圓貳拾錢

附屬化粧　美顏クリーム　美顏ポーターー、ホワイ　五拾錢

送料拾貳錢　代金引換廿八錢

本器には使用方法 **美顏術秘傳書** 無代添呈

製造專賣元　大阪市東區兩替町壹丁目　**錦花堂**

---

## 編物夏期講習開設

普通部七八月束脩免除

## 普通學教授

女子ニ限ル　午後三時ヨリ

神田猿樂町二ノ一天主教會向　近藤編物教授所

---

## 圖書目録

御入用の方は往復葉書で申越あれ直ぐ送ります

東京本町　**博文館**


カメリヤ
洗粉(あらいこ)
カメリヤは色を白くし
艶をよくする最新最良の洗粉なり
カメリヤは優美なる香氣を
有し一度之れを用ゆれば芳
香永く身邊に薫りて自から
心氣爽快ならしむ
殊に貴紳淑女の
高等化粧料とし
て大に社會に高
評を博せらるゝ
本那唯一の洗
粉也
定價
大瓶 廿五錢
瓶入 十二錢
袋入 五錢
小袋 三錢
ライオン齒磨
發賣元
本舖
東京神田 小林富次郎

(いの四)

七夕



一條成美筆

女(ろの一)

女(ろの二)

登錄商標

# 佛國天然葡萄酒古「メドック」




此「古メドック」は佛國產純料の天然葡萄酒にて弊店に於て十有年來一手直輸入專賣するものに御座候此葡萄酒は藥用としても常用飲料としても慥に人體に有益あるものとして諸大醫及需用者諸彦の稱讃を辱ふし古「メドック」の名稱世に知らざるものなきに至りしは誠に仕合に奉存候然るに世間往々同一の名稱の葡萄酒を賣捌くもの有之候に付弊店の「古メドック」には印の商標を印し有之候間御注意御買求被下度候●御注文之品は直ちに御屆可致候●代價表は御申越次第進呈す

海外直輸出入
和洋酒食料品商
東京新橋竹川町
三組屋 大塚琢造
電話新橋七三六番

---

妾事小供の時より薄毛にて種々の藥を試みしも効なかりし所洋行中なりし醫學博士令夫人より奇藥を得是迄の薄毛も濃くなり又毛の生へざりし所迄毛生へし嬉しさの餘り困る方に告たし三錢郵券を添へ御照會あれ




東京市京橋區越前堀　河村愛子

---

# 肺病者救濟

アドロフ博士新發見肺結核治療法は醫界**新紀元**也我國に傳へ公私病院長二十七名の醫家實驗**不思議**の効果を確認せる全治報告並根治療法根治藥名詳說の雜誌を同胞患者救濟の爲**無代**ハガキで申込次第進上

東京市京橋區越前堀
**樂天堂藥房**

女(ろの三)

# 滋養新劑 グリコナール錠

本劑は醫學博士北里柴三郎氏指導の下に佐伯矩氏が牡蠣の滋養成分に就き研究の結果創製せるものなり本劑は滋養劑として病者及一般衰弱者に有効なるのみならず心臟を強め盜汗を治し速かに體力を恢復し元氣を旺盛ならしむる特異の効能ある事を多數の醫學者に證明せられたり……本劑の説明書は御申越に從ひ呈送す

# 消化新劑 タカヂアスターゼ

本劑は工學博士藥學博士高峰讓吉氏の發見に係る澱粉消化新藥なり我醫學諸大家が治療上に於ける本劑の効果に就き發表せられたる實驗報告を集載せる説明書は御希望に依り無代郵送す

本劑は粉末及錠劑各大小容器入として各地藥舖に販賣す類似品あり必す高峰氏タカヂアスターゼと御指定を乞ふ

發賣元 東京市日本橋區南茅場町貳番地 三共藥品合資會社

(ろの四)

涼風




大下藤次郎筆






(はの一)

(ばの二)

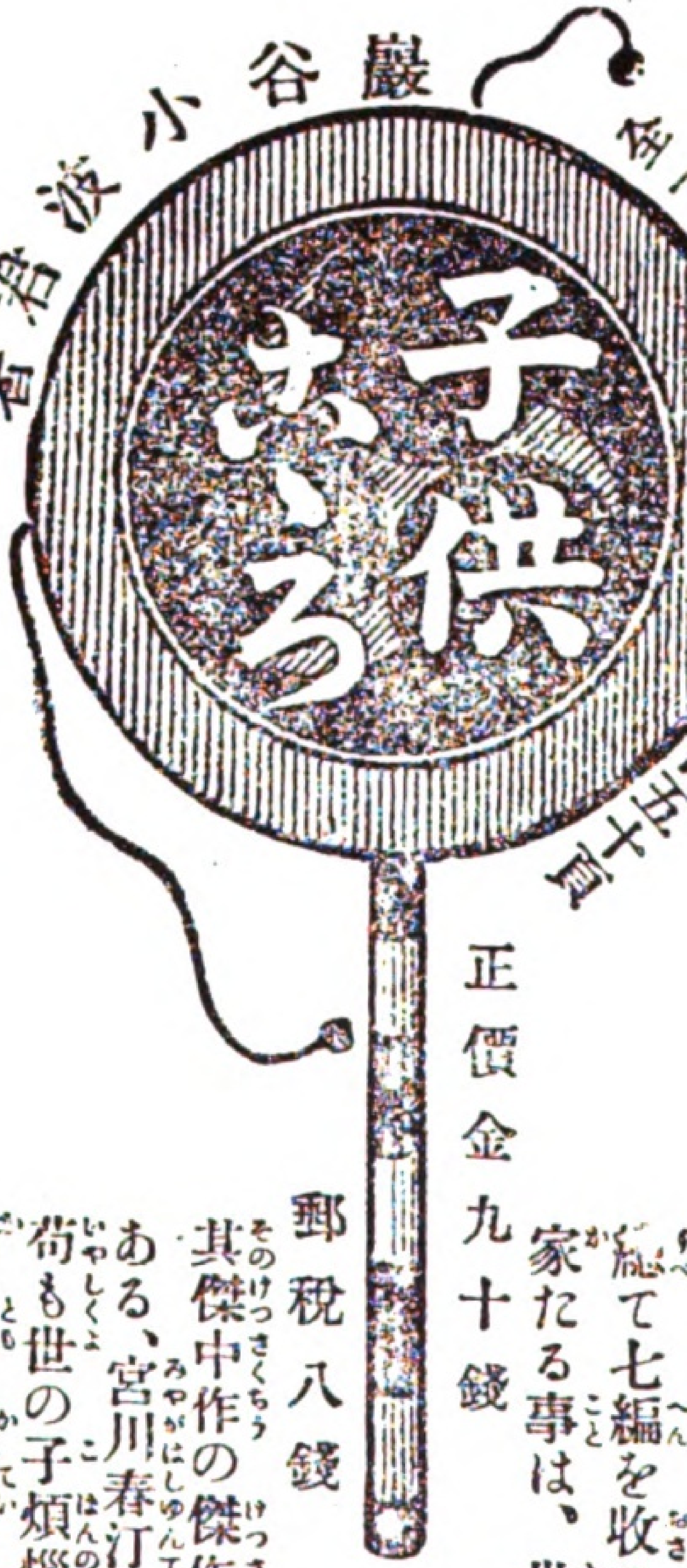
# 木村小舟君著

# 少年訓

全一冊袖珍美本
紙數二百五十頁
寫眞版四葉挿入
正價金貳拾五錢
郵税金四錢
（既刊發行）

講堂に於ける修身教授以外、家庭に於ける趣味豊富なる教材として茲に本書出づ、著者は多年少年教育に經驗ある人、巧みに現代少年社會の風潮を列記したれば、父兄教師は之に由つて、よく修身倫理の大綱を授くるを得べく、少年諸氏は之に由つて、よく品性美心の養成に資するを得ん。加ふるに著者一流の典雅流麗の筆致は、少年文を學ぶ士も、日夕座右の友となさば、得る所決して尠少ならざるべし、戰捷國の少年は須く之を讀め、二十世紀の少年は必ず之を繙け、而して後將來發展の基礎を定めんか、成効の花は正に其頭上に滿開せん。

巖谷小波君著




全一冊洋裝中判上製紙數三百五十頁

正價金九十錢
郵税八錢

題して『小供心』と云ふ。内容は大方判じ得べし。蓋し子供を主人公としたる、清新高雅なる家庭小説總て七編を收めたるもの是也。著者が當代のお伽作家たる事は、世已に定評あり。而もそれと同時に、巧みに少年少女を寫して、紙上に躍如たらしむる技量も亦文壇の珍とする所とす。本書の如きは、即ち其傑中作の傑作を集め、更に子供書を以て獨特に妙ある、宮川春汀氏の極彩色挿畫七葉を添えたるもの、苟も世の子煩惱者にして、此書を座右に置かざらん乎、共に家庭を語る可らず、共に兒愛を語る可らず。

（二の三）

東京 博文館 本町


衛生家必携
懐中良藥
ゼム
THE GEM
ゼム一粒の馥郁たる香氣と愛すべき美味とは一度用ひて終生忘るゝ能はざらしむ
故にゼムは廣く萬人に愛用せらる
ゼム二粒は煙草の味を美にし心神を爽快にし疲勞を減じ息切れを防ぎ渴を醫す故にゼムは外遊學生に愛用せらる
ゼム三粒は音聲を美くす音聲は美の一要素也故にゼムは紳士佳人に愛用せらる
ゼム五粒を食前食後に用ふれば食慾を增進し消化を助く故にゼムは衞生を重んずる士の常用劑として愛用せらる
ゼム十粒は異境に於ける風土病疾病食當り水傷りを治して神効あり舟車の醉を防ぐ故にゼムは進取的遠征家及び旅行家の必携劑として愛用せらる
ゼム定價
七十五粒入 十錢
百六十粒入 廿錢
四百卅粒入 五十錢
九百粒入 一圓
容器入ゼム 二十錢
日本一手發賣 愛國堂 山崎榮三郎 東京馬喰町二丁目
支舗 山崎兄弟商會 大阪高麗橋二丁目
其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり

女(はの四)

はらから



榊原蕉園筆

婦人世界第六號（昨年六月三日發行）婦人の日常生活中「十五」の條に弦齋居士が（髪の油は何を用ゆべきか）の題目の下に其の効能を確認せられし賛辭あり參照あれ

**純粹椿**

**三宅油**




◉近來僞物販賣する商店あり御買求の節は三婦人の商標に御注意を乞ふ（◉升賣は本舖のみに御座候）

定價

改良大瓶一壜金八拾五錢

中瓶一壜金四拾五錢

小瓶一壜金貳拾五錢

包料 小）拾二錢 卅五錢

（內地拾二錢（滿韓臺灣 卅五錢

（八錢 三拾錢

◉爲替は東京蛎売町郵便局宛郵券代用壹割増

**本舖** 東京市日本橋區人形町通り水天宮際 **間宮三宅堂**（電話浪花六二二〇番）

◉其外みやけ香油、みやけおしろいみやけ油製すき油發賣仕候

---

# ケーバ香水

佛國製 大好評

有名なる各和洋小間物化粧品店にあり

◉中瓶一本…………金壹圓

◉小瓶一本…………金廿五錢

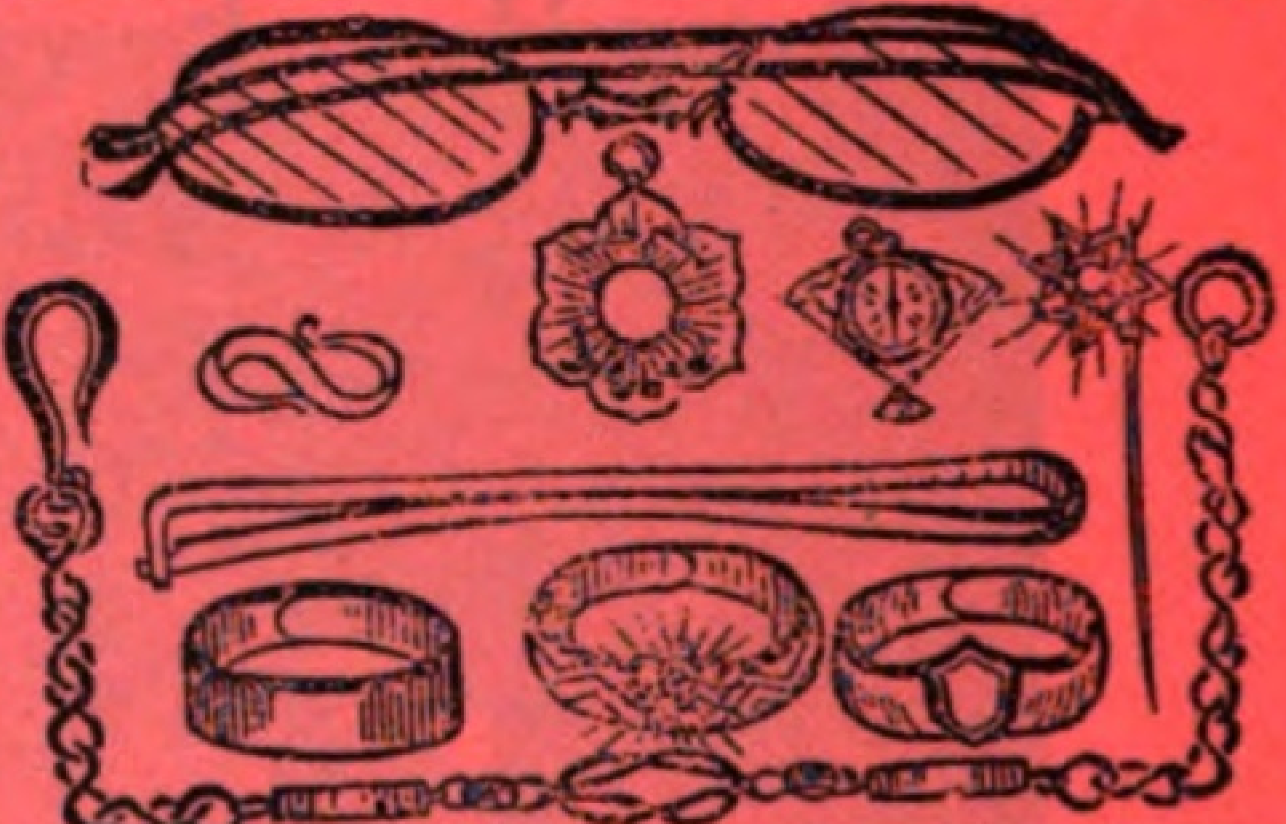


化粧品雜貨直輸入商

東京日本橋橘町二丁目 **竹間商店** 電話浪花（一六一四番）

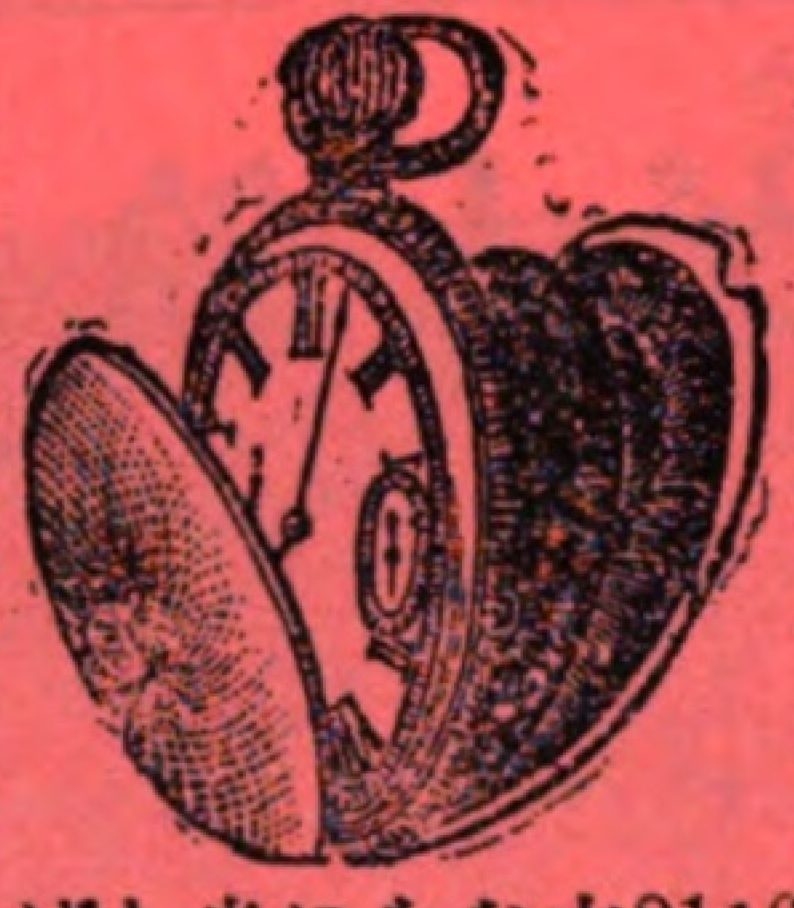
化學的大發明 旭印

# 人造金の完成



印章指輪 平打指輪 石入指輪
養生眼鏡 メタル 帶止金具
時計鎖 新式磁石 羽織紐鐶
襟止
以上拾種 取揃箱入壹組 特別大減價金
**壹圓** とは實に驚くべき安價にあらずや
小包料拾錢代金引替料拾錢

弊堂專賣の旭印人造金は在來の延金消金細工の如き無責任なる僞品と異り學理と實驗とに依り發明したる最進歩せる名擧的美術品且品質純良高雅且**金色**燦爛として麗々たる光彩を放ち遙に**眞正の純金**を凌駕す故に上流社會殊に華族の御用蒙る其他實驗者禮狀山の如且本品に就ては永久無限の保險を附正確保證す



# 合成金側懷中時計

三枚蓋斜子刻薄形寶石入
アンクル龍頭卷引出針廻

2116より まで **價金** 甲拾參圓 乙八圓 （送料拾錢）

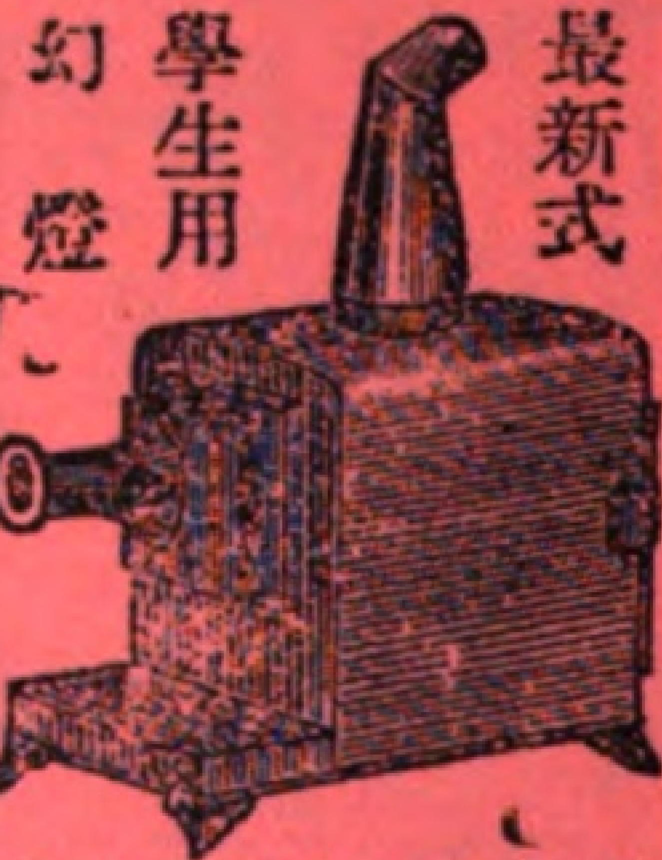
本品は英米商人の間に於て非常なる苦心慘憺の結果遂に大成功を來したるもの即ち機械は世界に冠たる瑞西タバン會社製側は米國ウオルサム時計商店に結託し茲に完成したる無缺の品なれば機械の堅牢正確なる申すに及ばず側は毫も純金に一歩も讓らず金色光々たるを以て貴紳の御持用として決して遜色なし●殊に二十ケ年の**保險證**添付

大阪東區和泉町 （無限責任） **金賞堂**本店

---

最新式 學生用 幻燈「 」 幻燈

# 早取寫眞器完成



多年苦心の結果廉價にして精巧品を供給し少年諸君の需用に應ぜんとす乞ふ陸續御愛求を祈る

定價 壹號貳圓五拾錢 四號壹圓拾錢
貳號壹圓八拾錢 五號九拾錢
參號壹圓四拾錢 ●送費各卅錢

映畫數百種あり各十二枚一組廿錢送費拾錢（日露戰爭畫廿二組あり）

## ●寫眞器械 寫眞鮮明

今回弊號にて初めて發賣する寫眞器は是迄有觸たる玩具的のものとは大に異なり撮影簡易なれば高價の舶來品は無用の長物たり殊に初心者の爲に獨案內書を附したれば如何なる素人にても人物景色其他萬象を自由に撮映し得携帶至極輕便なれば教育、娛樂、旅行、學生用には適當の器械なり

**注意** 本器は眞正の寫眞器にして復寫器にあらず毎器何も乾板光澤紙各種藥品等入用品一切取揃

●御注文切手代用一割增●振替貯金の御利用歡迎仕候

## 定價

特別製 三脚函付 九圓 送料五十錢
特上製 三脚函付 七圓 送料五十錢
特製 參圓五拾錢

壹號 貳圓五拾錢
貳號 卅 壹圓五拾錢
參號 壹圓

大阪市東區
內久寶寺町四丁目
# 常盤號
振替貯金口座八一九八番



# 鈴木ヴァイオリン

の音量豐富にして品質佳良なるは概に大方各位の認知せらるる處且つ價格の如きも僅々貳圓の實用品なり百貳拾圓の優等品に至る迄是を貳拾貳等に頒ち大方各位の御好みに應じ其製品を提供す時下夏季に向ひ消夏の友として尤も適當なる本品に如くものなからん

**山葉オルガン** 金拾八圓より 金貳百七拾圓迄

**山葉ピアノ** 金參百參拾圓より 金千參百圓迄



**樂隊用吹奏樂器各種**

**和洋音樂書各種**

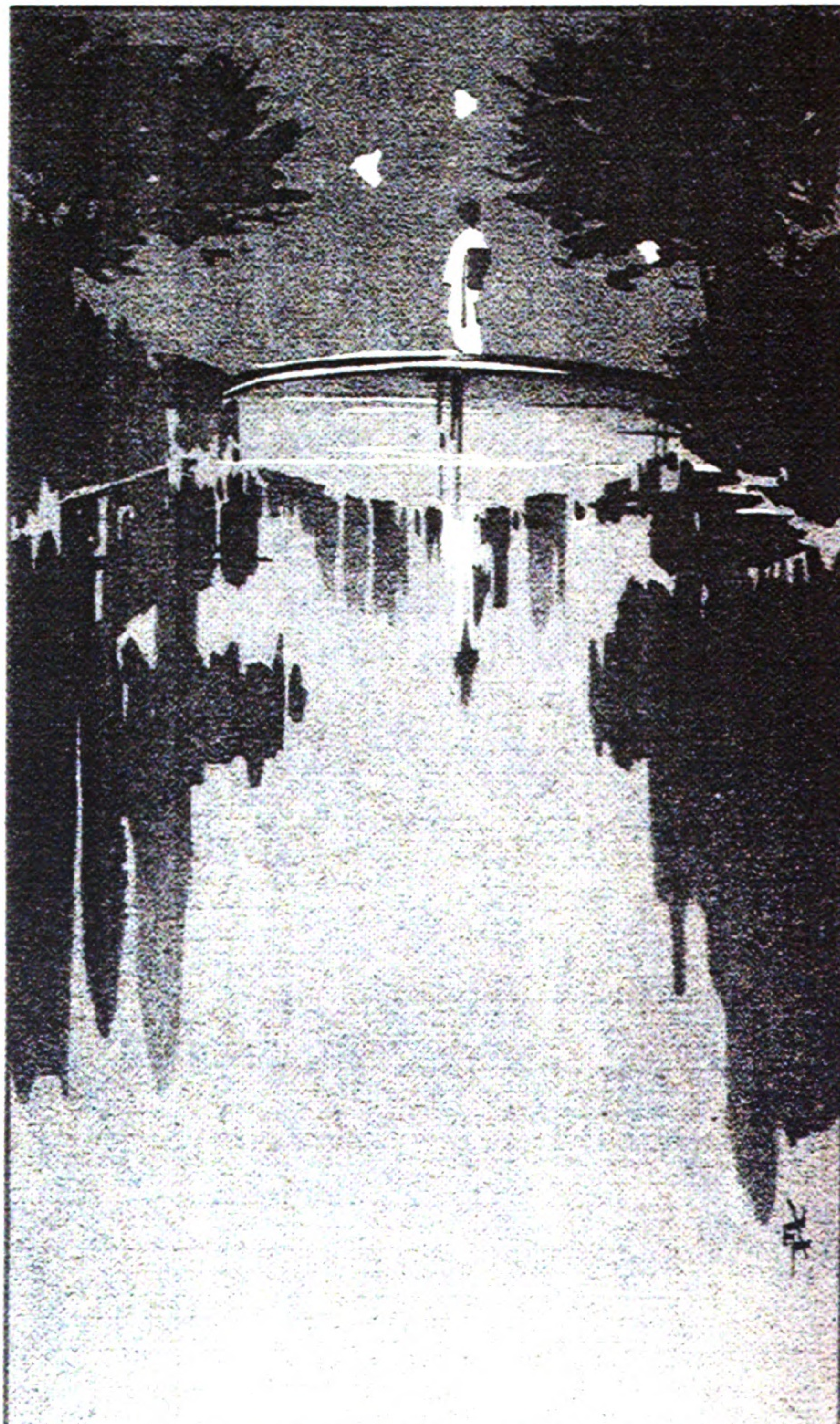
**樂譜帖、五線紙各種**

郵券貳錢御送付アレバ詳細ナル定價表ヲ呈ス

東京市京橋區竹川町十三番地 合資會社 **共益商社樂器店** 電話新橋五二九番 振替貯金一五八〇番

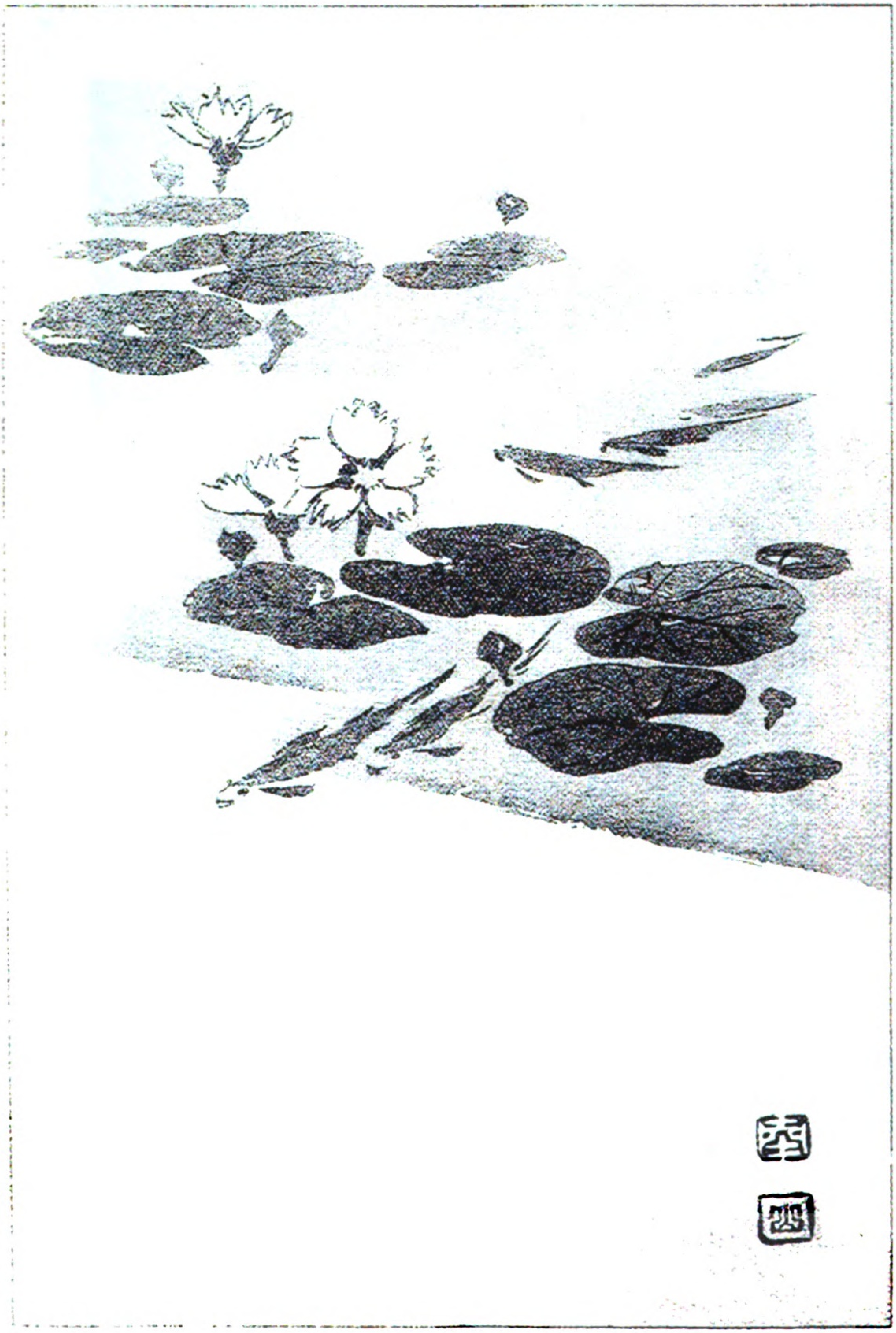
（にの四）

# 綠蔭



一條成美筆

## か だ め



加藤南山筆

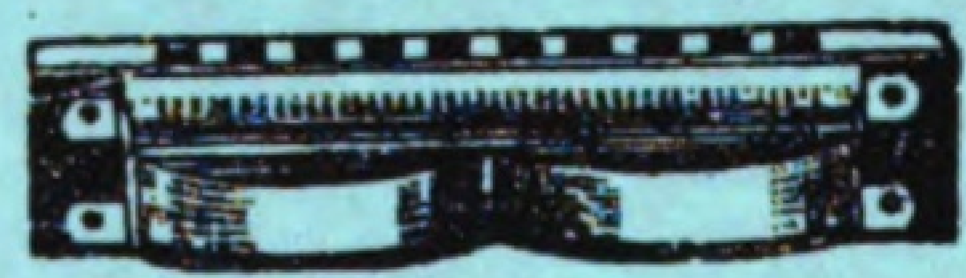
# 和洋樂器大販賣所

電話新橋 一二五九

振替口座 七一五八

# 十字屋樂器店

西洋横笛
（ハーモニカ）



金卅五錢以上金二圓迄

大聲發音器



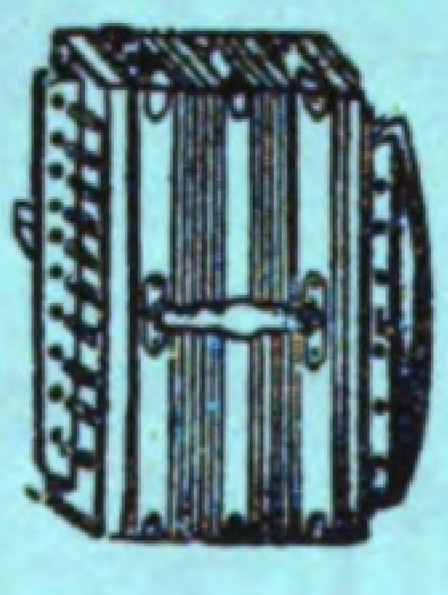
各製造會社 特約

無師獨奏
紙腔琴



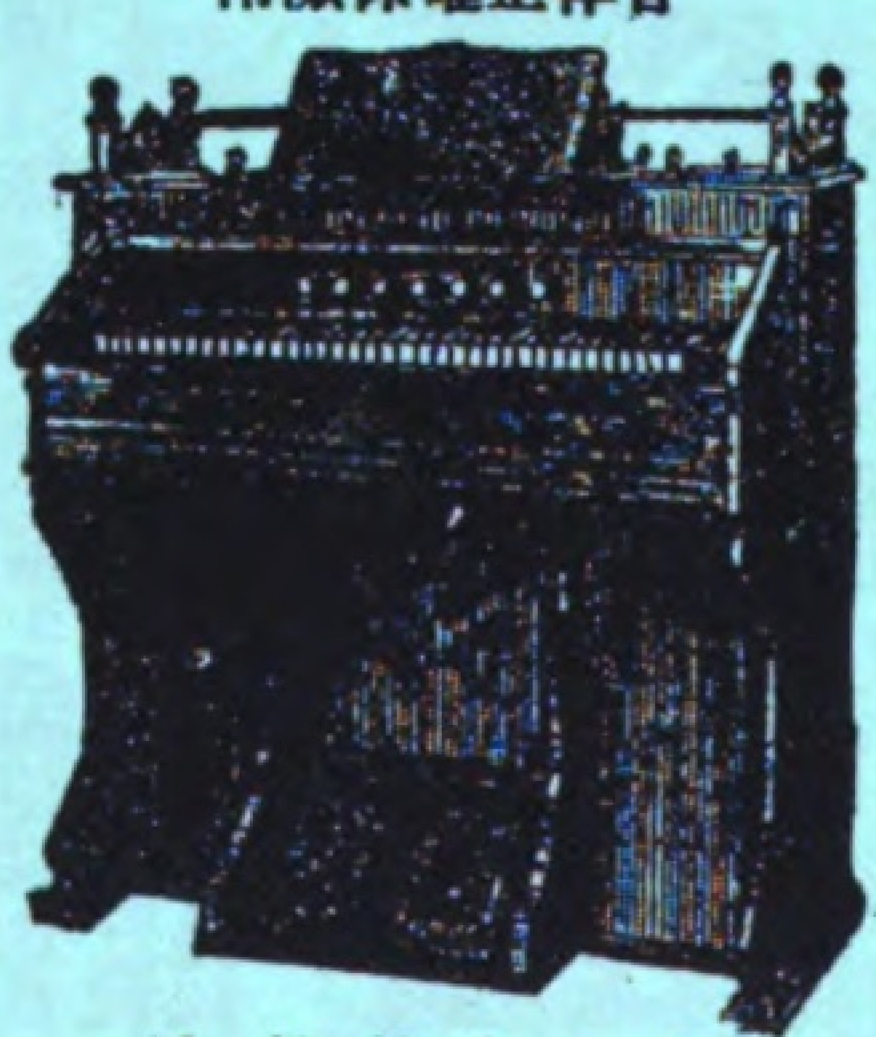
上製 金拾五圓
中製 金拾圓
小形 金五圓

舶來
手風琴



金三圓卅錢以上
金廿圓迄

日本製造元
西川風琴
音律正確保險附



第一號 金拾八圓以上
第廿號 第二百七十圓迄

和洋
バイオリン



附屬品 各種

◎箏曲 松風（バイオリン樂譜） 正價二十五錢 郵税二錢

◎同 椿盡し 同 正價三十錢 郵税二錢

◎同 江の島の曲 近刊

◎瓜生繁編 進行曲 正價四十錢 郵税六錢

◎文部省檢定濟 山田唱歌集 正價三十錢 郵税四錢

◎歐米各國 舞踏大觀 正價六十錢 郵税八錢

◎舞踏必携 ダイアモンド 正價三十錢 郵税二錢

東京銀座三丁目

女（ほの一）

# らい病 根治新薬 レプラ丸

本劑は獨乙國醫學博士ホルマルセイ氏が癩病の病原より探究し多年の辛苦と數萬の患者に施藥實驗を經て終に成功したる靈藥にして如何なる難症と雖も本劑に依て全治するを得る一大奇藥也●にせ物注意あれ

價一劑廿五日用三圓●二劑五圓五十錢●四劑十圓●小包料金十錢

# 梅毒根切の藥 パウル氏丸

久しき難症も根治し身體を強壮にする事非凡なり

禮狀 多供 一覽

●十五日分七十錢●卅日分一圓卅錢●六十日分二圓四十錢●小包料金十錢

# 肺病根治劑

有名なるエベレット大博士の發明方劑にして如何に長年の大患にても五十日分にて驚くべき奏功する事を保證す●(にせ物御注意あれ)●

●價一週五十五錢●二週一圓●三十日貳圓●五十日三圓●小包料金十錢

# 色を白くする藥

男女成美劑

此藥はアンダルソン大博士の秘方劑なれば効能の確實なる事世上雜多の賣藥化粧劑の類にあらず●にせ物注意●

●定價 小瓶五十錢 中瓶壹圓 大瓶壹圓半 特別製貳圓 ▲送料十錢

# 毛のはへる藥

驚く可き天下唯一の保證藥禮狀山の如し

●偽藥館名御注意あれ

●凡てあるべき處に毛のなき●やけどできもの●はつぼう等のはげ●頭髮まゆ毛口ひげはへぎわ等の薄き●病後のぬけ毛●多年實驗の生毛劑特効驚くべき奇藥

藥價

●壹圓●壹圓半●濃厚製貳圓●參圓半 ▲送料十錢

# 中風 全治保証藥 ヘミプレギー丸

此藥は醫學の淵源たる醫學各博士が協心戮力多年の苦辛を以て發明せられたる方劑なれば効驗の確實なること喋々を要せず用ひて治せざる患者の非ざるを以て明白也輕きは二劑にて全治す重きも四劑にて必全癒す

○弊館を以て他の無責任藥舗と同視する勿

◎定價 四劑七圓五十錢●二劑四圓廿錢 一劑二圓廿五錢●半劑一圓廿錢 試用六十錢送料十錢

# 美容散 やせる藥

藥價(一週)七十錢(二週)一圓(五週)二圓廿錢

●血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤く、のぼせ症等總て肥胖質の人用ひて害なく身體美容となる保證藥なり

# 皮膚病專門藥

僞物注意

| | | |
|---|---|---|
| かさ | いんきん | たむし |
| あか鼻 | ざくろ鼻 | あざ |
| ぜにがさ | ひぜん | わきが |

小瓶五十錢中瓶一圓大瓶一圓五十錢特製二圓送料十錢宛

專賣本舗 東京本郷區本郷三丁目 新宮藥館

(ほの二)

本號より大發展大改良珍趣向山の如し

大好評

# 婦人世界

大歡迎

七月一日發行 毎月一回 二卷第八號 一冊拾五錢 郵税一錢五厘 六冊分郵税廾九十錢十二冊一圓七十五錢

◎米國人の家庭に於ける女中……新歸朝者 北村美那子

◎私の感心せる奥樣(鳩山春子)

◎嘉悦孝子女史(面影 胡桃樂石)

◎六十歳の老女教師(古巣枝生)

◎弦齋夫人の料理談

△御飯の腐りは如何に妨ぐか……

△御飯の炊き方は如何にするか……

△御飯は如何にお櫃に移すか……

△糠味噌は如何に造るか……

## 見よ本號所載の四大文字

◎女は如何に男子の人相を觀察すべきか……村井弦齋

△男子の眼は如何に觀察すべきか……

△男子の鼻は如何に觀察すべきか……

◎我が母(淺野總一郎氏夫人)の苦心實歷談……穗積博士夫人

◎溫泉と海水浴は如何なる子供に適するか……加藤醫學博士

◎巴里貴婦人の日常生活法……東里園主人

◎私の感心せる女學生 市川教諭

◎婦人向中元暑中 進物一覽

◎懸賞少女繪探し 答案募集

口繪

△侯爵前田利爲氏令夫人△十五人の子寶を持てる家庭△名家新婚寫眞△名家令孃寫眞△彩色石版口繪(跡見花蹊◎片山春帆◎黑澤珠子)

◎小說故鄉……齊藤弔花

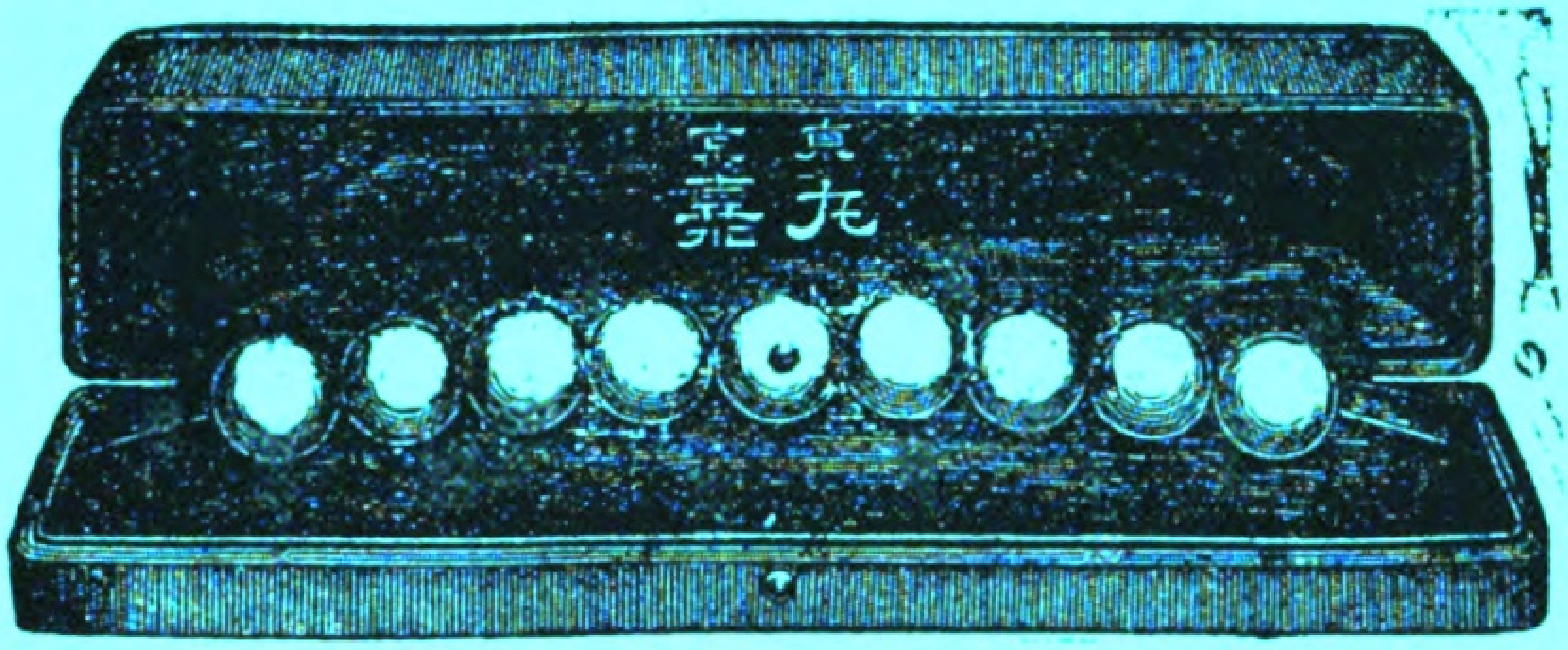
◎女子大學校の寄宿舍生活……竹內定子

(其の三)

東京京橋南紺屋町 (電話新橋八七四番) 實業之日本社 (郵便振替口座參貳六番) 賣捌全國各地書店

# 翡翠砡装身具

1



(1)
根掛
丸玉附
二分五厘丸　金貳拾圓以上七拾圓
三分丸　金拾五圓以上五拾圓
四分丸　金貳拾五圓以上

(2)
帯〆
金裏拵
拾圓以上貳拾圓内外
ツキ裏
五圓以上八圓

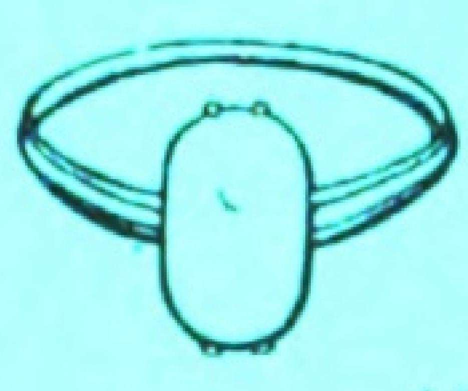
簪玉
甲　金壹百圓以上
乙　金五拾圓ヨリ七拾圓迄
丙　金拾圓ヨリ参拾圓迄

(2)

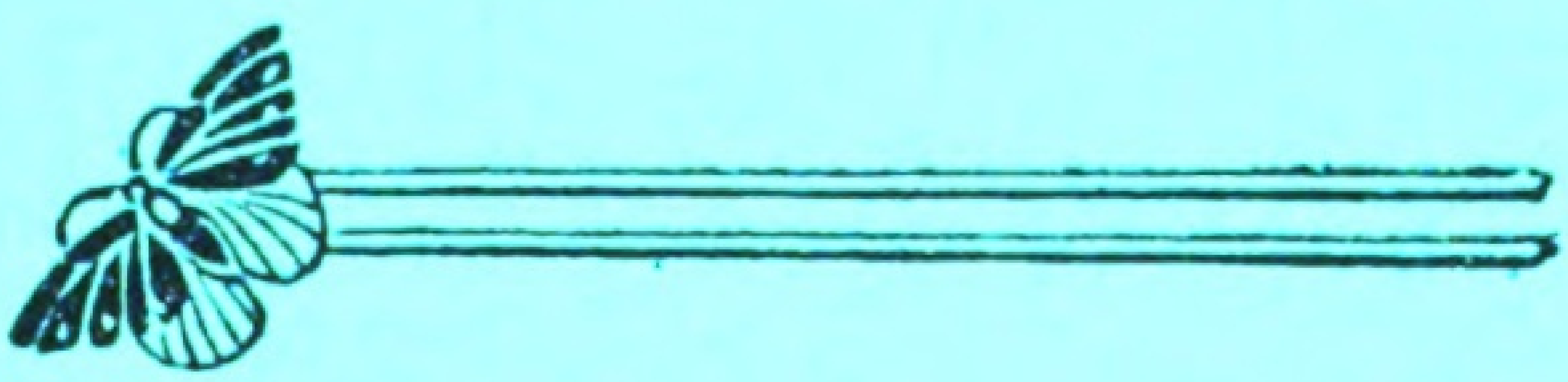


(3)
束髪簪
金足付
拾圓以上廿五圓迄
メッキ足付
六圓以上拾圓

(4)



(3)



(4)
指環
十八金拵
拾五圓以上貳拾圓



(ほの四)

大口鯛二筆

# 秋と夕と

おほつかなまちわたらむ村雨ならね
あきかぜいとすゝしうて山おろし
雲ちりにしろうわたりなかへにそ
かゝやきまつとよふ月ならうつろひあさ
にほひうつりてみゆるあしたのけしき
ら森峰松杉もらこまつかはなけれ
あそびのこゝろもやうまて日のあはれ
まちのはし　いてなむ

零るはなひら



太田三郎筆

# 各女學校御用

シホン
附屬品並ニ
造花器械類一式

東京市日本橋區横山町一丁目十六番地

**天野卯兵衛**

電話(長)浪花一六四三番
振替貯金口座四九七〇番

(切取線)

◉營業目錄御入用なれば此切取を添へ御申越被下度候(女學世界第十號)◉

縣　　郡　　町　　村

(一〇)

數年難治の慢性胃病を根治し
消化機能を強壯健全になす靈藥

# 胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑（即ち重曹、マグ子シヤ、苦味劑の如き一時おさゑムチスカシ的舊式賣藥のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發見せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓つて根治**し胃腸を健全に消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絕し無病強健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

（藥價）壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割增し

新輸入 美容料 肉體

# 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓八拾錢

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

血塊流下

# 通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃するを確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衛生に無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

（注意）本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効な**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



腋臭

# わきが

根治確證
新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に用ひ苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢 頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢 着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增のこと

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

女(への四)

西班牙皇后ビクトリヤ陛下



巨巖



北米オレゴン州コロンビヤ河の巖石

女子高等師範の瑞典式體操（第一形式）



瑞典體操は下肢の運動、內臟機關に重きを置き膝の屈伸、頭の血液を末梢に取つて働かせる目的の體操にて第一形式より第十呼吸の運動まで十種に分れたり、以下第二より引續き撮影す。

# 名流小照



日向輝武氏夫人欽子

（趣味生活參照）



三井養之助氏夫人せつ子



女（その二）

造花用材料一式

摘細工用材料一式

刺繡用材料一式

刺繡用
日本畫用　白絹張團扇各種

東京市本郷區眞砂町十五番地

百花堂

地方御注文ノ節ハ代金引替小包郵便ニテ
御送リ申上候

世界唯一痳病消渇の根治新薬

# 痳滅（りんめつ）

痳滅は最も進歩したる最新の痳病消渇即治根絶薬なり、本剤はありふれたる普通の売薬と異なり殺菌学上効力頗る峻烈なる一新薬を主剤とし是を内服して痳病消渇の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち滅殺する處方に基き製剤せし新薬に付軽症は壹剤重症は特別製分にて必ず著て根底より根治するを確證す但し彼の舊式洗滌剤の如き迂遠無効有害の姑息薬と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ薬價不廉なり用薬者豫め之を諒せよ薬價壹剤壹圓拾錢特別製貳圓拾錢郵券代用貳割増しの事

専賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館薬房

---

色白特効 ペーアス石鹸

此石鹸は世界第一等の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を揭げん 皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質を治するは此石鹸特有の神効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ（昨年輸入の五萬個は[illegible]賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む）

壹個代價送料共八拾五錢 △三個函入同上貳圓叁拾錢

輸入一手専賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館薬房

---

世界無比 最新發明薬

# あざ

入墨は廿日ほくろそばかす、なまづ、いぼは拾日目に必らず美麗に除去すること

保險附 新發明薬にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも些も痕跡を殘さず無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の美質を完ふせよ米館者へは山の如き全治者の感謝狀及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新薬價は壹劑壹圓參劑半分三圓六劑分五圓拾貳劑分拾圓送料各拾錢宛必ず添送の事郵券代用貳割増し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす）

専賣 東京神田五軒町拾九番 日新館薬房

---

驅黴新劑 ドクトル

本劑は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於ける唯一のばい毒根法特効新藥なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症（即ち第一期黴毒。第二期黴毒。全身黴毒。下疳。横痃。楊梅毒。胎毒。痳毒。骨うづき。關節痛等）ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて誓って根治することを確證す従來醫療賣藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試用し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ。藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓七拾錢着金次第送藥す郵便切手代用貳割増しの事 ●以上貳藥

専賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

---

眞正極秘 粋珍書案内

望の人郵券四錢送れ直に送呈すべし披閲忽ち愉絶快絶眞に粋士必讀の珍書案内

申込所 東京市下谷區西黒門町廿番地 東雲堂書店

女（その三）

星顔印

# 星美人香水

●本品は馥郁たる芳香を永く保つ特色を有す

日本政府 登録商標




ヒナ洗粉本舗
御幸香油
東京市日本橋區本石町十軒店八番地
中岡太洋堂

（定價）
大瓶 壹圓
中瓶 五拾錢
小瓶 貳拾錢
ニツケルロ金付 懐中用 廿五錢

# 俳句資料解釋

内藤鳴雪翁題句
高濱虚子先生序文
峯青嵐先生編著

全一册和裝菊半截美本紙數三百頁

●正價三拾錢 郵稅六錢

東京本町 博文館

# 毛はへ

最新薬ハロールは數年前獨逸國皮膚病専門醫學博士シュワインゲル氏の發明せられ歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる秘密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て専門的に多年苦心研究の後其有效成分を検明し之に最近の發見に係るドクトルベンザム等の生毛に關する新説を參考し最新藥を配合したる世界無比の學理的最新藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き賣藥が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する鱗着品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する芫菁丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗悪の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮、はへぎは、まゆげ、ひげ陰毛等の薄を濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脱毛するを防止し拔毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハツポー、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合

藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割増の事

# らい病

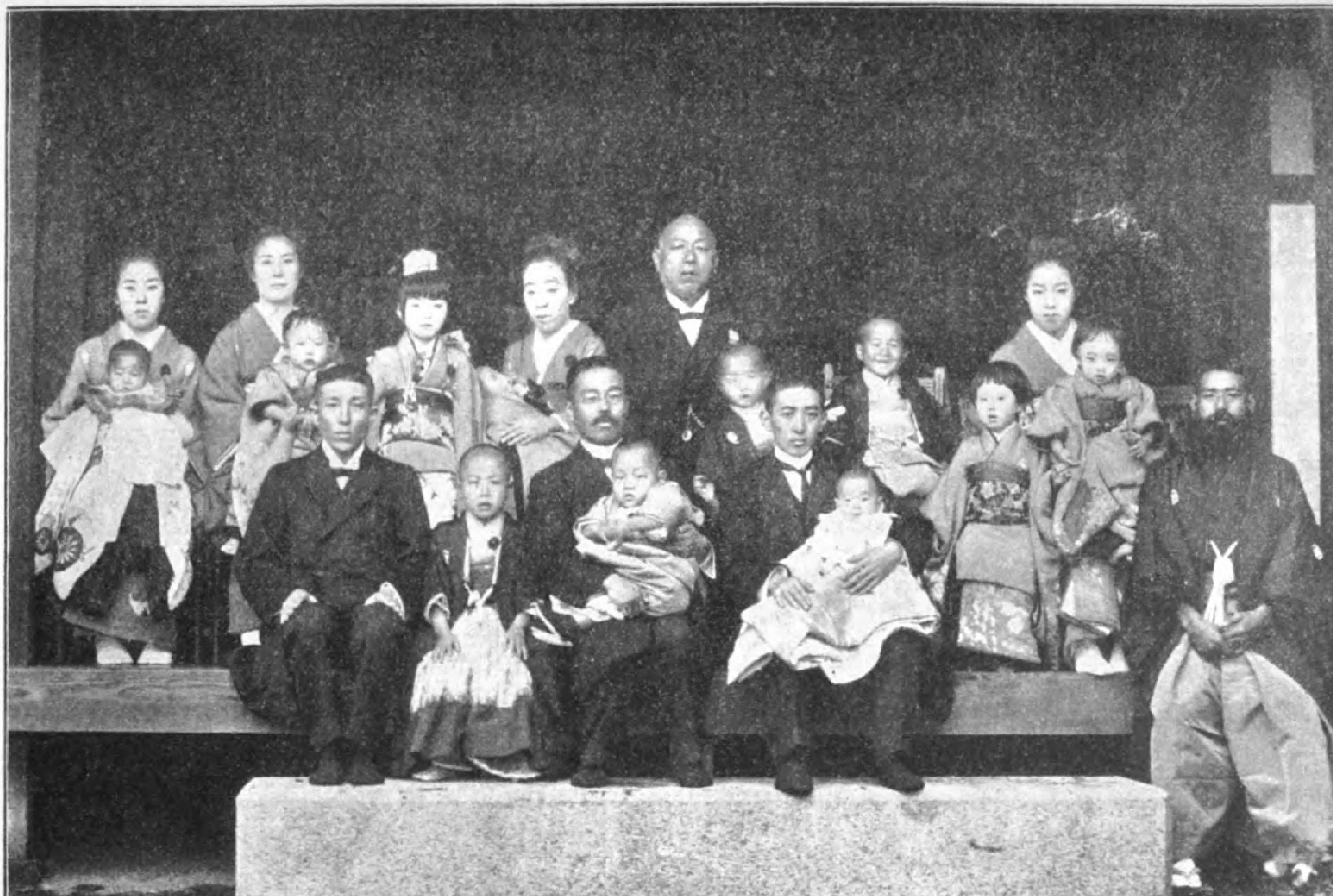
最新藥
ザノサール 一ケ月分 貳圓
複方ザノサール 一ケ月分 參圓

此のらい病薬は永年ハワイ國に在留して癩病の研究に從事し世界に雷名を轟かしたる醫學博士ハドソン氏の癩病治療藥を化學的の方法にて分析し其主成分に更に最近の發見に係る治癩新藥を加へ且つ當館主が醫科大學本職中研究したる成績に考へ配劑したる新藥なれば一度使用して其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむる事は難事なれども其病勢の甚しからざる中に參圓分を四ヶ月服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても二藥を六ヶ月併用すれば病原菌を脱力死滅せしめ漸次輕快に趣き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陷れんとする鱗着主義の賣藥に非ず

三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主
醫科大學卒業藥劑士
從七位勳六等 中島龜之丞鑑製

女（との四）

# 雨宮氏の一族



前列右より一、養子才六郎氏、二、同養子信一郎氏、三、同養子孫四郎氏、四、孫宗助
五、養子豐二郎氏

後列一、信一郎夫人タマ子、二、主人敬二郎氏、三、長女テル子、四、豐二郎夫人エミ子
五、次女けん子、其他小兒は皆主人の孫なり。




醫科大學病院辭職
專門的治療院開設 院長平田章之亟

男子 婦人 生殖器科 睾丸陰莖 卵巢子宮 ◎ 梅毒痳科

殊に機能障害神系衰弱ヒステリー

東京淺草
七軒町二
入院隨時

# 明治療院 毎日診療

○月木曜の午後施診藥價減額




全國各藥店ニて取次販賣す

# 博文館創業二十週年紀念

# 明治名著集

既刊發行

全一冊洋裝四六判二倍
紙數五百六十二頁
正價金六拾錢
郵税金六錢

内容



◎六大敎育家追頌式◎文相と師範敎育◎小學敎員增俸◎美以敎會合同◎殉難志士贈位◎明六雜誌編輯小史（坪谷水哉）

## 口繪

◎御幼年時代の皇太子殿下◎北白川宮成久王殿下◎朝香宮鳩彦王殿下◎明治廿年の內閣其一◎全其二◎橋本雅邦川瑞玉章兩氏筆◎寺崎廣業川合玉堂兩氏筆◎竹內棲鳳小堀鞆音兩氏筆、以上八頁光澤紙刷）

◎昔日の二重橋◎ロンドンシヤー氏筆獅子王◎博文館創業の地◎バルン、ジョーンス氏筆黃金の階段（以下一色刷）

◎福澤諭吉君と西周氏◎福澤氏の筆蹟◎伊藤圭介男◎伊藤男の筆蹟◎中村正直君◎中村博士の筆蹟◎加藤弘之君と西村茂樹君◎加藤男の筆蹟◎西村博士の筆蹟◎外山正一君と田口卯吉君◎外山博士の筆蹟◎田口博士の筆蹟◎馬場辰猪君と筆蹟◎中江篤介君と筆蹟◎鳥尾小彌太君と筆蹟◎井上哲次郎君と坪內雄藏君◎坪內博士の筆蹟◎井上博士の筆蹟◎德富猪一君と藤田茂吉君◎德富氏の筆蹟◎藤田氏の筆蹟◎故大橋佐平君◎博文館の事業

（ちの二）

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

# 秘訣 リウマチス全治

妾儀多年リウマチス病に罹り百方手を盡すも更に効なく困難の處不思議の神藥の奇効に依り忽ち根治全快し喜悅に堪へず依つて人助のため同病者に事實を告げ救濟せんとす御希望の方は郵券二錢封入申込次第詳細に御通知申上可く候間御遠慮なく申込あれ

東京府下大森停車場東大畑
河奈とめ女

---

優美高尚極薄手形

# 米國形銀時計



本品は小店特約東洋一手販賣の時計にして價は頗る廉價なるも機械の精確なると形狀の優美高尚にして而も側の銀質等總て米國ウォールサム製に遜色なき良品なり

價拾三圓半 銀側兩蓋中蓋附16 17 18形機械金梨子地寶石入二枚車別爪石巻上向アンクル龍頭引出針廻し

價拾貳圓半 右同品乙號

價拾圓半 銀側兩蓋機械ニッケル惣寶石入別爪巻上向アンクル

價九圓半 右同品乙號

極薄手形 太文字 鐵針

注意 ◎保險三十ケ年 ◎送料內地拾錢 臺、清、韓參拾錢 ◎代金引替は卅錢前金 ○振替爲替口座百七十三番

注意 大景品附此廣告を切拔き御注文書同封の御方には磁石、一切の附屬品を添へ景品として進呈す

東京銀座壹
伊勢伊時計店

---

最近 子宮病 自宅療法 全一册

▲如何にせば子宮血の道の難病を根治し▼

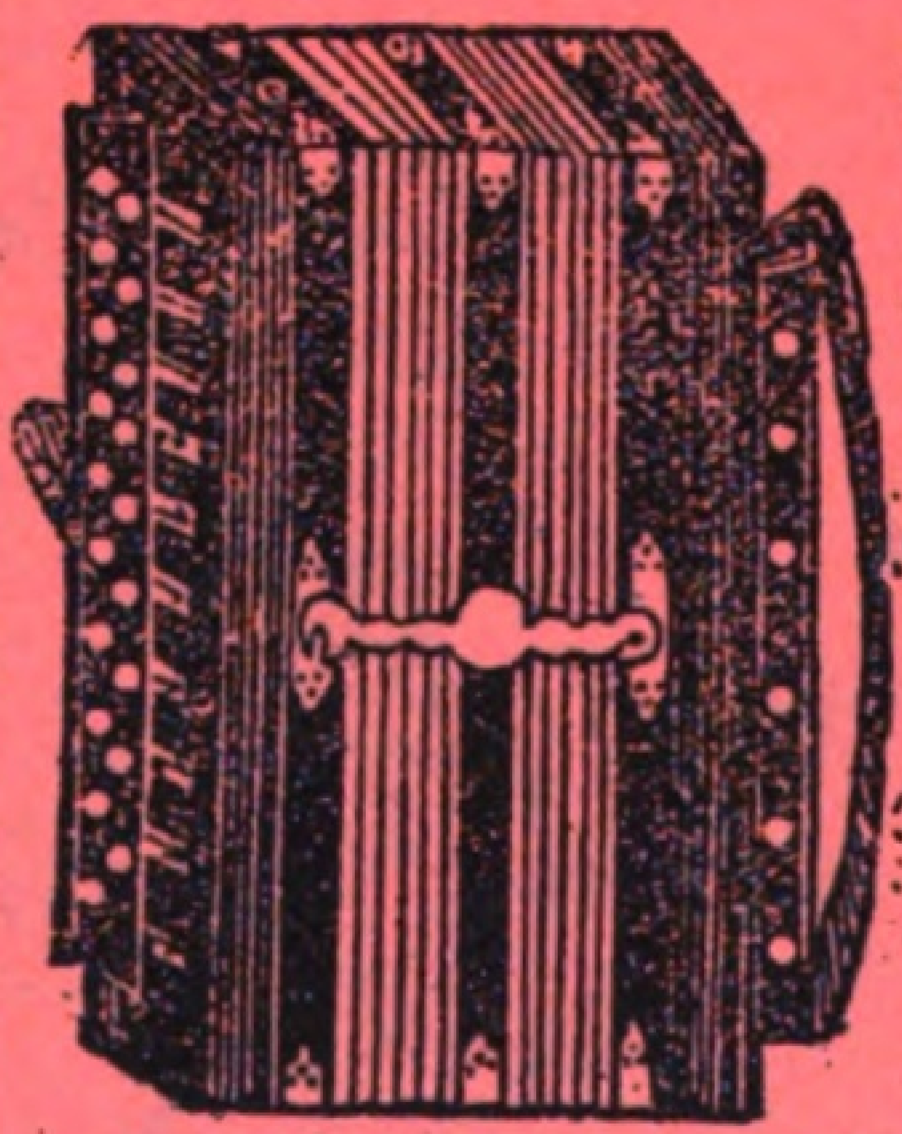
▲子寶を擧ぐべき健女性となるを得べきか▼

◎本書は著者が多年の實驗より得たる成効と、最近の學說を基礎とし、親切叮嚀に自宅の療法を記述せるもの◎郵券貳錢を送れば當分の內無代進呈す

申込所 東京市築地新榮町四丁目一番地 笹岡省三

---

堅牢無比懷中 手風琴



本品は最も優美且高尚の小形なる手風琴にして音律の正確なる音聲の強大なる事舶來手風琴に異なる事なし左れば旅行散步等には至極輕便なり獨習書附屬す

正價 上製金壹圓八拾錢 並製金壹圓五拾錢

送料拾錢切手代用一割增

大阪市東區谷町四丁目

發賣元 精美堂

---

# 肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治する故世の同病者を救ひたき志願に付望の方は郵券二錢封入にて御照會あれ

東京府下大森入新井
川名助次郎

女(ちの三)


於內外博覽會名譽大賞及金銀牌受領
元和二年創業
ヒゲタ印醬油
HIGETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
TRADE MARK
Patronised by the Imperial Household Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad
The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor G. TANAKA Choshi, Chiba-ken, JAPAN
ヒゲタ印醬油
宮內省御用達
千葉縣
田中玄蕃釀造
銚子港


造花及半製品
造
器具材料卸小賣
造花裝飾用達
花
東京市
九段坂
吉住商店
營業目錄は御申越次第御送付可仕候

# 清國の女學生






上段は北京北洋女子師範學堂の生徒にして中央日本服を着たるは河原操子女子下段は同女史が嘗て招聘されし蒙古王の子女なり

女(りの一)

少女世界定期增刊

# わが家

第二巻第十號 七月十五日發行

全一册 洋裝菊判 正價金拾錢 郵稅貳錢

## わが家の歌（花袋作 鐵笛曲）◉日本少女遊戲

◉少女芝居 ホームシック（巖谷小波作）◉樂しきわが家

▲家庭のなつかしみ……文學士 下田次郎
▲一番えらい人……文學士 三輪田元道
▲自分の部屋……鳩山春子
▲少女と家庭……三宅花圃
▲家事と社交……府立第一高等女學校長 伊藤貞勝
▲よく休みよく働け……府立第三高等女學校長 小林盈

わが家を愛する少女は、早くこれをお讀みなさい！ 戀しきわが家を忍ぶもの、わが家を幸福ならしめんとするものは、少女も、父母も、敎師も、速かにこれを讀め！

▲少女の心得……學習院女學部長 下田歌子
▲家庭のゆかしさ……女子大學校學監 麻生正藏
▲幸福な少女……高等女子實修學校長 山脇房子
▲變化と忍耐と……東京高等女學校長 棚橋絢子
▲少女のつとめ……女子高等師範學校敎授 篠田利英
▲わが家の感想……女子學院長 矢島楫子

◉わが家の庭園＝◉わが家の歷史＝

（りの三）

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

望月小太郎氏の家庭



三十八年一月創立

# 女子文學研究最好雜誌

●三巻第九號　七月一日發兌

**選評家**　文學士沼波先生。廣津柳浪先生。巖谷小波先生。河井醉茗先生。佐々木信綱先生。山中古洞先生。其他編輯局諸氏

▲懸賞投書募集項目（毎月十五日〆切）

●叙事文　●抒情文　●評論文　●俳句
●小説　●新體詩　●書翰文　●和歌
●新歌謡　●短文　●笑話　●圖畫
●文藝遊戲（其他誌友諸嬢の思ひ〳〵の事）

賞品
甲種（一等　拾圓　二等　參圓　三等　八拾錢　四等　五拾錢　五等　參拾錢）
乙種（一等　五圓　二等　壹圓　三等　五拾錢　四等　貳拾錢　五等　拾錢）

▶詳細の事は本誌に就て御覧な願ます◀




# 毎月一回壹日發兌（外に年四回二月五月八月十一月増刊）

口繪　三宅克己先生揮毫　水彩畫（石版數度密刷）繪端書繪手本寫眞版數葉挿入

定價　最廉無比　壹册（大判百卅頁）金拾錢　郵税壹錢
●半年分（増刊共八册）郵税とも前金八拾四錢
●壹年分（同　十六册）同　前金壹圓六拾錢

發行所　東京市京橋區大鋸町十一　振替口座第壹七貳九番（電話本局六百七番）　女子文壇社

▲賣捌所は各地到る處にあり、若し最寄に取次販賣店なくば發行所へ購讀御申込を乞ふ

（その一）

第貳號七月一日發行

# 鐵道 滊船 旅行案內

每月一回一日發行

洋裝菊判紙數約二百頁
正價拾錢　郵稅壹錢五厘

我が戰勝帝國民は、今や松翠柳綠の樂天地に、探勝遊覽の日もまた足らざらんとす。本誌は此等旅客が陸海交通の機關を遺憾なく利用せんが爲に、今後每月發刊せらる。其の體裁には最も新機軸を出して、携帶に便にし、且つ必要なる鐵道又は航路の發着時間は、一見忽ち見出し得べく、また其等の鐵道の沿道案內は、最新最正の資料に因て最も確實明晰に之を編纂す。統計家の伊東祐穀氏は時間表の編製に從ひ、旅行家の名家坪谷水哉、其他の諸氏は、案內記に筆を執り、皆な多年實地の經驗に依て成る直ちに是れ總ての旅客が時間を誤らず、經費を省き、最も迅速に目的を達する爲に唯一無二の案內記なり。

從來同種類の雜誌あり冀くは**博文館發行**の**旅行案內**に注意を乞ふ。



發兌元　東京本町　博文館

女(ぬの二)

(〇〇三)

女(ぬの四)

家庭の彈奏



大町桂月君著

# 桂月文集 新木林

大町桂月先生の文名天下を動すこと久し抒情に叙事に議論に何くに往くとして可ならざる無し或は雍容或は洒脱或は豪放或は悲凉氣宇寛裕にして情感痛切區々たる技巧の域を超脱して人格の美直に文字の美となる文の仙なる者なり

全一册

洋裝菊半截紙數三百頁
正價金貳拾八錢
郵稅金四錢
○既成發行

東京 博文館 本町

---

讀賣新聞記者 足立北鷗君序
文學士 大町桂月君序

讀賣新聞記者 田村逆水君著

# 成功と人格

成功とは何ぞ人格とは何ぞ是れ研究すべき疑問なり顧ふに人、生を天地の間に受く能く其人格の適する所に從ひ其人格を磨き上げ努力して人格の達し得る所まで人格を大たらしめ高からしむれば是れ眞の大成功なり今の世多くは成功を誤解し人格の努力を外にせり此書の記する所實に人格と成功を得るの羅針盤たり志士須らく精讀して飜然自得する所あるべし

(再版)

全一册

洋裝菊判並製
紙數百八拾餘頁
正價 參拾五錢
郵稅 八 錢

東京 博文館 本町

(その一)

七月一日發刊第四卷第八號

# ハガキ文學

◎見よ本誌の大活躍を◎見よ本誌が如何に發展しつゝあるかを◎青年文藝の士奮て本誌を見よ

一冊十錢郵税不要　六冊前金七十五錢

◎朋友論　德富蘇峰
○奥羽の最高峯　愛弟生
○物臭日記　XYZ
◎文學上に於ける獨創　高須梅溪
○朝月　佐々木信綱
○遺悶　久保文學士
◎予の中學生活　法科大學生某
○文藝界新報　ABC生
◎綠蔭濤聲　深山嵓雄
○通俗哲學　田村白梅子
○文月曆　中野としこ
◎女尊論　風間法學士
○豆畑唄　野口雨情
◎獨乙學生氣質　塚本博士
○女やもめの議　巴里通信
○支那奇談　李生の妻
◎苗賣の歌　兒玉花外
◎俳人惟然坊　大須賀乙字
◎新和文英譯　僞嬌生

○普通文　久保天随選
○新體詩　兒玉花外選
○ハガキ文　橋本春郊選
○和歌　窪田空穗選
○俳句　内藤鳴雪選
○新川柳　窪田而笑子選

（表紙圖案）中澤弘光（繪葉書）岡野榮（口繪色刷畫）太田三郎（挿繪）佐藤生榮太田三郎（泰西名畫）寫眞版、懸賞繪葉書圖案、スケッチ、漫畫等滿載

發行所　東京小石川　日本葉書會　賣捌　全國書林

中村不折先生著

# 鉛筆畫法

新刊發賣定價金六十五錢郵税八錢
（石版手本及木版手本挿入）

◎スケッチ流行の時に當り斯道の大家中村不折先生此新著あり挿繪口繪甚だ多く文章平易にして小學校卒業者は一度熟讀玩味せば直に其畫法の秘訣を悉し思ふが儘に寫生し得べし重なる要目左の如し

○動物○植物○物體○人物○景色
○裸體

總クロース製
金畫金文字表
裝頗美本

第二輯

# 鉛筆スケッチ習畫帖

太田三郎著

石版彩色刷羅紗紙臺紙付繪畫十二頁説明二十四頁頗美裝一冊金二十五錢郵税二錢全部十二冊郵税共金二圓五十錢

◎お待ち兼の第二輯愈發刊せられたり本帖の眞價は第一輯に於て既に諸彦が認められ斯道に志を有する人にとりて此の上なき良師父たるを信ずゝ乞ふ本帖を繙き十二分に其眞體を採り腕を鍛へられんことを希ふ

女（その二）

博文館編輯局編纂




全一册洋裝菊判
石版表紙裝幀優美
紙數約五拾頁
石版口畫付
（既刊發賣）

女子に日誌

記載方練習の必要なることは云はずもがな、各女學校高等小學校等に於て生徒に夏期休業日誌を記載せしむることは近來殆んど其軌を一にせり然るに之に恰當せる簿册のあらざるため亂雜なる書き方に流れ易く教師は之を閲覽訂正するに苦み生徒は之が保存に其の興味を欠く弊多し是れ等の弊を矯むるの目的を以て本書を編纂せり惟ふに現今の女學生がその學科の煩多に逐はれ社會の問題に疎く卑近の家事にさへ通せず卒業生にして尙ほ且つ沒常識の譏をうくること少なからざるは實に嘆はしきに非らずや故に本書は夏期休暇中を利用して避暑消閑の間に知らず識らず日常百般の智識を與へんことを目的とせりされば本書は縱し之を日誌に用ゐずとも夏期休暇の友として慥に好讀み物たるべきを信ず幸に高需を待つ

正價一册拾貳錢
五十册以上一册拾壹錢
百册以上一册拾錢
▲外に郵税一册貳錢宛

各女學校生徒
高等小學校生徒
夏季休業中
必需書

東京日本橋區本町
發兌元　博文館

# 團欒




（米國桑港領事上野季三郎氏と其家族）

（長野縣立高等女學校々舍）





（千葉縣立高等女學校生徒の體操）

文學士 久保天隨先生精解

# 日本外史新釋

●全部拾貳冊

●每號一回發行

每編和裝美本 紙數約二百頁 第一卷既成發行

賴氏の外史は、その一生の心血を注ぐところ、世道人心を裨益せし功固より少からず、且つ漢文講習に益あること言を俟たず、これ家藏戸誦今に至りて尙ほ廢せざる所以なり。その講義の如き、坊間頗る是ありと雖も、その完全なるものを求むれば、遂に指を屈するに及ばず。天隨氏こゝに深く慨するところあり、乃ち平生の蘊蓄を傾けて、此書を著はさる、兎を搏つに獅子の全力を盡すは、適まその婆心の極めて深切なる所以、精該詳備、まことに賴氏の忠臣羽翼たるに負かず。この書一たび出でて初學幸に津梁あり、その業をなすに際して、唯だ易きを見て難きを見ず、將門の興廢を詳かにし、國史の大半に通曉すると同時に、讀書力の涵養に資するの便あるべく、一擧兩得勞半にして功必ず倍するものあらむ。

## 目次



正價一冊金參拾錢
郵稅一冊金六錢

前金 六冊金壹圓七拾錢 十二冊金參圓貳拾錢 ▲外要郵稅

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

女(その一)

# 通俗作文全書

全部二十四册洋裝四六判
並製紙數各三百頁
正價一册參拾五錢
郵稅一册六錢宛

記事論說或は紀行叙事等の雄篇大作より尺牘葉書の日用文に至るまで、齊しく是れ文なる以上は、文明社會の人は皆文を以て互に意思を通じつゝある者と謂ふべし。然るに今日の狀況を見るに、百般藝術の駸々進步するに反し作文の技のみ獨り退步の觀あるは詢に痛嘆の至りといふべし。是れ多數の人士が文章に重きを置かざるに由ると雖も、從來作文法を敎ふる完全なる書籍なきもの亦其一因なりといふべし。弊館之を遺憾とし、通俗作文全書を發行し聊か以て此缺點を裨補する所あらんとす。其の目は下に列記す。

第一編 **文章組立法** 大和田建樹君著

第二編 **書簡文作法** 同

第三編 **美文作法** 田山花袋君著

第四編 **商業作文法** 天城安政君著

第五編 **評釋支那時文軌範** 青柳篤恒君著

第六編 **紀行文作法** 西村醉夢君著

第七編 **寫生文範** 福田琴月君著

第八編 **論說記事文範** 河村[illegible]名君編著

第九編 **女子消息文範** 西田敬止君著

續刊

- 書簡文範
- 日記文範
- 祝賀弔祭文範
- 中等學生文範
- 言文一致文範
- 英和商業作文
- 雅俗はがき文範

- 英文作法
- 才媛文集
- 明治時文軌範
- 古今名家尺牘文
- 古今文人逸話
- 古今名家文選
- 作文熟語類集

東京本町 博文館

（その二）

每卷醫學專門大家講述

# 家庭衛生講話

每卷洋裝菊判美本——紙數各約百六十頁

口繪寫眞版數多挿入

醫學博士 三輪德寛先生講述

第一編 **一般救急法**

正價金參拾五錢 郵稅金六錢 既刊發行

此書は三輪博士が素人にわかり易く親切丁寧に講述せられたるものであつて書中には家庭にて身體に急な變常の起つた場合に醫師の來るのを待つ暇なく臨機に處置すべき方法が一切網羅して載せてある。

**假令へば急に卒倒した場合・創を受けた場合・痛の起つた場合・毒な物を食べた場合・水に溺れた場合・火傷をした場合・毒虫に螫された場合**などにどう云ふ處置をするがよいかと云ふことを述べてあるのであるから一般の家庭幷に殊に**旅行家工場の事務員學校教師警官航海者消防夫**などに甚必要な心得である、每戸一本を備へて不時の急に應ずる用意とせられんことを希望するのである。

第二編 **衛生學大意** 醫學博士 森林太郎先生著

（その三）

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 **博文館**

# 大日本淑女學會

會員募集
規則書進呈す

御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする人は本會におはいりなさい本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義錄を發行します講義の親切丁寧な事は固より新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法を計ります卒業は貳箇年會費も低廉であります

## 第四回新學期開始

本會の講義錄

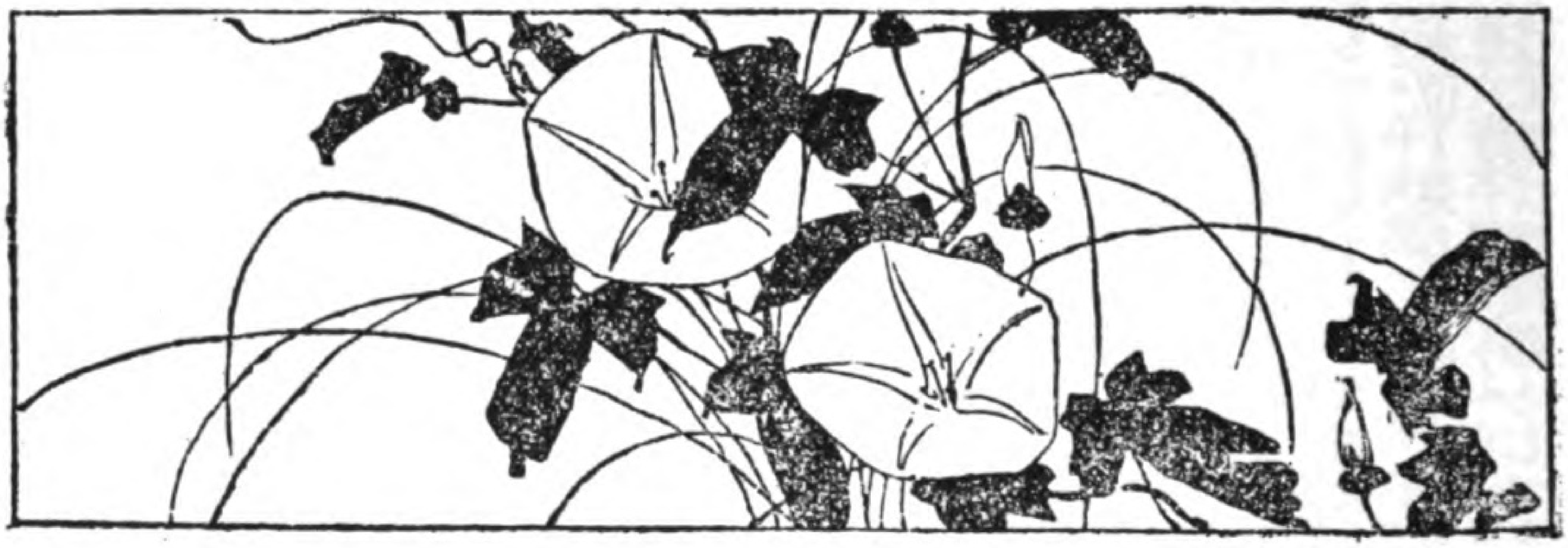
▲大版三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子教育家也
▲科外講師は博士學士卅家
▲毎號科外講話を附錄とす
▲純潔高雅の家庭小説あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義錄は貳ヶ年完結とす

◎博覽會開會中入會金全免す

本會機關雜誌 **姫百合** を發行し會員に限り進呈す

◎東京神田南甲賀町（電話本局三千四番）**大日本淑女學會**

▲報知新聞評　本講義錄は高等女學校の全學科を知名の專門女子教育家が講述せる者也平易懇切を主とせるものなれば何人も難解の虞なかるべく各科皆聯絡を保ちて其程度を一にせるなど講述者の苦心を見るに足る且つ有益なる科外講話の外に雜錄五十頁の附錄あり博士學士等の婦人に關する評論史傳衛生家庭等の文字を滿載し卷末更に純潔高雅の小説あり凡そ天下講義錄多しと雖も實益と趣味と併せ有する事斯くの如きは稀也



# 女學世界


第七巻第拾號

七月五日發行


## △古都の花

兒玉花外

姿かくれて天津女の、梳髪の樣の春雲の、かの下あたり千年ふる、山紫の山城や、水は靜かに流れゆく。

南の風の塵たてず、空は鏡と青の日よ、模樣華やか露重き、袖を重ねつたを〳〵と、いまし歩むか京をとめ。

蒔繪の籠の雛鳥の、夢みる瞳、恥らへば、前髪垂るゝ町女、花の都の花の精、自然が生みし美人よ。

友禪洗ふ加茂川の、滸に佇ちて髮すけば、曇り雨ふる東山、四橋の柳靡きつゝ、風なまめいて起るなれ。

詩人キーツが憧れたる、かの南歐の伊太利の、花の少女と花かざし、遊ぶ姿を思ふかな、あゝ山城の町女。




# 男女複本位說

日本女子商業學校長　和田垣謙三

## △眞理は複本位に在り

貨幣經濟の上に於て單本位說と複本位說との二說あるが如くに、人間經濟の上に於ても亦單本位複本位と云ふやうな一種の本位說を立てることが能るであらう。詳しく言へば男子獨り舞臺の國家は男子單本位と見ることが能るであらうし、又男女共同じく活動する國家は男女複本位と見ることが能るであらう。所で私は貨幣經濟の上に於ては理想として金銀複本位說を執るものであるが、人間經濟の上に於ても亦等しく男女複本位說を執りたいのである。恰も我々が金銀兩つのものを以て經濟社會を經理して行くやうに、我々は男女相共同して此の人間社會を處理して行きたいと思ふのである。世には男子單本位說を唱ふる人があるかも知れぬが、男子單本位は決して人間經濟の眞理では無い、世の中は如何しても男女複本位で無ければならぬと思ふ。其理はまことに明瞭である。蓋し男と女とは互に長短あつて孰れを棄て孰れを排することも能ぬので、此の二本位が各々其の特長を以て社會に立ち働き社會の爲に盡して行かねばならぬからである。

## △孰れが金で孰れが銀か

既に男女複本位と云ふからには玆に又金と銀とがある筈だが、今此處で男子が金で女子が銀だと言へば諸君に對して失禮に當るから其れは申さない、又申す必要も無い、兎も角も男と女とで世の中を保つて行くと云ふことが男女複本位たる所以であるから、或は女子が金で男子が銀であつても構はない。併し乍ら古い諺に『雌鳥すゝめて雄鳥時を告ぐ』と云ふことがある。即ち女は蔭で働いて男をして時を作らしめると云ふ意味であらう。私は婦人は恰度其樣云ふ役割であらうと思ふ。雌鳥の旦を告ぐると云ふことは那邊から見ても不祥である。之れは決して男女複本位の主義に反するものでは無い。所謂男尊女卑と云ふことは素より不可である、女尊男卑と云ふことも亦無論不可ぬ、然れ共彼の男女同權と云ふやうなことも意味の取りやうに依つては亦甚だ面白からぬ結果が起る。故に私は世の中は那邊那邊迄も雌鳥勸めて雄鳥時を告ぐるであつて欲しい。之れは私が男子だからして言ふのでは無い。實に大なる趣味あり、深き意味あることと思ふからである。

## △アーヴィングの名詩

男子と同じ仕事をすると云ふことは決して婦人の能で無い、婦人には婦人獨特の能がある。即ち私は婦人は願くは彼の蔦蔓の匍ふが如くに美しくあつて欲しいと思ふのである。支那では蔦蔓のことを女蘿と言つて最も能く女性を代表させてゐる。又歐羅巴邊でも蔦蔓は葡萄樹の一種として往々女性を代表させる。之に對して男性を代表させるものは彼の松樹である。我國などでも松樹は風霜を凌いで百年の壽命を保ち最も强壯なものとして男子を形容し男子を代表させてゐる。所で此の松樹に蔦蔓の絡まつた景色は實に得も言はれぬ趣がある。詩人アーヴィングは嘗て此の景色を謳つてゐる。大きな松樹が雲を衝くやうな姿勢で亭々として立つてゐると、忽ち非常な大暴風雨で、天裂け、地碎け、雨は雷鳴電光を交へて咫尺を辨せず、と云ふ有樣となつて來た、其樣するとやがての中に烈しい風が轟々と地響をして吹いて來る、流石に頑丈な松樹も其の打

擊に堪えずして半分程からめき〳〵ッと吹き折られやうとする、――松樹丈ならば無論吹き飛ばされる所であつたが、幸ひなる哉蔦蔓が堅固と絡み附いて居た爲に、僅に枝を傷めた位でとう〳〵其の暴風にも堪えられたと云ふやうなとが書いてあつたと記臆してゐる。實に美觀である、何とも言へぬ風致がある。世の婦人達は何卒係うあつて欲しいと思ふ。

△蔓の一本立は無し

男子が外で働く時には或は大雨に逢ふ事もあれば大風にも吹かるゝ事もある、電光雷鳴咫尺を辨せぬやうな苦難に遭遇するとも數々である。此際婦人は家庭に在つて夫の慰藉者としては最も適當なものである。見よ男女同權論の最も盛んな亞米利加に於てすらも右アーヴングの時は最も有名なものであるとを。婦人は實に蔦蔓である。蔓の一本立と云ふとは無い何か一つの樹に頼らなければならぬ。而も樹に頼れば之に依て天迄も昇るとが能るのである。蔦蔓の纏綿として松樹に絡み附いたる所は實に美しいではあるまいか。而して之に依て男子を助けて行く、之れが眞の男女複本位であらうと思ふ。

（文責在記者）

# 婦人と趣味問題

女子高等師範教授文學士　下田次郎

△趣味は心の反映

一口に趣味と謂ば甚だ漠然たる問題で、炊婢が甘諸の買喰ひをするのも趣味なら、貴婦人令孃達が詩歌、音樂、繪畫等に憧るゝのも趣味で、こればかりは其人人の性質により境遇により年齡により階級によりて差別され各々好みを異にするのである、だから固より趣味を一定せよと云ふのではないが、茲には趣味と、嗜好と、道樂と、流行との區別を劃てゝお話し爲やうと思ひます。で私の所謂趣味とは彼の下等な肉體上の嗜好や道樂を意味するのではなく、例へば日本武士の

面影が櫻花によつて代表されて居るやうに少くとも其人の品性の一端を窺ふに足るべき精神的の糧食を指すのであります、言換ふれば我々が肉體を保つてゆくに一定の米や味噌を要するが如く、精神の平安を保つには是非とも趣味といふ糧を要するのである、けれども其糧の中には滋養分に富んだのもあれば、中には却て其營養を害するのもあるやうなもので、良い趣味を糧とすれば精神が健全になり惡いのを糧とすれば即ち不健全となるのであります。然るに一般の人は這の精神的糧食と肉體的糧食とを混同して、甚だしきは酒色の嗜好をすら趣味の範圍内にあるものと思つて居る人もある。

## △食客的趣味

未來の母となるべき女學生、其他年若い婦人に就て觀察するに、大方は外面の美觀と流行を追ふを以て趣味と心得て居るらしく、自ら固有の趣味と、それに對する批評的眼識とを有する者は殆んど無いと云つて宜しい。兎角現今の女性は、音樂が流行と云へばソレ音樂、舞踏が流行ると云へばソレ舞踏、何誰が新體詩を作るから私もやつて見やう、お隣りの奥さんが洋食のお稽古されるから妾も負けてはならぬ、といふ樣に凡て心から趣味を感じてやるのではなく、寧ろ交際上の虚榮心から起る一種の物眞似である。殊に彼のハイカラ式を以て趣味の標準とする一部の人達が、頭髮の形から髮飾、帽子、服裝等まで西洋人を擬て、怪しげの會話なぞを操り乍ら一廉時世に先つたものゝ如く心得て居るやうに見受けらるゝが、恁那のを西洋人の眼から看たら、誠に氣毒なほど可笑しいものだらうと思はれる。尤も趣味は時代の變遷につれて變化もし向上もしなければならぬものであるから、必ずしも流行を趁ふ勿といふのではないが、唯だ其物が我身に適するや否や、將た調和するか如何かを考へてやらぬと遂には我家を空屋にして他所の家へ食客する樣な滑稽に了るのである。

憾る例の最も甚だしいのは暹羅で、曾て其國の一部を佛蘭西の爲に侵略された事を同國民は既う忘れてゝも了つたのか日常の生活狀態から、裝飾、服裝、言語、交際振り等一切佛蘭西式に模倣するのを誇りとなし、學校の如きも巴里ですら見られぬ程の、形式だけは完備した女學校があつて、生徒も亦た自國の學問は如何でも先づ佛語を修めねば流行に後れると心得、若し誤つて巴里ッ兒とでも見られやうものなら、それこそ無上の光榮とする位だから其他は推して知るべしである、で右樣に自國の國粹を放擲して、他國の流行物に化ぶれた結果は甚麼かと云ふに、其表面こそ模倣し得ても內容は既に藥拔の殼で、佛蘭人ともつかず暹羅人とも附かぬ一種變手古の畸形兒が出來上つて居る。我邦では未だ左程に極端な人がないから幸ひであるが、萬一固有の國民性趣味を棄てゝ濫りに他國の物眞似をする婦人があつたなら、其子女は軈て魂までも國體と遠ざかる事だらうと案じられます。

### △財政と相談の趣味

西洋諸國の學校では兒童の時から智育や體育と共に情育——即ち趣味教育といふ事にも頗る重きを措いてあつて、私立の小學校ですら校舍の裝飾には非常に工風を凝し、且つ講堂や教室には名家の手に成つた繪畫彫刻等の美術品を網羅して、清新なる趣味を涵養せしむる機關が備はつて居るから、既に十二三歲の少年子女でもコローの畫が如何でミケロアンヂエルの繪が怎うだなぞと評し合つて居る者さへある。又家庭に於ても其通りで、よく〳〵生計に困る家なら格別、然もない限りは大抵眼や耳を娛ましむる器具の一式や二式ない處とてはない、殊に英國邊では到る所の都市に美術俱樂部及び娛樂俱樂部等があつて、何人でも自由に其處で興を得る事が出來るやうになつて居るが、日本には遺憾ながら未だ其設備がない。個人の家庭には勿論公共の學校ですら趣味教育の機關がなく、無風流で殺風景で、全で空家同然である。之は富の程度が彼國と

比較にならぬのだから致方がないとしても、責ては學校と家庭との間に於ける趣味の共通を計らねばならぬ、其故は女學生諸君が音樂學校なり美術學校なりで、折角專門の技藝を修得してもサテ家庭で其應用が出來なかつたら結局寶の持腐れで、學校でこそ三百圓も四百圓もする樂器其他が自由に使へても、我家でそれを購ふだけの餘裕がなかつた日には却て不滿を求める種になる。又料理法のやうなものでも、學校では瓦斯の火や蒸氣の湯でドシ〳〵費用を吝まず旨い物を拵へる法を習つても、我家なり嫁入先なりが餘り豐かでなく瓦斯釜どころの沙汰でなかつた場合にはツク〳〵其家の富裕ならぬが恨めしく、旁々家庭の不和を起さぬとも限らぬから、趣味の涵養も忘れてはならぬが、一面には富の度と相談して、成べくなら金のかゝらぬ、實益を兼ねた趣味に就く方が得策である。

### △職業即趣味

茲に職業の趣味といふのは、己が專門の業務に對して、所謂商賣氣以上の趣味を有する人を指すので、即ち生活の爲に業を營むといふよりは趣味があるから其職に從はる人を謂ふのである。勿論何人と雖も職務の中に多少の趣味を認めなければ行つて居られぬ譯であるけれども、併し生活の爲に厭々乍ら就業して居る人も決して尠くはない。宗教家、詩人、學者、發明家、美術家、音樂家等は前者に屬し、勞働者、人夫、小官吏、小商人等は後者に屬して、同じく生活難に追はれるものとしても、前者は職業其ものに多大の趣味を感得して居るから濫りに失望したり、肉慾上の慰藉を求めたりする事は比較的少いけれど、後者に屬する人達は己が仕事に興味が薄いところから、動もすれば娛樂を劣等の方面にのみ求めやうとする、といふのも畢竟趣味の感じ方一つで、如何なる勞働事業でも個中に一導の趣味を認めて行りさへすれば愉快でこそあれ、決して苦痛なものではない。詩人が詩を作るのも趣味なら百姓が田を作るのも趣味で、俗に詩を作るよりも田を作れとの諺は、一寸聞くと沒趣味の言葉に思はれ

るが、爾ではなく下手な非似風流を擬るよりは寧ろ健全なる勞働の趣味に就けとの諷刺である。然るに我邦では古來からの習慣で詩を作る人を以て上品となし田を作るを以て下等の民と心得、趣味と職業とは到底一致せぬものゝ如く見做して居るが、それが既に大なる間違で、凡て何業に拘らす我爲す事を神聖のものと思ひ、彼刀劍の名工が一口の刀を鍛へるにも齋戒沐浴して取かゝるやうに、心から敬虔の念を以てすれば自から職業以上の崇高なる趣味が生じて來るだらうと思はれる。

それと同じ理由で婦人が日常家庭に於ても琴や生花のみを趣味と思はず、今少しく之を廣義に解釋して、臺所の事から子女の養育、衣服の裁縫、洗濯、病人の看護等、凡て我爲すべき任務の一切を神聖なるものと信じて行つたならば、目に觸れるもの悉く趣味の津津たるを覺えるだらうと信ずる。要するに趣味とは必ずしも或範圍内に固定したものではなく、我々の職務及び日常の生活が即ち趣味であると覺る事が出來たなら、何人も敢て贅澤な慰藉を他に求める必要がなくなる事と思はれます。





# 現代 生活の重荷

佐治實然

## ▲生活難に對する救急法

物價は年一年高くなる一方で、收入は夫れに伴はぬから、社會の各階級に通じて、一般に生活難の聲か、高まつて來たが、取り分け困難なのは、月給五十圓以下の人々の家庭であらう。實に此の種の階級の人々に限り、何樣考へて見ても、貯金などは思ひも寄らぬ、只だ月々足りなくなる一方である、先づ考へて見給へ夫婦に子供一人と夫れから女中を一人置くとして、家賃が十五圓、米代が八圓、副食物が十五圓、主人の小使を五圓とするも、殘る所は僅に七圓である、此の七圓で衣物も着なければならぬ、子供に小使も遣らねばならぬ、夫れから醫療費だとか交際費だとか、何だ彼んだと數へて見ると、數限りもないが、何うして七圓位でなか〳〵遣り切れるものではない。月々食ひ込みに極つて居る、だから前にも云ふ通り、今日の所ろ月給五十圓取り位の人の家庭が一番困難であらう、故に私は思ふのである、今日の社會で一番能く貧民と云ふ言葉に當て嵌まるものは、今云ふ月給五十圓取り位の人々の家庭であると、事實車夫とか、土方とか云ふ勞働者は、是等の階級の人々よりも、餘程樂な生活を送つてるのである。

月給五十圓取若しくは夫れ以下の人々の家庭が、社會の貧民である事は今云ふまでもないが、翻つて考へて見ると、今日大學若しくは、其の他の學校卒業生の、月給は先づ五十圓以下と見ねばならぬ。突つ掛け五十圓以上と云ふのは、餘程の秀才か特殊の事情でもなければ、一寸困難である、故に今日女學校出の婦人を始め社會一般妙齢の婦人が、嫁入りをする事となると、素封家の家や、上流に生れた女は格別として、普通の婦人は先づ以て此等の五十圓以下の月給取り、



即ち私の所謂社會の最貧民の人の所へ嫁くものと見做さねばならぬのである、さう云ふ貧民の所へ行くものは誰れも厭であらう、又同じ嫁くならば、百圓も百五十圓も取る人の所へ嫁きたいと云ふのであらうが、今日學校出の青年の俸給は、十年も廿年も年功を積んだ後ならば知らぬ事、差し當り五十圓若しくは五十圓以下と相場が定つて居るから仕方がない、偖て斯うして見ると、今日の嫁入り盛りの女子は、非常の難局に立つて居ると見なければならぬ。

### ▲貧民たるの自覺

然り今日嫁入り盛りの婦人は、其の女學生であるとないとに論なく、一番困難の瘦せ世帶を繰り廻さなくてはならぬのであつて、今日の女學生が能くいふスウキートホームとか、理想の家庭などと云ふことは、思ひも寄らぬのである、社會の最貧の家庭の神さんが、樂器も糸瓜もあつたものでない、されば今日女學生諸君が考へて居るやうな、呑氣の事では、只だ喰ひ込み一

方で、一生浮む瀬がないに極つて居る、何うして子供の教育所ではあるまいと思ふ。

されば、是れを切り拔ける策は只だ一つある、夫れは何であるかと云へば『我れは社會の最貧民である』と云ふ自覺である、此の自覺さへあれば、此の生活難を切り拔くる事は、左程困難ではあるまいと思ふ、今日の月給取りの家庭（五十圓以下）が貧に惱まされて居るのは、此の貧民と云ふ自覺がないからである、見給へ、今日五十圓以下の月給取りの人の家庭は主人が一廉の紳士顏をして居れば妻君も又天晴の奥樣氣取りで居る、これではとても堪つたものではない、既に奥樣氣取りであるから、一寸出るにも辻車には乘れなくなる、正月他家へ行くにも、縞の衣物では行けなくなる、門構への家でなければ住めなくなる、と云ふ鹽梅で、だん／＼生活難の重荷に壓せられて、苦しまねばならぬのである、凡そ此の世の中に何が苦しいと云つて、外見を張る位い內心の苦しいものはなからうと思ふ。

## ▲奥樣氣取を廢せよ

是れに反して、我れは貧民の妻であると云ふ事を自覺したならば、女中を置く必要もなからう、子守を置く必要もなからう、自分で買ひ出しにも行ければ、水仕事も出來ると云ふ鹽梅で、一切見榮を張る必要は無くなるであらう、斯うなれば生活費は、乾度半分に減少するに違ひない、即ち今まで六十圓掛つたものも、三十圓で足りるやうになる、斯うなれば最う占めたもので、多少の貯金位は、乾度出來ると思ふ、成る程物價は騰貴し、生活費は近來著しく嵩んでは來たが、實際の生活の費用、即ち臺所の費用と云ふものは、爾う多く掛るものではない、現に我輩の家では、夫婦に子供一人、夫れから子守が一人、女中が二人、書生一人と云ふ七人暮しであるが、純粹の臺所の費用は、全體の生活費の三分の一の三十圓しか掛らない、成る程物價は高くなつたとは云ふ者の、實際の生活費と云ふは知れたもので、多くは外見を張る爲めに費す費用なの

である。

### ▲流行に對する心得

貧民であると云ふことを自覺するのは、之を具體的に云へば、虚榮心を去れと云ふことになるのである、而して此の虚榮を張ると云ふ事は、殆んど婦人の天性である、そして此の天性は、一番能く衣物の上に表れて、流行を競ふことになるのである、即ち流行の奴隷となるのである、こんな事では一生生活に餘裕の生ずる氣支へはない、恐らく此の世に何か愚だと云つて此の流行位愚なものはあるまいと思ふ、先づ新橋とか柳橋とかの、尊敬の出來ぬ婦人達が、暇潰しか、或は奇を衒ふ爲めに、妙な服裝を爲る、すると吳服店や何か〻奇貨措くべしとなし、新意匠だとか優美だとか高尚だとか、勝手な理窟をつけて、景氣をつける爲めに賣り出す、夫れを世間では、ワイ〳〵持て囃して、大流行となるのであるが、元來病的である流行などと云ふものゝ中に、眞の美術的な高尚な趣味などがあらう筈はない、苟も一家の主婦たる者が流行に目を眩されるやうでは一家を維持する事は思ひも寄らぬ話である、其人の心掛如何によりては、五錢の茶呑み茶碗にも、美術的の趣味を發見する事は出來るのである。

### ▲意志の鍛錬

兎に角今日のやうな生存競爭の烈しい社會で、一家を維持すると云ふことは、非常の難事で、第一意志が鞏固でなければ、何にもならない、虚榮や流行の奴隸になるのは、要するに意志が弱いからである、假令貧民と云ふことを自覺しても、意志が弱かつたならば、決して一家の財政を整理して、餘裕を生せしむることは到底覺束ないのである、我輩の思ふ所では、五十圓以下の家庭の人々で、立派に子供を教育して獨立させるだけの、資格を與へ、社會の一員として親たるの義務を全うし、更に老後子供の厄介に成らぬだけの計を爲すには、何うしても例の貧民的生活を二十年續けなくてはなるまいと思ふ、此の二十年の貧民的生活と

云ふものは、却に意志が弱くては續けられるものではない、何は兎もあれ此の意志の鞏固と云ふ者が、一番の要件である。

重ねて云ふが意志が弱くては、迚も一家の生計を支へる事は出來ない、世間では好く支出が收入を超過して困ると、溢して居る奥さんが澤山あるが、是れは畢竟意志が弱いからである、其處で我輩は世間の奥さん達に御忠告申すが、よく收支相償ふやうにするには、毎日支拂帳を檢査して、是れは是非支出せねばならぬ費用か又は支出せないでも濟むべき費用か、乃至は自分の意志が弱い爲めに、つい支出して了つた費用であるか、又は贅澤品であつたか不急の費用であるかを、一一檢査して、夫れに印をつけて置いて、漸次此の不必要の費用、贅澤の費用、不急の費用を尠くすると云ふやうな鹽梅にして、意志を鍛錬して行つたならば、克己心を養成する事が出來るのみならず、必ず生計に餘裕が出て來るに相違ない、兎に角是れから家を持とうと云ふ人、若しくは持つて居る人、殊に靑年の人は非常の難局に立つて居る譯であるから、平生意志の鍛錬を怠つてはならぬと思ふのである。

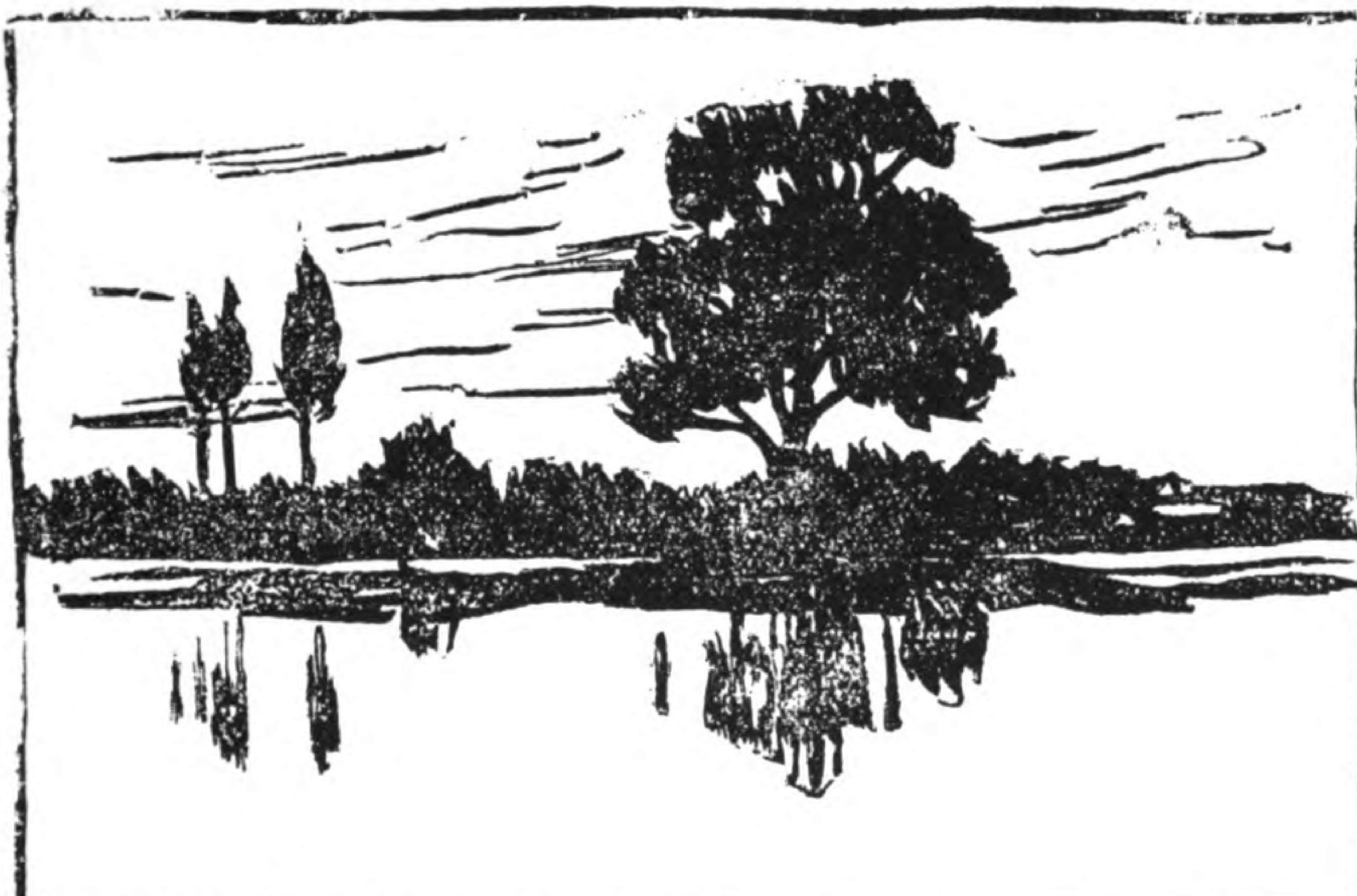
### ▲新世帶の覺悟

以上の次第で、今日では家庭を作ると云ふことは、一般に非常の難事となつて居るから今の男女學生が口癖にして居るスウーヰトホームなど、云ふものは、却却爾う容易に實現されるものではない、で斯う年々に生存競爭が、烈しくなつて來ると、男女を問はず、今後の靑年には、家庭を造ることの出來ない人々が、澤山出て來るに違ひない、で女子にも老孃と云ふのが、だん／＼增えて來るに違ひない、是れは實に人生の恨事であるが、何うも仕方がない、考へて見ると今日の物價で二十圓や三十圓の收入で、夫婦の間に子供が出來て遣つて行けるものではない、二十圓や三十圓では例の貧民的生活を實行した所が、貯金は覺束なからう、故に我輩は無資産の靑年男女に勸告する、互に家庭を作る前に、相當に貯蓄を爲し（譬へば男子は十七歳か

ら卅歳迄の間に、女子は十七歳から廿五歳までの間、刻苦して五百圓とか千圓とか云ふ貯金をして)、夫れを出し合つて世帯を持つやうに仕たならば、生計にも餘裕が出來、將來の發展を望む事も出來るだらうと思ふ、是れは新に世帯を持たうとする青年男女に特に御忠告申すのである。

### ▲虛榮心

以上述べた所は、現代の生活難に對する、救濟策として、我輩の見解を述べたのであるが、何も貧民生活をしろと云ふて、純粹の貧民の眞似をして、衞生上、體面上、又子供の教育まで



も無視して、不健全な生活をしろと云ふ譯ではない、要するに人に笑はれるとか、見つともないとか云ふ下らぬ虛榮や、夫れから亦た利益にもならぬ、奥樣氣取りや、三越、白木屋などの奴隷になる事は、止めにしてしまつて、極度の節儉を實行しろと云ふのである、で若し此の善き意味に於て、貧民生活を實行する事を、嫌ひの者は、相當の貯蓄の出來るまで、世帯を持つ事を見合はせるのが好い。

### ▲如何に日曜を暮らすべきか

終りに臨んで一言して置きたいのは、人間には休息の大切な

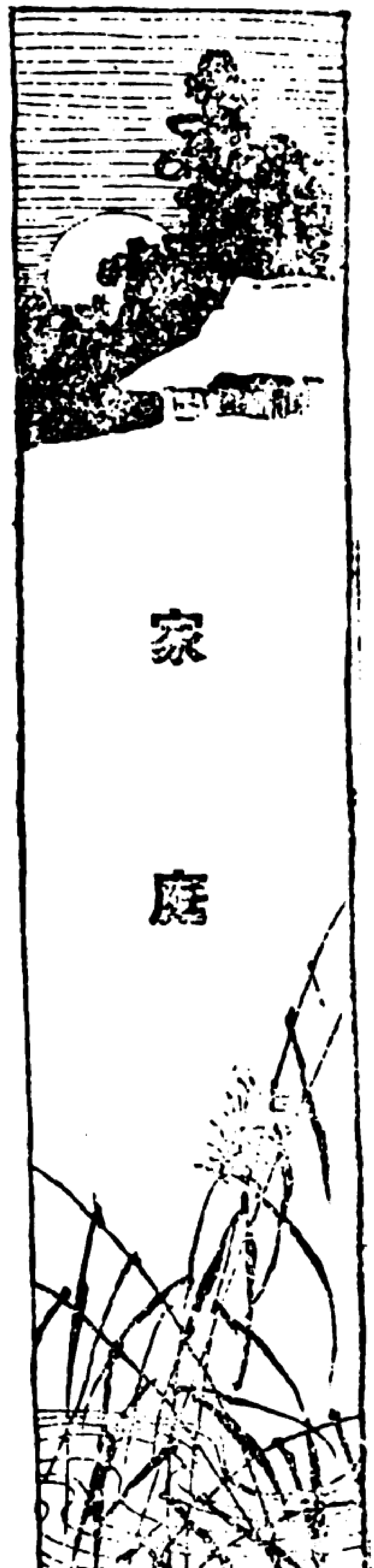
ることである、斯う生存競爭が激しくなつて來ては、若し人間に適當の安息日がなかつたならば、社會は砂漠のやうになり、人間は獸類の如くになつて仕舞ふであらう、一方に於ては貧民生活を自覺して、極度の節儉を行ふのは、固より必要であるが、又た他の一方に於ては、適當の安息休養を求むると云ふことは、是れ亦た極めて必要の事であらうと思ふ、其處で巧みに有功に日曜日を利用すると云ふ必要が起るのである、我輩の考ふる所では、此の日曜だけは、平生の生活の規則から脫して、極めて氣儘に、自由に遊ぶ事が必要であらうと思ふ、即ち主人が盆栽が好きならば、一日盆栽を弄くつて居るも好し、娘が小說が好きならば、一日小說に耽つて居るも好し、要するに他の意志を以て人の自由を束縛せぬやうにするので、是れで始めて安息の趣旨に副ふのである、故に日曜には、是非教會へ行かなければならぬなど丶、子女を强制するのは安息の趣旨に反すると思ふ、一家揃つて郊外散策も面白いが、餘り進まぬ者を强いて、連れ出すのは如何であらうか、何でも不健全でさいなく、有害でさへなかつたならば、當人の好きのことを何でもさせるが好いのである、故に芝居でも寄席でも、當人が好きであるならば遣るが好いのである、要は十分心身を樂しませ、一週間の疲勞を洗ひ去りて、新らしい勇氣を養へば夫れで、安息日の目的は達しられたのである。(亞洲生筆記)

## 脚氣と麥飯

麥は分析の結果に依れば滋養分に於ては米飯より優るけれども消化吸收に至つては米に及ばず從つて身體を營養することも米の次である思ふに胃腸を刺戟して其運動を促し胃腸を通過する間が早過ぎ吸收さるゝ間が無いのである脚氣患者或は脚氣豫防の目的で麥飯を食するのは便通を良くする爲で便通が充分なれば脚氣も大抵豫防が出來、既に罹つて居る人でも重くはならぬものである、單に脚氣豫防の目的のみならず、都會居住の人、座業を執る人、運動不充分の人殊に學校及び便通の惡しき人の常食には麥飯が適當である、然し胃腸の病氣のある人及び常に胃腸加多兒に罹り易き人には惡い同じ目方の米飯と麵麭とは滋養分は米が多いが消化は麵麭が良い。

# 予が理想の家庭

子爵　秋元興朝




茲に何か一つの問題が起るとすると、世間の人は之に對して色々と異說を立てる、色々新規の說を出して來る、漢語に『議論百出』と云ふ熟語があるが、今日の有樣は實に其の通りである。併し乍ら一體眞に道理のある有益な說と云ふものは普通有りふれた極めて平凡なもので、其樣〳〵異つた說が澤山出來べき筈のものでは無い。然るに今日右の如くに或る問題に就て異說紛々として絕えないわけは何故であるかと考へて見るに、凡そ說を立てると云ふとは甚だ自由なもので、設令事柄は同一であつても其の言ひ廻はし方一つに依て之を如何樣にも論ずるとが能るものであると共に、議論は多くは一種の政略として用ゐらるゝ爲である。科學や宗教上の議論は或は其樣で無いかも知れぬが、政治上の議論などは多くは夫れである。即ち普通有りふれた平凡な事を言つて居ては到底世人の注意を牽くに足らぬから仍で成るべく斬新な珍らしい說を立てゝ一世の耳目を驚かし、而して之を自分の仕事の上に利用しやうとする。で、其の結果は如何かと言ふと、所說は兎角奇矯に走つて迚も實際に行はれぬやうな空論ばかりが多くなつて來る。家庭問題に就ても慥に此の弊はあらうと思ふ。實に遺憾な次第である。

斬新奇矯な説を立てゝ一世の耳目を驚かすと云ふとは、政治上の駈引などには時には必要なこともあらうが、婦人相手の家庭問題に就ては、斯かる奇説は成るべく之を避けたいと思ふ。抑も婦人は非常に神經過敏な者である、彼の圍碁は能く人間の氣質を示すものであるが、それには最も明かに此の消息が現はれてゐる。今日日本一の女碁客は都築某と云ふ婦人であるが、それで何段を打つかと言へ



ば、僅に三段である。私よりはやゝ強い位のものだ。何故婦人には恁う立派な碁客が無いかと言ふと、即ち婦人は餘りに神經が過敏の爲に、一方を押されると忽ち其處へ氣を奪られ、他方を押されると又忽ち其處へ氣を奪られると云ふ風であるので、自若として全局面に目を配つて居ると云ふとは到底能ないからである。之れは強ち圍碁ばかりと限らない、總て何事に就ても非常に感動し易いと云ふの

が婦人全體の稟性である。斯かる氣質の婦人に向つて殆んど空論に近い奇説を述べると云ふことは甚だ危險な話であるから、家庭や婦人に關する所説は斬新奇矯を避けて成るべく穩當なもの、換言すれば成るべく平凡なものであつて欲しいと思ふ。斯かる平凡の中にこそ却て盡きない眞理を含むでゐるのである。

尙ほ一歩を進めて言へば、所説其ものが平凡であつて欲しいのみならず、家庭或は婦人其ものも亦平凡であつて欲しい。先づ家庭に就て言つて見れば彼の種々小六ケ敷い理窟を列べて、家庭内を規則づくめにすることなどは、甚だ面白からぬことである。其樣云ふ堅苦しい所も無く、平々凡々たる中に洋々春の如き趣味を求めてこそ初めて家庭は樂しいのであらう。此點から言へば彼の武士道的の家庭の如きは餘り感服したものでは無い。

又家庭の主腦たる婦人其ものに就て言つて見るも、若し私の理想を聞く者があるならば、矢張り、婦人は溫良貞淑で高誇らず、家政を處理する程の經濟思想もあつて、奢靡に流れず去りとて吝嗇に陷らず、と云ふやうな極めて有りふれたことを言ふので、決して特色があるとか偉ゐとか云ふことを望まない。詰り私は平凡を望むのである。勿論婦人にしても自分の身を立てやうとして政略的に一世の耳目に價するやうな珍らしい事業を遣つて見せると云ふことも往々あることだし、又昔から書物に傳へて烈婦孝子と言はれてゐる者の中には親や夫の爲に切腹をしたと云ふやうな例もいくらもあつて、孰れも惡いことではあるまいが、併し此等は極めて非常の際に處する手段で、決して通常則るべき道で無い。通常則るべき道は實に平凡であらうと思ふ。

所が奇矯は學び易いが此の平凡と云ふことは却々困難なことで、特に平凡の中に趣味を保たせやうと云ふことになるといよ〳〵六ケ敷くなつて來る。或る彫刻家の話を聞くと、鬼神の像を作るのは甚だ容易いが、仁王や鐘馗はやゝ六ケ敷く、阿彌陀の像は最も困難だと云ふことである。蓋し鬼神や仁王は非常に奇矯な特色を備へてゐるが、阿彌陀となると何等の特色も無く極めて平凡々々であるからであらう。平凡の困難なることは之を以ても知ることが能る。去れば如何にして平凡を學ぶべきか、如何にして平凡の中に趣味を保たせるかと云ふことは、實に今日の家庭及び婦人に就ての一大難問であらうと思ふ。

# 下婢使用の呼吸（某實業家夫人の實驗）

婦人記者

下婢を使ふには家々の職業、生活の程度、主婦の職業等に依て餘程難易があらうと存じます。私は良人の創業時代に殆んど家事を擲つて職業の手助け致しましたから、臺所や子供の世話一切を一人の下婢に任せて置きました。主婦が自分の職業のために下婢を使ふ氣苦勞は却々なもので御座いまして、實驗ある御方は御分りの事と存じます。

## ▲主婦の職業と下婢

一家の體裁上とか家事繁忙のためとかで使ふ下婢は若し彼が暇を申し出た場合には、左程ハラ〳〵せずと暇を出して差支へないでせう。畢竟代りの來る僅かの間、主婦が一倍の勞働に堪へれば濟むと云ふ次第ですが、財政上の都合で學校教員を勤めるとか、文筆に從事するとか、其他の職業に主婦が身心を傾注する場合特に幼い子供でも在つて老人も無き境遇には實に下婢を唯一の股肱と賴まなければなりません。餘裕なき生活で完全の下婢を求めると云ふ事は勢ひむづかしく、不完全な下婢を股肱に賴む主婦は誠に氣骨が折れるに違ひありません。私なぞは今日の地位に登るまでに此苦痛をさん〴〵味はひました。創業の頃は二人の幼兒を下婢に托して早朝から夜晩くまで良人の職業を助けましたので、不完全の下婢も取捨選擇の餘地なく、何んでも居る者を置くと云ふ主義でありました。其頃居つたのは大抵山出の少婢でしたが、無理と知りつゝ臺所から子供の世話を托し、目を眠つて我慢して居りました併し唯今から考へますと割合よく延つて參つたものと存じます。

## ▲弱味を見せぬ事

如何に下婢が股肱だからと申して主婦が一歩を讓るのは不得策でありませう。私は下婢に空威張は致しませんが、又如何なる場合にも喋々しく機嫌を取る事は致しませんでした。賞罰は嚴重に定め、誤つた事は諄諄と說き聞かせ、主婦の威は充分保つやうに致したのです。主婦が自分の我儘を捨てゝ嚴正に使へば却つて逃出しもせず、追々善化するもので、相模から參つた十五歲の少婢なぞは、初め山猿のやうで在つたのが、追々事理も譯り、働き振りも怜悧になつて十九歲の嫁入時まで勤續致しました。唯今では幸ひに良人の事業も盛大に進み、私も一定の職業を止めて家庭的の主婦となりましたから、下婢を使ふ呼吸も大きに樂にはなりましたもの〻、男の雇人も多勢となり、生活の程度が進めば勢ひ二三人の下婢が必要となりますから、一層の氣配が必要になりました。三人の下婢が二人暇を取つた場合なぞは、殘る一人が自然鼻張が強くなつて幾分か我儘を申し、小言を云へば直に暇を與れと嚇すやうになります。私は斯る際に決して之を宥めません下婢が皆無となれば男の雇人等は辨當に致し、自分等の炊事は自分が執るから少しも困らぬと申して澄して居りますと、彼は拍子抜がして却て謹愼となります。總べて出來得るだけ勇氣を皷して彼等の增長を壓へなければなりません。猥りに下婢を馴れ親しませて友達同樣に遇するのは結果が宜しくないやうです。

### ▲物を與へる場合

盆暮の心付は格別、間に着古した物でも與へるのには餘程場合を考へなければなりません。下婢が不平を漏す時とか、二人の下婢が一人下つて人手に困る際なぞに與へる方がよくあるやうですが、是れは彼等の自惚心と慾心を增長させる許りで宜くないと存じます。私は下婢が誠實〲しく働いた場合とか、一人の下婢が二人に殖へた場合とかに與へます。斯樣致すと己れの勤め方を主婦に知られた事を喜こび、又後進の下婢より己れが信任さる〻事を悟つて大いに勵みとなるもので御座います。夫れから間食品なぞをチョイ〲

と與へたり、遊歩に出た際僅かな土産物を與へたり致すのは、一時彼等を喜こばせませうが、慣るに從つて如何も貰ふのを當に致す弊風を起し易いので、私は一切チョイ〳〵與へることを致しません。但し家內の祝ひ事と正月や彼岸なぞには其折々の物を充分に與へますし、他家から到來した赤飯とか饅頭とかは平等に分與する事に定て居ります。

▲閑居を戒しむ

私の家では主人は申すに及ばず、年季子僧に至るまで休日の外は夙夜汲々と働いて居りますから、子供達も初め下婢達までぶらりと暮す時間はありません。否私は勉めて寸暇なきやうに用事の割當をして置ます。男子ばかり働いて女子が閑居致しては誠に濟ぬ次第ですから、此點は下婢に充分申し含めて置ます。夫れで此趣意を了解する下婢は永く勤めて相應の衣類貯金も拵へ、是に堪へぬ下婢なら一二ヶ月で出て了ふと云ふ風で御座います。給金の多寡に依て働らくと云ふのは一般の下婢根性のやうに申しますが、一つは習慣の力も御座いまして、最初から閑居を戒めて置けば自然此風に化されるものです。




私は下婢等が例令坐睡致さうが如何しやうが、立働きの間に爲すべき針仕事は整然と責任的に分命して置き、避暑なぞに出掛る際にも手一ぱいの仕事を當が

つて參ります。

### ▲主婦の虛言

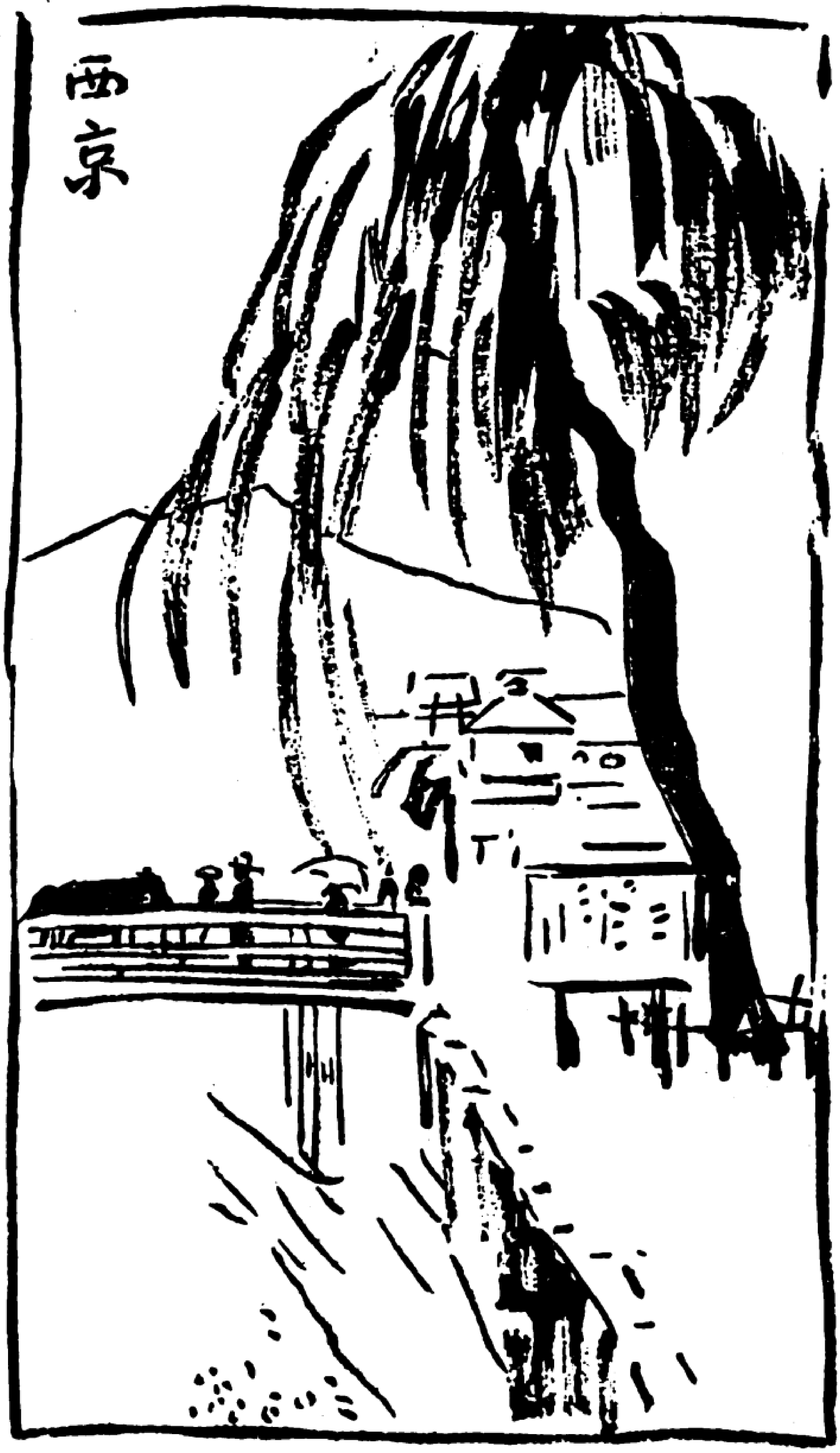
敎育なき下婢等に對しては臨機應變に誤魔化して置く方を得策とする主婦方も在るか知りませんが、私は如何に劣等な下婢にでも虛言を申し聞せた事は御座いません。未だ年若の頃は良人が芝居見物其他の行樂に私を促がす事が屢々御坐いまして、子供を下婢に托して遊びに出ると云ふのが甚だ心苦しかつたのですが據どころありませんから何時も正直に打明け「今日は芝居の御供爲なければならぬので留守を賴む」と斷つて參りました。平生私が獨りで逸樂を貪らぬ事は彼等も知て居ますし、且斯樣に正直に打明けますれば却つて快よく感じて眞面目に留守を致したのです。或る知己の主婦は良人が行樂好きで度々連れ立て出るのを下婢に氣兼致し、虛言をついたり、內々で少許の御金を與へたり、御土產を買て來たり致した處、增々下婢に附込まれ、遂に御金をやらぬ時は留守に家を明けるやうになつた相です。斯樣に氣兼して一時を瞞着するより初から正直に申し聞せた方が却つて主婦の威を維持されるものと存じます。私は子供にも四五歲の者には整然と行先を明言して留守居させて置きました。

### ▲下婢に節儉を敎ゆる場合

經濟の何物であるかを辨へぬのは普通下婢の習ひですから、最初より炭薪の使方等を敎へましても、彼等は唯吝嗇と誤解いたし蔭で復讐するものが多ふ御座います。私は置いてから半年も經て私の主義を略々呑込だと思ふ頃そろ〳〵と經濟法を敎へ初めますが之を敎ゆるにも「斯樣に致しては御前達が他日一家を持てから大きな損となるのだ、女は收入の道を知らぬものであるから、一家を興すには唯良人の收入を巧につゝまやかに用ゐるにある」と云ふ理窟を反復申し聞かせますが、自身に影響ある訓言と感じて割合によく遵奉致すもので御座います。

## ▲正邪の鑑別

下婢の正邪を鑑別するのは一寸面倒なもので、横道な者程細かい事を正直に見せかける事が御座います。或る歳私が子供を連れて一ケ月間旅行に出掛ける際、二た瓶の白砂糖を仲働と御飯焚の二人の婢に預けて参りました、雇人達の御菜には別の砂糖を用ゐますから白砂糖を使ふのは唯主人の副食物ばかり、夫も甘味を好まぬ方で一ケ月間に些細の分量で足りる筈でありますのに、私が歸宅の際には一と瓶の砂糖が盡て居りました。是は二婢が自由に間食に用ゐたので留守中是位の事は當然でありますが、唯二婢何れか先立になつて致したのか曖昧で御座いました。其後御飯焚は暇を取り、仲働は勤續して極正直に働いて居つたのです、翌年の夏又々出掛る際矢張砂糖を瓶のまゝ渡しました處「御留守中は唯旦那樣の御菜ばかりですから小さな蓋物へ入て置て頂けば澤山で御座います」と申しました一寸聽くと如何にも正直のやうですが、前年朋輩と共



に留守致した際は共に誤魔化して置き、單獨となつてから正直に見せると云ふのは却々油斷がならぬと存じ夫れから始終注意して居りました處、後に少々纏つた金を竊取いたしたのを發見して暇を出して了いました。

### ▲紙屑

紙屑、空瓶等を粗末に致させぬために、賣拂つた御金を下婢の所得と定ますのは良い事で御坐いますが私共のやうに混雜な大家內で目の屆かぬ場合が多いと、却つて弊害を引起すかと思はれます。下婢が屑屋に關係する味を覺えますと、慾心を引起す動機となり、些細な品は主人の目を忍んで賣拂ひ自分の收入と致さうと云ふ念が起り易いものです。些細な事から下婢に罪惡の念を釀させますが恐しいと存じ、例令屑類の始末に少々の粗漏は出來ても、下婢と屑屋との關係は一切斷つて置くので御座います。

### ▲下婢の慾と買物

下婢の慾深きは使ひ惡ひやうに思はれますが、無慾の下婢は希望もなく萬事無氣力で困るもので御座います。慾深き下婢は金錢の事は成る可く關係を絕つやうに主婦が注意いたし、良く感化すれば必らず結果が宜しう御座います。私は出來るだけ買物は自身出掛けて致すので、野菜物など夏は二三日分冬は十日分程一まとめに求めて置きます。野菜物も魚類と同樣に日々相場の差がありますから、大家內の總菜を買ふには此邊の加減を餘程注意せねばなりません。

### ▲良人と下婢との梶取り

男子は寬大の代りに下婢の情を察するのが粗雜ですから、時々不調子な叱言を申し、下婢は非常に狼狽する事があります。斯樣際に旨く梶を取てやるのは主婦の役で御座いませう。併し餘り下婢に同情し過ぎると良人に不快の感を與へますから、成る可く良人の面前

では默つて居るか、共に輕く添口を致す位に計らつて置き、後に下婢に向つて主人平素の德行を說き、不調子な叱言は男子の常である事を申し含めれば宜いでせう。良人が少々無理な叱言を申したとて、遽て下婢の機嫌を取り物など與へたり致すと、彼は唯主婦のみを敬愛して主人を怨侮するやうになります。

▲主婦の素行と下婢

下婢は主婦の素行を戒めるのに餘程利益あるものと存じます。夫婦差向ひで居れば無遠慮に過ぎて口爭ひなぞ致し勝ですが、下婢が居れば世間に吹聴せるゝのを恥ぢて自然主婦が忍耐いたすやうになり、又間食や晝寐なその不行跡も下婢に氣兼して謹むやうになります。下婢が二人三人と殖えるに從がひ主婦は益々窮屈を感ずるだけ品行を謹むたつきとなるので御座います。



◎女子の結婚期

米國の一雜誌に曰く近頃女子の結婚期がひどく後れて來たのは憾みである、近頃の女子は夫を迎ふるの前に先づ實社會に出でゝ、いろいろな履歴を作りて其身を飾り立て樣とするが、夫は大なる誤りで、女子の最も幸福な結婚は蕾の將に綻びんとする時が良いのである、若し此時期から晩るれば互に愛の情が減少して居るから、結婚後の愉快は甚だ淋いことになる、女子は年齡十九歲頃が結婚するに丁度良い程に熟して居る、晩れて夫を選ぶ女子は、多くは其選擇を誤り易いものであるから、年十九歲に達したならば、其眞情より愛し得る男子と結婚するが良い云々」とある、我國の女子も參考として然るべきことと思ふ。

# 日向(輝武)夫人の趣味生活談

一記者

渡米成功者、否移民成功者として有名な日向輝武氏夫人欽子が、當世倬卒なる美婦人であるとは、皆様御存じの筈、併し親しく夫人に接した人々は、容貌の美よりも、寧ろ其の才學の優れたのに服して居るといふ事でムいます。日向氏が少壯政治家として品行の正しき、一に夫人淑德の致す所であるとは同人間の噂でムいます、記者一日この美にして慧なる夫人を王子のお宅に訪ひました。

上野停車場より汽車に乘り、田端驛に下車し、停車場の後ろの岡を昇り盡せば、其處に一と際目立つ宏壯の建築曠濶なる眺望を占領した邸宅があります、刺を通じて導かるゝまゝ和洋折衷の應接室に入れば、そこはやゝハイカラ風に裝飾された一室で書架には裝釘の麗しき洋書が數多積み重ねられてありました前庭は約二百坪もあらんかと思はる一面の芝生で、左方の隅には葡萄棚がしつらはれて秋の結實時には紫玉のさぞとおもはるゝあたり、美はしき紅紫様々の草花は地を彩どりて一しほ艶に、眺め床しきお庭と拜見いたしました、やがて夫人は出て來られましたが、實にも噂に聞く當世風の麗人、鴉の濡羽とまがふばかりの艶々しき黒髪を庇にふつさりと結ばれ、質素なる洋裝にて一應の御挨拶ありて談は外國語の研究より始まりました。

## ▲外國語の研究

英語は二三年來重に、會話の方を勉強して居りますが、矢張り會話は書籍では思ふやうに上達しません、殊に俗語やアクセントの具合などは、是非西洋人に就かねばだめです、實際西洋人に就て見ますと、書籍で學んだ所と、餘程違ふ所のあるのが分ります、私は只今はミセス、マッコーイと云ふ人に就て、習つて居りますが、其の研究方法は、何でも構はず種々の話し

を矢鱈に話し掛けて貰ひ、夫れに答ふると云ふ方針を取りて居ります。ミセス、マッコーイの外に、今一人私の師匠は、竹山と云ふ婦人ですが、此の方は久しく外國に居りましたので、日本語は丸で分らぬ位です。此の方には二三年來自宅へ遊びに來て貰つて、毎日教へて貰ひました、兎に角會話は、學校で學んだ丈では何にもなりません、其の證據は日光や箱根へ行つて見ると、眼に一丁字のない西洋人の乳母が、立派に英語を操つて居るのを見ても分ります、會話は右の通りですが、併し讀書力を養ふには、先づ一冊自分には少し六づかしいと思はれる位の書籍を、幾年かゝつても善いから、飜譯して見るなどが好からうかと思ひます、



浴衣

何の仕事でも然うですが、外國語の研究には、殊に此の根氣が必要です、私は只今英語の外に、佛蘭西語を神田(猿樂町)の和佛共和女學校で學んで居りますが、思ふやうに進歩しないで困ります、人樣は英語の素養が十分あれば、他の外國語の進歩は、極めて迅速であると、申しますが、併し文法や發音などは、全で趣きを異にして居りまするから却て或る場合には、英語の素養が邪魔になることが澤山あります、私は只今の所では、さう多く西洋人に交際がありませんから、外國語を實際役立てると云ふやうな塲合は、比較的尠う御座いますが西洋人で只今交際して居るのは、日向の商業上の友人の夫人連中位のもので御座いますが、追々

役に立つ場合も多くなつて來るかと思つて居ります。

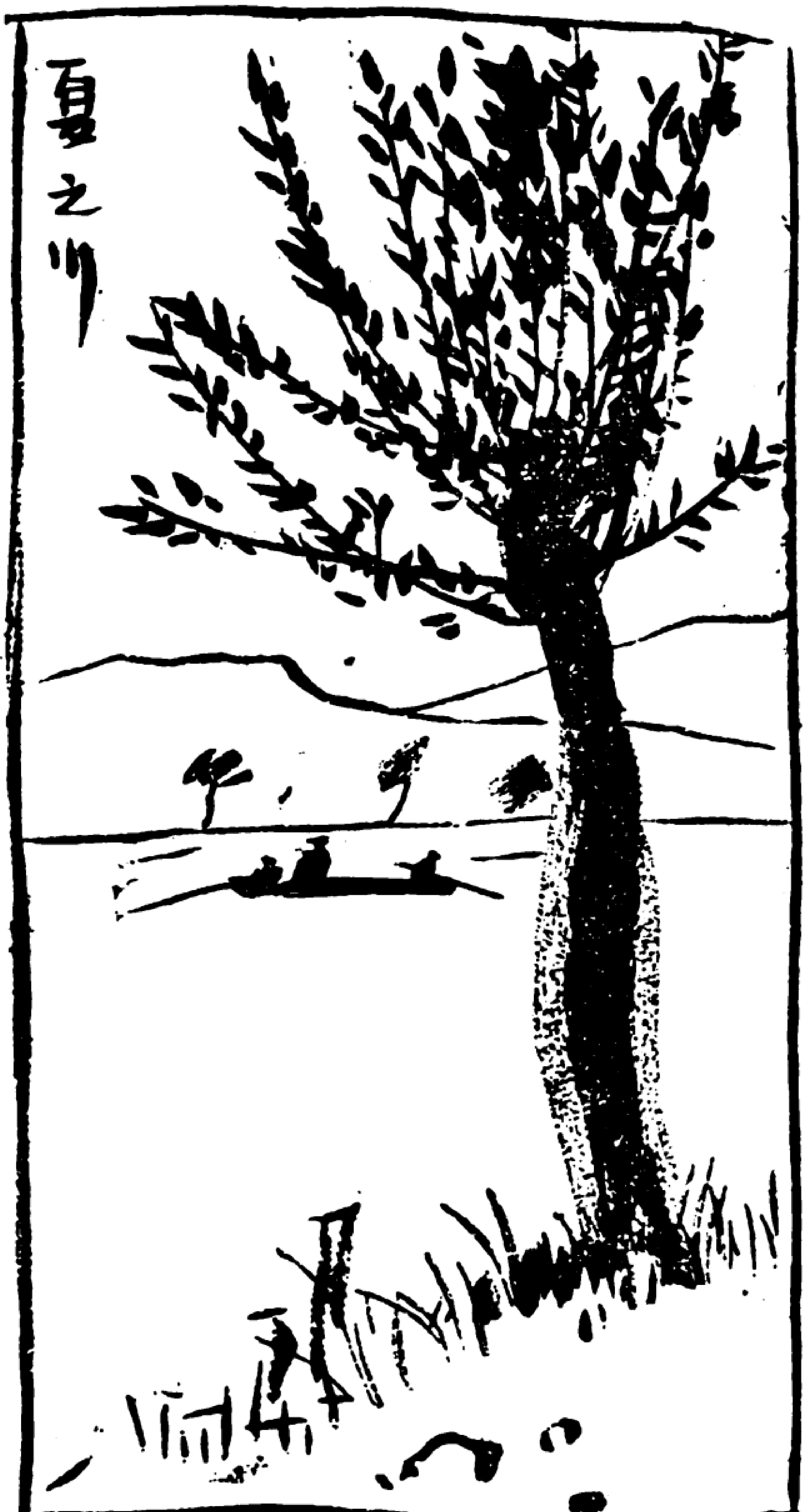
▲英詩の趣味

私は趣味と申して取り立てゝ、御話し致す程のことも御座いません、私は子供の時から、和文と和歌が非常に好きでムいまして、一時文學で身を立てやうなどと云ふ、望みを起したことも御座いました位ですから今でも遣つて居ります、併しあまり上達しませんが、もう少し英語の力が增して、自由に英詩の趣味が、解し得られるやうになれば面白からうと、思つて居るのです、左樣英詩人の中で、格別是れが好きと限つたことはありません、ロングフエーラーや、ウヲーツウオースは好い所があると思ひますが、併し取り分け私はキーツが好きで御座います、私のマア趣味と申しますれば、斯んなもので、音樂とか美術とか、社交とか云ふものには餘り趣味を持つて居りません。

▲慈善事業

社交と云へば、私は外へ出るのが餘り嗜きでありませんので、愛國婦人會とか色々の會へ、入會ては居りますが、滅多に顏出しをしたことはありません。其の理由は、一つは引込み思案でもあるからでせうが、今一つ當今の會と云ふのが、餘り形式的で、多くは只だ外觀ばかり立派で、實質が伴ひませんから、夫れが第一嫌ひなので御座います、併し同じ婦人の會でも、板垣伯の夫人が創立された東京女囚携帶乳兒哺育會へは、單に入會して居るばかりでなく、亦た非常の同情を以て、出來得る限りの盡力を致して居る積りで御座います、私は爾う思ふのです、世の中に何が一番同情に値するかと云つて、女囚の携帶する乳兒位、憐れな者はあるまいと、是等の乳兒は、生れ落つる時から、監獄を以て天地と考へ、被物と云へば、柿色の獄衣より外に見たこともありませんから、外へ連れ出して、普通の衣服を見せると大變驚いて早く家へ歸りたいと云つて泣くさうですが、其の家とは即ち監獄のことで御座います、何と氣の毒なものではありませんか、夫

れは兎に角萬事斯う云ふ風で、周圍の惡風に化せられ滿足な人間になれぬと云ふのは、何たる不憫のことでございませう、假令親には如何な罪があつたにせよ其の子にまで罪のまきぞへは酷いでせう、ですから私は此の女囚携帶の乳兒哺育と云ふ事業は、目下最大の急務と存じまして、此の方には多大の同情を以て、盡力致して居るので御座います、此の會は、最初板垣伯夫人が、獨力で始められたので御座いまして、微々たる者ではありましたが、只今では餘程盛んになつて來たやうで御座います、此の外に私の微力を盡して居りまするのは、片瀬と群馬の孤兒院ですが、矢張り是れも前と同じ理由で、盡力致して居るので御座います。




### ▲雇人へは責任を持す

宅には只今二十人許り、雇人が居りますが、妙なもので、船頭多くして船山に上るとでも申しませうか、前にはもつと澤山雇人が居りましたが、大勢居れば居る程、仕事が間に合はぬので御座います、此れは畢竟自分の責任を互に逃れやうとするからだらうと思ひま

す、で人數をズット減じました今日では、前よりも餘程成績があがるので御座います、何でも雇人を使ふには、大勢雇ふよりは、小勢の人を雇ひ、夫れに大勢雇ふだけの給料を増して遣り、仕事の分擔をチャントと定めて、其れ〳〵責任を持たすと云ふのが、一番善いやうに思ひます、只今宅に居りまする女中は、臺所に一人、仲働き（座敷係り）が一人、乳母が一人、夫れから親類から女の子を二人預かつて居りますが、此の親類から預けられて居る二人の娘は、他日嫁に行つた場合に當人の利益にもなると思ひますから、女中と立ち交つて働くやうに言ひつけて置きますが、人數を減らして給料を増し、其代り責任を重くしましてからと云ふものは、一同善く働いて與れて、何でも普通雇人の殆んど二人前も働きます、日向は久しく米國に居りましたから、雇人の休日も是非米國のやうに、一週に一度宛休まして遣りたいと、平素申して居りますが、夫れは直ぐ實行し兼ねる事情もありますから、毎週一人宛交代に休暇を與ると云ふことに致して居ります、夫れで何にも彼も、夫れ〳〵責任を負はせて置きますから、大抵の事は任して置いても間違ひはないやうです、併し食事の獻立殊に、晩餐は、私が一々指圖して其上手傳ひまで致すやうな按排にして居ります、夫れから最後に、私は雇人を使ふ秘訣は、何でも餘りガミガミ干渉したり、叱つたりしては駄目だと思ひます、で何か誤りのあつた場合には、見ても見ぬ振りをして居て、其代り何か一つ善いことがあつた場合には、非常に褒めると云ふ具合にして居りますが、是れが一番好いやうに思はれます。

### ▲育兒の方針

何も詩人や學者の見地から申すのではありませんが私は子供を教育するには、田舎に限ると思ひます、夜晝人馬の聲や、車の音で、囂々して居て、人の安眠や靜思を妨げる都會は、決して子供を教育する場所ではあるまいと思ふのです、殊に人間は自然に遠ざかれば遠かる程、罪惡に接近し、天眞を損ずる者ださうで

すから、都會に於て子供の受ける周圍の感化は、決して善良のものではありません、夫れに亦た學問の上から見ましても、折角學校で習つた植物學とか動物學とか云ふ類のものは、所謂米の生る木も知らぬと云ふやうな、都會に居ては、實物教訓に接する機會がありませんから、夫れを實地に應用したり、亦たは研究したりすると云ふやうな譯には參りません、私は子供の時永らく田舍へ遣られて居りまして、百姓家の子供と一所に、野山を遊び廻つて、單に身體を達者にしたばかりでなく、餘程自然に對する興味と云ふ者を覺へました自分の經驗から考へて、何うしても、都會は子供の教育には不適當だと思ひましたから、是れまで久しく赤坂に住んで居りましたのを去年斯んな田舍へ引き越して參りましたので御座います、で三人の子供の中二人は學校へ行つて居りますが、一番大きい姉の方は、

私と一緒に矢張り和佛共和女學校で、佛語を遣つて居ります、進歩は私よりも好い位、何うしても語學は子供の時に限るやうです、夫れは兎に角、私の子供を教育する方針と申せば、何でも大體に於て、放任主義で、大抵のことは干渉しないやうにして居ります、で學校から歸つて來ますと、直ぐ惡い衣服に着替さして野原や畑を遊び廻らせて置きますが、併し全くの放任主義では、放縱に流れる虞れがありますので、放任の中にも何か一つ規則立つた事が必要ですから、昨年から鳩を飼ひ時間を定めて夫れに餌をやる役目を命じて置きましたが、鳶が悉皆攫つて行つて了ひました、兎に角、王子へ參りましてからより多く自然に接近さすると云ふ、目的は十分に達せられまして、品性に及ぼす感化も餘程善いやうに考へます、妙なもので毎日自然に接近して居れば、從つて自然に對する興味も出て參るものと見えまして、先日も六歳になる姉の方が、竿突て雲間を嘯き渡る雁を見て居ましたが、突然に、「字のやうだ」と叫ぶので厶います、之れを聞いて私は成程と感服致しました、何故かと申せば、偶然とは云ひながら、あの薄墨に書く玉章の云々と云ふ古歌の意と一致して居りますからです、まあ斯ふ云ふ按排に

萬事自然から受ける感化は、非常で御座います。

## ▲家庭の趣味と幸福

家庭は婦人の王國でありますから、趣味の滿ちまするのも、又殺風景になるのも、一に家婦の心掛け如何に依ると思ひます、家婦には色々の務めがありますが分けても家庭に趣味を生せしむると云ふことが、一番太切の務めではあるまいかと思ひます、婦人として交際場裡に出でたり、又は公共の事業に斡旋するのも、勿論必要ではありますが、併し夫れも家政が善く整つて、最早内顧の憂ひがないと云ふやうな場合に餘力を以て遣るべきもので、自分の家庭を沙漠のやうにして置いてまでも公共事業に奔走し、交際場裡に飛び廻るべきものではあるまいと思ひます、夫れでは何うすれば、家庭に趣味が生ずるかと云ふに、夫れには第一家婦たるものが高尙の趣味を持つて居なければならぬと思ひます、家婦が高趣味を持つてさへ居れば、一家中夫れに感化されて、乾度趣味が生じて來るに違ひありません、夫れから今一つ家庭を幸福ならしむるについて、私共の一日も忘れてはならぬことは、快活と云ふことだらうと信じます、人間は固より感情の動物ですから、場合によりて隨分辛い事、悲しいこと、又た面白くないこと癪に障ることが、中々多いでせうが其所が即ち務めだらうと思ひます。若し私共が何時も快活で、莞爾して居れば、家中一同愉快で、笑聲の絶ゆると云ふ時はなくて、晴々した春風和日の趣きを呈するで御座いませうが、若し之と反對に、主婦が何時も苦虫を嚙潰したやうな、顏をして居たら何うで御座いませう、夫れこそ家中が濕つぽい陰氣な空氣に掩はれて了つて、一日も面白いと云ふ日はなくなつてしまひませう、ですから私は何時も小供のやうに無邪氣になつて、快活に振舞つて居なければならぬと思ふので御座います、此の無邪氣と云ふことは、氣を快活にするには一番好いやうです。

## ▲樂天主義

快活と無邪氣の精神は、固より必要ですが、同時に極く大切なのは、樂天的の思想だらうと思ひます、樂天の思想と云へば、大變六つかしくなりますが、畢竟物事の、暗黒面を見ないで、成るべく光明の方面を見ることです、さなきだに女は兎角悲觀に傾いて愚痴を溢したりしたがるものですから、此の樂天の思想を常に養ふのが、肝要だらうと思ひます、自分の事を例に引くのは何ですが私は何時も負け吝みが强いと笑はれるのです、日曜などに全家揃ふて、散歩にでも出掛けると云ふことに、前から定めて、樂しんで其の日を俟つて居りまして、偖て愈よ其の日になると、急に雨が降り出すと云ふやうなことが厶います斯う云ふ時に、一同落膽して、鬱ぎ込むのに、私は雨が降つて來て能い鹽梅だ、お蔭で一家揃ふてかるた取りが出來るとか終日讀書が出來るとか何とかマア負け吝みを云ふて、一同を勵ますばかりでなく、自分をも慰めると云ふやうな具合にして、成るたけ樂觀〳〵と務めて居るので御座います。



▲良人の待遇法

快活なそぶり格別心得になるお話でも厶いませんが何でも結婚後一ヶ月許りの時の心持ちで、永い年月押して通して行くならば、夫婦の間は何時も圓滿であるに違ひありません、誰れしも結婚當時に、良人に對して、畏敬の念を失ふものではありませんが、二月三月狎れるに從ひ、我儘が出て來て、最初は毎日新らしい花を活けるだけの心掛けのあつた者も、終には花瓶に山程埃が堆つても構はぬと云ふやうになり、又た最初良人の歸りを、玄關まで出迎へたものが、次ぎには廊下で鉢合せをする、其の次ぎには良人が自分の室まで入つて來たのを、知らないで居て、オヤ何時お歸りになりましたのと、洒々して居ると云ふやうな、風になり勝ちのものでして、夫れが爲めつい夫婦の間も圓滑を缺くのだらうと思ひます、夫れから何と申しましても、容貌を粧ると云ふことは、良人の愛を惹く第一の要件だらうと私は信じて居ります、如何にもお粧で以て辛うじて、良人の愛情を惹くなどは、屑くないとか、情ないではないかなどと、云ふものもありませうが、併し美を好むのは人間の天性ですから、仕方がありません、此のお粧りも、結婚當時は、誰れも怠りませんが日數の經つにつれて、だん／＼等閑になり、殊に子供でも出來ると、愈よ怠け放題で、最後には、良人に催促されて、やうやく不精不精に、髮を結ふと云ふやうな按排で、我と我が良人の愛情を冷却さするやうになるですが、私は是れは自業自得で誰れを恨むにも當らないと思ひます、夫から今一つ、世間にはよく良人の不品行を溢して居る、夫人が澤山ありますが是れは世間の夫人方が餘り、眞面目過ぎるので、良人の方でサッパリ面白くないから、ツイ慰藉を他に求むるやうになるのではあるまいかと思ひます、申すまでもありませんが、家庭は男子方に取りて、唯一の樂園であります、終日波風荒き生存競爭場裡に馳せ廻つて、辛いこと、不快の事、悲しいこと、山のやうで御座いませう、で溢るゝばかりの不平を包んで、慰藉を家庭に

求めやうと歸つて來ました時に妻たる者が、笑顔一つ見せずに、眞面目に、澄して居たら何うで御座いませう、つい其不平を他所で晴そうと云ふ氣になります。私共にした所が、外から家へ歸つて來た時に、出迎ひに出た女中が鬱いだやうな面をして居るのを見ては餘り良い心持ちは致しません。

### ▲如何にして良人を慰藉べきか

夫れでは何うすれば、不在中の出來事について良人を喜ばすことが出來るかと云ふに それは餘り眞面目でなく、只




だもう子供のやうに無邪氣に快活に、時々滑稽でも云つて、良人を笑はせるのが肝腎です、夫れから良人を慰めるについて、一番大切なのは、矢張り良人が晩に外から歸つて來た時に話す事柄です、で、私は毎日今日は何う云ふ事を云つて、良人を笑はせやうかと、色々滑稽の趣向を考へて置くと云ふ風にして居ります、夫れから、亦た此の良人が夕方歸つて來た時には、私は何でも其日の出來事は、一仔一什洩れなく話して聞かせるやうにして居ます、此の有り丈けの出來事を悉皆話すと云ふとは、良人を慰める上に取

て極く大切のことだらうと思ひます、夫れであるのに、結婚當時は、よく話したものですが、日數の經つと共に、だん〳〵懶くなつて、三つの中二つ若しくは一つしか話さぬと云ふやうになり勝ちのものですが、是れが一番惡いことで、若し後日夫れが良人に知れゝば、良人は氣を惡くするに違ひありません、是れは極く些細のことですが、夫婦間の不和も、斯ふ云ふ些細のことから、起るものですから氣をつけねばならぬと思ひます。併し何も彼も打ち明けて話すと云ふ事が必要だからと云つて、かう云ふ時に家計の困難や、會計の不足などを訴へるのは、一番謹しまなければならぬことです、然もなくても良人は、浮世の波風に揉まれて、ムシヤクシヤ腹で居るのに、顏を見ると直ぐに、爾んな話を持ち懸けては堪ッたものではありません、總じて良人の氣を惡くするやうな話しは、成るべく後廻しにして、好い機を見て話し出すと云ふ事は、妻たる者の心得置かねばならぬ事であらうと思ひます。

## ▲剛柔兩性の調和

女子は始めから家庭的、内助的に作られたもので、特に良人に對しては、服從的でなければならぬ、斯ふ申せば、何うやら卑屈なやうで、盲從ばかりしてゐると云ふ人もありませうが、女子の天分がそう云う具合に、精神的にも、形體的にも造られてあるのですから仕方がありません、服從的だからと云つて、何も一から十まで盲從しろと云ふ譯ではありません、男子は剛性であり、女は柔性であつて、其處に剛柔の調和が出て來るものであるのに、男の剛に對して、女が矢張り剛に出ましたならば、何時まで經つても調和する時がないでせう、盲從と云ふから聞えが惡いのです、服從と云ふ中には固より其處に女子の天職があり又た柔能く剛を制すと云ふ、作用がなければなりません、夫れから女の天職は只今申す通り、何うしても家庭的、内助的であるから、特別の場合は兎に角、女が外へ出て働らくと云ふことは、私は主義として賛成致し兼ねま

す、ですから、私は日向の選擧の競爭の時に、人樣が鳩山夫人や栗塚夫人のやうに、選擧運動を遣つてはどうだなどと、お勸め下さいますが、爾んなことをしなくても、政治家の妻として、良人を助ける道は幾らもある事と存じて居ります、マア斯う云ふ鹽梅で、私は萬事引込思案ですから、女權擴張とか、婦人運動とか、云ふものには、何うしても贊成致し兼ねまする、先日も或る婦人の方が、女子にも政治演説の傍聽を許すとか云ふ請願を衆議院に出したいから、加盟して呉れろと申して參りましたが斷ッて仕まいました、でお話はまだ色々親子別居や良人待遇法などについて、考へもありますが、餘り長くなりますから、今日は是れで御許しを願ひます。

（胡劍生筆記）

## 家の修飾法

今西桃里

家は慰安の場所である。家内の樂しむべき處である。從つて修飾（趣味の發現）が必要である。一體我邦の家庭はこの趣味の發現と云ふ點に缺けては居まいか。即ち修飾の方法が誤つては居ないかと思ふ。抑も家事の中で最も大切なものは子女の教育である。そこで修飾も自ら教育的でなければ不可ぬと思はれる。で吾々はこの教育主義に依つて其修飾の目的を達したいのである。

### 一、應接所は如何に修飾すべきか

應接間は他人と對面する最初の場所である。若し心易き人なれば或は臺所に、或は主人の居間に案内するのであらうけれど、初對面の人は先づこの應接室に入れて會見するのである。そこで互に挨拶があつて、彼我の疏通を圖るのであるがこの面會以外に客をして「我が家」を知らしめるものは何んであるかといへば無論この室内の修飾である。客の正面に懸つて居るのは一家族の寫眞である。我が家の系圖である。或は主人の理想とする人物の肖像である。卓上は白布を以て被はれ白高麗に自然の花卉をさしはさみたるは其主人

の人に對する公平にして潔白なることを示して居る。それから來客があれば直に面接する。之れが禮である。しかし場合によつては客を待たさねばならぬこともある。客の方から云へばこの待たされると云ふ場合が得て多い。之れは吾々の能く經驗する所である。所で徒に時間を空費し卷煙草の五六本も吸はせられてようよう面談の光榮に浴するといふことが隨分ある。之れは主人の方に他意がないとするも客の方から云へば嬉しくは感せぬものである。さりながら室の一隅に新聞とか新刊雜誌とかを集め之等の縱覽所が設けてあるなれば假令客は讀む氣でなくとも自然眼を移して慰めるものである。かくて人を感化し我が身も高尙に進むのであると思はれる。

二、食堂は如何に修飾すべきか

家族は勿論、知己親友も交りて相語らひつゝ會食すると云ふことは樂しみの中の樂しみではないか。さりながら我邦の食堂の構造、設備が不完全であるがために、この樂しみを受けることが少ない。薄暗い最狹い片隅が急がしさうに食事を濟すといふのが習慣である。來客に食を進めるには客間に膳を配し、六ケ敷げに饗應するのが例である。かくては決して會食の樂しみを得るといふことは出來ぬではないか。吾々の考では家内も客も一室に集つて同じ膳に向ひ、强ゆるなく遠ざかるなく、相談じ、相語らひ、自由に食を共にすると云ふようにしたいのである。かくあるからは食堂を廣くし、又明るくし、而も淸潔に、前には庭を扣えて見はらしあり、室内は草花などを配したいのである。芝居でも背景がよろしくないと情が活きて來ないと同樣、食堂は食堂としての背景を保つことに心を用ゐねばならぬ。かくて食堂をして趣味あらしめるは勿論、衛生の法を進め、交際を容易ならしめ、又經濟にも叶ふことゝ思はれる。

次號には客室、小兒室、庭園の事を說くべし。

# 庖厨

婦人博覧會に於いて實演せる

## 支那料理

津川千代子

### ▲清湯江搖柱

干したる貝の柱を柔になるまで茹でて、細にほどしておき。それから鍋にスープを（一人前に五勺足らずの割）入れて、火にかけ、右の貝の柱を入れて、鹽（茶碗盛の味位に）と醬油を極少し入れ、胡椒にて味をつけ。次に鶏卵（一人前に一個）を別の器に割つてよくませて、其貝の柱が煮たつてゐるところに、まんべんなく流し込むのであります。丁度日本料理の玉子とじのやうにするのです。

鶏卵は直に煮えますから、火から下して、茶碗に盛りて出します。（貝の柱は乾物店で賣つてゐます）

### ▲炸丸子

十人前をこしらへるとして、百三十目位の豚肉をよくたゝくか、また挽肉にして、生姜を二片程、微塵に切つて肉とよくませ、それに醬油三勺ばかりを入れ、よく〳〵かきませます。

うき粉を、茶飲茶碗一杯程を、かたく水に溶き、前の肉に入れてまたよくかきませ、一錢銅貨の大さ程にまるく團子のやうな玉につくり、豚脂または牛脂のよく煮たつたところに入れてあげます。あげる時間は表面狐色になり少し黒みを帯びた程度においてとりだします。

うき粉の代りにかたくり粉を用ゐてもよろしうございます。いづれも乾物店にあります。

### ▲春捲

鉢か丼に鶏卵をこわして、（三人前に二個位の割）よくませ、メリケン粉を中匙一杯程、水にてどろどろに溶き、鶏卵と一緒にませます。フライパン（此は西洋鐵鍋でありますが、實は支那鍋にてこしらへるが正式です。フライパンや支那鍋がない家庭には、たゞの鍋

卵焼鍋を用ゐてもよろし）にあぶらをしき、此に前の鶏卵を少し入れて、圓滿に搖り乍ら厚くならないやう成るべく薄く焼き、すぐ裏がへして、一寸片方を焙るのです。それを外にあけて、更に幾度も前のやうにして焼くのであります。

一、豚肉を薄く切つて、それを更にかさねてせん切りに切り、二、キヤベツの葉を一枚一枚にほどして、煮たつた湯に鹽を一つまみ入れて一寸うでまして、それをまたせんぎりに切つて、水氣をしぼり、三、葱の白いところを二ッに割つて、細くせんぎりに切ります。

あぶらをフライ鍋に入れ、前の肉を入れ、チリチリといり、杓子にて始終かきまぜながら、醤油を少しさし、葱を入れてまぜ、最後にうでたキヤベツを入れて、よく杓子でまぜ乍ら、煮るのです。此等が煮えた頃スープを少し入れて、加減を試て、皿にあけておくのです。

最初に焼いた鶏卵をひろげて、皿にあけたものを、細長く入れて、グルグルと卷いて、中央までに至り、兩端を少しそり、メリケン粉のドロドロに溶いたものを指にてなすりつけて、而して後卷きをさめ、その卷きをさめのところを又メリケン粉にてつけておきます。

それから此卷いたものを脂にてあげるのです。それを三つか四つに切つて、一人前として皿に盛ります。脂は、ヘットでもラードでもよろしいのであります。

### ▲伴鶏絲（パンチースー）

上等の鶏肉を切らずに、そのまま、煮たつた湯の中に入れて茹で、茹だつたら外にとり出して、一寸位の長さにして細かに指にて裂きます。又庖丁にてうすくそぎ小口より細く切つてもよし。

外に鶏卵五個を（鶏肉百目として）白味と黄味とを別々に分けてよくかきまぜ、兩方とも水と鹽とを少しづつ入れてまぜ、黄味を丼のやうなものに入れて、蒸籠に入れてむします。黄みが蒸しあがつた時、その上に白みを入れて又蒸籠に入れて蒸します。蒸しあがると白味は眞白になりますから、外に出して、前のやう

に細くせん切りに切ります。両方とも切れたら一緒にませ、西洋がらしを酢にてとき、醤油と塩少しとにて味をつけ、此にてませ合せます。これは皿に盛ります。

又鶏肉の代りに豚肉でもよろしい。豚肉百目を二つ三つ位に大切りにして、湯の煮たつたところへ入れて茹でます。箸をさして見て中から赤い血が出なくなれば茹だつたので。それを細く、せん切りにして前と同じやうにします。



▲醤肉

まづ五人前として百目位の豚肉（股の肉）を、丸のまゝ煮たつた湯をたつぷりとして、その中に入れて一時間程茹でます。その茹でた汁を極僅少（匙に二杯位）を殘して、後は外にとつてしまひ、醤油を三勺程を入れ、それから香ひをつけるために、葱を丸のまゝ五寸位に切つて二三本と、生姜を皮をむいて丸のまゝ二つばかりとを入れ、汁がなくなつて焼きつく位まで、肉をまはしながら煮ます。それをうすく切つて皿に盛り、西洋がらしを練つて少し附け合せます。

### △燒醸魚

豚肉を細かに叩くか、又は挽肉にして、葱と生姜とをみじんに切りたるものを入れ醤油を少し加へよくませておきます。

魚を（魚は白き身の魚なら何魚でもよし、當會にては鯛を用ゐました。）長さ一寸五分が二寸位にうすくそぎ、うすく鹽をふり（好みにより胡椒も少しふりかけるもよし）それにて前の肉を少しとり分けて包み、メリケン粉を鶏卵にてとき、鹽少しを加へ、この中に包んだ肉を入れて、ころものよくつくやうにしてラード（豚の油）のよく煮たつたところに入れて揚げます。

### ▲米粉肉

糯米を洗つて、此を焙烙にて煎り、擂鉢にてすりて粉にし、水嚢にてふるひ。それから肉をうすくそいで醤油に生姜をおろして少し加へ、それに前の肉を浸しておく事五分間、取り出して、糯米粉の中に入れてませ、肉のまはりに粉がつくやうにして、茶碗蒸の茶碗に五六片を入れて、外にスープに鶏卵を入れよくませ、醤油と鹽少し入れて味をつけ、これを前の茶碗の七分目位まで入れて、蒸籠にかけておよそ三十分間蒸します。出來上りたら、茶碗の蓋をして、暖かい中に出します。

### △揚白菜

キャベツを一枚一枚に取りはなして、煮たつた湯に鹽少しを入れて、其中にキャベツを入れて、ざつと茹でて外に取り出して、冷しおき。

豚肉をよく叩くか、挽肉にして、葱と生姜とを微塵に切り、肉の中に入れて、醤油と少し許の胡麻油とを入れて、よくかきませ、キャベツの葉を小なれば二つ位、大なれば三つ四つ位に切り、堅き部分は切り棄て、それにて肉を包み、兩端を折りて巻きおさめる。

肉を包む分量は拇指の大きさ位に、長さ一寸五分に巻きます。巻けたらば此を鍋か丼のやうなものに入れ、スープをたつぷり入れて、醤油と胡椒にて味をつけ蒸籠にかけて。およそ三十分位蒸し蒸しあがりたら三つ位を小丼に盛つて、汁も入れて、出します。

# 季節の總菜

▲嘉許肉

豚肉をうすくそぎ、それを細くせん切りにして、葱と生姜を微塵に切りたるものを少しませ、醤油を少し加へ、鶏卵を割りて塩少し入れよくませて、其肉の中に入れてませます。

鍋に牛脂または豚脂少し溶きその中に前のを入れてかき交せながらジリジリ煎る、此時間は肉がにえとほるまでに止めておきます。



△鯛の若菜焼

鯛を三枚にをろし、程よく切り塩をふりかけて小骨を抜き金串を打つて皮面から焼き、中頃打返して串を捻り、程よく焼きあげて菜の微塵を魚肉へかけて復び煮るなり、風味極めてよろし、菜の微塵は茎を除き俎の上で揃へて細かに切り叩き塩水に投じ茹て引揚たるものなり。

△鮪の卸し和へ　鮪の肉を賽の目に切り置き大根を卸して水氣を程よく絞り、蓼を酢にて揉み出し、蓼を捨てゝ酢に醤油を加減したるを大根にかけ右の鮪を和へるなり。

△蠶豆の味噌汁　蠶豆の皮を取り　若布のみち（筋のこと）を取除き程よく切りて實とするなり、汁は味噌を摺りて漉すは常のごとくなれど手數を省くには一週間分位味噌をすいのうにて裏漉になし、貯へ置き沸湯に分量の味噌を入れ溶かして煮立用ふるもよし。

△小鯛の潮仕立　小鯛の新しきを撰び鱗を去り腸を開き、よく洗ひて鹽を撒り暫時置き鍋に鹽を加減して入れ金杓子にて底へ摺りつけて燒き、それより鰹節の煮出しを入れ煮立つたところへ、鯛の鹽をざつと洗ひ落して入るなり、斯くて沸立ちたるところへ、醤油を色のつかぬほどにさし、この醤油はほんの味をつける爲めの心持なれば、ほんの少量にてよし。

△海老の摘入れ薄葛　車海老の身を甲より離し、腹を去りて、擂鉢に入れて、よく摺り、鶏卵の黄味白砂糖少々鹽少々を摺りませ、小指ほどの大さに丸め、又は金杓子にて少しづゝ掬ひ一寸茹でるなり、取合に冬瓜を一寸ほどの長さに刻みて茹でたるを實となし清汁に仕立、沸騰せる處ろへ薄く解きたる葛を入れるなり、吸口は青柚子を剝ぎて添へるなり。

△鰹魚の附燒　鰹魚の身を大きく切身にし麹に柚子の皮を摺り交せ醤油にて溶かしたる液の中へつけ置き、暫時たちて後金串にさして炙くなり、浸し置く液は味淋醤油にてもよし、新生姜の根など添ふべし。

△鯉の洗ひ　鯉を調理して肉を薄く長目に二三寸程に切り、極冷水にて充分に洗ふなり、これをなすには別に一人水を注ぐものありて一人は洗ふ手順にするがよし褄には蓼、擦し山葵などよし。

△棒鱈の煮附　棒鱈を一兩日水に浸け置き（あまり永く水に浸し置く時は味を損ずるのみならず、夏日は臭氣を生ずるものなれば、一晝夜位がよし）取あげて角に切り、共に交せて味淋、醤油を加減して煮上ぐるなり、但し梅が香を撒りかくれば更に美味なり、梅が香

とは上製の鰹節の奥のみを削り、細かに揉み、醤油、味淋、酒にて味をつけ、火鉢の助炭に入れて乾燥せしめたるものなり。

△しんじよの清汁　鯛ならば申分なし、比目魚にてもよし、新しきを撰び、皮をすきとり、狙板へ肉をのせて庖丁の脊にてこきおろし、擂盆へ入れて能くすり、全くこなれたらば、それへ鶏卵二つ白砂糖少々塩少しとを加減して入れ、また摺り交せかくて適宜の淺き箱へ擂肉を入れて上をこき、平にしてゆでるなり、若し面倒とおもはゞ丸めて摘入にするもよし、さて茹で上りたらば、それを清汁に仕立つるなり。

△鯖の味噌煮　鯖の鱗をふき、鰓を取り、腹を開きて臓を出し腹の中を水にて能く洗ひ、三枚におろし、適宜の切肉となし、別に鍋へ水と砂糖とを入れ、一回煮立て、前の切肉を入れ落蓋をなして煮、魚に火の通りしとき、並味噌を粒のまゝ加へ一回煮立て、之に少し生醤油をさし一寸煮て鍋を火よりおろすなり。(但し上等の煮方ならば最初に酒と味淋とを四分六分の割合に合せ之に水を加へ一回煮立てし汁にて煮るべし)

△南瓜の丸蒸し　南瓜の蒂際より少し離れたところに庖丁目を入れ徐かに蒂を抜き細き竹箆にて瓤を浚ひとり、其中へ兼ねて拵へ置ける煎豆腐、椎茸、銀杏を薄醤油にて味をつけたるものを詰め、以前の蒂を蓋にして蒸籠に入れて蒸すなり、但し南瓜は嫩くして肉の締りたるを撰ぶがよし。

△梅干の仕方　梅干は餘り熟さぬ無瑕のものを選び暫時水に浸し置き、笊へ揚げて水の切れたる時、瓶のごときものへ入れ、梅一升に塩二合の割合に入れてまぶし、壓石をせずに簾蓋なり、板なりの蓋をなして一日の内に三四回動搖せば二日ばかりして水上るなり、さて赤き縮緬紫蘇の葉(梅一升に付一把の割合なり)をもぎとり、よく洗ひて塩をふりかけ、擂鉢の様なものゝ中でざつと揉み灰を搾り去りて更に梅酢にて能く揉み、梅の中へ入れるなり、かくして漬けたる梅は暑中三四日干せは好き梅干になるなり。



# 月の手鏡

遲塚麗水

## 七月

卷く玉の芭蕉の葉の、何時しか鵬の羽となりて窓に一丈の碧を映す、若竹も早や簷を越えて琅玕の粉白く宵月の影は風を含んで、樗の花はをほろ〳〵と緣に敷く。

梅雨晴れて、夏は慌わしく訪づれ來りぬ、石榴の花、忍冬の花、一は鮮かに一は香ばし、南天の花は、見るに趣きなけれど、嫩葉の紅きが二十日鼠の趾のごとく看らるゝも愛らしや、合歡の花、雨に西施の睡りを思ふ風情あり、栗の花、山梔の花、何れも品なき花なれど、時知り顏なるは憐れなり、未央柳、春の暮れの楊花の無賴漫天の雪を學ばず、後れて梅雨の中に咲くはしほらしく、顏ばせ白き太り肉の當世風の丸ポチヤと見ゆる乙女の、近寄れば滿面の白痘痕と二世許六の品すべき紫陽花、誰が肌觸るゝ紅の花、鐵線の花、玉簪の花、籬の下の零れ種の酸漿草の、これも紅覆輪の小さき花を咲き出し、昔時の冥に雲を穿がつて名のりたる杜鵑の、吐きし血潮か奴苔靑き蹲石に、染めて鮮かに紅の石竹花、空行く雲を浮織にしたちゝら波の綾を驟む汀には、花菖蒲、燕子花、あるか無きかに藻の花の浮くも面白く、夏の景色はやうやくに整ひて、靑簾、釣葱、蚊遣の豚を緣にして、水團扇片手に簟に油團の胡坐、氷に冷した倠の雪、趣き多きは夏の夕暮、先づ此の月の行事を記せば。

四日　北米合衆國の建國祭、東京駐在の米國大使館にては此の夜朝野の名流を招待して夜會を催す。

六日　水防出初式、日本橋濱町の大川にて執行す、式場は細川侯爵邸の前の河岸にて、午前九時警視總監臨場し、勇ましき水防夫は三十人づゝ一組となりて、角乘、梯子乘、竿乘り、競泳などの技を演ず。

七日　七夕の佳節なり、牽牛、織女、鵲の橋を渡り

て相ひ會ふの夕とかや、支那にては乞巧の奠とて月の光りに五色の糸を針に貫ぬきもて、裁縫の技巧を祈るとぞ、竹の枝に色紙短冊など結びて立てたる習例は今ま廢れたり。「笹の葉に枕つけてや星迎ひ」

九日　此日と十日とは淺草觀音の四萬六千日の緣日なり、賽客雜沓す。

十一日　諸官衙、學校、此の日より暑中休暇となる。

十二日　魂祭の料を賣る草市は此の日より諸處に立つ。

十三日　此の日より十五日までは盂蘭盆なり、魂棚を作りて祖先の靈を祭る、膳の上に誰が落したる白髮を拾ふて魂棚の奥懷かしき親の顔、乳母の來て茄子の牛、瓜の馬にも泣くあるべし、供へたる朝顔の、紅筆に似たる蕾を有せし人の面影に忍ぶなど、夏の底にも秋の哀れの通ふ日なる、此の夜、川邊に苧殻を焚きて魂を迎ふ。




十四日　佛蘭西共和國紀念祭日なり。

十五日　中元、健やかに在す双親に、子より鮮魚を供する生見魂、此の夕、魂棚の靈を送る、送り火や後下りの袴腰、此の日より十六日は地獄の釜の蓋の明く日とて、商家工家の徒弟等は一日の暇を乞ひ得て遊び歩く、やぶ入りなり。

十八日　三緣山增上寺の開山西譽上人忌修行。

二十一日、此の日より土用の入りなり、暑氣はますます加はる、閑ありて累なき人は己がじゝ銷夏の好地へと赴くなり、近年いたく流行する富士登山、時流を趁ふて心催むる、まだ登らざる人の爲めに、いざ其の梗概を此に記さん。

風煙縹渺たる富士の裾野、其の中に通ずる登山口は御殿場停車場よりする中畑口の東表、同じ驛よりする須走口、佐野停車場よりする須山、鈴川停車場よりする大宮口、甲斐の大月停車場よりする吉田口、この五つの登山路の中にて御殿場口と須山口と、須走口と吉田口とは、富士の半腹にて合して一つの路となる、中に大宮口は尤も險しく、須山口は最も淋しく、先づは吉田口と御殿場口とは、登るに易き路なるべし、今は御殿場口よりする路の事を記すべし。

裾野を過ぎて馬返までは馬、轎を通ずべく、馬返の上に太郎坊あり、登山の必要品は大抵此にて用を辨ずべし、此處にて登山第一の要具なる金剛杖を購ふ、登山の時期は陰暦六月の朔日より開かれ、八月の三十日に閉づと稱すれば、七月の初旬より九月の中旬ぐらゐまでは石室に人ありて登山の客を待つなり、但し大抵は七月の十五日頃より八月の中旬迄に登るを可とす。

登るには衣服の注意が肝要なり、裾野、燒山、登る時には淋漓と汗を流せども、名にし負ふ三國一の名山とて、人の世を拔くこと高ければ、麓こそ夏の最中なれ、廣寒紫微に近き巓きには氷雨ふる寒さなれば、フランネルの襯衣二三枚は用意すべし、但し夜具、褞袍の類は隨處の石室に備へあり、服裝は輕快なる和服に限る、草鞋が好し、洋傘など携ふべからず、山上の雨は橫に吹き逆に降れば傘の用なし、携へ行けば棄てたくなるなり、足袋は二足ぐらゐ用意すべし、興奮劑として少量のブランデー、ウヰスキーなどを携ふも可、登るに急ぐことなかれ、輕く徐かに、金剛杖に身を凭せて千鳥に登るべし、路も自づから文字の形についてあり、八合目から上は空氣稀薄となれば、人の顏が黃色に見え、唇も紫に變り、呼吸脈搏の切迫することあり、こ

れを山當りといふ、中には頭痛眩暈するもあれど、山を下れば忽ちにして平日の心地となるなり、怖るゝことなかれ、山に登りて路に迷ふといふことなし、そは登山者の絡繹として絶へざればなり、一合目毎にも石室あれば、夜に入らぬ限りは何處にも人あり、寂しきことなし、恐ろしさもなし、迅雷風烈の襲ひ來ぬかぎりは。

石室といふも、三方に巨石を疊み一方を開きて出入の口となし、厚き扉を設けたれば、穴藏の一邊を開きたるごとし、低き床に疊あり、入りて正面に爐を穿ち屋上に雪を置きて、其の溶けたるを架樋にて桶に導く、鑵詰、菓子、鷄卵、酒、草鞋など客の需むる儘なり、六合目より上は空氣の稀薄なる爲めに火力弱く、飯には心あり、八合目より大だるみ、胸突八町の嶮あれど、左ばかり嶮岨とは思はれず、やがて內院、一に御鉢といひて古の噴火口、直徑は十三町、其の周壁を巡るを外輪、巡り、といひ、內部を巡ぐるを內輪巡りといふ、山巓は殆んど此の巨孔にて占領せられ、これを繞りて立てる八箇の峰は、則ち皆な火口壁の突起せるなり、八朶の蓮華、玉芙蓉とは好く其の樣を形容したり、日の出を拜むものは御來光といふ、入日の光を背に受けて、佇む人の影法師が、鮮かに平布の雲の上に映り、十尋巨人の姿となる、若し三人の影の映ればこれを彌陀三尊と唱へて富士行者が其の奇瑞に賛



嘆するところなり、落日富士の影を得て、これを屯雲の上に映し出すの絶大偉觀を影富士といひ、影富士を看たる人は誠に福祿の子と羨稱せらる、扨て山を下るには「沙走」といふあり、火山沙に脚を踏み入れ、連りに頓足すれば身は自づから走りて、御殿場口は七合目より三合目まで、須走は六合目より太郎坊まで、吉田口は七合五勺より三合目まで一瀉千里の勢にて下り得るなり、この事は實に一大快心なり、我が國に生を享けし人は、一たびは此の靈山に登らざるべからざるなり。

日の出こそ、天下の偉觀ならめ、予が見たる時の日の出の様を記さんに、時は七月の末と覺えぬ、晴れたる曉なり、石室の主人、夙く起きて飯を炊く、呼び起されしは四時頃なりき、萬古消えざる雪の水に嗽ぞいで、爐を圍んで飯をしたゝめ、靜かに坐して日の出を待ちぬ。

旋て戸外に出でし主人は余を麾きて、日將に出んとすといふ、走り出で樻のごとき岩の上に踞して東の方を看めぬ、東の方、漆よりも黒きあたりは紫の氣ありて棚曳きそめしが、やうやくに色も變つて微かなる紅となりぬ、眸を凝して善く觀れば、俄かにして炭火のごときもの光り燃えぬ、色は渥丹のごとし、或は昇り或は降る、須臾して冥中渾沌のところにそろそろと五彩の龍文湧くよと見えしが、次第に鮮かになりまさりて、眩ゆきまでの光りを放ち、見る〳〵熔けて猩血のごとし、尚ほ瞳を見据ふるほどに、其中に物ありて浮び出でたり二個の黄子を有つ鷄卵のやうなりしが、忽ち合して熔けてる銅の色を作しぬ、石室の人曰ふ、是れ大陽なりと、熔銅の色は再び變じて爛銀の色をなし、環らすに紫金を以てし、終に眞白に燒け爛れたる鐵の色をなすかと、見る間に巨靈の手にせる大槌に打たれしごとく、百千の金箭、天を射り、冥中に浮び居たる猩血の、さながら火の柱となつて逆だてば、大陽躍然として輾り昇り、天地茲に晴明なり。



# 土爾扈特王妃を訪ふ

一記者

中央亞細亞の西の際涯から遙々極東の日本へ來て研學に精勵される土爾扈特王と其の王妃の近狀を伺ひたいと思ふて、或る日曜日の午後余は一人の支那語通譯者と共に、兩殿下を府下西大久保の邸に訪問致ました。

玄關に立つて案内を乞ふと、洋服姿の家僕らしい質朴な男が奧から取次に出て來たが、言葉を交はして見ると、此の人は蒙古人であつたので、日本語も支那語も通じない、たゞ「殿下」の語丈が解るらしい。で兎も角も名刺を出して『之を殿下へ』と言つて渡す。

軈て奧へ通されたから、案内に伴いて室へ這入つて行くと、王は莞爾な御氣色で室の入口に飄然と立つて居られる。

御歳は二十三四であらう、髮を輕く五分刈にせられ、身に振武學堂の制服を召された御樣子は全く日本人の學生と外見えぬ。

室は十疊位の日本室であるが、滿面に絨氈を敷きつめ、眞中に長き卓子を置き、それに五六脚の椅子を備へて和洋折衷に取繕されてある。

王は余等兩人に椅子をすゝめ乍ら先づ話される。

『先日は公使館へ行つて不在の所で誠に失禮でした、日曜日は來客があるか左も無れば他へ出かけるので、誰方にも失禮勝で居りますが、併し今日は幸ひ閑散だから、何卒ゆるりと御話し下さい、妃も直に此室へ參りませう』

余は此前の日曜日に御留守中に訪問したから其れで斯う言はれるのだが、まことに流暢な支那語で話されるので、支那人の通譯者すらも餘程感心したらしい。

王は其處にある紙卷煙草を取つて余等兩人にすゝめられる。御自分も一つ召し上る。先刻の男が茶を持つて來た。王が言はれる、

「御口に合はぬか知れぬが何卒一ッ召上り下さい、御國では料理に砂糖を御用ゐになるが、私の御國では料理に砂糖を滅多に用ゐぬ代りに、御茶には必ず恁う云ふ風に砂糖と牛乳とを入れて用ゐるので……」

仁を見て法を說けとやら云ふが、王は却々御如才が無い。

扨て王は安樂椅子にもたれて、近頃御生てになつたらしいちよんびりとした短い髭をひねくり乍ら暫く余の言を聞いて居られたが、やがて少しく身を起して下の話を續けられた。

「同じ蒙古でも近來御國の方に知られて來た喀喇沁などは北京迄日本里程で僅か百里程しかありませんが、私の御國は遙か向ふの土耳其斯坦の附近に在るので、千五百里は慥かにあります、極めて邊鄙な處で且つ交通は甚で不便ですから北京朝廷との往來も從つて稀れで、他の蒙古諸王は毎年一回必ず北京へ參朝するに拘らず、私の方からは僅かに八年目に一度位しか遣つて來ません。」

「市街と言つても非常に淋しいものであるし、學校と云ふやうなものも未だ一つもありません、だから敎育と云ふ事は無論御話にならない、尤も家庭敎師と云ふやうなものがあつて蒙古文だとか其他色々の事を敎へてゐるが、之れはたゞ富裕な人達が遣らせる丈だから、一般の者は殆んど無敎育だと言つてよいのです。漢文を讀む者は私と私の友人に一人ある位のもの、之れで以つて略々樣子が分るでせう、まことに遺憾な次第でムいます。」

「日本へ來るには北へ回はつてシベリヤ鐵道を利用するのが最も速い方ですが、それでも三十幾日はかゝります、が先達ては妃が日本へ來るに就ては、沙漠を橫切つて南へ出で、道を支那內地に取つて、河南迄駱駝や馬で遣つて來たから、彼是六ケ月餘を費しました。」

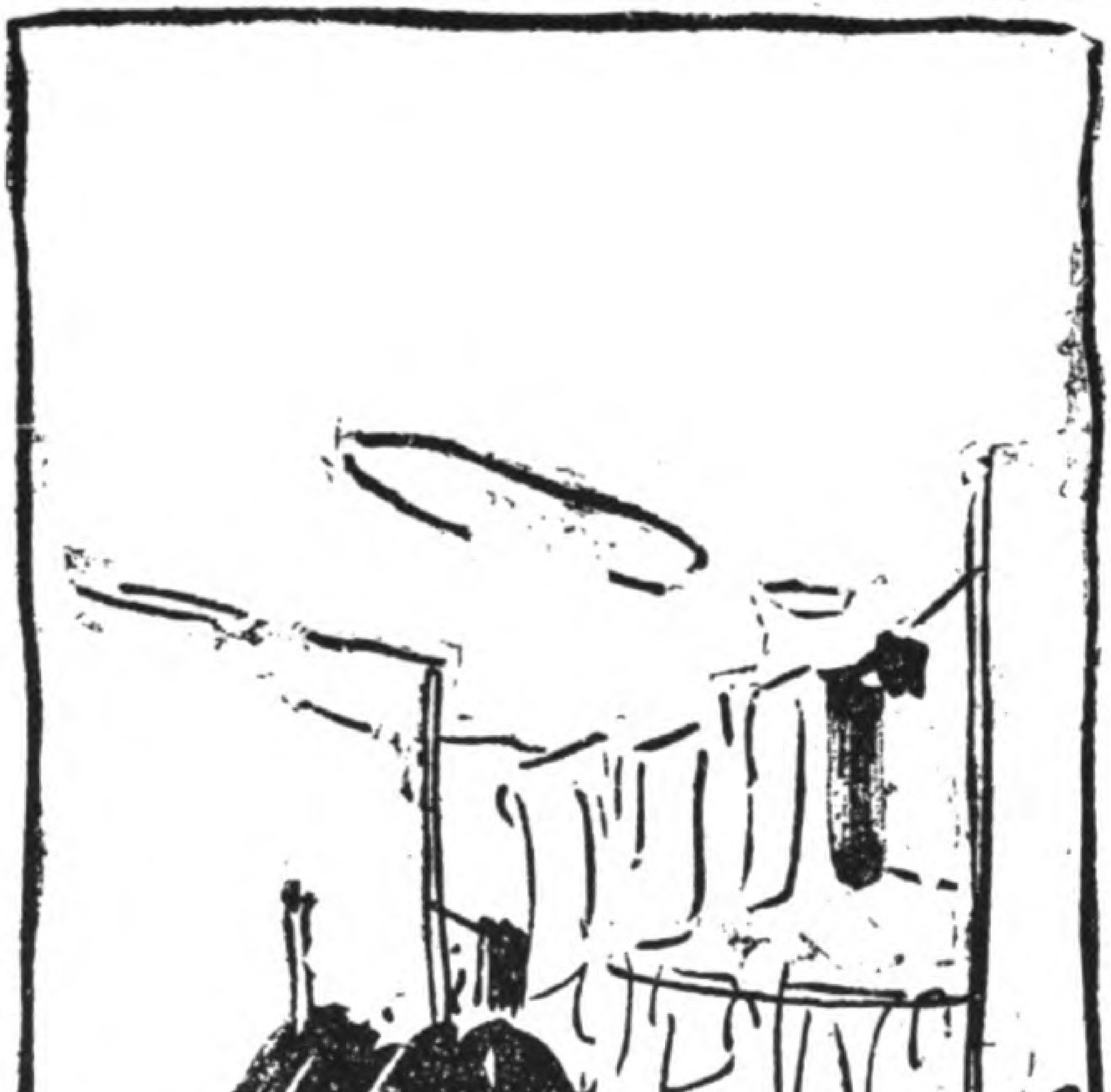
勿論四五人の御伴はあつたと聞てゐるが、纎弱い女性で御在しながら、汽車の便も無い土地を、六ケ月間旅行を續けられたとは、扨も御偉いことである。

王の後の方がすうーッと開いたと思ふと王妃が這入

つて來られる。

王妃は其昔全亞細亞洲を從へ歐洲を戰慄せしめ其餘威十數萬の兵を日本に遣して之を征服せんとしたる無雙の英主成吉斯汗の後裔で在せられるので、御名を俊尼と申されるが、御背はすらりと高く、身には淡紅色の洋服を召されて、髮を日本風の束髮に取り上げられた御樣子は、迚も蒙古の方とは思はれぬ。

余等は立つて御辭儀をする、王妃は靜かに會釋して



席に着かれる、すると王は又話をつゞけられる。

『自分の家には隨分澤山の人が居るが、其中本統の家族は、兩親と、伯父さんと、此邊に居る二人、加之私の妹が一人、と都合六人で御座います。』

『左樣、妃は亞爾泰山下のホンツト王の家から嫁したので、私が十八歲、妃が十五歲の時でした。——御國の人々に較べるとやゝ早婚の嫌はあらうが、私の鄕國では之れが一般の風習で御座います。』

『結婚の儀式は御國とは大に異つて却々面白い所があ

りますよ。……いや〳〵これは餘りに長くなるから又此の次に致しませう。」

私が一言話せば王は二言も三言も話される、話頭は其れより其れへと轉じて今度は子供の話となつた。

「支那では子供が生れると、親達が呼ぶ名だの、兄弟同志が呼ぶ名だの、他人に對する名だのと言つて子供に幾個も名を附けますが、私の郷國では子供が生れると喇嘛僧が一つ名を附ける丈で、支那のやうに幾個も附けるとはありません、こゝは先づ御國と大差はありますまい。」

「併し子供の育て方となると大分異つた所があるやうです、私の郷國では子供は必ず仰向に臥かせて決して横には致しません、だから少し御注意なさると分るでせうが、御國の者は皆私のやうに頭が恁う圓くなつて居りますよ。」

言ひつゝ微笑し乍ら自分の頭をぐる〳〵と御撫でになる。

「其の臥かせるに就ての遣方は又却々妙で私の郷國では子供は皆箱の中に臥かせます、箱の中に仰向に置いて而して其の胸の邊と腰の邊と膝の邊とを抑へるやうに三本の帯を箱の隅から隅へ引張つて置くのです、之れは子供の姿勢を頽させぬ爲で、斯うして置けば子供が何程跳ねくり返らうとして藻掻いても決して横になる憂ひはありません。」

お話は總て奇妙な手眞似や足眞似で示される、殊に赤兒が跳ね返へらうとして藻掻く様子が餘程可笑しかつたので、其れ迄默つて控へて居られた王妃迄が御笑ひなされる。

やがて服装に就ての御話が出たので余は王妃の御思召をも伺つた。御答は優美な蒙古語である。王が之を支那語に譯されて通譯者が更に之を日本語に譯したのは恁うであつた。

「妾は何方かと申せば洋服の方を好きますが日本の婦人服とても決して悪るいとは思ひません、特に令嬢達が髪を束髪に結つて袴を穿かれた様子はまことに綺麗では御座います、たゞ其の袖の大きいとが、御慣れに

なつたら宜いかも知れませんが、妾らが見ましては餘程不便ぢや無いかと思ひます。』

又王が話される。

『着物も不便だらうが、其れよりも彼の下駄と云ふやつが一層不便なもので如何しても私には穿きませんよ、去年の夏でした、私が片瀬へ遊びに行つた時に之を穿いて懲々しましたよ、足の裏に水泡が出來る、指から血が出る、隨分痛い目に逢つたから、もう其後は穿きません。』

餘程痛かつたと見えて眞實に痛さうな御顔をされる。

王は御話の間に折々日本語を使はれるが發音も語法




も頗る正確である、が其の練習は左程苦心も成さらぬらしい。

『一體日本人と蒙古人とは如何したものか能く似て居ますよ、第一額の格好から髮の生際などが能く似て居るし、それから頬骨の隆起した具合なども實に能く似てゐるぢやありませんか、私は未だ其樣で無いかも知れぬが、妃は彼の通りで、日本人そつくりでせう、言語なども矢張り其樣で、語法其他が殆んど同一ですから、之を習ふのは誠に容易いとです、特に漢字が讀めるですから之を蒙古の文法で遣れば日本語になるやうな譯で、私は日本語を習ふに就ては一向苦心は致しませぬ。』

王は或時は一日に二百語位の日本の單語を御覺えになつたと云ふが、之れでは成程事實であらう。色々御話を承はつて彼是一時間を過したので、又再會を期して歸りました、歸へる時に十一二歲の蒙古服を着た可愛い少女が見えたが、彼れがチユルノとか云ふ王妃の侍女であつたらう。

## 趣味と粧飾

近來指輪其他の粧飾品は非常に贅澤になり來り、二三年前までは黃金の平打の指輪などまだ多く見うけしが、今日にては全く田舍ものか中流以下の婦人に用ゐらるゝのみの有樣にて、少しく人中に交る人の指に一つ二つの寶石入り指輪を見ざるはなく、而して寶石中にても今流行の全盛を極めをるはやはり金剛石にて、殊に夜會などにて電光の影に閃めく色ざしの麗はしさはこの寶石の右に出る者なく最も婦人の指を奢侈に見するとて美事なる金剛石の所持者は衆目羨望の府となる有樣なり。眞珠ルビーはまた其次に喜ばる、指輪の臺は極めて細きを貴び、フト見たばかりにては指に珠のみ粘着て輝き居るかと思はるゝを善しとし、極く細き臺に大きなる金剛石の入りたるなど、双手の指に燦爛かしつゝある夫人も少からず、かゝる有樣にてたとへ寶石入ならずとも彫刻ものとか何かを大抵兩方の指に箝めるが常の樣なり、寶石店にて聞くに善き品ほど寧ろ賣行よしとの事にて贅澤なる世の風潮は驚ろかるゝばかり、併し双手の指にのみ千金を要す事は、决して容易き事にてはなく、さればとて人中に出る程のものが只一個の寶石入だもなくては何となく肩身の狹きが如く感ずるは、婦人の弱點にて詮なき次第なり、殊にまた趣味の點に於ていかにも乾燥の感じの免れざる處より、左もなき人にても巧みに模造されたる紛ひ寶石入など箝めて手先を飾り、指に一個の指輪もなきは殆んど見受け難くなりたり。

襟止は左ばかり不自由のなき品なれ共これも今は粧飾の一つとして是非とも持たで適はぬ有樣となれり、併し小さき繡模樣などの淡き襟に黃金或は寶石などのキラ／＼とひらめくは何となく顏を引立たするものにて矢張り粧飾の趣味より今はなくてはならぬ品とはなりぬ。

# 時事

# 青春期の危き機會に處するの法

ドクトル　兒玉修治

## ▲人間一代の革命期

詩人の句に、『青春の涙は壺中の醴酒と化し、青春の血汐は我世の戰場に紅爛花のを點ずべし。』と言つてあるが、此青春期は人間の一生涯中に於ける最も華やかな時代なると共に、復た最も危險なる時代である。醫學上の定論からすると、女子は十六歳より二十歳まで男子は十八歳から廿二三歳位までを謂ふので、何人も此期間を經過せぬ者はなく、而して此期間に於ける歡樂の情と苦痛の味とを嘗めぬものも無いのである。戀愛を懷ふのも此時、煩悶を覺ふるのも此時、無常を感するのも又此時、理由もなく喜ぶのも此時、發狂者の多いのも此時、自殺者の多いのも又此時である、兎に角二十歳前後の數年間は人間一代の革命期である。殊に女子は男子よりも一層此際に於ける生理的變化が著しく、或時は春風に誘はるる如く唯だ何とはなしに嬉しく、箸の轉ぶにも腹を抱へて笑ふがごとし爾かと思へば又何でもなき事を苦にして悔しがり、もどかしがり氣を焦だち肚を打立て、時には又水の流るゝさまを見ては涙を催ふし、蟲の音を聞いては物悲しく、身も世もあらぬ切なき思ひに打沈むもあり、勿論懸る狀態は永續すべきものではないが、若し自制心に乏しくして之を助長せしむる時は、女子はヒステリーとなり男子はヒポコンデリーとなるのである。西洋の醫學社會では是を青年病若くは妙齡病と稱し、何人も免るべからざる一時代の病的現象として相當の警戒を加へて居るが、未だ一般の素人には這間の消息が解せられて居らぬ。ドウも家の娘は此頃ソワ〳〵し出して落着かぬが何かしたのではないか、誰それは氣が荒くなつた、彼

は我儘が募つた、あれではならぬと見當違ひをして頭から壓へつけやうとする親達が少くないけれども此青春期は男女共に一種の病氣に罹つて居るのである。即ち動物でいへば蠶が蝶に化せんとする時の如く、鷄が卵を孵化さんとする時の如く、人が少年といふ舊世界を脱して、新に『大人國』に入り『第二の我』を產出さんとする產褥期に在ると同じ譯である。されば身心の不健全なるは生理の然らしむるところとして、當人の自衞すべきは勿論のこと、之が監督の任にある、父兄も亦た病者に對するの同情を以て緩嚴の度を失はぬやうにせねばならぬ。

### ▲青春期の特徴

青春期に於て、有形に無形に諸種の變化を來す中に何人にも明かに見らるゝ生理上の主なる特徴は凡そ左の如きものである。

一　身長と體量との增加
二　筋肉及び骨格の發育
三　心臟と肺臟との增大
四　生殖器の成熟——女子乳房の發達
五　發毛——女子皮下脂肪の增加
六　神經組織の變化——感情鋭敏
七　音聲の變化——耻羞心

這の中、第一の身長と體量の增加とは、少年少女が將に大人に成りつゝある普通の目印である。第二の筋肉と骨格とは常に同じ比例で生長する人は極めて少く、大抵は其中の何れかゞ先に發育する、だから此期間に在る男女の體格が往々不格好に見えるのは其爲めである。又第三の心臟の機能は、青春期の前に比べると四割以上も增加して之が軈て青年の感情に現はれ來る凡ての變動と大關係を有して居るのである。次に第四の項目は知れ切つた事實であるから說明の限りではない第五は男子が腕や脛に發毛すると同じ生理で、女子は皮下の脂肪分が增加して例の皰なぞを生ずるのである。それから第六の神經組織の變化に就ては學者間に種々の說があつて、之を說明せんには全紙を盡すも猶

ほ足らざる程であるから態と省き、茲には唯だ過去の空想生活と現在の實際生活との衝突から急に苦悶を感じた結果神經過敏に陷るものと推定しておきませう。次に第七の音聲の變化は、俗に聲變りと稱するもので、異性に對する耻羞心に伴ふ成熟期の特徴である。加之日常擧動の變化に至つては男子よりも女子の方が遙に甚だしい、十二三歳の頃までは人を人とも念はず無邪氣に憶面もなく跳ね廻つてゐた少女が、僅か二三年の間に全で生れ變つた者の如く溫柔になつて、稍もすれば異性に面を合すさへ羞かしがるやうになる。係る状態は戀愛關係があると無いとに拘はらず、一般に通有する生理作用の然らしむるものと見做しても差支えないのである。




### ▲智と情との戰鬪期

青年男女が過去の小說的空想時代を離れて這の複雜多難なる活社會に足を蹈入れんとする刹那には、必ずや無限の哀感に打たるゝと共に亦た曾て見た事のない幾多の新事實に驚かさるゝのである。即智識の方面では人類歷史の實相が知れ初めるのも、社會諸制度の

眞意義が解りそめるのも、宗敎や科學や哲學や文學等の思想中に含蓄されてあるところの隠微な消息を領解し得るのも、凡て此時からであるから渠等は何れも驚異の眼を睜て一々之を觀察しやうと試むるのである、けれども此時代には、智識よりも理性よりも兎角感情が先にたつて來て冷靜なる觀察を許さぬから、却て其新たなる事實が傷心の種となつて、危險に陷る機會ともなるのである。言換ふれば感情と理性との戰鬪期であるから、感情に敗るれば墮落し、理性がそれに克てば向上する譯で、智識を盛るべき容器は既に〱完備して居るのである。

### ▲善惡兩面の危機

靑春期とは讀んで字の如く、花笑ひ鳥謳ふ人間の春の季節を謂ふのである、如何なる人も此期間は最も娯しかるべき筈であるが、然し事實は却て傷ましい病的反證を示して居る。其所以は智と情とが不平均に發達して、さなきだに神經が過敏になり切つてゐる所へ、嘗て描きつゝあつた夢の如き理想が現實の手に觸れて悉く破壞された上に、戀愛關係、生活難其の他いろいろの動搖が一時に押寄せて來るので、熱し切つた感情は追々病的に傾き、玆に不平となり失望となり煩悶となり果ては反抗心を起す事となつて、種々の悲劇を演じた後、遂には自暴自棄の闇に陷るのである。尤も女子の方は男子ほどに大膽でないのと又一方には直接に生活上の責任に當る場合が稀であるから、此際に於ける墮落者は、比較的少數であるが、それでも學校時代——處女時代の夢は結婚期に至つて打破されて、同時に男子のそれと同じ徑路を辿つて、神經衰弱に陷るのもあればやゝもするとヒステリーの擒になる者も少くない。其或者は舅姑に對する氣苦勞から、或者は一家の不和合から、又或者は夫婦間の誤解や、邪推や、嫉妬や其外雜多の方面から層一層神經を疲勞せしめるのである。

さて又此時代に於ける男女は感情生活にのみ滿足して居るかと云ふに決して爾ではない。一方に感情が

極度に亢奮してゐると共に智識に對する慾望も亦同速力で發展しつゝある。謂はゞ血氣旺盛の高潮時代であるから惡い事にも感じ易いが善い事にも又感じが強い。そして双方相戰ふのである、タトヘば一代の偉人が終世の大事業を成さんとする默示を感得するのも此時代であれば、古來の大詩人が其傑作を成すのも亦重にこの青年時代である。或監獄教誨師の話に、男女共二十歳前後の囚人は最も惡感化に染み易いが、其代りまた悔悟する事も速かで、若し此年頃に改悛の念なき囚人は生涯濟度し難き惡漢である。と言つてゐるが、兎に角此青春期は一代の運命に關する善惡兩面の機會と言はねばならぬ。



▲危機に處する豫防

年頃の子女を持てる世間の親達は、其子女達の擧動の變化（奇矯の行爲）を見て、單に彼等の我儘から出た現象と思つてはならぬ、世の親達は自ら戒飾さへ加へれば容易に矯正し得べき事と思ふてゐるのは間違で

あるよ、前項に逃べた青春期に起る生理的の變化を十分了解した上で、精神的に於ては、智慮ある同情と寛大なる推察とを以て之に臨み、又衛生上の豫防法としては、睡眠、食物及び運動の三要件に注意してやらねばならぬ。けれども多くの父母は此點に餘り意を用ゐて居らない。其子女が時々遊戯や交際や勉學の爲に夜半過ぎまで起きて居るのを默許し且つ不規則な生活をやるのを平氣で見てゐるものもある、一人前の大人ですら睡眠の不足や不規則生活は、活力に大なる欠陷を來すのに、況して成熟の途中にある未成年者が爾那不攝生を繼けては早晩神經衰弱に陷るのは必定である。又第二には食物の注意である、此時期には成べく消化し易い物を擇んで食後は適宜の休息と運動とを要するのであるが、一般の女學生などに就て見ると、朝起きて手水を使ふや間もなく膳に向ひ僅に一碗か二碗詰込んで食慾のない事を口實にして直に學校へ趨り去つて了ふ。而も放課後には菓子や果物を少なからず平げる、其の結果は頭痛となり、怠惰となり、惰眠の悪習に陷るといふ有樣であるが、恁那ことでは天性何程强壯な身體でも何うして其健康が保たれやう、又第三に運動であるが、男子は先づ可いとしても現今の女學生にはドウも運動過度の弊害があるやうに思はれる。實に此期間に於ける女子の健康には激動が最も有害であるから、梯子を昇降するにも可成靜かにして、急ぐ折でも決して二三段を一足で飛下りなどしてはならぬ。

要するに父母が其子女の破瓜期に就ては最も注意して、之に適當の指導をする事は當然の義務であるが、當人自身も亦た、あまり、感情に激して極端な悲みや喜びに走らない樣にし、若し悲喜の情懷が湧き起つた時は、振り返つて其原因を窮め、自らその生理的、基礎を立て直すやうに注意しなければならぬものである。

△妻の化粧部屋に這入る良人、哲學者でなければ餘程の馬鹿者である。

△妻に望む可き餘地を遺さぬ良人は、餘程下手な良人である。

# 禮義の眞意

他人が失策するのを見て一種の可笑味を感ずるのは、人間の弱點ですが、併し其失策が恥辱とならざる限りは何程笑ふても差支はないけれど、苟も失策が其人をして赤面せしめる程の場合であつたならば、此自然性を矯めて他に恥辱を與へぬ様にするのが禮義を重んずる婦人の當然の務ではなからうかと思ひます。

維新の當初、我邦の全權公使の一行が米國へ行つた時、一日某富豪の宴會に招かれました。で食事も大方濟んだ頃、西洋料理の常としてフキンガボールと稱する手や指を洗ふ爲の小い水鉢が供せられました。我公使は其時頗る渴を覺えて居たものと見えまして、直に其鉢の水を呑んで了はれました。之は慥に失策ではありましたが、然し其家の主婦は我公使をして、赤面せしめてはならぬと考へまして、自分も亦た水鉢の水を飲みました。すると同席の人にも氣が附て、或者は主婦の例に倣ひ、或者は指を洗はずして其儘にしたので、公使の失策は失策とならずに濟んださうですが、凡て些細なる失策に對しては常に恁の様な用意が必要であると思ひます。又學校などでも偶ま一學生が鳥渡可笑しな質問や答辯をすると、他の生徒が大聲あげて笑ふたりなぞ致します、殊に此弊は輕はづみな女學生に多いので、其爲め氣の弱い者は、若し笑はれはせまいかとの懸念から充分なる答をなし得ぬ者さへあるのです。是等は謹まねばなりません。



# 雛嫁の感想

小昭君

## 世間知らずの女學生が結婚せし當時の感想を述ぶ

私の父は、地方の醫師で、英學者を兼ねた人でして、伯父は陸軍の中將でありました。けれども、不幸な私は、幼いときに此父と、母とに死別れ、姉と二人で、祖父の家に引取られて居りますうち、間もなくこの祖父も、相つゞいて死まして、姉と、私とは、まことに賴り少い身の上になりました。けれども幸ひ祖父の遺産が厶いましたし又、東京の伯父から、いろいろと間接なお世話も厶いまして私は醫師を良人に持つた姉の家に暫時厄介になつて居りました、勿論人知れぬ、心配は此間に、厶いましたけれど、とにかく、中流の生活が出來まして、相當の教育をうけましたのは非常に幸福な身の上なので厶います。そうして、私はある女學校を、つい此間卒業いたしました。

私の良人と申しますのは、もと私の父の英學塾に、私の至て幼い時居りました人で其後東京なる私の伯父に引取られて苦學をし、數年前陸軍士官學校を出ました砲兵の士官で厶います、年齢は私と六つちがひの、本年二十九歳で厶います。

△夢のやうな空想

結婚は人生の一大事で、また嬉しいことの極度であると思つて居りましたが、いよ〳〵結婚といふ其時、私には此嬉しさが七分で、殘りの三分は心配で厶いました。嬉しさの七分は、御話しせずともお分りでせうけれど、殘り三分の心配は何で厶いませう。新にホームを作る夫婦の間には、鬼千匹のたとへにされる、小姑

も、姑もムいません、この點は、非常に安心でムいました、けれど、唯、私の心配は、良人になる人が、果して私を御氣に召すでせうか、若しも、御氣に召さなかつた時はどうしたものでせう。と、私の小さな胸は、恁んな、つまらない、心配にかき亂されて居りました。

結婚式の仕度としては、よい上にも、よい衣裳を好みまするのは人情ですが、幼い時から、比較的人生の苦しい味を嘗めました私は、此慾望が、さほどでムいませんで、兎に角、衣裳は、通常の儀式通りあれば、それで濟みます、此等の不滿足は、何れ夫婦になりましてから、拵へてもらへる時節を待ちませうと思ひました。

胸一ぱいになッた淚をおしかくし、姉上や、義兄上や、いたいけざかりの甥に別れます時のつらさ、さやうなれば、お機嫌ようの挨拶も口のうち、永い間養育の恩を受けました姉の家を出まする時の思ひは、なかなかでした、さて、停車塲迄參りまする四五里の間と申ますものは、ゆう〳〵と夢のやうな空想を人力車にのせまして、思ひは結婚後のゆくさき〴〵の事になりまして、良人が、やがて陸軍大學校へでも入學して、立派な參謀官になります事やら、更に進んで伯父のやうな將官にでもなりました時の樂みや、可愛い子供が出來まして、それに小さな海軍服を着せて、良人と共に、故鄕を訪れまする時の樂しさや、鄕里の人々が皆うらやましそうな眼で、私ども夫婦のものを眺めまする時の樂しさなどを、それから、それと、思ひつづけて居りますと、家を出ます時のつらさ、かなしさも、不思議に忘れてゆきました。

東京の伯母の邸に着きました其夜、私の良人になる人が十時頃に新橋につくといふ電話がありまして、之を傳へて參りました女中の言葉さへ、私の胸には、妙な聲になつて響きます。それからと申すもの、急に心が改つたやうになり、立ちつ、ゐつ、そは〳〵して居ますと、伯母さんや女中などが、それを笑ひます時の、耻しさ。

やがて、門の方に鈴の音がして、車の轍の留りました時、我知らず、胸にはッと思つたのでムいます。續いて靴の跫音が庭石の邊で消えまして、私の眼の前には、其良人になる人が、坐つて居りまする。私は、あはてゝ、お叩頭をし、挨拶を致したのも、ほんの口の中、かねての約束でして、もとより知らぬ間柄でもありませんのに、其晩に限つて、妙に明瞭りした挨拶が出來ませんでした。さぞお笑ひになるお方もムいませう。



が、之は誰樣方にしましても、屹度一度はおありなさる事でせう。

△日比谷大神宮の結婚式

いよ〳〵其日になり、仲人以下、すべて十一臺の人力車を、威勢よく日比谷の大神宮にひきこみました時のうれしさ、天も地も、みな私ども夫婦の爲に、今日だけはつくられたやうに覺えられ、式の始まる一寸の間までが、そんな空想に耽つて居りますと、やがて用意が出來ま

したから彼方へといふ知らせが厶いましたので、（式場神殿）の中に通されました良人や、良人の親族と、私や私の親族とは、中に幾間かの疊を隔てゝ神前の左右に扣へ居りますと、三人の齋主と、齋員とが其處へあらはれまして、淨めの詞を神様の前に申あげましたり、祝詞をよみあげましたり、供へ物をなされたり、私共夫婦と仲人さん夫婦とを神前に向はしめました。そうして、こゝで、仲人が、次のやうな事を、神前に御告げなされたので厶います。

明治四十年五月九日を吉日と定め婚姻の式を行ふとしていはひまつる大神等の御前に誓ひまをさく神代の昔伊佐那岐伊佐那美妹背二柱の大神の立て給ひる神業にならひて 某 と 某 と夫婦の契りを結び堅むるは尊き神の御心によれる事と悦びまつりて今より後は千代に八千代に相睦び相親みつゝ修理固成すべしと詔りたまひし神語のまゝに内外の差別前後の秩序を誤らず左を左とし右を右とし苟且にも夫婦の道に背く事なく互に輔翼して家政を整理すべく誓ひまつる事を聞食せと媒 某 白す

之が濟みますと、緋の袴を穿きました、二人の美しい官女のやうな方が見えまして、三々九度の 盃 を致します 盃に、神酒を注いで呉れまする動作の神々しさ、恭しさ、私は、唯もう、夢中で、顔すらえあげられませんでした、いつの間にか之もすみまして、夫れから親族の堅めの 盃もすみこゝで私共は、一生涯中、最もはなやかで、忘れる事の出來ぬ神聖な夫婦の固めをしたので厶います。

△家庭を作る迄の私

結婚式もすみ、披露會もすみ、私と、良人とは、暫時伯母の邸の世話になつて居りまして、一兩日は、東京中の親戚を、そち、こち挨拶に歩きました。どちらに參りましても／＼、親切な方からは、滑稽半分に、種々な處世上の實驗談を聽かされましたが、まだ何の經驗のない身ではありますし、どういふものですか、まだお嫁にならぬ時のやうに、はき／＼した御答が出來ませんで、唯顔ばかり、赤めて居りました。そのう

ち、良人が聯隊から請暇致した期日が近づきまするので、私共夫婦の爲には、名殘多い、此東京の地をあとにして、良人の任地横須賀に行く事になりました。多くの人に見送られ、新橋から汽車に乗りまして横須賀迄は、短いながら注文通りの新婚旅行でありまする。此間いろいろ、之から先の家政の話などを兩人でして居ます中、汽車が鎌倉を過ぎ、逗子の邊になりますと、かねて小説好きだと話に聞いて居りました良人が、突




然、不如歸の浪さんの話をし初めて、浪さんの人格の批評やら、境遇の批評やら、軍人にしては、珍しい程精しい事を申ますので厶います。私は、今の軍人といふものは、みな慇いふものですかと、此時初めて思ひました。

私は、良人が、是迄、下宿屋生活をして居ると申しますから、横須賀についたなら、いろ〳〵衣類の始末や、洗濯や、裁縫物などで、當分は非常に忙しい事でせうと思つて參りました處、案外にも、軍

服は軍服、和服は和服、附屬品は附屬品でよく整頓されてありましたばかりでなく、別に私が、手を出す用事のない迄に、始末がついて居りました。私は感心して、それを申した處、良人は唯笑つてばかり居りまする。いふ迄もなく、是は、軍人が規律を尙ぶ處からと宿のものが、親切な人で厶いますからでせう。

△家庭を作つてからの私

宿に一日居りましてから、其翌日、良人がかねて借り置きました家に引越す事になりました。恰度、其れが日曜でしたから、私と、良人と今一人の人と共に、先づ下宿生活をして居りましたいろ／＼な荷物を、二三臺の車に載せて運んで行きました。それを私が、簞笥のおき處や、火鉢の置所や、それ／＼勝手を定めて居りますと、武骨な良人が、不思議にも、痒い處へ手の屆くやうな指圖をして呉れまする。そうかうしますうち、すつかり整頓が出來まして、借家ながら、兎に角玆に自分の家庭といふものを拵へましたので厶います。

此晩、私と、良人と、雇人とは、不足な道具を買う爲街に出ました。私は、良人が氣のつくのに、驚きましたと共に此等の精神は、すべて、良人が、苦學された時代の賜物である事に考へ及しまして、逆境に居た人の、親切である事、思ひやりのある事を知りました。

歸つてから、良人が私に向つて、自分は隨分苦學したつもりなれど、まだ／＼十分でない、之から先、尙は十分勉強しなくてはならぬ、ついては、家事一切の事をみんな御身に任せるやうにすると。申したので、私は、寧ろこれが非常に名譽と思ふと同時に、又責任の重い事を覺りました。これは、初めて世帯を有つものゝ多くの方が、世帯の方にばかり氣を取られて、勉强が兎角怠け勝ちになるといふ事を心配しての譯だらうとおもひまして、及ばずながら、一切の家事を引受ける由を誓つたので厶います。

何でも生活は、五十圓なら、五十圓の收入を、一ヶ月に皆かけては駄目だから、四十圓、若くは、四十五

圓位で生活する事が必要だとの事ですから、其後私は、寧ろ、良人の申したよりも、少い經費で生活をする事に定めて居りますと、どうしても、そうは行かないので厶います。正直に、申せば、五十圓の收入が、皆、かかるやうに思はれますので、非常に行先が氣づかはれました。平和で、家庭に何もない時ですら、こうでは若し何事かあつた時の經費は、どんなでせうと、自分ながら寒心にたえませんです。



私は、玆で、つく〴〵、學生時代の空想の、あてにならぬ事や、誰樣でもが、同じやうに希望してゐなさる理想の生活といふものが實際に於ては、容易に出來ない事でありますと、覺りました。

良人が隊に出で行きましたあとは、獨り淋しく、歸りを待つて居りますが、その待つ間の長いこと、わづかな一日が、二日も經つたやうな心地がし、表のほうに靴の音でも聞へます時は、もしやと思つて、起ちかけました事が幾度か知れません、ある時などは、玄關の格子の開く音

がしますから、お歸りとばかり、障子を開けて手をつけば見も知りません一人の男が、番地のお尋ねで厶います、つい二十日ばかり前に越して來たばかりの私に、どうして其れが知れませう、けれども知りませんといふも、妙ですから、其處を何とか要領を與へねばなりませんので、大にまごついた事が厶いました。

私は、斯樣に、實際のことと、學校で學んだ事とを較べながら暮して居りますと、女學校でも、特に技藝科を修めた事を喜んだので厶います。

人の妻として、家庭に實際の必要を認めまするものは、中流以下では、普通學よりも、技藝科でせう、私はこれからお嫁にゆく方の爲に、家庭を作りました、直ぐ其日から必要な技藝科を修めます事をおすゝめ致ます。さすれば、女中を使ひます經費も自然省けまするし、他人交らずの家庭が、比較的平和に保ちゆかれます。たとへ、女中を使ひえられる家庭でも良人の體面を損じませぬ限りは、なるべく、使はないといふ事が、よからうと、感じました。

家庭を作りましてから一番の心配は、朝夕三度のお菜の事で厶います。つまり、同じ品物でも、どう〱、變つたお料理をして、良人に澤山、褒めて召あがつて欲しいといふ、極めて、單純な希望から、毎日三度〱の心づかひは、容易で厶いません。それも、お金がいくら要つてもよいといふのであれば、兎に角、限あるお金を以て、限りない希望を滿そうとするのですから、むづかしう厶います。おいしくないものでも、其れを良人が、澤山召あがつて下さる位、嬉しい事は厶いません。且つ、その際、特に良人が、之はどうして拵へたものかなどゝ問はれます時は、倘ほ一層嬉しう厶います。それを時によりますと、何だ之は、學校時代のノートを見て拵へたものだらうなど、揶揄れます時などは、顏を赤めて、眞面目に辯じます事も厶います。兎に角、寄宿舍生活なり、何なりの中に、實地に行ひました事をするのですから割合易う厶います。

引越しました當座、一番に困りましたのは、漬物の石のなかつた事で厶いまする。仕方が厶いませんから、

パケツに水を入れて石の代りに致しました處、夜中お条が減つて其爲パケツが倒れ落ちまして、勝手の板間一ぱい水だらけといふやうな滑稽な事も厶いました。次に困りましたのは、良人の友人の方が入り交り、たち交り、澤山お見えになる時で厶います。私のほうでばかり、そう思ふたのか知れませんが、其かたぐくが、皆んな私を見にお出になるやうに見えまして、始終顔を赤めてうつむいてばかり居りました。又日曜などに、二人が散歩いたしましても、妙に人から見られてばかり居るやうに思ひまして、何となく極りがわるう厶いました。何がさて、只今は險しい荒浪のやうな世の中を、淡い夢見るやうに暮して居りますけれど、行先永く此境遇がつゞくものでせうか、どうでせうか、といふ事が心配でなりません。

## 東洋婦人會紀念會

去月廿五日有樂町三井倶樂部に於て同會創立三週年紀念會あり、會長鍋島侯爵夫人は會の目的事業の經過幷に將來の發達に就て希望を述べ、次に清國公使楊氏の簡單なる挨拶あり、それより尾崎市長の演說ありしが其要旨は現今男女道德の標準の相違せるを慨し日本の法律は或る行爲に臨み、男子ならば恕すべきも女子ならば許すべからざる犯罪と見做さるゝ事あり、是等は男子の我儘を見逃がすものにて隨分不埒千萬のものなれば、男子の道德の地位を進めて女子と同等に置きたし云々而して男子の惡風を矯正するには婦人は須らく燒餅を燒くべしとて燒餅論を奬勵されしは眞面目なる演說中一寸愛嬌ありたり、氏は更に女子が男子の職業範圍に侵入する點に就て一解釋を下して曰く男女の事業を同じ方面に向けて高むべきや否やは疑問なり、されど、彼の戰爭に際して男子は殺人を以て國家の爲に盡し、女子は赤十字の如き博愛の事業を以て成功せるが如く、家庭と社會とを問はず男女の仕事の方面は常に斯くの如き調子にてありたし云々と次に風敎上に關する注意指導は目下の急務にて、世界の交通日に開け行くにつれて其交際は西洋の長所を輸入せざるべからざる事勿論なれども彼の長所を誤解して採用せん事は戒めざるべからず、故に這般の事情に明かなる人々は彼國の交際場裏に於ける、禮式作法等を詳說して博く其標準を示さん事を望む云々と。

それより會員一同撮影し、餘興に活動寫眞數番あり來賓の重なるは鍋島侯、清浦男、肝付中將、清國貴紳等十數名にて會員には毛利母堂、黒田侯夫人、其他交際社會の錚々たる貴婦人約百五十名、清國婦人八九名なりき。



# 米國人の見たる日本婦人と我が見たる米國婦人と

櫻井女塾長　櫻井ちか子

このお話は昨年中米國へ渡航し、ヴアンクバーから加奈陀、シヤートル、ボストン、市俄古、紐育、其他の都市を歴訪して女子教育の有様を視察し歸られた同女史の土産話であります。（記者）

## △二十年間の變遷

私は今度で丁度三回目の洋行で、參ります度毎に米國の文物の發達や教育の進歩の著るしいのには驚きましたが、併しそれ等の事情や風俗の紹介等に就ては既に專門の雜誌さへあるくらゐですから、茲に有振れたお話は省くと致しまして、唯今後渡米されやうといふ婦人の爲めに彼我共に誤解し合つて居る點等をお咄しいたします。そこで一般の米國人が私共に對して奈何な感想を抱いて居るかと申すに、最初私が渡航しました（明治廿二三年）頃には、未だ日本も一向幼稚の時代でしたから、恰度今日私共が印度婦人か或はエスキモ人でも見るやうに、往來を通りますにもゾロ〳〵人群りがして誠に肩身が狹うございました。次に日清戰役後、第二回目に參りました折には、大分以前と調子が變つて居て、萬更日本人も馬鹿には出來ぬ、其分で教育さへ進歩したら遠からず歐米人と肩を比べる事が出來ませう、まア折角御勉强なさい、と云つたやうな鹽梅で、學校へ這入るにも寄宿するにも萬事便宜を與へて呉れる樣になりましたが、それでも未だ偶には御國にも滊車がありますかなぞと質問を受けることが厶いました。それから第三回目（昨年三月）に參りました時、今度は日露戰爭の結果、餘程日本の眞價が解つたものと見えて、全で人種でも變つたかの樣な待遇振りで、到るところ、歡迎會だの演說會だのと公私の婦人團體から招待されまして、そればかりでも忙殺される位でした。加之會ふ人毎に、日本の軍人はド

ウして彼樣に强いのか、武士道とは如何なるものであるか、畢竟するに其强い人達を產み出したところの婦人が偉いのに相違なからうから、是非暫く滯在して居て家庭教師に來て吳れぬかとか、或は日本人の家庭には乾度模範となるべきものが有るだらうから、一度渡行して親しく日本人の家族と同居して見たいとか、それは〳〵非常な好遇をして吳れますので、急に鼻が高くなつたやうな心地も致しましたが、然しそれが果して米國人の眞意でありませうか、心から尊敬して其樣に喝采してくれますのか、其點は少々疑問だと思はれます。成程日本は東洋の新興國として侮り難い國民であるといふ事は一般に信じては居りますけれど、未だ〳〵歐米の婦人と日本婦人と同一視する程に事實に於て許して居ない樣に存じます。と申すのも、從來渡米する日本婦人の多數が例の賤業婦であつたのと、それに彼我の意思が充分に疏通しないでお互に誤解し合つて居た點とにあるだらうと思はれます。

## △單純なる觀察眼

日本人が短日月の間洋行して、ホンの表面だけの觀察をして來てからに、英國がドウの米國が恁うのと飛んだ間違つた事を吹聽すると同じやうに彼方でも矢張り其種の人があつて、一廉日本通と云はるゝ人までが往々眞相を誤つた事柄を傳へて居ります。曾て日本へ來た事のある一婦人がどうして日本の婦人は彼樣に悠長で暢氣で仕事がなくて氣樂さうなのでせうと私に問ひますから、貴女は未だ日本の中流以下の家庭を御覽にならなかつたから然う思召すのでせう。と答へましたが、全く外國から觀光に來る婦人の多くは大抵帝國ホテルとか、メトロポールとかいふ巨きな旅館に宿泊して、今日は某の夜會、明日は彼處の招待會と申す樣に上流社會へ出入して交際する人と云へば、長い袖のある美しい綺羅を着飾つた所謂貴婦人達ばかりですから、如何さま日本婦人は優美で氣樂さうなものだ、と思ふのも無理はムいません。總別外國人は我邦

の女子に對して二様の觀察を下して居ります。其一は優柔で、主張がなくて、遠慮勝ちで自分の云ひたい事も言はぬといふ良く云へば温順だが惡く申せば意氣地の無い、唯だ良人や父兄のみに依賴して、日常の生活とても、終日爲す事もなく長火鉢を擁したまゝ新聞でも讀んで居るといふのが、普通日本婦人の模型で、又他の一面に於ける下流社會の女子に至つては、糊口の爲めに貞操を賣る事を何とも思はず、而も一度墮落すれば毒皿主義で、恥を外國にまで曝しに來て平氣なものと、恁う二通りに極めて單純な觀察をして居りますが、孰れも其眞相を誤つてをるではありませんか。



### △鸚鵡返しの誤解

單り米國人が我邦人を誤解して居るのみならず、日本人も亦彼方の事情を正しく了解して居るとは申されません。米國は女尊男卑の國風だから定めし女子の權力が強く、夫は外で働いてゐるのに細君は終日化粧や交際の事に浮身を窶して、臺所や幼兒の養育や衣類の洗濯や裁縫やは凡て雇人任せでせう、とは屢々受ける質問ですが、如何に女權國だと申しましても爾那に極

端では遣切れる筈がムいません、成程一部の上流社會では日本のそれと同じやうに夫人が自ら家庭の雜務に手を下さずとも治まつて行く處もありませうが、先づ普通の家庭では大抵學僕、若くは女學婢の一人も雇ふて、而して細君はそれに手傳はせて炊事を爲たり小供の世話をしたり、尤も洗濯物たけは便宜上洗濯屋へやりますけれど、衣服の裁縫其他一切の事は細君自身の責任となつて居ります。イヤ衣服の事と申せば此頃も可笑しい噺がムいました、一米國婦人が私の着てゐる長袖の衣服を見まして、日本服は誠に優美でありますが、併し遊んで居るにはそれで可いとしても立働きには不便でせう、と云ひますから、其時は斯う致します。といつて襷をかけて見せますと、如何にもと合點が參つた樣な譯で、凡て恁云ふ調子で鸚鵡返しに誤解し合つて居るのでムいますから、大體に於ては日本の家庭も米國の家庭も爾う太した相違のあるものではムいません。それに女尊男卑と申せば何だか聞苦しうございますが、これは强ち女子の地位が男子よりも一等上といふ譯でなく、唯だ女子の權利を認め且つ之を尊敬すると謂ふ意味なので、決して女子が男子よりも威張つて居る譯ではありませぬ。

## △男女交際の眞相

米國の婦人はお饒舌でお轉婆だとは一般の謂ふところで妾共の眼からも本邦の最もお喋舌の女と彼方の最も無口の女と相當するほどに見えますが、それも日本のお轉婆とは少々趣きが異ひまして、唯だ無闇に意味もない事を饒舌り散らすのではなく、交際上の必要から、客の氣を外らすまい、場なりをよくしたいと云ふ習慣が遂に天性となつたのだらうと存じます、例へば日本では客と食事中口を利くのは禮に戻るとしてありますが、彼方では之と反對で食事中は殊更愉快に快潤に談話をするのが客への馳走としてあります。けれども何方かと申せば此點は日本の風習が寧ろ奥床しいと思ひます。次に男女間の交際でも米國では男を男臭いとも思はぬ婦人の多いのは事實で、隨つてこれに伴ふ

弊害も全くないではありませんが、然し日本人の想像するほどに決して男女間の風儀は紊れて居りません。それを我邦の人は、男女の自由交際と云へば直ぐ戀愛若くばそれ以上不淨の關係を意味するものと誤解して、米國の缺點ばかり學んで居る様に見えますが、是等は未だ男女交際の眞意義がお解りにならぬので、下層勞働者の子女ならイザ知らず、多少敎育のある男女間の交際は極めて淡白で、嚴格なもので御座います。タトエバ男子が其友人としてゐる處の女子を訪問致すに幾程懇意の間柄でも、決して私室へその男子を導いて人目を憚り私語する様な事はなく、必ず應接室へ通し四方の扉や窓を開放して何人が見ても聞いても差支ない様にして面談致します。



殊に私が感心致したのは、歸朝の船中で、英國の一紳士が夫婦して上等室の別房に乘つて居りましたが、或日其細君が病氣を起して非常に苦しみますのを夫は一人で其介抱を爲かねて居りますので私共はじめ皆々がお氣毒とは察しましたが、さりとて夫婦一緒の室へ看護に參りましたと突然這入るのも如何と控へて居りますと、米國の一醫師が、徐かに室の

外から、失禮ですが夫人が御病氣と聞きまして御見舞に伺つたのですが還入つても宜しいですか。と叮嚀に聲をかけて而して應急の手當をしてやりました。之に反して同じ船中で、矢張り米國の一紳士が何處の國の者とも知れぬ怪しげな婦人と喫煙室で密談をして居りました事が船中の問題となり、其如何はしい關係の有無に係はらず、忽ち此男女は船中の交際界から除外されて口を利く者すら無くなりました。恁様に男女間の禮儀や制裁は嚴重で、日本の男女學生が自由交際と稱しながら濫りに其下宿等へ來往するのとは大きに其趣旨を異にして居ります。

### △平和なる別居制度

日本の家族制度と西洋の親子別居制度と何方が宜しいかとは遽に斷言し難い問題でありますが、茲に米國の狀態を申し上げますれば、一口に親子別居と申したところで、必ずしも老夫婦と若夫婦との折合の如何を懸念して別居するのではなく、寧ろ親子が經濟を別にすると謂つた方が適當かと思ひます、男女とも丁年に達して各自獨立出來るやうになれば父母から財産を分配して貰つて結婚すると同時に別居するのが先づ普通となつてをりますけれども、中には親子の間が睦まじく、アノ嫁なら一緒に居ても好い、彼姑さんなら同棲したいとの希望から生涯を圓滿に同居して了る者も澤山あります、爾云ふのは若夫婦から老夫婦に月に幾干宛と定めた賄料を拂つて暮すのですが、其睦ましさは羨ましい程です。又兄弟が幾人もあつて何れも既に別居してゐても、親は其何れかに同居したいと思へば其中で最も氣心の合つた若夫婦へ申込んで矢張り規定通りの食料を拂つて同棲するのもあります。而して一週間に一度づゝ親子夫婦兄妹等一堂に會食して團欒の快を盡します。凡て別居制度も此様に參りますと結構ですけれども、今日本人が舊慣を棄てゝ俄に之に倣ふのは如何かと存じます。

### △自活女學生

公費又は私費でも學資の充分にある女學生方は既に公私の學校へ入學してそれ〴〵勉强して居られるだらうと存じますから、それ等は別と致しまして、現今在米の日本婦人中には最初勉學の目的で渡米したものが、中途で學資の缺乏や生活の困難から、魔道に陥る人が隨分少くない様に見受けられますが、是等の人々の轍を蹈まぬやう、將來渡米志願の婦人方に自活の一助ともなるべきスクールガールと日本婦人寄宿舍とを紹介しておきたいと思ひます。スクールガールは即ち女の學僕で、男の學僕よりは需要者も多ければ給料も高く、米國の中流社會では大抵の家で雇ふて呉れます、日本で下婢と云へば一寸品が惡いやうに思ひますが、彼方の雇女は整然と時間に規律がありまして、一定の勤務を了れば學校へ通ふとも出來れば讀書の餘裕もあり、それで給料は一週間五弗、一ヶ月二十弗位ですから、其内から月謝を拂つて小使を費つて衣服を着て未だ剰るくらゐです。で又雇主が日本のスクールガールに對する批評はドウかと申せば、日本の女は歐米人の如く氣位が高くなく且つ柔順しくて忠實に働くから大層使ひ宜い。と云つて居ります。但だこれに雇はれるには萬更語學の素養のない者よりは、リーダーの三位まで讀める力があれば最も好都合です。若し萬一上陸匆々スクールガールの口が見當りませんでしたら其時は沙都にある日本婦人寄宿舍へ行つた方が捷徑でせう。其處は日米兩國の聖教婦人が協同して特に日本婦人の爲に設立したので、事情によつては無料でも宿泊せしむるのみならず、早速就職の口を周旋するなり或は學校へ世話するなり、萬事に便宜を與へて呉れます。目下其處に宿泊して學校其他へ通ふて居ります日本婦人は五十人以上もありまして、中には危く墮落せんとするところを濟はれた者も少くないと聞きました。

### △大規模の婦人寄宿

米國では到る處の都市に婦人青年會又は婦人寄宿舍等、凡て婦人を保護する機關が設けられて就中大規模

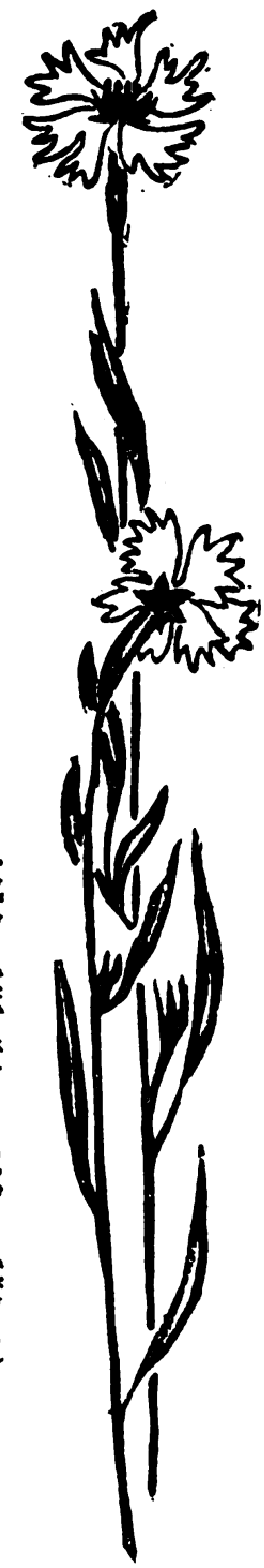
なのはボストン市に於ける婦人ホームで厶います、此處は十階造りの大建築で、一番階下が炊事場、二階が運動場、三階は圖書室、四階以上は總て寄宿生の室と區別してあり、運動場には最新式の運動器械は勿論、樂器まで具付けられ、圖書室には諸外國の有ゆる書籍があつて自由に閲覽する事が出來、又夜間になりますと特に各方面の大家を招聘して、女子に關する必須の學科、其他音樂、繪畫、割烹、裁縫等に至るまで教授する設備になつて居て、全く婦人の樂園であります。加之寄宿料は一週間五弗乃至七弗で、普通下宿屋の半額にも過ぎませんので、昨今はいよ／＼入會者が增加して、既に七百人以上に及んださうですが、其最も多數なのは女學生、次に女教師、會社員、商店の賣子等で、何れも此寄宿舍の恩惠を蒙つて獨立自活の道を講じて居る婦人のみださうで厶います。

## 禮義心

女子は詰らぬ事にも笑ふ癖があるこれは注意しないと往々無意識の間に、他人に恥辱を與へる塲合が尠くない。此點に於て歐米の女學生は嚴正なる禮義を辨へてゐるやうだ。決して人の失策を見て笑ふ樣な不作法はありません。

我國の一紳士が教育視察の爲め洋行した砌、英國の某女學校へ參觀に行つたところが、折柄晝食の時刻になつたので、其校の生徒と共に食堂へ案内せられました。此食堂は折々舞蹈室にも兼用せらるゝものと見えて、敷物に立派な模樣が塗り出されてあつたので、紳士は其處へ這入るや否や、花の如き數百の女學生が列んで居る前で、美事に滑り轉びました。若しこれがはしたない女學生であつたらクス／＼と笑聲が起つたに相違ないですが、流石は禮法を重んずる英國の女學生で、誰一人として笑ふ者が無かつたので、其紳士は非常に感服したとのことです。

要するに日常禮義の眞精神は、徒に言葉のみ叮嚀にしたり、又は小笠原流の末技に走るのではなく、如何なる塲合にも、人に恥辱を與へぬといふに歸するので厶います。



小說 堅忍

可笑子

一

東京は白金臺町に、廣々と杉の生垣を結ひ廻して、一際目立つ古風の家がある。

杉垣の上からは、紅い白い梅の花が、色麗しう咲き揃つた枝を差出して、惜氣もなく芳しい馨を外に溢し、春は此家ばかりだといふかのやうに、澤山の梅が美事に咲き誇つて居るので、この前を通るときは、帽子を冠つたものも、半天着も、紳士も奥樣も、袖引き留められるやうな氣持になつて、耳を鶯の初聲に傾けて、暫時は行き掛けた足を止めないものはない位である。

生墻の南の端には立派な冠木門があつて、その門柱には御家流の手蹟で、「薫風女塾」と書いた大振な標札が掲げてある。

茲には毎日四十人許の女生が集つて居つて、朗々に書を讀む聲、優しい唱歌の聲などが、をり／＼杉垣の隙を洩れて聞えるのである。

今しも、白金坂を駈け上つて來て、此家に這入つた一個の若者、身には外套を纏ひ、頭は深く頭巾で隠し、足には草鞋を穿き、肩にズックの革鞄を掛けて居る。

この若者は新聞配達夫で、三田の何とやらいふ取次店から受取つて來て、毎朝必ず七時にはこの家に一枚の新聞を置いて行くのであるが、扮裝が變手古で奇怪いといふので、この男の玄關口に來るのを見ると、數多の女生等が種々と噂を始めるのである。夫れは無論春

めるでも毀すでもないが、唯風采が奇怪いところから、不思議がつて笑ふので、度々塾主の小言を聞くこともある。

この男の扮裝の奇怪さと言つたら、なか〳〵一通や二通ではない。よく觀ると、柳原から小供の外套の古物でも買つて來て、それに少しの修繕でもしたかと思はれるやうな、古びて垢染みた外套を着て居る。其許では別に笑ふこともないが、魚屋も豆腐屋も寒い日などには、丁度同じやうなのを着て來ることもあるから。

けれど特にこの男の着て居るのが可怪いといふのは、外套が餘りに小さ過ぎて、少許も體軀に釣合はないからである。その丈といへば僅かに足の膝の遙か上で、袖はやつと臂までに止まり、胸は狹い故か、宛然米俵のやうに丸く固く括られて居る。で、外套を着たといふよりは、寧ろ嵌めたといふ方が適當して居るかも知れぬ。

下部の外套が斯樣に狹苦しく窮屈なのに引換へて、上部の頭巾はブク〳〵する程な大袋で、それが前にかぶさり後に垂れたりして、些時も頭の上に靜止して居ないのを、やうやう手拭を紐にして頸に括り止め、而も帽子を冠らない爲、頭巾の形が烏賊のやうにならないで、章魚坊主のやうに丸くグニヤ〳〵と成つて居る。而して外套が短いので、腰の裂目が歩く每に臀部の圍邊に擴がつたり、卷き付いたり、宛然消防夫の持つ纏のやうであるから、それは夫れは實に可怪いのである。

だが本人は一向平氣なもので、每日この扮裝で押し通して居る。此家で新聞を此男から取り始めたのは去年の十月、爾來今日に至る迄、何時も同じ不思議な裝で一度も變つたことがないのである。

最初のうちは、雨が降るから、天氣が惡いからとも思つた。寒いからだとも思つた。けれど去年の十月から今日迄には隨分天氣の佳い日も暖い日もあつたが、この男は、一度もこの服裝を改めたことがない、一回も頭巾を脫いだことさへ無いのである。或る時この家

の老婢が、頭巾の釦の外れて居るのを見て、親切にも一寸着けてやらうと言ふたけれど、彼はそれをも辭して行つて仕舞つた。

全體彼は何者であらう!?

## 二

塾主と見える年頃五十四五の品の良い老婦人、今しも彼が新聞を置いて立去らうとするのを認め、

『あの新聞屋さん、一寸待つてお呉れ。』と呼び止た。

『はい、何か御用で……。』と纏のやうな體は急に止つ




て、老婦人の方を振向いた。

『あのお前ん店に此頃出來た學生寶鑑があるだらうが、一部持つて來て貰ひたいが、あれは幾價だね。』と塾主は問た。

彼はさも迷惑そうな面色で、

『さうですね明日序に聞いて參りませう。』と言つて早脚に進み出した。

塾主は周章しく兩手を揚げて、

『ま、お待ち、お前には眞實にお氣の毒だが何れお禮

するから、一寸往つて持て來てお呉れでないか、急に見たいのだから。』

『明日ぢや不可ませんか。』

と言ふ彼の言葉に、塾主はちよつと考へ、

『是非急に見たいので、實はお前の來るのを待つて居たんだから、迷惑だらうが一寸往つて來てお呉れな。』

と切に頼めば、彼はさも困つたらしく、急に頸を垂れて、

『困りましたな、どうも。』

と澁面造つて呟いた。

塾主は彼の抱へて居るズックの内を覗き見て、

『お前もう、その中にやア新聞は一枚も無いぢやアないかい、もう配つて仕舞つたんなら店へ歸つて持つて來て呉れても可いじやないか、今都合が惡けれや、直ぐでなくとも、午前中でさへあれば宜いから、是非左樣して貰ひたいね。』

と言ふ斷然の依頼に彼は困じ果てゝ、暫時默然として考へて居たが、何思つたか、急に括つた頸の手拭を解き、頭巾を外さうとするのである。

塾主はこの體を見て、

『お前、什麼かお爲かえ、この寒いのに頭巾を取らんでも宜いじやないか。』

と笑つて言へば、彼は頭巾を後に跳ね、顔を剝き出して、塾主を眺めたが、きまり惡さうに俯いて、

『あの、小生は、實はその、何です、こんな服裝してお恥しいですが、實は書生です、麻布中學の生徒で御座います、これから鳥居坂の寄宿に歸つて、着物を着換へまして、學校へ參らんければならんですから、折角のお依頼ですが、お引受け致し兼ねるので御座います、何卒惡しからず思つて下さい、小生の現下の境涯、學問の爲めとは言へ、餘り面目無さに、他人に知られるのを恥じまして、飽迄面を包んで、今日まで一度も脫いだことの無いこの外套、貴女の餘儀ないお言葉に、據所なく、御覽の通り、恥を曝したので御座います。』

と顔を眞赤にして、聲まで震はして言ふのである。

塾主は是はと許り驚いて、暫時驚きの眼を以て彼の顏を凝視つて居る。

濃き眉、締つて居る口、何處となく賤しからぬ容貌、逞し氣なる相格、眞に是れ好箇の美少年！學資に窮する境遇より、人目に耻を包むの外套であつたか、世には親の仕送る學資を、可惜遊蕩三昧に費消する墮落學生さへあるに、これは粉骨碎身して、苦學力行、以てその素志を貫徹せんとす、さりとは天晴見上げたる心掛、平生から尋常の配達夫ではあるまいと睨んで居たが、案の定……と、深く感じ入つて、

『左樣でしたか、それはまあ、嘸かしお骨が折れませう、今迄全然存じませんものですから、飛んだ失禮しましたよ、矢張し店の雇ひどんと許し思つて居たもんですから、あんな御無理も願つたんです、そういふ譯なら、何に、書物は婆やにでも取りに遣りましよ、でもまあよくこそお身分を明して下すつた、そして及ばずながら今後はお力添へも致しませう、毎日、新聞配達を爲さらないでも、何か他に……それはそうとまあ、お上んなさい、お茶でも入れませうから。』

と言つて彼を家内に招せんとした。

『難有う御座います、が時間に遲刻致しますから、是で御免を蒙ります。』

と、彼は丁寧に辭儀してその厚意を謝した。

塾主は强て止むることもならず、

『では明後日の日曜日はお休暇でしやうから是非お話にお出で下さい。』

と言へば、彼は、

『日曜日は却て閑暇が御座いません、失敬致します。』

と飾氣のない露骨な言葉を殘し、再び頭巾を冠るや、門を出て、その奇怪な外套の影は、軈て見へなくなつて仕舞つた。

## 三

此事があつてから、塾主は頻りに彼の志を賛歎し、感賞して、豪いものである、感心な男である、將來大臣となり、大將となるものは斯樣な少年であらう、他

日靑雲に乘じて、世界に飛躍して華々しい手腕を振ふものは、確かに斯樣な靑年に相違あるまいと稱へ、塾生には勿論、あらゆる知己朋友にまで吹聽したのである。

塾の女生等も先生からこの事を話されてからは、以前に笑つたことを後悔し、その翌日彼がコツソリ新聞を置いて行くのを逸早く見付けたときは、何となく氣高いやうに見へ、傍に駈け寄つて、頭巾の間から顔を覗かうとしたものもあつた位である。

翌々日曜日の早朝、この家の玄關に御免と訪ふものがあつた。

老婢が取次に出て見ると、黑羅紗の制服を着けた中學生が、手に帽子を握つて、ニコ〳〵含笑みながら挨拶して居るのであるが、今迄つひぞ見たことも無い、立派な靑年なので老婢は奇怪な顔で、

『貴郎は誰方樣です？』

『お見忘れですか、小生は何時も參る新聞配達夫で御座います。』

と答ふるに、老婢はさも呆れたらしく、

『あら左樣でいらつしやいますか、私としたことが至然お見違申して、とんだ失禮を……、一寸お待ち下さいまし。』

と言つて、此由を塾主に通じたのである。

軈て老婢は塾主の命を受けて、彼を客間に導き、座布團、火鉢など薦めて、その度毎に彼の顔を熟々見れば、成程風采格好は何時も古い外套を着て來た人に相違はない、だが何うもまだ不審の雲は晴れない、恐らく彼の素顔と眞の姿を見たのは、今日が初めてであつたらうから、斯樣に迷ふのも決して無理からぬことである。

程なく、老顔にこやかな塾主の婦人、悠々然と出て來て、鹿爪らしく正座して居る彼の前に席を占め、扨て時候の辭儀も濟めば、塾主は愛相よく、

『よくお來訪下さいました、今日はお休暇でせうから、何卒ゆるりと遊んで入らしつて下さい。』

と言ひさして、老婢が持ち出でた茶を注ぎながら、

『よくまあ、それでも新聞配達なぞなさいます、嘸ぞお骨が折れることで御座いませう。』

と言へば、

『否、初期のうちは随分辛かつたですが、なあに馴れて見ますと、左程にも感じません、だが時間を費すには閉口します。』

と答へて、塾主が薦める茶碗を恭しく両手に受けた。塾主は、

『私も貴郎のやうなお心懸の人には、充分同情を表する價値があると思ひますから、爾後は及ばずながら、お力になりませう、唯今も感心な方だと言つて、衆とお噂をして居つたので御座いますが、嘸ぞまあ今迄には種々苦勞をなすつた事でせうね、ですが艱難汝を璧にするとか申しますれば、將來は人一倍の御成功なさるに違ひありません、何卒確固り御勉強なさいましよ。』

『どう仕りまして、そんなにお譽め下さると却て慚愧に堪えられんのです、けれどたゞ小生は、仰



言るとほり將來の成功を樂みに、如何樣な苦學も敢て辭すまいと言ふ決心で御座います。』

と言つて、薦められた茶を、ぐつと飲み干し扨て語を次いで、

『これまで親許からも、たび〳〵學資を送らう、小遣錢をやらうのつて手紙を寄越したことも有りました、ですから樂に修業を爲やうと思へば、出來ないこともないですけれども、何うも小生は性質として、兩親が粒々辛苦の末作らへた身代を減らすのは、甚だ快くないことであると存じ、如何樣に刻苦をしても、飽迄獨立自活で以て、素志を貫きたい量見で御座いますものですから、斯樣なことを行つて居ります。』

と言つて、持つて居た茶碗を床上に置いた。

四

塾主は益々感じ入つて、

『その決心が他人に出來兼ねることで、實に貴郎は感心な方ですよ、現今の書生さん方を見ますに、口に許りは理想が何うの、抱負は何うの、扨ては苦學をして居るのと立派なことを言つても、その實、故鄕から充分に學資を仕送つて貰つて、金錢で切符を購ふやうに免狀さへ取れば可い氣になつて居るんですもの、あれで如何して大人物に成れますものですか……、私は貴郎のやうなお心懸なのが、眞實の修業だと思ひますわ。』

と續いて言はうとしたが、丁度そこの襖を開けて這入つて來た老婢は、一葉の名刺を塾主に示し、

『このお方が一寸お目に掛りたいと仰言います。』

と告げた。

塾主は名刺を見て、微かに點頭き、

『さう？　書齋へ通してお呉れ。それから暫く待つて居て下さいつてね。』

『は、畏りました。』と老婢は靜かに襖を閉て去つた。

塾主は青年の方へ向き直つた。

彼はいま來客のあつたのを認て、長く居るは邪魔だと思つたか、不安げに、頻りにもぢもぢし出した。

塾主はそれと悟つてか、
「只今お出でのお方は、高橋さんと言ふ女學生ですが、なに忙ぐ要事でもないのでせうから、まあ緩然とお出遊ばせ。」
高橋と聞いて、彼は痛く驚いたやうに、思はず、
「えゝッ……。」
と驚きの聲を發せんとして、辛うじて聲を咽んだ。
だが彼の顔色の稍々赤味を増したことゝ、彼の體の著しく震ふたのを以て見ると、兎に角彼は何か偶然に思ひ當つたことが有つたであらう、然しこれもほんの霎時で、直に元の平氣に歸り、
「はア、そうですか、いやどうも……。」
と何か言はうとしたが、何思つたか急に口を閉んだ。
塾主は不審な顔付で、
「貴郎、高橋さんを御存じで入らつしやいますか、御茶の水の……？」
と問ひかけたが、彼はたゞ、
「いやなに……。」
と答ふるのみであつた。
塾主は不審に堪えぬが、問へば彼は快からぬ顔をするので、强ひて聞かうとはしなかつた。
彼は何か無限の感慨が胸に迫つたかのやうに、兩眼を見開いて、あらぬ方をきつと注視した。軈て微かな溜息が漏れた。
塾主は彼の顔を覗くやうにして、
「眞實に貴方は感心な方ですよ、此樣なことを突然申すのも何だか妙ですが、新聞配達なすつて貴重な時間を費すのは、貴郎の爲に惜む可きことだと思ひますから、貴郎を見込んで、出來る丈はお世話も爲て上げたい心ですが、何うでせう、宅にお來でなすつて御勉强なさいましては、澤山なことも出來ませんが、月謝に食費くらいは、私の方で持ちませう、その代り、時々宅の生徒に數學でも敎へて下さらば宜しう御座いますから左樣なさいましな。」
と言ふ親切な言葉に、彼は痛く感激して、頓には諾否の答へもなし難く、唯靜かに考へ込んで居たが、少時

して、

『難有う……、その御厚意は決して忘れません、小生如き貧書生をそれ程までに思ふて下さるお志は、實に感謝に堪えんので御座います、けれど、けれど何うも折角のお思召もお斷り致さんければなりません、といふのは、今迄小生は兩親に對し朋友に對して、誓つた言葉もありますから、それを今更變更致して他人の保護を受けたと在つては、男子の一分が立ちません故、お斷り致すより外はないのです、何卒不惡御推察を願ひます。』

と斷然ことはりを陳べた。

この厚意には必然應ずるに違ひないと、豫期して居たのに、案外にも、奇麗にことはられて、塾主は、

『そうですか……、でもまあ能くお熟考なさいましな。』

と言ふより外には仕方が無かつたのである。

一陳、寒い風が吹いて、彼は鷄の聲。雀の鳴聲。新橋停車塲の邊に當つて、けたゝましく、汽笛の音が聞へる。

## 五

塾主は思ひ出したやうに、

『あの、失禮ではありますが、何卒貴郎のお名前を承りたいものですな。』

と言つて彼を見上げた。

彼はこの唐突の言葉に、聊か驚いた樣子であつたが、

『小生のですか、いや名前なぞ他人に申し上げるのは、耻しい次第です、何卒、名なんか申すことは御免下さい、それに……。』

と言はうとしたのを打消して、

『でも、そう仰言らずと、お聞かせなさいましよ、何も貴郎のお名前を聞いたつて、良いぢやありませんか。』

彼は五月蠅そうに、

『小生、名なぞ申し上げる程のものでは無いのですから、……それでもと仰言るならまア、鳥居坂の一苦學

生とでも、言ふものですかな、ハヽヽヽ……。」
と快活に笑つて、
「何れ成功の曉は、立派に名乘つてお伺ひ申しませう。」
「まあ！」
塾主は呆れて彼の顔をつく〴〵と眺めた。
何といふ殊勝な青年であらう！ 何といふ健氣な學生であらう！ 見れば見る程、聞けば聞く程、ゆかしく、慕はしいのは、この青年の言動である。あゝ、青年學生墮落の聲、到る處に囂々たる現今、斯かる殊勝な、そして斯かる健氣な學生も居ることか、嗚呼賴しい青年よ！ と塾主は霎時默然として思ひを空想に馳せ、この青年の既往を思ひ、將來を想ひ、敬慕の情は油然として滿腔に湧き上つた。
折柄轔々と聞ゆる人力車の音。犬の吠聲。
なまぬるい太陽の光が、東向きの緣を照し出して、そよ吹く軟風に微搖いで居る軒端の樹枝が、障子に映つて、娑婆たる樹影を宿して居る。

東京の田舍！ と言つてもよい位な白金臺町は、今しも平和の神が逍遙ふて居るやうに、靜穩である。
彼は此時初めて氣が付いたやうに、塾主に向ひ丁寧に辭儀し、
「今日はこれから上野の圖書館に參らんければならんですから、これでお暇致しませう、何れまた……。」
と言つて座を起つた。
「左樣で御座いますか、それなら強いてお留めは致しますまい。何卒他日お入來下さいまし。」
塾主も續いて起つて彼を玄關に見送つた。そして、
「あのことを能くお熱考なさいましな。」
と勸めるのであつた。
然し彼はこれには答へで、
「失敬！」
と言つて玄關外に二三歩踏み出して、其處の塀際に立つ晩香梅を眺め、何か感ずるところあるかの如く、急に踏み止まつて、塾主を見返り、
「是は善い梅ですな、早咲きをしないで、充分霜や雪

に逢ふ方が梅も良いです、花が咲きましたら嘸ぞ奇麗でせう、その頃は拜見に參りたいものですな。」
と意味あり氣な言葉を殘して、門外に立ち去つた。

＊　＊　＊　＊　＊

その翌日から彼の新聞配達夫は來ない。十日經つても、二十日經つても、彼は再び姿を見せぬ。
玄關前の豐後梅は滿開と成つたが、尋めて行つた彼の影は、頓とこの界限に見へなくなつた。（終）

二等賞　岡　廣子

## 行く水

さつき

「てる子さん、よく尋ねて來て下すつてね。」
と、今しも扉を開けて、這入つて來た一人の美婦人、身には京おめしの袷、帶は流行のはかた、髮は束髮で、あたりの有様といひ、世の幸福を一身に集めた申分のない人です、其人がかういひながら、いきなり友の手をつかまへて、涙ぐみました。
友は。
「アラ八重子さんその後は暫く、私學校の事で久しく遠方へ行てゐたので、ごぶさた致しました、あなたお身體は丈夫なの。」
と、つく〲見ながら。
「大そうおやつれ遊してね、おかほ色もわるいわ、どこかおわるいのぢや、ありませんか、ね八重子さん。」
と心配そうに尋ねました。
八重子は淋しい笑をうかべて。
「ハ有がたう、別に病氣じやないんですけれど、あなたに泣そう見えて。」
「エー何か御心配事でもおありなの。」
八重子は暫くだまつてゐましたが、ためいきをつきながら、つく〲と。
「私ほんとに、あなたの御身の上がうらやましいは。」
「アラどうして、そんな事ありませんわ、御自分の御

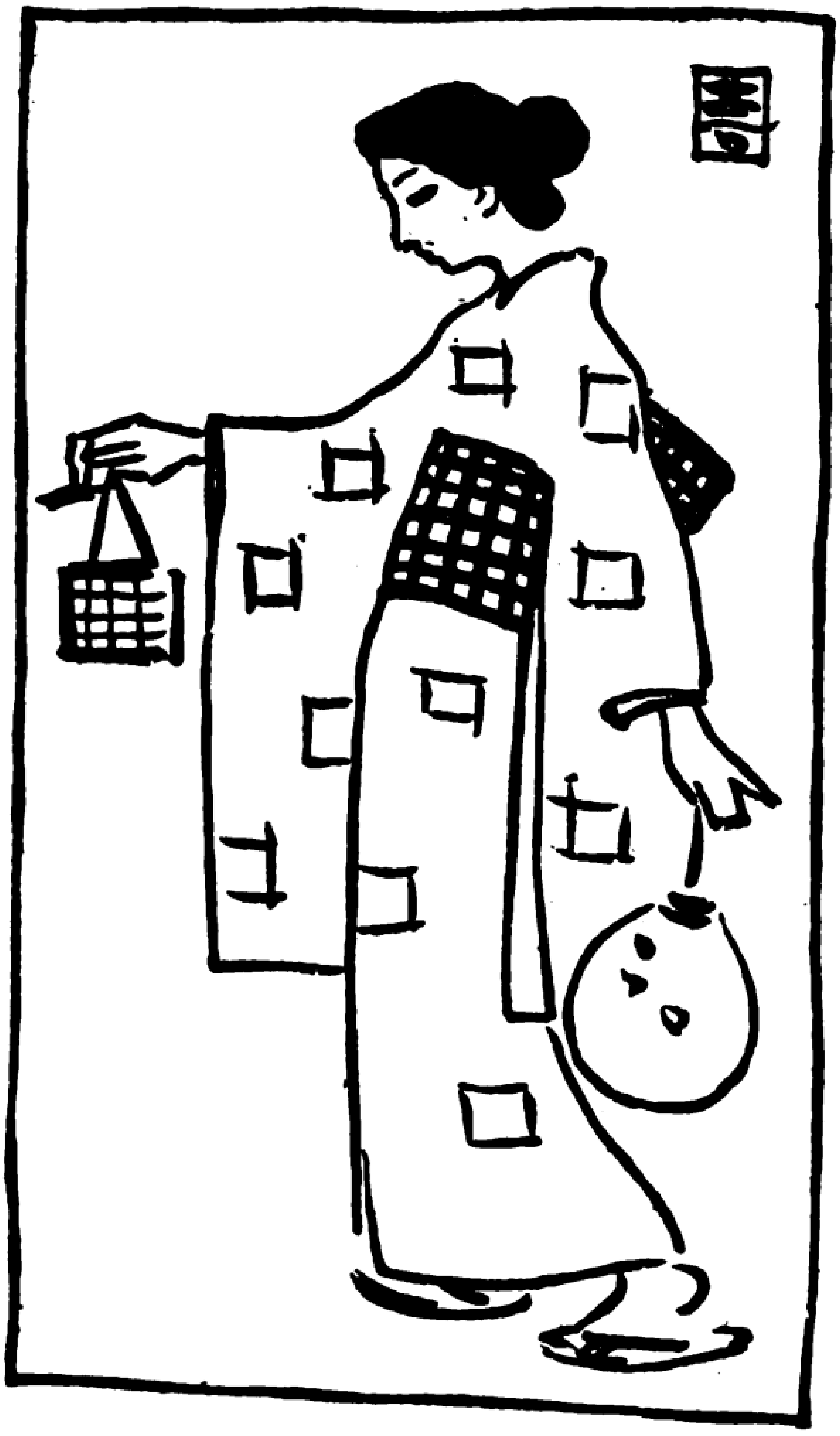
望み通りになつて、こんなに幸福な事はありませんわ、私なんか未だに獨身で、淋しい生活をしてゐるのぢやありませんか、でも神樣の御定めなすつて下さつた事と、思へば、少しの不平もなく、毎日子供を相手に、日を過すのが無上の樂しみですの。」

「それがうらやましいの、幼い時からの仲よしだから。」

と少しためらいながら。

「あなたなぞ、そんな事はないけれど、あなたの敎へ子の敎訓にもと、私のいふ事を聞て頂戴な。」

「エヽきゝますとも、話して下さい。」



八重子は椅子を引きよせて。

「てる子さんも、知つてゐらつしやるわね、私よく學校にゐた頃、世の中は何でも、お金しだいで、どうにでもなるのだから、金持に嫁ぎ度いと、始終いひましたわね、でもその望が叶つて、十七の時この山木へ、嫁入りました、其時分は夫は法學士で、會社員で財產はあるし贅澤はし放題、それにどこの會へ出ても、お金の威光でもてはやされるし、ほんとに私ほど幸福なものはないとうれしく〳〵思ひましたの、それから、子供もでき、ます〳〵幸福になるかと思つたら、其頃から、夫は內をそとへの夜あすびそして私が何かいへ

ば、二言目にはけんつくで、でもまだ私も其頃は、それ程にも思はずに、自分の虚飾にばかり、心をうばゝれてゐましたけれど、もうこゝへ來てから九年になりますが、いまだに夫の身持は、直るどころか、ます〳〵はげしくなるばかり、私もうつく〳〵自分の、考へのなかつた、馬鹿だつた事に、あきれてしまひましたの。

お金があらうが、名譽がどうだらうが、愛情のない夫婦ほど、世に不幸なものはないと、思ひますわ、世間には、私の樣に、うはべは幸福のやうに見えても、心の中でないてゐる人が、澤山あるだらうと、思ひますわ。

人足、車力と、人はいやしむけれど、夫婦共かせぎで、睦まじく、暮した方が、はるかに幸福だらうと思ひますわ。

私この頃になつて目がさめましたの、おそかつたわね。

今からでも勉強すれば、一生一人で暮す位の事は出來やうから、いつそ離別して貰つてと思ふ事も度々ありますのよ、でも私がこゝを出ると子供に氣の毒だと思つて、我慢してゐますの。

私がいゝ見せしめだから、どうかこれからの人達にこんな、間違つた心を持たない樣にして上げたいと思ひますわ、私とても家の恥、自分の恥だから、人にいひ度はないけれどね、てる子さん全くよ。』

といひながら、卓上のよび鈴をおしつゝ。

『御迷惑だつてね、こんな愚痴を聞かせられておいやだつたでしようね。』

折しも入りくる小間使、しとやかに手をつき。

『召しましたか。』

『アお茶を入れておいで、それからお菓子も、』『ハイ、』と出て行く。

『八重子さん、ほんとにそう思しめして、では私おすすめする事がありますの、あなた安心を得たいと思ひなさるなら、私今こゝに聖書を持て居ますから、これを置て行きます、おひまがあつたら御覽なさい、世間

では、耶蘇といふと嫌ふ人がありますけれど、自分の安心を得るためには、何か一つ信仰するものがなくてはなりません、それには耶蘇が一番いゝと思ひますわ、今迄の罪といふと、わるい事した様ですが、今私に話された事を神に懺悔なさるんです、それは〳〵心が清々して何ともいはれないいゝ氣持ちになります。

あなたほんとに神をお信じなさい、どんなに氣丈夫になるかしれませんよ。



八重子はしみ〴〵と『てる子さん誠に有がたうでは仰にしたがひましよう。』

先の小間使、茶、菓子をはこび來る。

あとより今年七つになる、可愛い盛りの俊雄。『母様といひながら、走つて參りました。』

「コレ俊さん、おば樣におじぎをし。」

「おばさん、ゐらつしやい。」

「おや坊ちやん今日は、まアおゑらい事。」と頭をなでながら。

「こんなかわいゝお子さんが、おありだから、まあ辛棒あそばせよ、今に乾度嬉しい時が來ますわ、世の中といふものは、いゝあとはわるい事、わるいあとはいい事のあるものですから、ね坊ちやん、あなた、お怜悧さんだから、孝行なさいよ、今にえらい〳〵人になつて、母樣が御安心なさる樣におなんなさいといひますと。

「僕何にならう、東郷大將の樣に、ならうか、大山元帥の樣に、ならうか、ねおばさん。」

「さうですね、何でも御自分のすきなものにおなんなさい。

何になつても、家族睦まじく、樂しく、面白くお暮しなさいよ。

坊ちやん、あなたね、いろ〳〵なきれいな花が咲いて、いろ〳〵な鳥がないて、蝶が舞つたりする、此頃のやうな、樂しい時に、靑々とした、野原で遊ぶと、心も晴々して、ほんとに〳〵面白くて嬉しいと思ふでしよう。

「僕、いつも〳〵野原で花とつたり、鬼ごつこしたりして、遊ぶの大すき。」

「さうですか、今こんなむづかしい事、いふても、お分りにならないでしようが、家庭といふものは、始終、その樂しい〳〵、春の樣でなければ、いけないんですよ、何でも自分の勝手な事ばかり、しないで、皆愉快に、樂しめる事をするんですよ。」

「ほんとに俊さん、おば樣の、仰しやる事よく伺つて覺えてゐらつしやいよ。

「坊ちやん、面白くもないね、こんな事いはれて、母樣には褒美一つ頂きましようね。」

「どうぞ、てる子さん、つまらぬもの、召し上つて頂だい、じや俊さん、お相伴。」

とカステーラを取つてあたへますと、口一杯に、ほうば

つて、その愛度氣なさ、おかしさ、主客ともに大わらい。八重子。

「この子が時々おかしな事をしては、笑はせるので、餘程まぎれますの。」

てる子は、つく〴〵有樣を、見てゐましたが。

「ほんとにかあい〻事、こんなかあい〻お子がおありなんですもの、御主人だつて、おなほりになりますわ、まア折かく神樣をお信じ遊ばせよ。」

と、ふと氣のついた樣に、時計を出して見て。

「ア・もう五時ですわ、思はぬ長座して、では八重子さんお邪魔いたしました、また伺ひます。」

「まアい〻じやありませんか、何もありませんけれど、晩の御飯でも、あがつてゐらつしやいなね、宜敷でしよう。」

「有がたう、折角ですが、あしたのしらべ物もせねばなりませんから、おいとま致します、左樣なら。」

「そうですか、ではあなたの、御氣性としてお止め申しても　だめだから、また入つしやつて頂戴、ほんとに今日は眞から愉快な日をおくりました、では御機嫌よう。」

といつにない、はれ〴〵とした八重子の顏。

撰外佳作　さつき女子

# 机上の花

刈萱女

頭髪を高島田に結つた、十六七の可愛らしい小間使が、火鉢と褥とを持つて入つて來て、

「最う直ぐに被來いますから、少時お待ちなすつて。」

と三ッ指の丁寧な挨拶を殘して閑雅に出て往くと、跡はお新一人になつた。

二方に廊下を控へた、風通りの宜い四疊半で、庭に向つた窓際に欅の丸脚の机が一脚、手摺のした聖書、家庭雜誌らしいのが二三部、其横に鉢植のクラシメンが、朱實色の美しい花を、拭き込んだ机の上に映してゐる。

お新は薦められた茵の上に、恐々片膝を乘せて、帶の間へ挿んだ袖入の莨入を出して、漸う落着いた態に莨を喫始めた。此邸へ來る迄は氣ばかり急いで顔も身體も霑然とした汗に潤つて居たが、氣が靜ると同時に急に張が拔けて、そよ〳〵と窓掛を搖がす青葉の風は、何だか生を新たにしたやうにすが〳〵しい。彼は片手を後に突いて、窓から見える森とした庭の花圃、羅漢松、枝態の面白い赤松、それから楣間の油畫の、大洋の中に海鳥の飛ぶ態などを、我れにもなく見込んで居たが、ふと廊下を通る跫音が、室の前で止つたので、急いで衣紋を整して端然となる。

靜かに襖を開けて入つて來たのは、頭髮を潰した樣な廂髮に結つた色の白い、銘仙の袷に白襟を襲ねた、此伯爵家の家庭敎師——お新の實姉の基子で、

「おや、新ちやん、克くお出てねえ。」

と可懷げに謂つて、傍に寄る。妹の世帶じみて神經質らしいのと反對に、擧動が何となく活々して、人に依つては却て姉を妹かと疑ふ程である。

「暑くなつてねえ、何時頃お出でだの？」

「三十分ばかり前よ、最う全然御用は濟んで？」

「あゝ、今坊ちやまのお稽古をしてゐて……。最う是で夕方まで何も用はないのよ、今日は悠然遊んでおいでても宜いでせう。」

そこへ小間使が菓子皿と茶器とを運んで這入つて來る。

「おや憚り樣、お茶は私が容れますから……。」

小間使が出て往くと基子は急須の茶を茶碗に移して、お新に薦め乍ら、

「さお上り。それから此お菓子一つ食べて御覽。」

「なに？怪しなものね。」と珍し相に菓子皿を覗いて居たが、軈て其一片を恐々口に入れる。

「あら、然うぢやないわ、ホ……、其鍋餡は排つてお上り。」

「おや然う、私如何も變だと思つたけれども……。」

顔を紅うして笑ひ乍ら、熱心に味はつて居たが、

「何だか牛皮菓のやうに甘つぽいお菓子ね。何と云ふ

名？」
「チヨコレツトと云ふ西洋のお菓子よ、宜かつたら澤山お上り。」
「否最う澤山。何だか口がねばねばする程甘いものね。」
話は些と途斷れて、基子は又新しい茶を急須に容れる。お新は默つて莨を味はひ乍ら庭を眺めて居たが、少時すると、
「今日はねえ、姉さん。」と急に眞顏の淋しい眼色して基子を見る。
「如何したの。」
「私今日は姉さんに相談があつて來たのよ。」
「相談？　何だね急に改つて……。」と妹の顏を覗いて笑つたが、
「ま、何だか謂つて御覽。如何したの？」
お新は少時俯向いて膝の手帕を弄くつて默つて居たが、急に、
「私最う、あの人と斷然別れて了はうと思つて出て來たの。」と云切つたが、其眼は最う涙が充滿になつて居た。
「別れる？　まあ一體何が原因で那麼事を謂出すの、如何したのか譯をお聽かせよ。」
「譯も何もありやしないわ、彼樣な意氣地のない人に密着いて居ちや、何時頭が上るか先途の見込が無いんだもの、私今日と云ふ今日は眞個に心を定めて相談に來たのよ、此先も一緒になつて居ちや、それこそ被るもの一つ無くされて了ふわ、顯らかな話なんだもの、御覽よ、お邸へ上るにさへ、此樣な着物で追ひ出すんぢやないの。」と云つたが、お新の良人と云ふのは、今さる私立の鐵工所の書記に傭はれて居るのであるが、生中の傲氣が毎も仇をなして、彼が半生の歷史を洗へば、殆んど失敗の連續と云つて宜い位である。
基子は默つて聽いて居たが、
「それで何、あの人は新ちやんに始終辛くでも當るの？」
「まあ、此樣な貧乏して此上辛く當られちや堪りやし

ないわ、姉さん、あの人の親切はね、皆私の衣服を脱がそうつて鼻薬の親切よ。」

『然う新ちやんの様に僻んで了つては詮方がないねえ。』と基子は凝然と妹の顔を凝視めて居たが、

『ぢやね、新ちやん、新ちやんは宜い衣服を被たり、物見遊山に出掛けるばかりが何よりの幸福とお思ひ? これは新ちやんだからお話しすゝけれどもね、……此邸のお上様――奥様のお身分は新ちやん幸福とお思ひか何とお思ひ?」



『姉さん、私は何も華族様の夫人にならうつて謂ひやしないわ。』

『それは然うでせうが、それでも、矢張お幸福な御身分位には、お思ひでせう、それで、其様な不平も出て來るのよ。私は何も拗く謂はうとはしませんがね、丁度宜い折だからお話し爲ませうよ。

「――何時か私はお上様のお伴を申上げて鮫ヶ橋のあるお邸――これも伯爵家のね――へ參つた時よ、お歸途はお氣の詰るお馬車よりも、お歩ひも偶には晴々して宜いからと仰せ遊ばして、丁度日の暮方、あの汚らしい貧民窟をお話し申し乍ら通つて來たのよ、すると、お上様はふとお立停りになつて、何物やら凝視と御覽遊ばした儘動かうとも遊ばさないでねえ――見ると裏までも一目に見える汚い荒屋に煤けた行燈が點いて居て、四五人の親子らしいのがお夕飯の最中よ、それでね、

『お上様、下層の者の暮らし向は此様なさもしいもので御座います。』と申上げると、お上様ははら〳〵と涙をお零し遊ばして、

『まあ、うらやましいことねえ』と搾る様のお聲で仰せ遊ばすのよ。

新ちやん！新ちやんは此御言葉を何とお聽きか？……御身分と謂ひ、お暮らし向と云ひ、何一つ御不足の遊ばそう筈のないお上様が『羨しい』と泣仰せ遊ばすお心の中！　これはね、御家庭に尊い愛と云ふものが缺けて居るからよ……!!

お殿様の事は私何もお話し爲ませんわ、唯、時にはお二方が一週間もお言語一つお交し遊ばさない事が折折ある――然う謂へば、新ちやんも大略お推察が出來るでせう、美しい外面ばかりに眼を眩まされておいでて、内部に隱れた悲哀はお分りにならんのよ。況して新ちやんの配合は新ちやんを幸福にしようと思へばこそ、種々な事にも手を出すのではないの、是が運惡く皆失敗に終つたから、新ちやんにも其様な不足が云へるのでせう、まあ吾儘な！……年中心の美しいお慰藉とては探してもなく、淋しうお過し遊ばすお上様のお心の中をお察！　被物位が何でせう!!――其様な吾儘はお言になれるもので無からうと、私染々思ふのよ。ね、新ちやん、生意氣を言ふとお思ひでせうがね、熟熟考へ直して御覽、榮華の夢に醉ふばかりが人生の目的とは私には如何しても思へないね。新ちやん、新ちやんは如何お思ひ？』

常には物を多く言はぬ基子が、その最愛の妹の爲に斯うまで説き續けて漸く興奮した聲の終つた直――二人の瞳のはしなく合つた時！　お新の眼からは、熱い涙が胡蓮の糸を索く様に流れた。

「姉さん、私が惡かつた！」

「お丶、新ちやん！」

基子も思はず叫んで、犇と妹の手を執つた儘、握りしめる。

窓掛を白く飜へして吹いた風は、基子が机の上の花を搖つて、寄添つて泣く姉妹の鬢を僅かに吹いて。

## 婦人身の廻りの價

流行を追へる婦人が外出の際に盛裝さるゝ身の廻りの價はどの位かゝるかといふ事に就て頃日去る好事家の取調べし處ろによると上等の部にて凡そ千八百圓、並の處ろにても二三百圓に上るといふが、今その内譯を記して大方の參考に供すれば

| 上 | | 中 | |
|---|---|---|---|
| △肌襦袢(縮) | 一圓二十錢 | 同(メレンス) | 六十錢 |
| △腰卷(メレンス) | 七十錢 | 同(同) | 五十錢 |
| △長襦袢(絽縮緬) | 廿六圓 | 同(同) | 二十圓 |
| △單衣(絽縮緬下著羽二重) | 五十圓 | 同 | 四十五圓 |
| △帶(絽綴珍丸帶) | 五十圓 | 同 | 卅六圓 |
| △帶(白地縮緬繡の花鳥) | 五十圓 | | |
| △シゴキ(友禪縮緬) | 八圓 | 同 | 四圓 |
| △帶〆(打紐金線と白線金具は二十金) | 廿四圓 | 同 | 三圓 |
| △帶揚(縮緬) | 五圓 | 同 | 三圓 |
| △千代田草履 | 五圓 | 同 | 二圓 |
| △駒下駄 | 十二圓位 | 同 | 三圓 |
| △足袋(麻絹) | 一圓位 | 同(キヤラコ) | 卅五錢 |
| △髮飾(日本髮) | 四百九十圓 | 同 | 四十五圓 |

右髮飾四百九十圓の内譯を記せば櫛笄百二十圓、平打金足寶石入の簪七十圓、金製寶石入或は彫刻入根がけ三百圓

| 最上 | | 中等 | |
|---|---|---|---|
| △ちよかけ(シホン製) | 十五圓 | 同(レース) | 三圓五十錢 |
| △襟止(ダイヤ入り) | 三百圓より五百圓まで | 同(寶石入) | 十二圓 |
| △洋傘 | 十圓 | 同 | 三圓五十錢 |
| △ハンケチ(麻一枚) | 五十錢 | 同 | 二十錢 |
| △時計(二十金寶石入) | 三百圓 | 同(銀女持) | 二十圓 |
| △指環(二十金ダイヤ入り) | 三百圓 | 同(寶石入) | 三十圓 |

合計千八百三十六圓四十錢

以上を合計すれば上等の服裝は千八百三十六圓四十錢、中等にしても尚ほ二百二十九圓八十五錢に上れり



# 文園

## 葉山繁山

清葉

春は花を稱すれども滿山皆花にあらず、然るに夏に入りて、新樹綠を吐くに至れば山は蜿々と蛟龍の如く野は瑞々と大湖の如し、四面皆綠英青華にして至るところ花ならざるはなし、薰風娟々と吹き來て、輕衣を拂へば、一味の凉情滾々として身邊に涌き、さながら泉水に打たるゝ思ひすめり、春色は徒に脂粉の氣多く自然が强ひて笑えるかとも思はれ、親しんで哀深かゝるべし、唯だ綠翠滴るが如き淸容の懷より陣々として生み出さるゝ青嵐に、顧望の天地活けるが如き夏の景色は雄麗にして氣宇恬淡、風貌自ら瀟洒なるこそ心地よけれ、雄大、洒落にして放膽なる夏の自然はあらはに活動の意味を訓ふ、午下綠蔭に現寢の人何をか夢む。

### ◎青松白沙

長汀曲浦小紋のごとき漣波習々と磯を打ちて、濱風謖々松を鳴らす、淸瀟淡麗の趣、宛然一軸の逸畫に對するの心地す、彼方の島は浮鳥の眠るが如く、山は一抹の長煙縷々流るゝが如し、色美しき磯馴松を綠の洗髮と見ば、悠々として浮ぶ帆影は、友禪の模樣にたぐふべし、げに夏曉歩を濱邊に移して、鮮明の氣を吸取すれば、宛ら淸き甘露を掬ふの思ひしつ爽快殆んど盡きる所なし、さはれ一痕の凉月松葉を照らして散點する漁家の炊煙直上するかたへに、藻鹽燒く煙絹帶の

如く棚引く趣に至りては、優妙の致、清婉の景相具はりて、之をや夏の絶調と云はん。日中乾坤を燒殺して閻魔王の狂へるが如き景觀と比べて何れぞや。

◎柳蔭洗馬

は夏の畫題也、午日赫奕として山地死したるかと思はるゝ頃、楊柳獨り涼風を呼び來て、綠髮を梳らしむるさま人に譬ふれば、悽婉なる京美人が、加茂河畔に涼むの趣もありつべく今其の木蔭を流るゝ潺緩たる清流に、馬脛を沒し首を垂れたる時、新しき菅笠を着けたる馬子が赤裸々たる五體に無限の涼氣を蒐めつゝ、藁の刷毛にて馬を擦れば、馬頻りに眼を瞬き尾を振りて、涼快堪えがたしと切に喜興を訴ふるの風情人獸相和して、恰も畫の動くに似たり、鬣毛風生翼を張りて天空をも駈けるらむ元氣の馬も、午下綠蔭の中に涼水を浴びれば、可憐なる狗兒の雪に轉ぶやう得も嘶かず可愛さ云ふばかりなし、一畝の綠林天下の夏を止む。

◎七色の光彩

陸離として、天宮より帷帳を垂下したるかと思はるる光貌は夏の雨後に能く見らるゝ景色也、紫電神雷を喚び來て、疾風地を捲けば、四望悽愴暗慘として、忽ち覆盆の大雨を射下し、俗塵を掃蕩すとおぼしく、之をや世の痛絶と云はましを、急轉して空さりげなく霽るれば、斜陽東山の殘雲を照らして、碧天綠地、山は重り水は復り、自然の成せる翠帳紅閨は婉艶たること阿房宮の如く、懸れる虹彩を天津乙女の紅筆と見ば、雨後の山水は深綠すなはち濃艶の情を籠めたる美しき玉章にあらずや、夏の心裡讀むべき也。

◎春月は銀の如く

肌白くして女性的也、夏月は白金の如し、豪邁にして英雄の質あり、秋月は黃金の如く、徒に光輝あるところ薄弱にして貴族的也、冬の月は鐵に似て、浮世の荒波と鬪ふ男の子の趣あり、何の月か尊かるべき。

◎夏は旅行

こそよけれ、綠の山紫の水、眞珠の亂るゝ磯の漣波、黃金色なす月の湖、あるは深山幽谷に雲霧の扉を敲き、或は島洲邊濱にも煙霧の門を潜りて、美しき

は書き、淸きは歌ひつゝ九旬の行樂を專にすれば、三伏の熱暑と聞くは名のみなりけむ、雜閙の巷に齷齪して人生旅行の趣味を覺らざるは、泉に望んで水の甘きを掬はざるにひとし命壽短かるべし、明け易きは夏の夜にあらずや。

旅行して、紀行文なきは佛に參じて唱名せざるが如し、口惜しかるべし、豪宕の景雄麗の樣奇峭の態淸洒の趣點じ來れば、一穗の筆自然の大觀を極む、讀んで天籟の響あるもの、凉風坐邊に起る、若し夫れ飛瀑三千尺、銀河の九天より落ち來たるかとも思はるゝ壯觀に至りては、悽凉膚に粟を生ず、杜甫李白の詩も竟に之を寫すべからず。



◎臥楊の下に閑話あらば綠陰讀書なかるべからず、洒々ハンモックを松間に吊りて、靑嵐に身を嬲らせながら紀行文を讀む、想望神に入りてすでに俗衰の人にあらず、こふらくは旅行を得せぬ人せめて紀行文をだに讀みて其十分の一をだに樂しますや、自然に對すれ

ば人は眞善美也。

◎登山と舟行

は夏の行樂也、登山は雄々しく況して富士の嶺に上りたるなど天津神も降り居ますらむ、舟遊はまことに爽やかなり、月の隅田川など云ひしらず一おもむきあり、乍去登山を企てゝ千仭の谿間に轉び其儘石と化したる、舟遊に罷りて空しく底の藻屑と消えたる、かゝる例乏しからず、幽魂今將た何邊をさすらふらむ思へば鬼氣身にせまりて、悽涼深山にあるらんやう。

年中行事

# 雲の峯

## 夕すゞみ

東京の隅田川、大阪の中の島、京都の鴨川、都人は競うて此處に集れども、畫舫相接し、涼棚相隣り燭火天を焦し、絃歌耳に煩はしく。謂はゆる此の人數、舟ならばこそ納涼かな。涼を追ふて却て熱に逢ふの感あり。

涼しさに四つ橋を四つ渡りけり、夜更けて月消く、四顧人なく、清風橋畔の柳を吹く。紅塵萬丈の都會にもまた此の如き清境なきにあらず。

金殿玉樓珠簾を捲いて明月を迎へ、瑠璃の盤上に北海の氷と琶湖の鮮とを盛り、夜光の玉盃を把りて葡萄の醇酒を飲む。傍には輕羅の小扇を搖かして涼を送る佳人あり。こはこれ貴人富豪の納涼鄙人の夢にだも及ばず。

夕顏棚の下涼み、てゝはてゝらに、妻は二布して、今日の暑さの強かりしことを語り、明日の仕事の順序を話す。こはこれ野人の境遇、樂しみは却つて其の中に在り。

或は湖上に舟浮ぶるもあらん。獨り池邊を逍遙するもあらん。荷香薫ずる池亭に坐して書を讀むもあらん。影濃かなる綠樹の下、淸水湧き出づるあたりにハンモツク釣りて高臥するもあらん。去りて山間に瀑布を尋ねて波にちり込む青松葉に心を澄ますもあらん。納涼

の道はさま／＼あれども、眞正の凉は己が心より生ず、四圍の境遇はこれに關せず。

いふまじと思へどけふの暑さかな
石も木も眼にひかる暑さかな
病む人をおもひやらるゝ土用かな
　　　　　　　　　　其角
此の人數舟ならばこそ納凉かな
　　　　　　　　　　來山
凉しさに四つ橋を四つ渡りけり
凉しさのかたまりなれや夏の月
凉しさや夕立ながら入る日影
凉しさや脾の上なる天の川
夕凉みよくぞ男に生れける

納凉に誘ふ

木も石も眼にひかる昨日今日の暑さ、言ふまじと思ひ定めてもすぐ口に出で、われながら可笑きまでに御座候、されば今夕はちと早う湯あみも夕餉も濟ませて上野公園より



不忍池のほとりを散歩せばやと存じ候御同行の思召おはさば私方へ御出かけ下されたく右御誘ひ申上候あら／＼。

暑さを見舞

金を流し石を爍く暑さに御障りもなう渡らせられ候や、私方などはところせき住居とて朝も夕も一陣の風なくさながら甑中に坐する心地に御座候、さりとて避暑旅行などの贅澤は及びなきことに候へば、暑い暑いといひながらも病みもせで起き臥し致し居候水蜜桃一籠お珍らしうは候へども時節柄御見舞として御目にかけ候御納め下さらばいと喜ばしう存じ候かしこ。

## 土用ぼし

夏の土用干こそ、忙しくもまた嬉しきものなれ。今日こそはと天氣見定め簞笥ひき出して取り出す衣裳のすべてを、ひきわたしたる苧繩に懸け陳ぬるに、黒の紋付白無垢の小袖は紅梅の裲襠と隣り、幾筋の帶は長く垂れて金色燦爛たり目もさむるばかりに華美なる友染は、じみなる小紋染と肩を駢べ、上布すきや絽帷子などのうす物さては單衣浴衣などは類を以て集めらる。こなたに羽織袴洋服被布などの一廓をなすあればあなたには夜具の堤防あり。下着も胴着も襦袢も裾除も老幼男女のあらゆる衣裳を陳列して、千紫萬紅、室内はさながら百花の爛熳たるが如し。これやこれ我が一家族が身に纏ふべき装飾、價にすれば幾干ぞ。而して皆父上が額の汗、母上が丹精の賜ぞと思へば有り難くもまた忝く。仇おろそかにすべきかは。

座敷の方はまた圖書什器の陳列、こは父上と兄上との受持。兄上は父上に敎へられて先祖傳來の鎧着けたまひ、のそ〳〵と勝手へ出で來たまふにぞ一家皆どよめきて褒めそやす。

かくて夕暮には物おの〳〵其處に片付けられ、迹掃き淸めて晩餐の膳に集る家族は皆喜色を帶ぬはなし。

よろひ來て褒ためさん土用干　　去来

繪入した時の枕や土用干

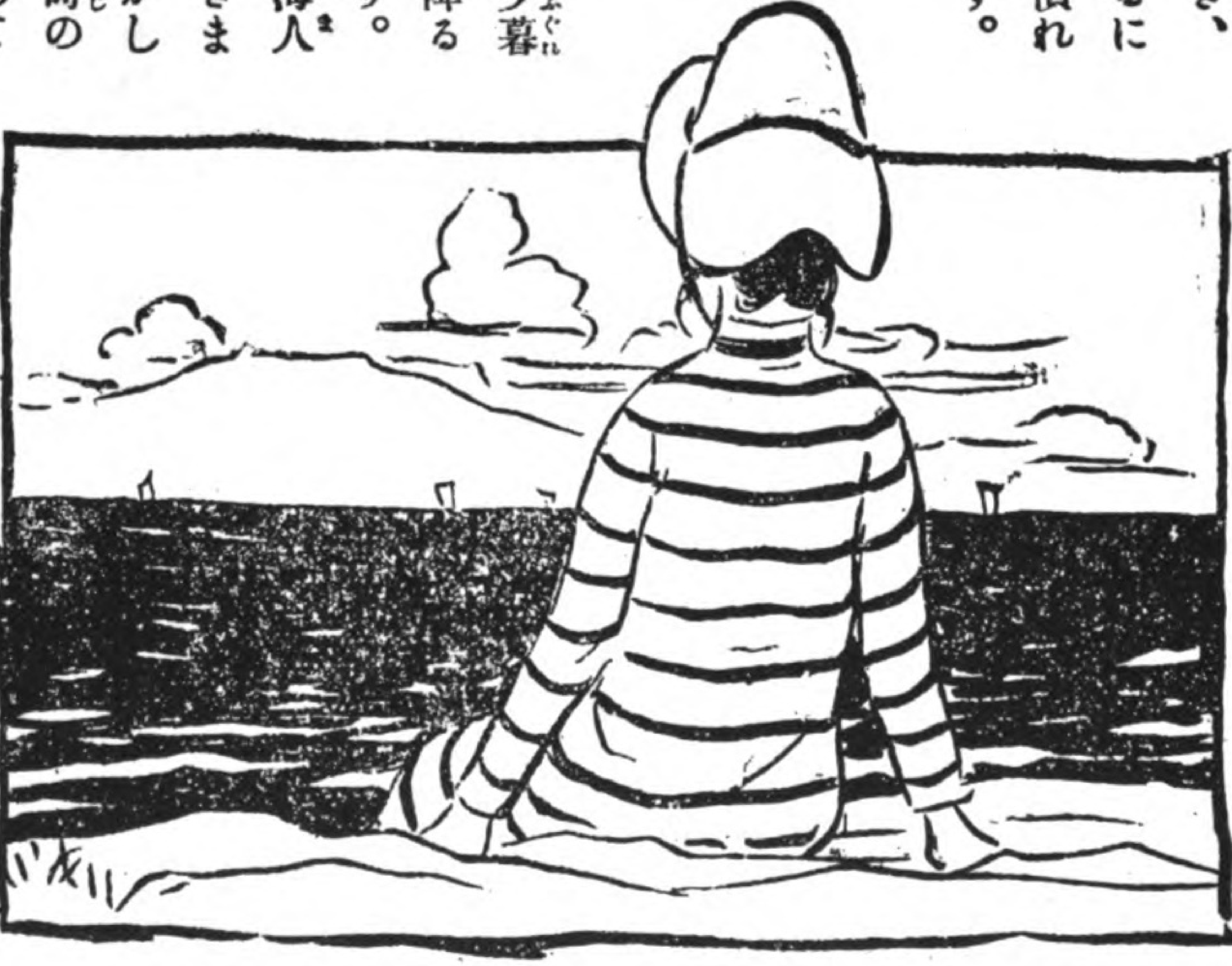
## 海水浴のすさび

ことしは吾が一家族暑中の卅日を某海濱に送りぬ。此の地は民家二百餘りの一漁村にて昨年始めて海水浴塲を開きたるばかりなれば、諸般の設備は整はねども、さすがに脱衣塲休息所などはあり。海岸は東南に面し、西には一帶の砂嘴斗出して海水深く灣入せることとて波穩なること恰も澄湖の如く、退潮の時には汀より一町餘りの處までは深さ乳にも及ばず、されば殿たちにこそ物足らぬ心地すれ女子供にはいとふさはし。

シャツ股引に麥藁帽被りたる姿は繪にこそ見れ、今自ら其の姿しては、さぞ見る目をかしからむと耻かしくもあり、海に入ることは生れてより初めてなれば、

何となう恐ろしく、抜き足さし足、鷺が餌あさるやうに深さ二三尺の處まで進みゆき、水母、小章魚の時々身に近よるに愕きすぐ陸に逃げ上りしが、慣れては恥かしくも恐しくもあらず。浮袋に縋りて水はねちらし。深さ肩に及ぶ處までも進み行くやうになりぬ。

　海水浴は朝こそ善けれと聞しものから、暑さにえ堪で日中に飛び込みしこともあり、夕暮に浴せしこともあり、偶ま雨降るには物足らぬ心地して晴を待り。されば皮膚の色は日に黒みて海人の娘に立ち並ぶも見わけがたきまでになりぬ。されど食慾はをかしきまでに進みて常に三度の食時の待ち遠く、夜の夢はた穏かにして



心地の快活なること得もいはず。

　固より旅館の設とてあらねば、われら一家族はとある民家の二室を借り入れて母上と妾と二人して自炊せしが魚類はもとより鮮しく野菜にも乏しからず、價は都會の半ばだに及ばざれば、席料飲食薪炭の費まで合せて一人一日に三拾錢を超えざりき。此の家はまた近く海面を見晴し眞帆片帆の往來手に取る如く夜は漁火の點々たるを望み清風室に滿ちて燈火も消えんばかりいつまでもかゝる處に住はまほしと思ひぬ。

　名たゝる海水浴場には黄金多き人の數多遊びて豪奢を競

へば物價もことの外貴く歌ひ女など入り込みて絃歌の聲も喧しとか聞けど此地にはまださる事なければいと閑靜にて浮き世に遠ざかりたる心地しぬ。されど此の地もまたやがて塵俗熱鬧の地と化し去らんか。

## 海浴より友の許へ

文もて申上候暑中御障りもなう渡らせられ候や、妾は先日より父上母上弟と共に三輪の海濱に暮し居候當所は三四年前に海水浴場を開き候のみにて、すべての設備は不揃ひ勝に候へども、海は遠淺にて波穩かに水清く、女子供には誠に此上もなき浴場に御座候後には青山を負ひ前は淡路島を望み眞帆片帆の往きかひ手に取る如く、朝夕の眺め筆に盡しがたく候、空氣も清く魚は無論新らしきが上に價も都のやうには貴からず野菜にも乏しからず候故私共は農家を一軒かり受け自炊致し居候に、席料飲食費を合せて一人前一日五拾錢位にて事足り申候、當地へ參り候てよりまだ一週に滿たず候へども、少くも一日二回は海浴致し候事とて、浮袋に縋りながら少しは泳げるやうに相成り、めつきりと顏の色上げ致し候、これがため例の胃病は忘れはてしやうに癒え申候、夜は清風海面より吹き來りて、燈火も消えんばかり、蚊は存外に少う御座候、今日父上用事ありて歸宅致され、私共は此月中なほ滯在の積りに御座候て、座敷も廣々と致し居候間、あなた樣にも一度御越し遊ばされ候ては如何にや、切に御勸め申上候かしこ。

## 七夕まつり

桐の一葉に秋のたちそめし頃、夕風涼しき庭掃き淸めて星祭るこそ優にやさしきわざなれ。

昔は五色の絲を竿に懸け、琴ひき衣などさへ星に手向け、兒女は皆硯洗ひ淸めて、芋の葉の露もて墨を磨り、梶の葉に歌かきて供へたりとか。今はさやうの儀式めける事は大かた廢れたれど、なほ彩箋に己がじゝ歌かいつけたるを笹に結ひつけ、瓜、茄子、大角豆、玉蜀黍など、くさ〴〵の畑の物供へて星祭るはいと多

かりき。

織女星といふは、天帝の女にて、牽牛星を夫としてより、機織ることを怠りたれば、天帝怒りて其中を割き、天の川隔てゝ住ましめ、一年に此の夜のみ逢ふことを許すとかや。

支那の傳説は、荒唐無稽なるが多き中に、唯これのみは、多少教訓の意味を含みて、やさしき物語なり。そはとにかく、此の日を兒女が乞巧の夜として、永く家庭行事の一に保存せまほし。

天の川渡らば二四牛と牛　宗因

七夕の雨やいづくの牛の聲　來山



暁のしづかに星の別れかな　子規

ひさ方の天の川原の渡守きみわたりなば楫かくしてよ

こひ／＼て逢ふ夜はこよひ天の川きりたちわたり明けずもあらなむ

## 魂祭り

麻殻焚きて先祖代々の精靈を迎へたる家の内は、見かはすまでに取り片付られて心地よし。疊の表とりかへたるもあり、障子の紙、新しくしたるもあり。

軒には青簾提灯など吊り、庭の箒目いと淸らかにて、一片の塵だに止めず、佛壇の燈明赫灼として線香の薫り絶間なく、蓮の葉、枝豆、大角豆、ありのみ、根芋、

茄子、青瓜、青柿さては水、米、素麵などに苧殼の箸添へて供へたる數々の飲食は、皆淡泊なる物のみなれど、家族心をこめての厚きもてなしに、祖先の靈もさぞ滿足したまはんか。

初盆に當れる家は、ことさらに魂棚設け、切子燈籠などあまた懸け並べて去年今年、亡せにける人の魂迎へ、今更に有りし昔を繰り返すもあり。

かくて十五日の夕に、また麻殻焚きて諸靈を送り出して後は、主婦の役目は果てけるものから、踊に急ぐ娘子の髪化粧になほ暫しの手數はかゝるべし。

聖靈も出て假の世の旅寐かな
喰物も皆水くさし魂まつり
無住寺に人もゆくなり魂祭
古道に逢ふ人もなし墓參り
墓參り兀山こえて戻りけり

### 初盆に人を招く

ことしの花と共に散りうせし娘の初盆にあたり候事とて魂祭の用意致し靈前にて湯漬さし上たく候間明日午後五時過より御越し下されたく候生前にはとりわけ御心易く願ひしあなた樣の御回向は千部萬部の讀經にも增して亡き魂も浮び出づらんと存じ候右御案內まであら〳〵。

### 盆踊り

月澄みて、一村壷の如く鎭守の森には盆踊り方に闌なり。壇上には美音張り上げて歌ふ音頭の節滑かに、宛轉抑揚の妙を極め。壇下には三味太鼓拍子木の囃子よく揃ひて遠く谺に響く、之を取り卷く踊り子の手振り足拍子、またよく整ひて一絲亂れず、時々合す掛聲の濁みたるは男かやさしきは女か。踊る者、固より樂しみて狂せるが如く、觀る者亦喜びて醉へるが如し、共に歸るを忘れて月の山の端に落つるを知らず。げに是れ農家一年中の最大樂事。日ごろ耕耘の勞も紡織の苦も、此の一宵の歡に忘れ果つべし。

さるを風俗壞亂とかいひて、あながちに之を禁止する警察官もありとかや。されど都には男女うち雜りて素人演劇に餘念なき學生あり。華館高堂の中に紳士貴女手をとりかはして、舞踏に一夜を明すもあり。

月澄みて鎭守の森の踊りかな
踊りけり月山の端にかゝる迄

# 歸郷日記

たま子

## (一)

夜もすがら胸躍られて夢も定まらず、暗きに目ざめぬ。

戸外はしつとりと露を帶びたる天地、東雲の空かすかに白みて、夏ながら朝の氣肌にさむし。

何となく心も落ち付かず、七時と云ふに東臺の森を見すてぬ。

右は青田、左は雜木林、白煙横に流れてわが乘る汽車は雲路の峽を翔けるに似たり。おゝ遙かの彼方に故郷の山は見え初めぬるよ。

楢林青葉の遠ちに紫の
郷の山見ゆ野をこえ來れば。

若松にて車を降る。

青田に竿を渡せる如き一里の野道、車上に搖られながら、見返る山、見渡す稻田、ふり仰ぐ大空まで、故郷は實に青からぬ隈ぞなき。




青き山、青き小田、
青きが故郷の色ならば――。

假り枕、いく百日、
さび〳〵し吾が京の夢、
目ざめては、寢がへりて、
山廻る故郷偲びしが。
胸おどる、この宵ぞ。
青蚊帳つりし里の夢、
小蛙の聲きゝて、
見らんは青き夢ならむ。
青き山、青き小田、
青きが故郷の色ならば――。

ヽヽヽがら〳〵と引き込む門、心は踊るなりき。

「おゝ早かつたこと。」と出迎へたまふ祖母上、「母上。」「姉さん」。「姉ちやん」と群がる妹、弟。末の妹の母の後ろに羞かむも可笑しや。

只、敏雄のみあらぬを、何となく何足らぬ心地す。樂しく内田家に暮すと聞けど。

夜更くるまで語りて十一時頃床に入る。蛙の聲枕邊より起りて、故郷

の夜はまても靜かなるよ。

（二）

心の末まで延び〳〵と筆につくせぬ氣の寛ろぎ。緣に腰かけて池水のほとりを見れば、花菖蒲今盛りにて、白や紫、絞りのとり〳〵、葡萄の實青く水にうつりて、小流れの筧とぼ〳〵と眞白の玉をそゝぐ。

ふと又敏雄の事思ひ出でゝ、淋しさに小胸はわびつ。彼の菖蒲、あれぞ弟の手植ゑなりしに……。

あやめ咲くや弟は今年家になき。

夕食後、小供等をつれて裏庭の園圃を廻る。柿、梅、林檎などのいと大きくなりたるに驚く。

「姉さん、もう梅が食べられるのよ。」

と妹のいふ。

「まう。道ちやんは靑梅なんか食べるの。」

「えゝ、澤山食べやしないわ。」

「どうだか、當てにならないのね。」

「あら、眞個よ、ほんと。」と眞顏になりて目を見張る罪なさ。

「姉ちやん、今日桃太郎の唱歌習つたんだよ。」

と弟は左よりまつはりて、袖引きつゝ打ち仰ぐ。

「覺えてるの。」

「えゝ。」

「歌つて御覽。」

桃から生れた桃太郎、氣はやさしくて……、飾りなき愛らしの聲を浮べて、夕暗はほのかに迫るなりき。

（三）

靑葉をしごきて東風するまじう荒る。川原田小學校に親しき友を訪れんとて出で立ちぬ。一年振りの堤路、磧の石の白きに鶺鴒遊べり。

校に近き頃、圖らず文子樣に逢ふ。

「おや……」。と意外の面持ち立ち止まり給ふ。若き背の君失ひ給ひしときく、慰めまゐらせんもまて何とや申すべき、云はぬも極り惡く……しばしたゆたひしがあゝわれは遂に得云はざりき。

無情とゝがめ給ふな。戀しき思出を云ひ出でて、涙忍べと云ふのみが慰めの道なるべきか。とぼ〳〵と行き給ふ後ろ姿見送りて、われは又靜かに歩みぬ。

校に至る。いそ〳〵と出迎ふる友の笑顏、うれしとは云ふも愚かよ。久し振りにオルガンの合唱もし、幸多き友の敎への庭も見て、正午近き頃又と約して出でぬ。

鄕の友より湘南の濱に遊ぶと云ひ來す。濱子不動の繪はがきに、

不動さん奥で見て居て苦い顏。

ほゝゝ、こんな樂書があるのよ。ひどいはねえ。

と優しき筆にて。

（四）

何となく頭重くて快からず、目さめても猶床にありて、わが同窓の友の多く斃れし事近くは文子様の背の君の失せ給ひし事、今年夏はれて人の子となりし弟のことなど思ひてうたゝ人の世の常なきを感じつ。

起き出づるも、猶心地わろし。

怖ろしげなる雲群れ合ひて、吹く風なまぐさく、鳴る神の音切りなり。

徒然なるまゝ、つまらぬ歌など物す。

夏にのみ歸る故郷を忘れては、
　百合の常咲く郷と思ひぬ。
夕暮や羽衣草の白き戸に、
　頬杖つきて峰の雲見る。
紫の桐の林に小雨する、
　中を來ますと君待つ日かな。

（五）

雨しよぼ〳〵と降りに降る。出水しぬと隣家に話し聲聞ゆるに、縁に立てば西の方ごうごうと音す。



風邪の氣なほ去られど、今日は心地よし。明日は兄上の歸り給ふ日、堪へ難きまで待たるゝ思よ。

夜更くるまで人々と物語る。

（六）

雲名殘なく晴れぬ。

暑くならぬ中にとて急ぎ内田家に行く。敏雄が快く養父母に睦めるを見て心を休めつ強いて止めらるゝまゝ晝食頂きて、やがて敏雄をつれて出でぬ。

停車場に待つこと少時、兄上着きたまふ。

日暑ければ、風稻田を渡りて吹く。連ぬる俥、大路にきしむ音も生ある心地ぞしぬる。樂しの故園よ。今宵は一入の賑ひなり。

「多摩さん。」と呼びて兄上は微笑み給ふ。

「なあに！。」

「大分廂髮が大きくなつたね。」

「あら……。」流石に顔紅められつゝも、

「兄さんの髭はうすいのね」。

「なに、之でも休み中には物にして見せる」。

妹が突然横合より。

「兄さん。毛生藥でも付けるといゝわ。あの新聞の廣告にある……」。叔母上も母上も打ち笑み給ふ。皆腹をかゝへぬ。

（七）

得家より川魚を貰ひたればとて、兄上は鐵に串をつくり給ふ。

「多摩さん、お前どちらが好き。鮎が宜いか、鯎がいゝか。」

「私、生魚は嫌ひです。」

「おや、今でもさうかい。二十世紀の……えゝと何だつけ、未來の眞妻賢母か、矢張り話せないね。」

「魚食へなくとも不自由は致しません。」

「不自由の話ぢやないよ、只れ——ほら宜い句がするだらう。この味を知らなくちや話せないと云ふのさ。」

「話せなきや話さないでも宜いわ。」

「まあさう怒らずに話してくれ。今こんな句が出來た。宜いか……、

寝忍草に串魚燒くや北の緣。

もう一つ、

魚燒いて浩然の氣を養ひぬ。

どうだ、浩然の氣には閉口つたらう、はつはゝ。」

「あら。兄さん。魚が焦げるわ。」

「おゝ、これは〳〵。」

朝よりぢり〳〵と煎る如き日、午後となりては臥れても眠られず、汗ぶつ〳〵と湧く、苦しい〳〵とのみにて何事も手に付かず。去年の歌反古など取り出し見るに、聖かしきことのみ多し。一まるきに束れて、「お祖母さん、これお鼻がみにでも。」とますかにあはれなり。

（八）

暑くならぬうちと思ひしが、あれのこれのと云ふに早や九時。今日は名古屋へ轉任の途次、お伯父樣の御歸鄕遊ばす日なればとて、若松のお叔母樣がり行く。

兩側は黑きばかり、濃緑りの稻田のつゞき、吹く風も夕べならばいかに涼しからんを、汗拭きあへぬ苦しの歩みや。

幾年振りか、伯父樣のお話なつかしき車のみなるよ。父上よりのお言傳てなりとて、わが行く先きのこと、敏雄養子のこと——しみじみと親の情けの有り難さに、物も云はで涙さしぐまれつ。

「敏雄だつてあれまでに育て、なんでくれたい事があらう。これも實に切ない事情からなので、敏雄も無情な親に捨てられたと思つたら、却つて奮發して勉强することにもならうから……と云つて、涙を拭いて居られました。

聞きて皆泣きぬ。涙落さじと歯を食ひしばりて戸外を見やれば、緣に腰かけ居たる敏雄——これも伯父樣のお迎へにと來しなり。——の、つと地に下り立ち、て後ろ向きに小さき石を弄ぶ。

何も知らぬ京子（伯父樣の子、今年七つ）の。

「敏ちやん。來て御覽なさい。變なものが居てよ。」

「む……なあに——。」と聲のみわざとらしう。われは遂に堪へずなり

ぬ。

　山小松、松の風だに當てなくに、
　　涙忍べと誰が教へけむ。

北庭の虞美人草、力なくゝれなゐの蕾を垂れたり。

（九）

堪へ難きばかり蒸し暑し。

赤黒き雲むら／＼と立つよと見るまに、やがて颯と下ろしたる風一しきり、怖ろしき雷鳴と共に夕立ちは来れり。

兄上の単衣を縫ひながら、人のまれして俳句など考ふるも興ありや。

　昼顔のめぐりて小さき乳母か家。
　欄干や雨足に散る雲の峰
　百合の香の一間に満つる書院かな。

今夜、兄上より西洋の詩なりと云ふ「エノツタ、アーデン」の話をきく人の情けの涙組まるゝまで美しき話なり。

（十）

絲をつれて裏山に百合の根を掘りに行く。皓々しとまで見ゆる白き大輪の、こゝそこに数多かれど根深きに、掘りわづらひて、多くに花のみ折る。はや両手に余るほどになりたれば帰りて床に活くるに、清き香はあたりを拂ふばかりなり。

　あゝわが籠り居の清き間よと思ひて、又例の歌の趣にふける。

　姫百合のむれ咲く岸や笹舟に、

　古雛果せて島に流しぬ。

郵便の聲、はいと答へて出づれば、なつかしや美登里様よりなり。数月前、某の學士に嫁ぎて人に羨まれし身の上の、あはれ悲しき聲のあとなりけり。友よ、富貴栄達を羨みたまふ勿れ、語るに人なきこの胸の悶え、妾は籠の鳥の涙の中に泣れるなと、あはれ昔の喜びは夢なりし友か身の上よ。

　あはれめよ玉の輿ぞと歌はれて、
　　胸に金鎖の捕はれ人な。

今宵、月殊に清し。遙かに笛の音きこゆ。悲しきことのみ思はれて、力なく縁の柱に倚りぬ。

月は只静かに上れり。

# 閑窓記

## ――武蔵野日記――

藤田いさを

（一）

春深くなりぬ。花も散りそめむとする今日、はからずも友の訃をきゝぬ。小學を出でゝより別れにし友な

り。今頃は美しき乙女となりて、花香る前途の夢に樂しき思ひをたどりつゝあるらむと忘られぬ人の誰れ彼れと共に思ひ浮べらるゝこともありしを、この春のくれ遂にはかなくなりにしとか。人の臨終に侍るは云はでもがな。見知らぬ人の死を傳へきくだに淋しきものを、ましてかう相しれる友どちの死よ。我れと同じ齡と云ふになほ、その悲しき運命の我れにも何となく係はれる樣にも思はれて、旅の身の、武藏廣野の伏屋にひとり其の幸うすき友の記憶を新らしく繰返しては、夕雲のたゝずまひに、限りなき心細さの影を見出でゝおのづから胸痛きを覺ゆ。あゝ、人の世に死あり、嚴として動かず、花や鳥や。何の相ぞや。清き心や美しき姿や、忽として去り永久に歸らず。人逝きて春また徂かんとす。春の去るや淋し、人のゆくや悲し、花の乙女にありてこそはなほかなしけれ。

（二）

美しき春の夢、うつゝなの身にはかなく消えて、さむれば曉の戸に落花のはら／＼といたましき姿のみぞ殘れる。あゝ、春は逝きぬと思ふ時、彩霞、花鳥の思ひ出のゆかしからぬにしもあらねど、そこはかとなきもの淋しさに誰か涙さしぐまざらん。若みどりの梢いさましく、晴れたる空のすが／＼しきを望みてもなほ、春を送りし心は、なつかしき人に別れし樣に、はかなき方に果てもなくあこがるゝかな。

まして夕ぐれ雨など降らば、我が若き血潮の一滴づゝ冷き大地に滴りおつるが如く、なやめる心も散る花かや、胸ひゆる心地もぞする。此の花を送りては、我が生の春の、一歩其の凋落の秋に近づきぬと知らば、止めんとして止まらぬ涙の今更の樣に流るゝなり。八ツ口の紅ふさはぬ女、戀ざめ心のいたましさは何にかたとへむ。かの美しかりし春景色のまぼろしの樣に心にのこる如く、追懷の帷帳に、青春歡樂の影法師をうつして、おぼろげに來し方をしのぶ、寂寞の世、いつか我が身にもめぐり來べきか。

今日しも、此の野住ひに春を送りて我が心そゞろに痛む。さびしき日や、待ち佗ぶる友も來ず、枝折戸押

して尋ね入る人もなし。此の窓從らに若葉のそよぎにまかして、折々にきこゆる蛙の聲、晩春別離の歌にふさへる其の節に、また亡き友のことも立ち返りて、あゝ果てもなき此の涙よ。

（三）

心いたましき春のくれ、かすかなる夕月の影さへそひて、うす絹の如き光につゝまれし野や杜や、靜寂おごそかに清みて、風だに動かず。

窓を開きて遠く望みぬ。

月光の果は縹緲として、空の色と地の色と溶け入りたるあたり、萬象灰色にかすみ、淡として無からんとす。燈火の二つ三つうつれるは若葉を洩るゝ、伏屋が窓の火影ならむ。其の色、深碧の淵に浮べる花の如く、動かず、瞬たかず。重々しき夜氣の中に靜かに輝けり。



（四）

此の頃、朝つゆしげく空よく晴れ渡る。

青葉ごしに打ち見やる野は萠黃にけぶり、空はみどりにすみたり。我れを取りかこみて廣き野は初夏の氣を吐きつゝ、清涼なる浴後の裝を整へたり。靜かなる日や、こゝに我が孤影ありて、ひとり靜思を樂しむ、清興求めざるに來り、天趣自から湧きて、春を送りし憂心地も、やゝ慰まるゝに似たり。

（五）

今朝、町に出づる花賣りの荷の中に、紫色こき花菖蒲の交るを見たり。夏の盛いよ〳〵深し。

朝顔の苗を求めて、心こめつゝ植付をなす。今よりまた秋の初め迄、我が淋しき庭を飾るべきは此の花なり。初花と日記に書く日のさて待たるゝかな。

（六）

家を出でゝ野を歩まばまた、盡きざる安慰胸にみつ。麥青き畔道をすぎ、若みどりの梢きら〳〵しき杜に入り、夏草の花も交れる下草ふみてさまよへば、神空にいまして世はすべて事もなしてふ信仰あつき詩人の句も思ひ出されて、生存の意味一しほふかきを覺ゆるなり。或る時は木下蔭の細徑をたどり、或る時は躑躅咲く賤が家の背戸をよぎり、或る時は、片岡に登りて、果てもなくあくがれ暮し、西の空夕榮の雲うつくしき頃、またとぼ〳〵と家路につかば、其の昔、故郷の野にあそび疲れて、戸に立ちて迎ふる母にすがりし面影も浮びて、流離の愁また新なり。

さもあらばあれ、此の頃の野すまひぞうれしき。月清く星高き空と、蒼々茫々の大地とは、自ら寂寞を貪れる夜にして、我れ詩歌の秘を思ひ、雲ゆき風動き、若葉の勝どき勇ましき日の午にして我れは人生の活動を思ふ。巷にあるものも幸なるべし。野にあるものは更に幸なるべし。來れ、朝つゆの野に、來れ、夕日が岡に、人の世の牢はそこに美しくひそめり。

△少年訓　木村小舟著

兒童を教訓するに理窟を以てするか趣味を以てするかといへば趣味を以てするの効能多きは今更らにいふまでもなし、小舟君は夙に趣味ある筆を以て多年少年諸君の伴侶となりたる人、此書は專ら趣味の閑書を旨として少年に讀書の智識を與へたるものなり、附録の讀書通信は現下必讀の章也。定價二十五錢　博文館發行

△萬有可解人事悟可

妙な表題なれども、決して唐突な書にあらず、今日の青年男女一部の弱點を呵破したる寧ろ頗る見るべし。但し、節不熟にして要領不得を免かれざるは惜むべし。但し本書の序に妙齢の處女が宇宙人生の大問題に對し一家の見地を以て解決を試みたるものなり云々とあるは少々厭味なり。價三十錢　寶文館



# 女代診（十一）

糸左近

## 肺結核の七療法

余は二三年前にも本誌及び中學世界で之を說いたことあれど、當時のは原因　病狀　等を詳しく述べ、療法　としては單簡であつたのみならず、世の進步と共に大に讀者諸姉の注意を惹起さねばならぬ節もあるから、又改めて記すことにする。

肺結核を治療する法は大凡七通り有つて、此の七通りを同時に實行すれば、末期に進んで居らぬ患者ならば大抵治癒に赴き、他の疾病に襲はれぬ以上は通常の職務を取つて人間普通の壽命を全うすることを得るものだ、然らば其の七通りとは如何、曰く（一）精神療法（二）氣候療法（三）日光療法（四）空氣療法（五）榮養療法（六）沐浴療法（七）藥物療法である、而して最後の藥物療法は本病を治す上に於て最も信賴するに足らず、唯諸療法を補助するに過ぎぬものである、然るに世人は之を反對に考へ、唯々藥物のみに縋り附き、他を補助的にする所より遂に取返しの出來ぬ始末になるのだ、返す〴〵も嘆はしき次第だ、されば今回改めて詳しく說明せんとするのである。

一精神療法――とは精神を快活に有つやうに工夫するのである。抑々精神の快活は何事にも必要で殊更爰に言ふ程の價値も無いやうだが、其實仲々然うではない、何となれば精神の鬱憂が原因となつて肺結核を惹起すことのあるものなるに、其の結核者が鬱憂するに至つては益々病勢を强め、他の療法を何程行ふても何等の効が無いからである。故に氣の合へる友垣と悠々談話するとか、山水に遊ぶとか、又は種々なる遊戲をするとかして鬱憂を慰めねばならぬ。古來肺病は不治の症となつてゐた爲に、醫者が肺病と診斷すれば恰も死刑を宣告されたかの如くに鬱憂煩悶する者も有るが、斯る筈の病で無いから暢氣に攝生を加へねばなら

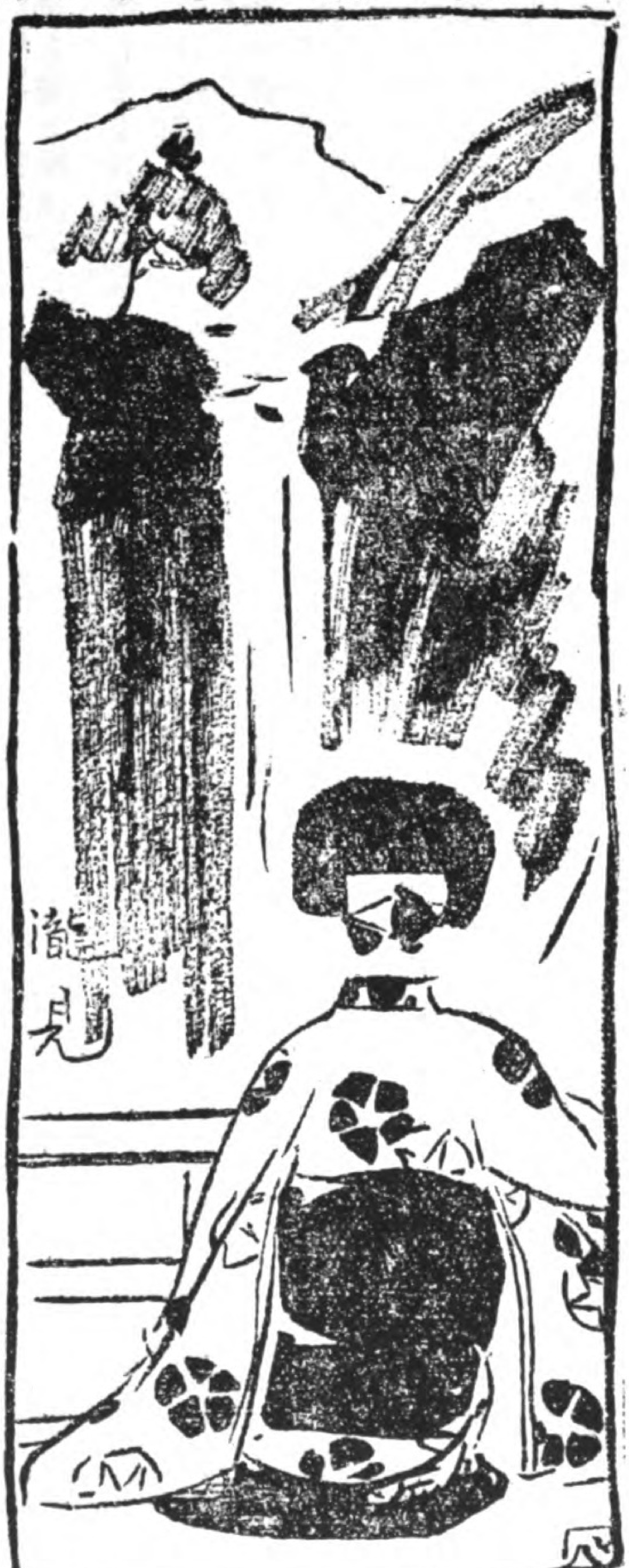
ぬ、之れ何よりの療法である。

(二)氣候療法||とは善い氣候の土地へ移轉するのだ。肺結核のみならず、凡ての呼吸氣病には寒冷なる氣候が最も有毒であるから温暖で而も變化の無い氣候の土地を撰ぶことが肝要だ、我國で例を取れば伊豆半島房總半島猶一層理想通りを言へば伊豆七島薩摩の大島等が之れに適してゐる、何故と云ふに、半島や孤島は海水が氣候を調和し、暑い時には比較的涼しくし寒い時には比較的暖かくする、況んや右の諸島は緯度が南方に進んでゐるから冬とても呼吸器を刺戟する憂がないからである。併し移轉するに就いては二つの要件がある、一は病者一人でなく必ず慰安を與ふる所の家族なり朋友なりを伴ふことだ、郷里を離れて異郷の旅宿に居ると意志強き健康者でも來方行末を考へるなど萬感交々至るものなるに、鬱憂し易き結核者が一人で行けば精神の慰安は迚も得られぬから氣候の良いにも拘らず病を重くする傾きがある。二は行くに當て正直なる醫師を顧問とせねばならぬ、行つても差支なからうか行くに就ては如何なる藥品又は物品を携帯せねばならぬか等萬事指圖を受けぬと飛んでもない過を招くことがある、熱發の甚しい時に旅行すると、途中で非常なる困苦に陷るかも知れぬ、又何の考へもなく行くと、行つてから藥を服まうにも醫者は居らず藥屋はなし、泣いても追付かぬ悔がある、然れば富貴な人なら醫師一人を聘して行けば何よりの好都合である、然るに正直ならぬ醫師を顧問にすると、心の中では轉地した方が宜いと思ふても、此患者を離しては長い月日の療治代即ち弗箱を捨ることになる、乃でお止し遊ばせ、氣候療法よりも他に良藥が御座る云々と云ふかも知れぬ、注意々々。

(三)日光療法||とは可成日光に觸るゝのである、日光に觸るゝとは傘もさゝずに赫々たる太陽に頭から晒せと云ふ意味では無い、即ち夏の日中などは勿論樹蔭に徜徉してる位が宜いのであるが、爰に云ふ日光療法は可成家の中に籠らないで濱邊でも散歩してるのが宜いと申すのである、西洋に行くと屋根も四方の戸障

子も硝子にして寒い時は其の中に日光浴をなさしむる療法をするさうだ、併し暖地へ移轉すれば斯る室を設くる必要も無からう。

(四)空氣療法――とは宜き空氣即ち新鮮で溫かで乾燥せぬ鹽味のあるのを呼吸するのである。之には右の三療法を實行すれば從つて空氣療法にもなるのだ、氣候の宜き土地即ち南方の半島とか孤島とかに行つて可成外出するやうにして居れば空氣は新鮮で、而も阿巽に富み、且つ暖かで水蒸氣を含み而も鹽味を帶びてるからである。米國へ行くと郊外に天幕生活を命じ十分に大氣を吸はしむるさうだが、我國の家では其の構造が自然と天幕的であるから、故々斯る住居をする必要も無い、併し空氣療法が宜いとて夜中戶を開いて眠るに至つては寒冒の基となるから誤解してはならぬ。近時此の目的を以て東京の人々は逗子や鎌倉へ轉地すること流行すれども、左程の緯度も違はぬから何の益にもならぬのみならず却つて健康者が本病に傳染りに行くやうな結果を來すことがある。



(五)榮養療法――とは右四ヶ條を實行して尙滋養食

物を常の人よりも消化を害せぬ限りは多く食し身體の榮養を盛んにするのである。合衆國のノルリス氏曰く殺菌の効ある藥物を服み、其れが爲に胃腸を害するやうでは身體は次第に痩せ、遂に結核の爲に打死するやうなものだ、其よりも身體の榮養を盛にして結核に對抗するが最も宜き療法である云々と、實に其通りで余の經驗に徴しても殺菌防腐の藥品よりも榮養療法の勝れることだけは確かである。結核者が盗汗を來したり、心臟の鼓動が高まり易いので皆榮養の不良が源であるから、十分に滋養物を取るやうにせねばならぬ。然らば滋養物とは如何と尋ぬるに日本人なら日本人に最も消化吸收し易い所の食物中で而も病人に適するものでなくてはならぬ。之には米、淡泊なる魚類例へば鯛、鱚、鰈、比目魚、鰹、鯵、前魚、鮟鱇などの如き物、痩せたる牛の肉、豆腐、新鮮で嫩弱なる野菜物、自然生、百合、蓮根等の如き物である、而して是等の食物を色々に旨しく調理して舌皷を鳴すやうに工夫せねばならぬ、又三度の食事の時間を規則正しくし、六時間を隔つやうにするが肝要である、何となれば食物が悉く胃中を去るは五時間なれば茲に一時間の休憩を胃に與へ、待ち設けて食事を取り、十分に胃液を分泌せしむる必要があるからである。又六時間中には如何に徒然に堪へぬとも決して間食してはならぬ、健康者ならば午前十時又は午後の三時頃に牛乳位を飲んでも可いけれど病者は僅かの間食でも胃の働きを疲らしむるから從つて榮養を盛んにせぬやうになる、大に愼まねばならぬ。

(六)沐浴療法―― とは沐浴をして身體を清潔にし諸機能を盛んにするのであるが、其の仕方は病勢の如何に依て大に違ふ少しでも熱發してゐる場合には温湯に浸したる手拭を以て身體を拭く位にしておかねばならぬし、大に熱發せる患者には之をも爲すことが出來ぬ、所が結核の初期ならば其の熱發は僅かでもあるし、又の藥品に依て除くことを得るものなれば毎夕若くは一日二回即ち午後の五時頃と臨臥とに攝氏三十九度位の温浴を取らしむるが宜い、この理由は患者は健康人

の如く運動が出來ぬのに健康人よりも滋養の食物を多く取らしむるを以て、之を消化せしむる方法が無いから、玆に温浴を二回も行へば血液の循行を盛んにして大に運動の代理となる抑々入浴十五分時は大運動を一時間爲したるに相當するものであるから無熱の結核者には是非之を實行せしめたいものである、余は嘗て之を或る患者に試みたるに、何は兎もあれ食慾の進むのと熟眠の出來る二つは確かに功が有つた、併し入湯後は身體を温包して、寒冒に罹らぬやう大に注意せねばならぬ。



(七)、薬物療法――とは言ふまでもなく薬物を以て療治するのであるが、之を余は又直接療法、間接療法對症療法の三つに別けてゐる、直接療法とは結麗阿曽篤やグヮヤコール等の如き殺菌劑を投ずるのを云ひ間接療法とは健胃強壯劑を與へて營養を補ひ間接に結核菌を枯らさうとするを稱し、對症療法とは咳嗽甚しければ鎭咳劑を與へ、熱發有れば解熱藥を服ましむる如きを云ふ。乃で余は三者を何ういふ風に應用するかと云ふに、直接療法は殆んど之を用ゐないで、間接療法を主と

し、對症療法は熱發の折に解熱劑を投じ劇甚なる諸症に夫々の諸藥を用ゐる外は可成服ましめぬ流義を取つてゐる。次に間接療法として用ゐる藥は機那皮、含糖百弗聖パンクレアチン、葡萄酒及びタカヂアスターゼ等の如き健胃強壯劑を用ゐるのである。對症療法は勿論臨機應變であるから何々を用ゐると前以て述べておく譯には行かぬが。唯解熱劑としては必ず安知歇貌林を一回量〇、三乃至〇、四を與ふることに余は定めてゐる、解熱劑は一々擧げて數へられぬ程澤山あるけれど結核者の解熱劑には該藥を以て最も有効なるものとコードウエル氏も賞用し、余も亦賞用す。尚處方を左に記して先輩醫師の訂正を乞ひ、後進醫師の參考に供へよう。

(1)機那皮煎(五、〇)一〇〇、〇　稀鹽酸一、〇　單舍八、〇
　括弧内の分量を括弧外の溫湯で十五分時間煎するのである。
　右一日三回食前分服

(2)含糖百弗聖三、〇　タカヂアスターゼ〇、五　乳糖一、五
　右分三包一日三回食後一包宛

(3)赤葡萄酒一五、〇　水五〇、〇
　右晩餐時に服用

(4)安知歇貌林〇、七　吐根末〇、〇三　白糖二、〇
　右分二包一日二回午後三時頃と臨臥とに一包宛

(5)重曹一、〇　食鹽〇、五　水三〇、〇
　右蒸氣吸入一回料

說明――(1)は一般の強壯劑で(2)は蛋白澱粉を消化する所の健胃劑(3)は興奮劑で精神を快活ならしむる爲だが舶來の上等で無いと一方ならぬ大害がある。(4)は熱發に用ふるので熱の有る間は縦ひ皮疹等の小なる中毒があつても連服して差支無いと信ず。又嘔氣を催したり、食慾の不進を來す場合あらば、吐根末を除くべし。(5)は咳嗽の甚しい時に一日に幾度でも行ふが可い。

終りに臨んで尚繰返したきは藥用療法のみを以て本病を治さうといふことは到底駄目なるのみならず藥液を過信する人は他の六療法を輕視するために遂に不歸の客となる事がある。

（二）

# 季節衛生

**避暑旅行は不衛生なり**――今月中旬頃より貴顯縉紳の方々は言ふに及ばず、血氣盛んの男女學生までが貧乏を質においてまでも中禪寺とか箱根とかへ避暑旅行と出懸ねばならぬかの如く心得てる輩も澤山あるが之は甚だ間違つた仕方で、衛生上の爲め大に宜しからぬことだ、箱根或は中禪寺に生れた者が東京にでも遊學してゐて、夏季休業になつたから故郷に歸省して避暑するといふなら聞ゆるけれど、我が故郷を去つて我が故郷よりも氣温の下つた所へ行かうといふは沙汰の限りである、自然は避暑旅行せねばならぬやうな不都合なる身體を作るものでは無くて印度に生るゝ者は印度が適するやうに、寒帶に生るゝ者は寒帶に適するやうに構造してあるのである、然るに自然を無視して其地を去り、流るべき汗を流さずに贅澤三昧をしてゐると、身體は益々薄弱になつて心は愈々惰弱になるのである。斯う申すと冬になれば暖爐等の裝置をなして自然の寒さを避くると同じく、夏になれば亦之を避ける方法として轉地するは、これ亦自然の道ならずやと言はるゝかも知らねどそれは亦別に方法がある請ふ之を言はう。



**銷夏の方法**――夏は必ず午前四時に起き出でゝ、露帶べる草木を眺めながら、冷風浴冷水摩擦も終つたら、令嬢なら令嬢のやうに、奥様なら奥様のやうに、學課の復習をなさるなり、或は裁縫をなさるなり、午前の中は其れ相當の坐り仕事をしておいて、愈々日中即ち午飯頃から二時過までの燒くが如き蒸すが如き炎熱の頃になつたら、襷掛になつて、家の内外を、或は掃き、或は拭くなど、ドン〱運動し、ドン〱汗を流し、其の揚句に「ザンブリ熱い位の風呂に入湯し、上つてから」約三十分時間は北窓の下に、浴衣着ながら涼むのです、其の心持の快いことは何とも申されませぬ、夏の暑いは何處の國にあるかと思はれる位です此の仕方は一寸聞くと亂暴なやうなれど、冬の寒い時に冷水摩擦をすれば暖かに感ずると同じく、夏の日中に汗を流して而も熱い湯に入るのだから、其の反射として涼しさを感じ、夏の何者たるを忘るゝは自然の道で、之が濟んだら御友達と遊ばるゝなり、琴を彈せらるゝなり、夫れは御勝手で、我輩の關する所で無い、何うか余の敬愛する讀者諸姉よ、斯の如き銷夏法を講じてあれば、他日寒熱共に劇しき大陸の歐米へ遊學せられても、或は旅行せられても、必ず堪へらるゝ身體になるものなれば、内地の避暑旅行などは夢なし玉ひそ。

**冷水を飲むの可否**――夏は水を飲むなと何れの醫士も言ふけれど、自然の道に從ふとすれば飲みたき水を飲まぬは甚だ不衞生では無いかとの疑問が起らうと思ふ、成程炎熱灼くが如き時は冷涼たる水を飲みたきは自然の道である、然れど夏は諸有機體の發生盛んにして人體に有害なる黴菌等の水中に發育するものなれば、之を生の儘で飲むと恐るべき疾病を醸すから、止むを得ず禁ずるのである、故に此の恐るべき事柄を避ける手段を講じてさへ飲めば、毫も差支無きのみならず、却て飲む方が可いのだ、然らば如何なる手段あるかと云ふに、大きな德利に熱湯を盛り、護謨のコロツプを以て密栓し、之に繩を附けて深き井の中に浸しおくこと約二時間經つてから、之を上げて飲めば殆ん

ど氷水程の冷さを感じ、老人小兒何人にも害とならぬものである。況んや之に檸檬油を一滴落し、單舍を少し加へて飲めば、えも言へぬ爽快なる味あるに於てをやだ。

飯の腐敗を何うして防ぐ

——飯も三度〳〵焚いて食べれば如何なる盛夏も何の心配も無いことなれど、通常の家では甚だ手數がかゝるから朝一度焚いて之を一日中餒えぬやうにせねばなりますまい、然うするには布を敷きたる笊櫃に盛り笊蓋をなし、之を北窓の風通り宜き所に吊しおくのである、倘明朝までもと思はるゝなら、最初に酢を少し打つておくのだ乾燥に冷却而も防腐の作用ある酢が交つてるから、決して餒えるなどの心配は無い。




衣服の注意

——夏は衣服を度々洗濯せねばならぬことは言ふまでもないし、又諸姉も實行してゐらるゝから今更繰返す可き必要も無れど、糊の仕方を注意なさらぬ方もあれば之に就いて一寸申しておきませう、抑々糊は衣服を硬くし身體に衣服の密着するを防ぎ氣持の宜いものではあれど、之を餘り濃く塗けると、それが爲に衣服の氣孔を塞ぎ、體温の發散を妨げ涼氣の入るを遮り、加ふるに汗が附くと、其糊は腐敗して一方ならぬ不衛生を醸すものであるから、最初に糊の中へ僅少の昇汞を入れ、之を極めて薄く塗

るが宜い、併し下に網シャツを着るとすれば糊は一切無用の物である。

**海水浴は如何**＝海岸に居らるゝ方なら一日に二回乃至三回の游泳は大に望ましけれど、他郷の方が態態遠地の海岸に寄留してまでも是非行らねばならぬ的の價値あるものでは無い、然るに近來は海水浴が非常に流行して、夏になると逗子鎌倉あたりの宿屋は一軒に二百數十名の浴客が充滿し、其の不潔其不深切なることは驚くに堪へたるものだ、斯る所へ行つて不規律なる生活をなして居らるゝ島田丸髷連もあるが、衛生所か、唯自墮落の練習する計りである、然れば若し出張してまで海水浴をせんとならば親戚或は知己の家に居て能々海水浴に慣れたる人の先達を乞ひ、眞面目に行られたいものだ、先年の夏余は所用あつて、逗子の○○亭に一夜宿つたが、其の雜沓は言ふまでも無く、夜具食器等の不潔は言語に堪へたるもので、海水浴場とても網を張つてあるでも無く、助舟が出てるでも無いから、游泳法を知らぬ者は危險千萬で、唯膝以下を濡すに止るのだ、斯る處へ行つて貴重な金錢を費してゐるとは返す〴〵も愚の至りである。

**夜中は腹掛をせよ**＝夏とても雨戸を明けて寢ることは衛生上宜しく無いのみならず、泥棒の爲にも甚だ不要心であるから之を閉めて愈々蚊帳の中に入れば、サア堪らぬ、今までソヨ〳〵涼風に吹かれてゐた揚句であるから、蒸さるゝやうな氣持がして、漸く團扇の力を藉りながら眠りに就けば、衛生の注意も何のその、七顚八倒夜具は跳ね飛ばし、枕は門番となるは勢の免れぬ所、事茲に至れば所謂寢冷をして寒胃に罹る次第である、故に最も大切なる胸腹即ち睡眠中と雖も其の作用を休めぬ呼吸器消化器を十分保護するやう、フランネルの腹掛を以て右兩部を十分溫包しておかねばならぬのである。

尙申す可き事は澤山あれど、餘り長くなりますから之にて筆を止めます。

「衛生顧問」を書かねばならぬのですけれど、書くに當り誤つて右手を怪我し、執筆を妨げたれば、來月に纏めて二度分一度に答へませう。

# 夏季に於ける眼の衛生

ドクトル　宇良田唯子

夏になると一體に病人が多く出來ますが、眼病患者の方は、春から初夏に掛けての時分と、秋期とが一番多うございまして、極暑の候は之につぎ、冬になると最も尠い樣です。春から初夏に掛けて能くある眼病は、俗に流行眼と申して、眼脂が頻りに出ものです、また俗に逆上眼と申す眼病も、猶且春から初夏の候に起り、之れも充血性のもので、流行眼と共に一種の血膜炎です、血膜炎と言へばトラホームも亦夫れです。逆上眼は、何方も御承知の通り、眼が充血して赤くなるもので、即ち脳充血の爲めですが、春に顯はれた眼病も、暑中には隱れて居ると謂つて可いので、約り素人目に見分ける事が出來ず、第一に患者自身も知らないで居る場合が多いのであります。ですから人々の注意を要するは病氣の隱れて居る夏や冬の方が、春秋よりも事は大切であらうと思ひます。

夏になると誰しも汗をかく處から、ツイ不潔な洗面器をも厭はないで、顏を洗ふと云ふ樣な場合が能くありますし、また他人の手拭や手巾などを借りて、顏を拭くと云ふ樣な事が往々ありますが、恁う云ふ事は、餘程注意して居ないと甚だ危險で、其れが爲めに恐るべき眼病の病毒に感染すると云例は幾らもあります。近來は世間の人が大分トラホームの恐る可き事を感じて來ましたやうで、學校などでは隨分注意して居る樣で、誠は結構な事ですが、獨り學校に於て注意するのみで無く、一般の家庭に於ても十分に注意して、病毒に感染せぬ樣にしなければなりません。

田舍などに參りて見ますと、何處でもと云ふ譯ではありませんが、場所に依ると、十人の中七八人迄はトラホーム患者であると云ふ樣な處があります。

此病氣は眼病中でも甚だ下等な病氣でありまして、文明國には餘りない樣です、現に歐羅巴でも、露西亞などにはトラホーム患者が多い樣に聞いて居りますが、

獨逸などには極めて尠いやうに思はれます。

# 米國女優の化粧法

ＫＴ生

婦人の化粧は例へば掛軸の表装の樣なもので、同じ繪畫でも經師屋の上手下手によつて非常に美醜の相違がある。元來化粧をすれば何人も美しくならねばならぬ筈であるが、それが拙いと素顔よりも却て醜くなる。之に就て歐米の婦人はいろ〳〵と研究をしてゐるが我邦の女子は唯だ白粉を塗つて紅をさしたと云ふ位なもので、大きな口許を小くしたり低い鼻を高く見せたり額のお凸を隱したりする事に就ては未だ苦心をして居ぬやうである。米國有名な女優が化粧法についてこういふ事をいつてゐる。

最初顏をよく洗つて皮膚の脂肪分を去つた後に化粧用のクリームを兩方の掌に溶いて顏一面に擦り込み、稍や濕氣の來た處で乾いたタオルで之を拭き去り、次にコスメチックの如く硬性クリームの煉おしろいで顏を塗つて其次に煉紅を兩頰へ一面に薄すりと塗擦した後今度は淡紅色の粉おしろいを絹すぼんじで顏全體に擦り込む。恁すると日本の白粉のやうに剝げる虞がない。其が濟むと更に眼瞼、睫毛、眉毛等を化粧する靑色の繪具を以て眼緣の上下を彩り眼尻を長く引くと眼が大きく見えて加之に頗る愛嬌を添えて來る。サテ其次に黑のコスメチックを火に溫めて稍や溶解した處を上下の睫毛と兩方の眉毛に塗ると、白粉に埋つた眉毛が明瞭と黑くなる、そうして後に唇紅を點すのであるが、それも日本婦人のやうに下唇へばかりでなく唇の上下共に中央へ少々塗けるので、恁すると口元が誠に可愛らしく見える。それから今度は鼻の孔が黑く見えては醜いから之へ紅を點し同時に眼元へも薄く塗つて最後に襟白粉を刷く順序であるが、之も矢張りクリームで下地を拵つて粉おしろいを塗るのである、恁云ふ工合に化粧をすれば大抵の婦人は美しくなつて年齡の三つや四つは若く見える事は請合です、そこへ前鬘と後

鬘とを附けて帽子を戴けば全で見違る程の美人になるのであると、併し之は舞臺上の粧で普通の婦人は恁うまでせずとも兎に角以上の化粧法を標準としてやれば乾度成績が宜からうと思ふ、總じて日本婦人で化粧は餘りに人爲的で、白粉を塗ると云へば白壁の如く、口紅はと云へば紫色に光るまで濃くして殆んど自然の肉色を沒して了つて居る、恁那不自然な化粧法は何處の國でも見受けぬ處であるから追々改良したいものである。又白粉を塗るには水の代りにクリームを用ゐた方が第一塗着が可いのみならず、剝げる憂がなく隨つて襟の汚れる樣な事がないのである。

### ●美容の障害物

世間で最も旺盛期の短いものは美人と文士と相撲取だと云つたものであるが、他はイザ知らず、美人の盛期の短いのは、一つは化粧法の不充分なのと今一つは生理的の作用（即ち姙娠の如き）から容姿が衰へ易いのである、又白粉中毒といふ人爲的の疾病によつて容貌を早衰せしめて居るやうである。白粉中毒急性に發するのではなくヂリ〱浸みて來るのだから毒と知り乍らも用ゐて居るが若し白粉の品質さへ擇んで鉛毒を避ける樣にしたならば、慥に十年位は美貌を維持する事が出來るのである。尤も今のところ日本では全く鉛分が混らぬ白粉はないのと素人は品質の鑑別がつかぬからで若し本統に無害のものを望むならば舶來おしろいの上等品を擇ぶか、さもなくば藥劑師に試驗して貰つた上で用ゐたが宜しい。そこで白粉中毒とは一體如何な兆候かと申せば、俳優や藝娼妓の素顏を見れば直ぐ知れるが、第一眼に附くのは襟足と眼の緣の黛づんで居るので、それが甚しくなると顏面の皮膚が凡て蒼黑色に變じて全身の要部々々の機能が弛み、恰も攣麻窒斯患者の酷くなつたやうな狀態である。

それと今一つ美人の大敵とも云ふ可き容貌の破壞者は、我々が日常飲食物に用ゆる器具、即ち赤銅、唐銅、眞鍮等の鍋釜又は藥罐に含まるゝ鑛物性の中毒である。殊に銅の毒は怖ろしいもので、身體の最要部を浸潤す

るのみならず皮膚の光澤を奪つて灰黑色に變せしめる故に美容を欲する人は大に注意せねばならぬ。

## ●爪の清潔法

實用上から云へば爪は物を搔いたり摘んだりするばかりでなく、指を保護する爲に具へられてある、俗に爪の垢など〻云つて何でもないもの〻樣に云つてゐるが、其實最も不潔なものに觸れ易いのが爪であるから食物などを調理する婦人にあつては特更爪の注意が肝腎である。又人に振返らる〻程の美人でも近接して見ると、爪が伸過ぎて居たり垢が堆つて居ては平生の無精が思やられてとんと戀のさめるやうなものである。のみならずそんな婦人は必ず睡眠中爪の間に不潔物の附着した事も氣が附かずに其儘食事の仕度をしバチルスが食物に混入して病を釀さぬとも限らぬ。又頑癬や疥癬の如き皮膚病に罹つて居る人が、爪の手入を怠つて居ると自然病毒を他に傳播する、恁うなると爪は漸次に光澤を失つて地質が粗くなり凹凸を生じて朽葉のやうに落ちて了ふのである。其他劇しい熱病に罹ると一時は爪が縱横に線を引いて落窪むけれど之は營養の回復するに隨つて原の形になるが、老人の衰弱した場合には此凹凸が一層目に立つて徐々扁平になつて了ふだから爪の荒れて居る人は大抵健康を損ねてゐるものと見てよいのだから、衞生と美容と伴ふて注意を怠つてはならぬ。然らば之が清潔法は如何先づ爪を洗滌するには爪ブラシに石鹼を塗けて指と爪の間をよく掃除し、次に外面を摩擦すれば附着した汚物は奇麗に去れる、斯うして毎日手入を怠らなければ可成醜い爪でも滑かに艶が出るのみか、爪下の血液を透して美しい淡紅色を見るやうになる。又爪際の皮膚がサヽクレを起したり輪廓が穢なかつたりする人は皮膚の荒れて居る證據だから、此際には洗滌後クリームを塗布するが宜い、而して爪の剪方は餘り深く切ると爪先の裂創を起す虞があるから、心持殘す位にして三四日毎に摘むやうにし凡て注意さへ行屆いて居れば態々爪紅などを點さずとも爪は何時でも美麗になつて居るのである。

# 母親の乳とその飲せ方

母親の乳がその飲せ方によつて滋養の厚薄を生ずるといふ事は世間の母親のあまり考へ及ばぬところですが今この事について加藤醫學博士は左の如く語られました。

一體乳汁の成分は乳漿と乳球の二つで乳漿と云ふのは極く薄い乳です乳球とは滋養に富んだ濃い乳を云ふのですが、乳房の中からは乳漿と乳球は孰方も出ます即ち濃い乳汁も出れば薄い乳汁も出るのは此譯です、夫れで乳兒には乳漿と云ふ薄い乳汁より乳球と云ふ濃い滋養に富んだ乳汁を餘計に飲せなければ乳兒は健康でムク〳〵肥つて成長ことは出來ません、今この事を説明する前に先づ牛乳と人乳とに就いてお咄をしませう、牛乳は乳房の中の何の部分に乳漿の成分が多いか又何の邊に乳球の濃い乳汁が澤山蓄含つて居るかと云ふのに牛の乳汁は乳首に近い部分程滋養に富んだ濃い乳が多いので乳首を遠ざかつて乳房の腹部に近い程薄い乳汁となるのです、夫れ故牛乳は搾り始めに一番濃厚な滋養に富んだ乳汁が出るのですから牛乳を飲むなら搾り始めを飲む事が大切です、これは何ういふ理由で牛乳には乳首に近い丈濃い乳汁があるかと云ふと那の通り牛の乳房は下へぶらさがつて居るでせう、夫れで乳球の濃い成分



は重量の爲めに下方へ沈澱つて居る譯です、然らば人乳は何ういふ事になつて居るかと云ふに牛乳とは全然反對になつて居ます、最初出る乳汁は乳漿の薄いところで、段々と濃い滋養のある乳球の成分となるのです人體は直立して居るから乳房は胸部より前面に突出て居る故に前に述べた通り乳球は濃くて重量が多いから自然下方に沈澱りて乳房の胸部に近い部分へ集り乳首に近い丈薄い乳漿になるのです、扨人乳は此の通りだから乳兒の飲み始めは薄い乳汁で、飲んで居るに從つて濃い乳汁になる理由がお分りになつたでせう、爾うしたら可愛い乳兒には乳球に富んだ濃い乳汁を飲ませてムク／＼肥つて健康に育つことを願はない母親はございますまい、これは即ち授乳の仕方にあるのですが爾うかと云つて之れは別に困難しい事でも何でも無い乳兒に乳を飲ませる時には一つの乳房の乳汁を飲み盡す迄飲ませれば宜いのですさうすれば先づ乳漿の薄い處を飲み盡くさして濃い乳球を澤山に飲ませる事が出來ます、然るに世の母親の誤解して居るのは一ッの乳房で少し飲せると又一方の乳房と取換へて飲ませる者が多い、斯ういふ風に取替へて少し宛飲せれば乳漿の薄い乳汁だけ飲せて置くやうになり、折角滋養に富んだ濃い乳球は飲せる事の出來ない内に乳兒の胃を充滿させて仕舞うではありませんか、殊に乳兒は尤も習慣の付き易いものでチヨイ／＼乳房を取換へては飲ませる事が習慣になると一ッの乳房を飲み盡すのを嫌ふやうになります、若し斯んな惡い習慣が付いたら乳汁を飲せるたびに薄い乳汁ばかり飲せるやうになつて終には乳兒の健康を破りよわ／＼しく育てる樣になりませう、乳兒成育の上に授乳の仕方が何れ程大切なものか何れ程注意しなければならぬものかは之れでお分りになりませう此お咄しは私が醫學上多年研究した處で乳兒の健康上授乳の仕方を誤解して居る母親の多い故夫れを御注意申すのであります。



# 全快せる腦膜炎の實驗談

誠齋手記

腦膜炎に罹つて助かる小兒は、千人に一人と云ふ難病で、假令全快したにせよ、後に身體へ故障を殘し易き恐ろしい病氣です、然るに醫師の手當と看護法の能く行屆いた結果、玆に紹介する如き經過良く全癒した實例があります、これは山下商會支配人島村久太郎氏の令息に就てのお話です。

△發病當時の容體

子供が病氣になります毎に、直ぐ胸に浮ぶのは腦膜炎ではあるまいかと云ふ事で、常に恐ろしく思つて居ましたが、不幸にして長男の一郎が八歳の時到頭此の病魔に取付れ、而も結核性と云ふ容易ならぬ重態に陷つたので、迚も助かる望みはないものと覺悟しました。

發病當時の容體は恰度感冒でも引いたかの如く思はれ、熱を計つて見ると三十八度五分あります、別段苦しい樣子もなかつたが其の晩も熱は下らす、翌朝は三十九度になつたから捨置けませんので直ぐに吉松病院長の來診を求めますと、院長は早速來て下すつて病人の脈を執り篤と容態を見られたが氣の爲ですか何となく不安の面色が見えました、「如何でせう矢張風邪で御座いますか」と夫れとなく病症を尋ねると醫師は首を傾げて「容子が良くないので腦膜炎に變らなければ宜いが」との診察でしたが色々手當の仕方などお噺しがあつて歸られました。腦膜炎の一言は早くも死の宣告を與へられたやうな氣がして、胸の鼓動は暫く鎭まりません、併し盡せる丈の手當をして遣らうと、助けたい一心で一生懸命になり、枕元へ附切つて看護したけれど悲しい哉其の翌日は腦膜炎の徵候がいよ〳〵顯はれて來て、子供は頭部が痛い〳〵と苦しげに叫びます。

△全快覺束なしとの宣告

助命ぬ迄も何うか此の苦痛を取つて遣りたいと、早速電話で吉松病院長を迎へましたが、此時は立派な

腦膜炎になつて居たから「此儘痙攣けたら所詮助ける術もないが、入院して居れば應急手當も出來るので事そ入院させたら何うです」と院長の注意がありましたソコで早速入院の手續きをして親戚の者も附添つて吳れ、吉松病院へ釣臺で送つたが、最早萬死に一生も六ケ敷い事と決心したのであります。

此時迄も病兒は「痛い〱」と言ひ續けで、次第に舌も廻らず譫言の樣に聞えました。

病院附の看護婦が無いので、救補看護婦會から一等看護婦中井とく子を賴んだが、中井さんの差圖で枕を取換へたり、看護上必要な品を買整へました、入院して二日目患者は益々衰弱を加へる許り、心配の餘り院長に聞くと結核性腦膜炎故誠に氣の毒だが全快の見込みはない、此の病氣に罹つて癒るのは千人に一人位の者だからと診斷上既に死を待つより外は無いのです。併し千人に一人でも助かるものがあるとして見ればソコが親の慾目ですから「如何でせう悴は其の一人の數へは入れられますまいか、お骨折の甲斐はないものでせうか」無理な願ひでも醫師に縋るより外はありませんが院長は「迚も全快覺束なし」との言葉を繰返すに過ぎません。

△一縷の命脈

看護して居て吳れた親戚の人に、院長の宣告を咄すと「夫れは殘念なことだが、助からぬ迄も外の名醫に診て貰つて、手に手を盡してからなら同じ事でも諦め宜い」と親戚の者は頻りに外の醫師を勸めて吳れますし私も其氣になつて再び院長に願ひ、當病院へ他の醫師を迎ふる事の承諾を得、直に東京小兒科院長瀨川醫學博士の來診を求めたが、博士は他用の爲め當時の副院長小松貞介氏（今の小松小兒科院長）が代つて參られた、小松副院長の診察によると、未だ命旦夕に迫る程でも無いとの事で、何んとなく一縷の命脈を繫げる事かと思ふ樣な氣がして、瀨川博士の來診をば救ひの神を渴仰するやうに思はれました、其の翌日即ち入院後三日目の朝瀨川博士を迎へたが博士の意見は小松副院長の見立てと一致して居りますから、之は壹その

事吉松病院を退院し、改めて瀬川博士なり小松副院長なりの治療を受けたいと思ひ「直ぐ退院したいのですが、釣臺で連れて戻つても萬一の事は御座いますまいか」博士「夫れ迄は屹度保證するが、極く安靜に取扱はないでは困る」博士の一言は私共に取つて實に千釣の重みがありました、ソコで直ぐ退院の手續きをして自宅へ戻つたが別段病勢も進まず・夫れより改めて小松副院長を主治醫にお願ひいたし、倘勝木醫師並に中井看護婦が夜間詰切りで應急手當に力を盡され、家内の者は丁度戰場へ出た時の如き決心で看護しました。



△紀念の寫眞

發病したのは殘暑の烈しい九月の上旬であつたが、醫薬の効驗と中井看護婦の看護法が行屆いたのとで秋風の戰ぐ頃まで、丁度月を越しても生命を取留めて居たから殊によつたら千人に一人の壽命があるか知らんと夫れを樂しみに相變らず親戚の者迄が看護して呉れました、去れども患者は衰弱甚しく見る影もなき程に痩せ衰へ、其上昏睡に陷つて唯虫の息の通つて居るばかり故其の

心細さは實にお咄しにも出來ない程です。

最早之れ迄に手を盡したのですから、假令此儘亡なつても今更遺憾はありませんが、切めては後の紀念にもと哀れなる病兒を寫眞に撮つて置てと或日小松副院長が來診され此寫眞を御覽になりました、副院長も此の寢姿の憐れなるのと、切なる親の眞情とに同情を汲まれ「私も力のあらん限りは盡して居るが、全快しても兎角身體に故障を殘し易く、一眼が盲ぬとか口が歪むとか指先が痙つたり、耳に障害を及ぼしたり此位性悪い恐ろしい病氣はないのです、何うか早く昏睡を醒覺させて、眼を開なり、口の發るなりさせたい」と醫師も始めて何うやら救かるかの如き口吻を洩されたが、此時の嬉しさは何んに例へんやうもなく、早く眼の開くやうに耳の聞ゑるやうにと看護婦始め勇氣を奮ツて其日を遲しと手當を施すに餘念はありません。

△愁眉を開く

待つ甲斐あつて、醫師の見込み通り稍々昏睡狀態から醒め來り、眼を見開いたのは發病後三十日目で御座います。夫れでも未だ〳〵油斷はならぬと、度々副院長の注意を受けました。

眼の見えるやうになつて一ヶ月餘經過ますと發音が出來たが、不思議なことには覺えた事を悉く忘れて仕舞ひ、父とも云はず、母とも云はず、之れには驚いたが、病氣の爲め全く腦の官能が痴鈍になつたでせう。左れどもまだ病床に横つた儘で、起立ことさへ出來ぬけれど、親の目からは快方に向つた樣に考へられるけれども醫師は身體の故障如何を心配されて居ます。

其年も暮れ翌年の二月になりました、患者は善良なる容體で其の間を經過し、何かの部分が一ヶ所位は不具となる事を覺悟したが、別段の缺點もない樣子で漸く足も起つやうになつた。丁度其の時の事でした、尾籠なお咄しですが厠へ連れて往くと跨くと云ふ事を忘れて仕舞ひ、何うしたら宜いかと尋ねられたが、總て此通り智識は悉く病の爲め腦から奪ひ去られたのです、併し此樣調子でも幸に其年の四月全快の床上げ祝いをする迄に運び、玆に始めて一同愁眉を開き、醫

者の丹精、看護婦の親切、私共は我子の爲めに神よりも尊く有難く感じました。床上げも目出度く濟み、爾後三ヶ月間は電氣治療を受けたが當時小松副院長は獨立に開業し、小松小兒科院を經營されたから相變らず同院の治術を受け七月頃より戸外で遊戲をなす迄になり、一ヶ所の障害も殘さず全治し、發病後十ヶ月間、茲に悴一人を拾ひ物したやうな心地がしました。



# 海水浴

野本森

九十度の苦熱、一リーメーのビーアわが高襟先生を以てしても一碗の心太わが芭蕉翁を以てしても遂にこの苦熱を云々せずには居られまい、鎌倉に下車するもの二千何百人、大磯に下車したる旅客數千人といふ今日此頃の大暑迴遊列車は官線に日鐵に山陽に到所に旅客を滿載して居る、日光可なり箱根可なり更に進んで湘南の海水浴殊に可なり。

海水浴は大磯以來のものであらうか、所謂西洋文明の餘澤であらうか。

あらず、請ふ去つて上代の歴史を繙け、伊佐奈岐尊、須佐雄尊の神々

は禊と祓とを採つて心身の汚穢を拂ひ淨め給ひ三千年の昔に已に海水浴の効能を認識せられたではないか、舊事記、古事記、日本紀、古今等にも代々の天皇や大宮人が水浴を實用せられたことが示してある、無論この時代には海水浴若くは水浴が今日の如く衞生とか健康とかいふ考より流行（少く弊はあるが）したものではなかつたらしい、寧ろ多く汚穢を淨め祓ふといふのが目的らしかつた。が、それが又非常に成効して寛偉大なる上古の大宮人を生じ健全なる精神は健全なる身體に宿るで、武内宿禰の如き齡數百を重ね、能く寡獨の神功皇后を補弼し奉り内憂外患に對し些の缺陷を見なかつたは、一面にはこの若人が水浴に務めた所以であらう。今でも尚は淸淨否禁厭として力士社會や花柳界では「浪の花」は附物である。

大磯の活神松本順翁が明治二十年の交、大磯や國府津に浴場を設けて以來、日本帝國七千三百里の海岸線長汀曲浦何れの地にも年々歳々海水浴場を新設せらるゝは雨後の筍にも劣らぬ次第である。

元來わが國人は他の科學的思想の發達に比し衞生思想のそれが甚だ卑く殊に海水浴や温泉の知識は殆ど零である。

海水は如何なるもので、又如何にわが身體に作用するものなるかを知つて貰ひたい。御承知の如く海水の主成分は食鹽で、その海水中の含量は二、七%でその他にはブローム、カルシウム、マグネシウム等の化合體が三、五%ある、これ等の鹽類が器械的に作用して皮膚を刺戟するので、此皮膚には血管及神經の末梢が一面に横がつて居る、——つまり吾人が切創のために疼痛を感ずるのは皮膚の眞皮中に極めて纖細の血管と神經が分布せられてあるからである、然るにこの血管や神經が小刀のために切斷せらるゝため疼痛も感ずれば出血もするのである——これ等の神經血管に鹽類の結晶が作用して適當の刺戟を與ふるのである、要するに鹽類がわが身體に對する作用は鹽類が皮膚の知覺神經を鼓舞しそれを腦の中樞に傳へ更に中樞より運動神經に達し次で心臓を働かしめ從て血管系統の彈力性を奨進するのである。

然し如斯單純なるものとすれば横町の樺の湯と一向變つた所はない、何も高價なる宿泊料を拂ひ馬鹿氣た茶代を奮んでわざ〳〵貴重の時間を空費するには及ばない、寧ろ晩景樺の湯に入つて意氣な喉を聞くに如かない。が、海水は以上の外に海流や潮の滿干や浪の動搖によつて海水中の不潔物をもち去り、それと同時に寒冷の刺戟を皮膚に與ふるのである、故にわれ〳〵は浪と鹽類との同盟軍に對し常に抵抗し能く筋肉を働かしめ、從て血液の循環を催進し身體の新陳代謝を好都合ならしむる所以である。

が、一利あれば一弊ありで、海水浴は賣藥の廣告の如く萬病に効驗があると考へられては困る、立派な紳士や貴婦人が大磯や江の島の如き怒濤に頑是ない小兒を入れて得意然たるものがある、三歳や四歳の小兒の皮膚は非常に抵抗力が弱く殆ど大人の口唇粘膜に相當する位のものである、如斯小兒に相模灘の怒濤はおろか海水浴すらも如何か

と思はるゝ程で、白砂青松といへば人に聞へはよいが海岸の砂地やくが如きの時、若夫れ海軟風の恩澤に浴しなかつたならば恐くは都會のそれよりも暑からう。

老人もそれと同く新陳代謝の作用が不充分であるから抵抗力も著く減退して居る、であるから餘程注意をしないと思はぬ不慮を醸すものである。

又脚氣患者や、筋肉の痙攣するものは別して注意せねばならぬ、健康のものですら五分間の水浴は已に心悸亢進を促すものである。

## △海水浴の心得

海水浴を行ふ時は室温八十三度、室外の温八十六度に達した時でなければならぬ――季節は七月末より九月中旬迄――が最もよいので、小兒婦人や老人は風の極めて靜かな日の暑氣の烈き日を選ぶことが必要である。

入水時間は小兒婦人老人は一日一回、精々四五分、大人は一日二回長くも三十分を超ゆることは出來ぬ。




食後直に入水すると劇烈なる運動のため嘔吐する恐れがある。十五分位熱伏樹蔭を一時間許散歩した後がよからう。浴後乾いた手拭殊に西洋手拭で皮膚を摩擦し、一盞の参湯に渇を醫し一陣の涼風に冒し十五分間の快眠が最も適當である。

## ▲小兒の胃腸病

小供の胃腸病は最も恐るべきものです例年夏季になると温度の關係や食物の爲めに胃腸病を起すもので患者が増加しますが普通の人は小供が胃腸病に罹かつたと云つても左まで心配しないと云ふ風があります之は大きな考へ違ひで小供の胃腸病患者には死亡が割合に多いのです殊に一年未滿の幼兒が此病症に罹ると最も危險であります就ては小供に與へる牛乳の如きも十分に注意を加へて假令消毒牛乳でも之れからは成るべく涼しい處に置く樣にすべきは勿論出來る事なら氷で冷して置くに限ります。又牛乳消毒器と稱するものがありますけれど之れは絶對的に効力はありませんから之に信頼してはなりませぬ、素人は小供の胃腸病に罹ると多くが先づ賣藥位を飲ませて置くと云ふ風で愈々重症に陥つた時に醫者の處に連れて來るので治療を施すべき餘地のないと云ふ樣なのが尠なくない、何うか小供の胃腸病には十分注意して手後れにならぬやうにして貰ひたいものであります。

（弘田醫學博士）

# 羨望と嫉妬

人として羨望心や嫉妬心の毫末も無いと云ふ者は稀で厶いますが、女子は男子に比して此情が一層甚だしいのです。單に男女の關係より生ずる嫉妬心のみでなく、女子は其友人が立身するのを見ても、華美な服裝をしてゐるのを見ても、凡て善意を以て觀察する塲合は少くて、先づ嫉妬の眼を以て、何かしら其非點を探し出さねば承知しないのである。例へば男子が妻の友人若くば知人の同性を捉へて『彼女は非常に美人だ』と賞めると『美人は美人ですが、アノ口元が下卑てゐますわ』と答ふるに相違ない。之に反して其友達が零落したり、失敗でもしたのを見ると、本統にお氣毒至極ですと口では同情を寄せて居ても、心の奧では幾分か自分が勝利を得たやうな氣がするのは殆んど女子の持前であると云つても可い。昔の道歌にも『善き仲も此頃あしくなりにけり隣りに倉をたてしよりのち』といふのがある。人情は恁うまで人の成功を嫉む樣に造られて居るのであらうか、然し之を自然性だといつて放任して置いた日には他日如何なる不幸を來すか解りませぬ。人を呪はば穴二つで、他人の成功を嫉視するが如き輩に限つて、意氣地のない腑甲斐のない人物と相場が定つて居ますから、此邊も又女子として深く愼まねばならぬ日常の心懸けであります。

科學

# 種子の散布の話

藤葉

抑も植物の種子と云ふものは何の爲めに出來るか、之れは云ふまでもなく植物が自分の種族を絶やすことなく永遠に傳へ樣として造り出す處のものである、植物に取ては最も大切な事業の一つである、凡そ此世界に生を受けたるものは一つとして自分の子孫を絶やさない樣にと勤めないものはない、毎日食物を食べる爲めに齷齪と働くのも敵を防ぐ爲めに種々の防禦をなすのも皆己れの安全を圖る爲めである、己れの安全を先づ圖て子孫を永遠に殘さん爲めである、此原則は吾々人類を初めとして高等なる動物は勿論下等微細なる黴菌類に至るまで少しも變ることはない、併其方法は種種に分れて居る或は人類の如く子を生んで自分の後に殘して行くものもあれば又は自分の身體を幾つかに分けて夫れを殘して行くものもある、又は植物の如く種子と云ふものを拵へて夫れを後に傳へるものもある、夫れで今種子のことに付きて少しく云はふとするのであるがいくら此植物が其種子を澤山に拵へ出しても植物はもと自分で運動すると云ふことは出來ない、否中には食虫植物など云つて虫が其葉にとまると其葉が自分で動いて其虫を捕へて其汁を吸ひ取つて自分の養分とするものもあり、又はあさがほや、豌豆の蔓は何でも物に卷き付かうとする性質のある處から常に其たよる物體をさがして其蔓の先きが絶へず動いて居ると云ふこともあるが、之等は誠に僅かな運動で自分の固有の位置を變へて運動すると云ふとは先づ普通の植物には無いのである。

夫れ故澤山の種子を造り出しても若し適當の方法を以て之れを散布しなければ出來た種子は勢ひ其植物の周圍にばかり落ちて其處に芽を出す、斯うなつたら如何で有うか、折角澤山に仕樣と思ふて出來た種子は一

時に狹い場所に芽を出して、夫れが皆大きくならうとする、夫れに就ては根から充分に養分も取らなければならない、葉から充分の光線も受けなければならない、初め小さい内こそ澤山一所に集まつて居てもそんなに害にならないが次第に成長するに從つては限りある狹い土地にはそんなに充分の養分を何時迄も供給するヿは出來ない、又葉も互に群生し重なり合つてとても充分に日光に當ると云ふヿが出來ない處から其親木は子孫を持ち傳へ樣として殘した種子が群生の結果お互に充分に成長するヿが出來なくて終には互の間の生存競爭となり所謂共倒れになるのは知れ切つたヿである、併し自然は決してそんな馬鹿なヿはして置かない實に巧妙なる深遠なる考へを以てよく其目的を達せられる樣にしてある。

即ち種子の散布の方法が充分に行き届いて互に完全に成長させる樣にしてある。

夫れで此種子の散布と云ふヿも其植物の種類に依つて何れも皆同じと云ふ譯には行かない大凡之れを分けて見ると次の如くになる。

即ち風の媒介に依つて種子の散布をはかるもの、水の力に依るもの、他の種々の動物の力に依るもの、又はある機械的の作用に依るものと、斯う四つに分れて居る。

風の力に依るものと云ふのは其例を擧げて見れば一番解り易いのは、タンポヽ、ツバナ、モミヂ、松などの種子で其果實は大抵小さく輕くて而して其種子の一端に必ず毛か羽子の樣なものが着いて居る、彼のタンポヽの美しい黄金色した花が咲いてしまうと後には今度は白い毛の樣なものが一面に出來る、之が即ち種子に着いて居るので最早や種子が充分に成育してしまうと其等からはなれる。

處で其種子の先きには例の毛が付いて居るから容易に空氣中に風に依つて吹き飛ばされる、風の勢いに依つては非常な遠方迄自然に飛ばされて行くのである。

又彼の松の實には彼の松かさの鱗の中に一つづヽ實が有つて夫れには極めて薄い蟬の羽子の樣なものが着

いて居て恰も鳥か蝶が飛ぶ様に矢張風に乘じて飛ぶのである。

彼の往々高い屋根の上に誰が持つて行つたともなく植物の生じて居るのは大抵此風に依つて吹き上げられたものである、之れに依つて此たんぽぽの如きは實に世界各國に殆ど無い處は無い位に廣がつて居る、春になると如何な處にも之等の花の咲くのは實に其種子が風に依つて四方に散らされた結果である。

次ぎに水の力に依ると云ふのは即ち蓮の様なもので其果實は大抵圓形か楕圓形をして容易に水に依つて流される様に出來、又其比重は大變に輕くて常に水の上に浮いて居る、而して最



其果實が堅くて容易に水が中に浸み込まない、長い間水中に漂ふて居ても腐らない様に出來て居る、夫れ故水のまに〳〵久しく水中に在つても少しも其勢力と云ふものは衰へずに保たれて終に遠い處迄押し流されて何處かに漂着し其處に新たに芽を出すことが出來るのである。

彼の熱帶地方の植物が往々洋洋たる海を越して海中にある珊瑚島などの上に盛に成育して居るのは實に此水力に依つて遙々と渡つて來たものであるにちがいない。

動物の力に依つて種子の散布をはかるものは槪ね果肉は各々其特有の味を有して或は甘く或

は酢く多くの水分や砂糖分が有つて食用に供せられるものが多い。

即ち今日ある處の食用果實は概ね此類の中に入るもので其味は種々の動物の嗜好する處となつて食せられるのである。

植物が斯く其果實に種々の味を付けて他のものゝ食用に供せんとするのは其處は一つの目的が有るからで即ち種子の散布をはかる爲めである、他の動物が其果實を食するときに其種子も一所に食べられてしまうから却つて種子が無くなる樣な譯であるが決して然うでは無い、其處には又之れに應じた處の工夫がしてある。

即ち其種子は甚だ堅い皮殼の内に入れられて有つて容易に動物の齒を以てしても傷けられない樣にしてある、而して腹に入つても他の食物と一所に消化されることなく終に何の變化も受けずして糞となつて方々に散らされるのもあるし、又は其果實を食べる際に其食べた處で散布されるともある、併し其果實がまだ充分に生熟しない内に他の動物の齒牙にかゝつては大變であるから植物は又之れにもちやんと注意をしてもう種子が方々に散らされても芽を出すことが出來ると云ふ迄に成育しなければ其果實は決して食べられない樣にしてある。

即ち種子の充分熟さない内は或は酸味が强かつたり又は苦い味がするものもある又は柿の如く熟さない内は澁くて到底口に入れることは出來ないのは實に此爲めである。

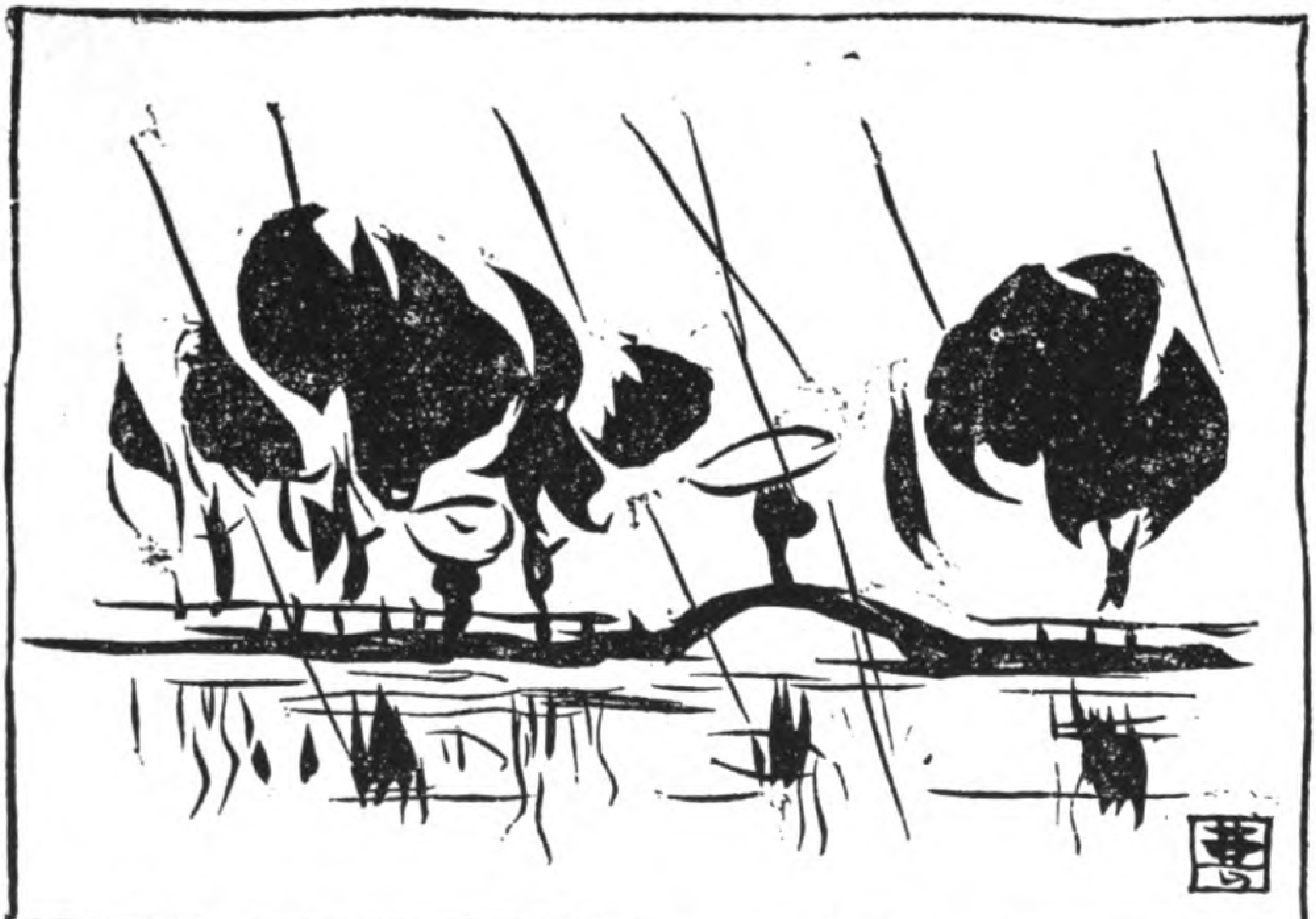
巳にして充分種子が成熟すると之等の好ましからぬ味は悉く去つて其植物特有の愛すべき味と香とを發し同時に其色は或は赤く或は黄に、紫に、種々の美しい動物の目に付き易い色となるのである、自然は何と巧妙な働きをするものでは無いか。

又同じ動物の力を借りるものにしても之等の愛すべき色も味も無いものがある、即ちやゑもぐら、たうこぎ、ごぼう、などの種子には別に以上の如き特點は一つも無いが其代りに果實の表面に澤山の鈎の形をした毛が生へて居たり、又は其面から粘液を分泌したりし

て種々の動物が一度び之れに觸れると直に其毛や羽子に果實が取り付いて其動物の運動にまかせて諸方に散るのである。

之等を附着果實と云つて我等がよく草原などに行くと何時の間にか裾や袂に草の實が澤山に付いて居ることが往々あるが之れ即ち無言の内に其植物が自分の子孫をなるだけ廣く散らして貰はうとして可憐にも裾や袂にすがつて來たものである。

更らに機械的作用に依るものは一層巧妙な働きをなすもので即ち其種子が充分に熟すると果皮は少しのもの丶接觸に依つても忽ち破れ其勢で中から種子が飛び出すのである。



彼のてつぽううりと云ふが如きは果實が全く熟すると果實の中に澤山に水が溜まつて夫れは非常な壓力を持つて居る、而して其果實が枝からはなれると恰もシャンペン瓶の口を拔いた樣に中から水が一時に噴き出して同時に其中に有つた種子が水と共に飛ばされて往々五六間も遠方に迄達することが出來るのである。

其他にホウセンカ、カタバミ抔の種子を此機械的作用に依て四方にはね飛されるのである。

更らに下等の植物即ちかび類になれば其胞子は吾人の目には見へない程小さいもので有つて從つて輕いから常に空氣中に混じて諸所に運ばれるのである、凡そ何處の空氣にしても多少の胞子を含んで居ないものは無いのである。



## 東京 女學生のスタイル

觀風子

近來東京に於ける女學生の容姿は、漸々質素の美風を失つて、甚だしいのは、惡口を言へば横濱あたりの洋妾の樣な、だらしの無い風をして居るものすら有る。華奢に流れ淫靡に傾いて居るのは、現代の時弊で有るから獨り女學生のみを攻むるのは、少し殘酷かも知れぬけれど、腐つても、べら〳〵でも、破れて居ても、絹でさへ有れば宜いと云ふ風が見え透いて居る。であるから平素着も、鳥渡見れば絹と見える樣な、瓦斯や紡績の擬かし物が流行つて、自家に居ても寢惚た樣な綿入のお召縮緬を、ぞろりと着流すと云ふ風が有る。從つて紺飛白や手織縞のやうな不粋なものを着て居るのは、田舍出の女學生か看護婦の連中の中に稀に見受ける位のものである。

着物に就いて斯う云ふ珍談がある。或る女學生が家に居る時は、米澤の着物を平素着にして居たが、外へ出る時は態々瓦斯の矢絣の衣服と着替へて行くので、或人が其理由を訊くと『だつて那麽田舍で流行つた米澤なんか着て出られるもんですか』と云ふて、得意然として瓦斯をひけらかして居たと謂ふが、成程之れは事實かも知れぬ。

一概に東京の女學生と謂つても、見たばかりでは電話交換手か、看護婦か、印刷局の女工か、見判けが出來難いから、女學生風を模した下婢や職工の不始末まで、女學生が其惡名を着なければならん樣な事が往々ある。純粹な女學生の內でも、各々其所屬の學校に依りて、其容姿が變つて、夫々一種の型を爲して居るのである。

▲女子大學生　の中には一貫した型なるものを見出すのに苦しむ。或者は頗るハイカラがるかと思へば、

或者は雲岳女史然たる蠻勇的のものもある。之れは主とするに内部の科が別れて居るからでも有らうが、年數も古く無いので、未だ確固たる流向的基礎が定まらんので有らう。

▲學習院女子部

貴族權門の令孃の巣窟で有る事は言ふ迄も無いが、上流の愛嬌丈け有て、普通の女學生とは事を共に爲無いから、同校の流行は同校に限つて居る樣である。嚴然として分れて居るのは舊守派の姫樣式と、新進派のレデー式で、此二種の容姿は誰の目にも付き易い、姫樣黨は髮を高島田乃至桃割に結うて、圖拔けて長い振袖を召



して居られるが、新進派は手近に上流社交婦人の模型が有るので、自然之れに化せられて居る。身體をすらりと正しく伸して、首を俯向けて、常に爪先きを凝視むるかの樣にして、スー、スーと爪先きも外輪をつゝしむで温雅に歩を運ぶが、往來では親兄弟に出會つても、莞爾とも仕無いで、一禮して行き過ぎる位。頗る其威嚴と品格を保つのに苦心して居るらしい。

▲お茶の水女學校

師範學校附屬の高等女學校で、爰の生徒の特徴は袴の帶の處に、上からバンドを締めて居る、歩く時胸を張つてお尻を後ろに

突出して、左右何れかの肩を少し上げて前へ突出す、つまり前のめりに成つて一方の肩を上げて、足は身體の中心を支へる可く、餘儀なく一イ二イと踏み出すやうな狀態である。

▲東京女學館　虎の門は富豪町人、紳商家の令孃を以て中堅としてゐる丈け、どこやらハイカラで瀟洒として居るが、歩く時少し横向きに成つて、讃美歌の拍子に合せた樣に歩く、髮は時によると前髮取の束髮や、お酌まがひの桃割に結ふてるものもある。一頃はマーカレットで持てたが近來は餘り見懸け無い。

▲音樂學校　音樂家とか技藝家とか言はれるのを非常に必嬉しく感じて居るらしく、容姿に金目を懸けるのも先づ第一と言て宜からう。髮は前髮を押し潰して後ろはべたりと頭に密着したやう。襟足が莫迦に短かく見える樣な恰好である。之れは同校の技術監幸田女史の恰好を宜いと思つて眞似たものであるさうだが、伊達の盛りに跛曳く諺にもれない方であらう。同校の演奏會に於ける出演者の服装などは一回毎に換へるさうだ、大抵の資産では衣衣裳代に追ひたふされるとか聞いたが、成程演者の衣裳の配色などは確かに凝て居るやうである。

## 夏の帶留

夏の身邊裝飾品としては婦人には先指輪と帶留であるが、此處には帶留の事のみを言はう、槪して紐は白琥珀、絽縮珍、白鹽瀬又は更紗抔が用ひられる、白地に黑又は金絲の一本獨鈷を入れたもの抔は中々氣が利て居る、金具は金で光琳の水、露芝、蟲盡し、鮎などを透彫にしたものが面白い、又鯉や菊や其他の丸彫物は惡くはない、金具に連て紐に意匠を用ひ譬へば金具が鯉や鮎ならば紐を水色にするとか、浮草模樣をあしらふとかいふ樣にしたのは又格別に面白い、金具に石入となると自然と形が大きくなる、從つて拵らへも凝り度くなるから夏向としては、何うであらうか、併し翡翠の屑や、ルビーや、眞珠や、ダイヤ抔の這入たのも中々需用は多い、冬の金具に紐だけを白地と取替ても濟みは濟むのだから要は人々の好み次第である。



# 婦人と慈善事業

弘田醫學博士談

▲歐米の慈善事業

私が今回歐米諸國を巡遊して、最も深く感じました事は、文明國に於ける慈善事業の、一體に發達して居ることであります。英吉利や獨逸は申すに及ばず佛蘭西でも澳太利でも、將た亞米利加へ往つて見ても夫れ〳〵慈善的事業の設備が十分に整つて居りまして殆んど遺憾なしと云ふ有樣です。

殊に獨逸の如きは、全國到る處の都市に、理想的の慈善事業が盛んに行はれて居ります。尤も之れは、一面から見ると、我國とは國情も相違して、彼の社會主義とか、共産主義なぞが、頻りと騒ぐ處から、上中流の婦人や富豪などが、勞働者や貧民の爲めに、競つて慈善事業に力を盡すと云ふ風になつたのかも知れません。併し夫れにしても、此種の事業が發達して居ると云ふ事は、大に羨望に堪へない次第です。

▲我國の慈善事業

日本に於ける慈善事業では、先づ岡山孤兒院の如き隨分盛大になつてまゐつた樣ですが、社會の狀態から云ふと、決して彼れだけのもので滿足が出來る譯のものではありません。將來は何うか獨逸に於ける慈善事業の如く、各都市に夫々地方的のものを設立して、夫れを益々發達させねばなりませぬ。

私の關係して居ります婦人共立育兒會の如きも、現に追々と發達はしてまゐりましたが、之れを戰捷國として世界列強の内に加はつた我國の婦人の事業としては、實に微々たるものです。世にも憐れなる貧困者の病兒の爲めに、力を盡すと云ふ事は、之れを所謂道樂とすれば、最も美はしい道樂で、殊に婦人の事業と

して最も適當であらうと存じます。共立育兒會に於て施療する病兒は、大學醫院小兒科病室の一部に收容して居りますが、近來漸次に狹隘を告げてまゐりました。之れから益々進んで、此慈善事業を盛んにし、現在の病室では、到底收容し切れぬと云ふ程に、一日も早く事業の擴張發達を圖りたいものだと思つて居ります。育兒會の病室では、牛乳其他の滋養物も豐富でありますし、また氷なども十分に用ゐて居りますから、病兒は普通中流の家庭に居て療養するよりも遙かに優で、病兒に取つては、非常の幸福であらうと存じます。

▲牛乳の施與

獨逸などでは、前述の如く、慈善事業が非常に發達して居りまして、而かも夫れが總て分業的に行はれて居ります。其中にも、小兒の死亡率を減少するの目的で設立されて居る慈善會がありまして、此會では、貧兒の死亡率の多いのは、乳の不良なのが原因であると云ふので、純良なる牛乳を施與する事になつて居ります。夫れで貧困者には、施與劵を與へてありますから、何時でも夫れを持つて行けば、直ぐに純良な牛乳が貰へます。また定價の半額を納めて買つて行く者も出來ます。而して一週間目毎に、其小供を連れて行くと云ふ事になつて居て、行くと早速小兒科專門の醫者が、一々診察して與れ、此兒に飲ませる牛乳は、其れでは薄いから、最つと濃くしろとか、此體質は斯うせねばならぬとか、夫々親切に注意して與れます。其處へ往つて見ると、建築の構造と云ひ、諸般の設備と云ひ、總てが能く整つて居りまして、殆んど完全無缺の有様で、實に驚くべきものです。

何うか我國の婦人方も、今後益々奮つて、斯る高尚にして有益なる慈善事業の爲めに、大に力を盡し、歐米各國に於けるが如く、此事業の發達を圖つて貰ひたいもので、平たく申せば、慈善事業を婦人方の一つの道樂として貰ひたいものでムいます。

# 觀察

# 姑の心を讀む人

割唐子

隨分頑固で我が儘で執拗で、加之に以て强情で極端で突飛で非常識で、自分一人には何一つ滿足にし出來しも得ぬ癖して、

　他人の棚卸し

となれば、御飯よりも大好物と來てる。と云ふ人で眞當にいけ好かないつたら姑婆阿染みてるよと誰れやらが自分を評して呉れた。厭や什麼も其の如何にも憎く體な口の利き鹽梅なら、時には雪を炭とも云ひ黑め兼ねまじき甚だ以て小意地の宜しく無さ加減。宛然出戻りの鬼千疋先生が嫁虐待でもする樣な格だと、又或る人は斯うも自分を評して呉れた。可哀相に寄る年波の甲斐無さには、額に小皺の波立つとも見ゆれ。昔つて一度だつて姑とも出戻りとも未だなつて見た事の無い自分である。が併し、元來が片意地な餘り從順ならぬ性質の自分が、取りも直さず直ちに姑小姑に擬せらるゝ處を見ると、何でも姑や小姑等と云ふものは乾度恐ろしい意地惡に限つてか何か居るもので、其れが一口に嫁とさへ云へば、怎うでも之れ等の人々に依つて始終中無性矢鱈と虐待されねばならぬ者と定つてるらしい。

自體自分の不思議に堪えられぬのは、之れであります。

徒然に今日不圖　本誌六月號を繙いて、適々小姑と掛けてとの謎々解答を見るに及んで、如何な圖々しい自分も少々面喰はざるを得なかつた。と云ふのは或る人の解答に、博覽會の雨漏り事件と解いて、心は技師(義姉)を責めるとあつたのや、路傍の石地藏と解いて心は夜目(嫁)には鬼とも見えるとあつたの等は、未だ〳〵多少、罪が無いとしても、老

人の手紙若しくは假名ばかりの手紙と解いて、心は讀(嫁)め憎くい等とあつたに至つては、如何樣吹きも吹きたりな。精衛の海を塡め蚊蝱の山を負はんとすると云ふとも、世に恐らく女子の氣焔としては、之れ位思ひ切つて露骨な大膽な胸のすう／＼する樣なのは決してあるまい。何ば何でも之れでは餘り度胸が宜過ぎると第一に自分は然う感じたのである。だから前以て我れ／＼の決して云はぬ事じや無い。親と主人とは無理なものと心得べしとて、憂辛き嫁が幾年辛抱の敎訓とせしは、夫れは見ぬ世の往昔の事。十九世紀の以前の事。誠に以て此の御活潑さですもの。此れ丈の御勇氣が居らつしやるんで御座いますもの。よしさらば如何ほど鬼の樣な蛇の樣な姑小姑だつて、這麼御嫁樣に掛かり合つたら最後。忽ち三舍を避けてぐうの音も出せずに降參つて仕舞ふは必定。憂いも辛いも、

六疊の御書齋

涙にほろりと目に物言はせて、紅入り友禪の襦袢の袖噛む淡泊とした藝當もあれば、口惜しさにピリッと絹ハンカチの水色美しう。拗ねては誰れへの思はせ振り。彼の儂はもう／＼……………悲しいのよと身を投げ掛けて、遣る瀨無げに鼻を鳴らして御覽に入れる至極念入りの十八番もあり。方寸は胸の中自由自在千變萬化。繋ぐ髮文字の女子の力に大象止めんは愚か。男は玉の巵底なくもまゝよ。時には髭鬚厳めしき旦那樣なら我が手の中に丸め込まうと云ふ私共が、何も吝臭い。高が姑や小姑づれに然う然うぎゆう／＼云はせられてるにも當らない譯である。先んずれば人を制し後るれば人に制せらる。寧しろ此方からどし／＼進撃してやつた方が、生強ひ下らぬ不平に姑の陰言利かうよりは、幾ら氣が利いて居るか知れないと自分は思ふ。强からば一層强かれ。弱からば女らしく飽く迄も弱かれ。怎うせ人間は動物から進化したものだとすれば、道德の宗敎のと人並々に虛僞は煽動てじ苦悶は増させじ。口憚つたい次第だが、寧しろ其麼のは話せる人として自分は正直に面喰ひながらも敬服してる譯なのである。

御降りは陸軍の砲兵大尉。鼻のちよびりした、丸顔の、口の小さい目の細い眉の綺麗な頬つぺたの赤い、如何にも肉附きのいゝ脊の高い、二十位の新婚らしい可愛い方と六十ばかりの人品の美い切り下げの御隠居様とたつたお三人の水入らずらしい、旦那様は例の軍人氣質の餘り物事に拘泥り給はねばか毎時奥様の事を「おいこら」で怒鳴りすまして入らつしやるけれど、御隠居様は乾度「花子さん」とお呼びになる。小供らしい無邪氣い女で、一寸道やなんぞで御逢ひ申す様な事等があつても、忘れて居ら



つしやるのか御挨拶は抜きと云ふ至極の略式でもつて唯翻れる様に笑つてばかり入らつしやる。其の癖此方で意地惡う不圖氣の附いた様に、急に丁寧に御挨拶でも申し上げ様ものなら其れこそ、顏を火の様に眞紅に遊ばして其の什麽もお狼狽きなさり加減つたら、其れが又馬鹿に眞面目で居らつしやる丈其れ丈隨分と可笑しいんで、能く自分は這麽事しては面白半分にちよい〳〵調戯つて上げたものだ。普通の女なら、好かない女だとか人を馬鹿にしてるよ位に直ぐにも腹の立たう處だけれど、其處が人並勝れて頗る暢氣らしい方なんで、一

向氣にも止めず相變らず平氣で莞爾して居つしやる。

無論女中さんが無いんだから、朝だつて大概は御隱居樣が眞つ先きに起きて、何くれとお臺所の用を御自分一人で遊ばすらしい。で、時には花子さん御飯が出來たからもう起きなすてもいゝよ等と、障子越しに四疊半のお緣側傳ひ、ちよいと訛りのある御隱居樣のお聲が手に取る樣に聞こえる事もある。其れで無くつてさへ嫁姑の御間柄ですもの、人一倍に彼れ程氣の勝つた御立派相な御姑樣が、之れは又外見にさへ氣の碎心める彼樣お嫁さんを、能くまあ我慢して見てらつしやるものだとつく〲自分も之れには感心して居る。されば、嫁樣お姑樣の折合ひも能く御夫婦仲も至つてお睦まじう。春は夜長の沈丁花清う闇にも香りて、燈火赤々と一家團欒の笑聲は何處迄も聞こえるのである。

姉さんだつて

記臆がありませう等と能く妹が泣いて來る。恥かしながら自分の妹と來ては、其れは〱負け嫌ひの强情つ張りの疳癪持ちの、其れでつて存外氣の弱い神經質

な何かすると直ぐ氣を腐らして滅入り込んで仕舞ふ。殊更に自分が撰んで、姑樣のある處へ緣付けは緣付けたものゝ。斯うちよい〱泣いて來られるには、自分とて所夫の手前もあるもの少々今では持て餘しの氣味合ひなんで、其んなら一層離婚ちまつたら等と氣早やに威しても見た事があるけれど、扨て自分よりも本人の身にしたら兒迄ある仲を、其れでは餘り可憐らしくて堪まらないので、其の都度のこ〱と自分に出掛けて外ながら姑樣への御詫をして來る。甚だ以て癪には障る談しだが、之れも妹の可愛さ故。能く〱後で聞き正して見れば、妹とて滿更狡猾けては居らぬらしい容子。其れは姉の口から斯う云ふのも餘り變な樣だが、彼れ程勝氣な妹なんだもの。隨分自分のする丈の義務は兎に角勤めてるに相違無いと信じては居るけれど、其れがさあ怎うしたものか。御姑樣の受けがねつから能く無い。嫁つてから丸四年の年月を、未だに出るの這入るのと本氣で騷いで居たものだ。

何日だつたかも、夜遲う良人の留守に、

今度こそは私も思ひ切りましたよと泣き〳〵やつて來た。一體怎うおしだと云ふんだと詰いて遣ると、何の事は無い口惜しい〳〵はよの連發で泣き出したら最後、手がつけられない。と云つて一々聞き糺して見た處で、私が斯したら御姑樣が這麼顔して這麼事を仰つしやつた等と、怎うせもう下らない事だらけなんだから。其れはお前の邪推と云ふものだ、お前からして其れだものを、怎うして阿姑樣の方で御前が可愛がられるものかと頭懸けから小つ酷くさん〳〵叱り附けてやつた。而してお隣りのお嫁さんの實例を引いて、よし、主婦としての手腕に於て少々位の手拔かりが生じ樣とも、萬づ控へ目に何事も今少し大膽に行れと忠告した。處が妹は何と感じてか、何時も程駄々を捏ねず姉さん御心配を掛けて眞箇に濟まなかつたわねえと器用に笑つて、其の儘素直にすいと歸宅つて吳れた。



妙に其れからふつゝりと妹は泣いて來なくなつた。越えて一月ばかりして此方から訪ねて行くと、私の顔を見るが早いか、彼のお陰樣でねえとしみ〳〵妹は

云ふ。怎うです些と又泣いて來ちやあと調戯ふと、エー然うね何れと極り悪る相に苦笑つて仕舞ふ。見ればお姑様も以前とはずつと變つて、餘程打ち解けて居らつしやるらしい御容子なので、大分具合が宜さ相ねと歸宅りがゝりに自分は密と妹に耳語ちすると、もう大丈夫よと氣も無う。妹は矢つ張り若いんだつた。

無論自分の様な者は、

嫁姑の心理關係

等に就いて、人様の様に六つかしう學理的に説明する事は存じませぬけれど、少なくも私は此の經驗によつて何等か或る眞理を發見した様な氣持ちがします。其れは自分とて徹頭徹尾姑は嫁を憎くがつて居るものだと露骨に斷定する程の度量は無いが、併し決して可愛いとは思つて居らぬ位は即答し得る。此れが原因に至つては、所謂或る種の愛の反影として當然起こるべき、嫁に對する年甲斐も無き姑の嫉妬心からだと、隨分人を茶にして論ずる者もあるけれど、自分に云はせると怎うも怪しい。其れ或は其の原因の幾分は構成しやうが、女性の弱點は其麼單純なものでは決して無からうと思ふ。自分は殊更に此處に自分の經驗談を述べた以上は、此の上何も多く云ふ必要は他に認めぬ筈ながら、抑も攻勢守勢は皆様の御勝手次第、唯姑とて婦人であるからには、我れ〳〵婦人の有してる丈の弱點短所しか有つて居らないと云ふ事を承知して戴き度いんです。

## 朴氏の愛嬢

韓紳朴泳孝氏の愛嬢妙玉事山崎たま子はいよ〳〵本國なる父より迎ひの電報に接し去月廿日午後一時神戸驛を發し山陽線を經て歸國の途に就きたり當日は故郷へ錦の首途とてさらでも玉の顏の晴々として喜悦の色眉宇の間に溢れいそ〳〵として動作殊に活潑に服裝は驕らぬ色の淡草色シツクりとせる洋服姿似合しく束髮の頭には麥藁帽を戴きたり嬢は日本に渡りし年より指折りて殆ど十年に近き長の年月を送りたることとて今將た故國に歸る嬉しさはあれ了得に名殘惜しき乙女心の何につけ起れるものか一等列車に乘込みたる後迄も獨窓硝子を透かし馴染み深き神戸の街に袂別の眼を注げるも可愛し同伴者は朴完緒及び下婢も二人切にて朴氏の妻女さと子は明石迄見送りの爲め同乘したり見送りの人は數多からぬも親和女學校の同窓生及日頃昵近の人々プラツトホートムに嬢を圍み告別の辭を述べたり。

# 狂句に現はれたる女性

菊雨



狂句の何物かは、更めて之れを説明する必要はあるまいが、所謂其の穿ち即ち、奇警なる觀察と、巧妙なる言ひ現はしを以て、其の神髓とせる狂句が、女性を如何に觀察し、又如何に之れを表現したか、之れに關する古今の句作は、實に種々雜多を極めて居るが、茲には愛兒に對する母親の心情より、娘、嫁、姑、小姑、女房、妾、乳母、後妻、繼母及び、下婢が性行を言へる、左の數十首を抄出し、聊か解釋を試みる事とした。

親は弓子は弦にねる枕蚊屋

ねせ付けて我身をぬすむ枕蚊屋

枕蚊屋の狹い中に、弓なりに跼つて母親の添乳、子はまたそれへ弦の樣にのび〳〵と寢付けば、月代でもと、い、ソッと身をぬすむで拔け出る蚊屋の外、研ぐや合はせ砥、靜にまた立ち寄りて、チリヤッと一剃刀、二分金ほども剃り落せば、癇の強い子の忽に眼を覺ます。

笑はれぬ爲に泣かせる親の慈悲

まぜこぜに母も名を呼ぶ宿下り

可愛い子には旅といふが、是れは又他人の中へ奉公させて、無情、悲い泣きを見せるも、偏に子を思ふ親の慈悲、明けても暮れても、是れが無事息災を祈らざる間とてもないに、今日は揃ひも揃うて、機嫌よく宿下り、隣り近處の人達から、見違ゐる樣に成長してといはるゝも道理、弟と兄と、妹と姉と、母も我が子の名を交ぜこぜに呼ぶ可笑しさ。

すい息子辛い親父にあまい母

うたゝねを隈取る樣に掃いて行き

ほんの母朝寢の息子掃き殘し

合槌が母でなまくら物が出來

母はあまいと極められて、轉寢の娘起しもやらず、朝寢の息子を掃き殘し、其の我儘を增長させては……と、鍛ひにかゝる父親の手前、昨夜は大分と更けましてと、又しても埀るい其の合槌、懶惰者の出來ざらむや。

死にやば死しやなどとこは〳〵母はいひ
どうするか見ろとお袋何うもせず

さる程に、息子や娘の我儘募りて、我意のみ振舞う樣に成れば、流石に打ち捨て置かれもせず、此處へお出でと呼び寄せて、物柔かに言ひ聞かせても、何にやらかやら口對への、果ては襦袢の袖口びり〳〵と嚙み裂いて、何うでも儘に成らぬが世の中、此樣窮屈な思ひで生きて居るよりは、私は寧そ死に度と、勿體至極もない事ほざけば、アのこゝな大不孝者めが、死にやば死なやれと怒つては見たものゝ、若しや本當に死なれてはと、所詮女の心弱くて、何うするか見ろとはいへども、何うにもされぬが母親の常。

糠袋二番だしにて母あらひ
着て見やと母は口から髯がはへ
糸屑を嚙み〳〵親の門送り
よい娘母もほめての數へ入り

女は化粧が大事ぞと、出來得べくんば日風呂、日化粧もさせ度て成らぬ處、糠袋にまで心付けて、効用があらうと思はるゝ、一番だしは即ち娘に、かくて仕立卸しの晴れ小袖、着せて拔き取る仕付糸を、口に含めば髯のやう、其れをば尙も嚙み〳〵、送り出す門口、出て行く姿見送つて、さてよい容貌、よい娘と、母はほめ人の一人となる。

恥かしさ知つて女の苦のはしめ

十三四は人形が友、やがて五、六、七にも成つて、肩上げ取れて端折となれば、鬼も十八恥知り初めて、十九は女の初厄とある。

帶解は男を尻に敷きはしめ
羽衣が無くても娘天上し

七歳は帶とき、嫁入ほどの仕度をして、出入の男の

肩車に乘つたが最初、兎角女はこましやくれて、いつしかに其の容貌自慢、服裝自慢、眞實其れが美人でも、是れ見よがしに天上されては、迚も鼻持が成つた話でない。

妹は杵屋で兄は舂屋なり

女湯は稻田姫ほどならべ立

洗髮脇の下から人を呼び

威風りん〳〵と花簪が鳴り

花の雨寢ずに塗たを口惜がり

中からの家庭には先づ少ない事ではあるが、父兄は粒々辛苦の汗に、日々の生活を求めつゝあるに、女は晝湯に、大蛇退治の稻田姫が、並べた甕ほど小桶を揃へて、さて髮洗ひには、母親をさへ呼立つる、威風凛々たる其の裝い、花簪まで飾りちらして、杵屋何某が許へ長歌の稽古通ひ、此樣のが即ち、翌日は花見と結はした髮を、壞して成らぬの氣遣ひから、一夜を坐して明かして曉方しよぼ降り注ぐ雨の脚を、人でもしたかの樣に怨言つた擧句、飯も食はずに寢る奴なり。



面白く目口の動くぬか袋

湯氣の立つ形で鏡の蓋を取る

そばかすが有つて二八の厚化粧

紅猪口のすりこ木にする藥指

口べにの時脣に反りを打ち

聟えらみする内柳臼になり

右手に左手に、糠袋の面白い使ひ分け、血の出る程に磨き上げて、湯氣立つ儘の鏡の前、厚化粧してそばかすを隠せば、此度は藥指に紅猪口かきまはして、唇反らす口紅の、笹葉娘の聟えらみ、彼れの是れのと撰り嫌ひする中に、柳腰は變じて搗臼の、見つともない姿に成り了る。

硝子でなくても母はあぶながり

三五から夜中出さぬ娘の子

小娘と飛火は捨てゝ置きにくし

親は子を見る明あつて、よく透き通る硝子玉、これと小袋は油斷の成らぬ破れ物として、三五十五の春からは、夜風も厭ふ蕾の花、飛火と共に捨て置いてはいかな大事の起るも知らぬと、用心おさ／＼怠りなし。

こゝをよう聞きやと娘を遣りたがり

ころび斑乳が紫色に成り

生涯生家に居らるゝではなく、いづれは一度、出でて夫に従はねば成らぬ其の身の上、此處の道理をよく聞き分けてと、强て我が娘を嫁けたがるも、聟の器量も、行先きも、鍋と見定めた上の話、誘ふ水あればいなんとぞ思ふ年頃のものを一人置いて、若しや不埒な淫奔事から、乳房の色でも變つて來て、父なし子でも生れてはと、親は苦勢の絶ゆる間なし。

我が尻はいはず盥をちいさがり

行水の盥少さきは、其の尻の大なるが爲なり、嫁して夫の機嫌が取れず、舅姑の氣色を損ずるは、皆な是れ其の身の到らざる故と、よく／＼心得置かるべきなり。

麥搗いて居ればこそあれあの娘

雛買ひし女は今朝の嫁菜賣

雛店で花見に行かぬ筈にする

被ぶつた手拭から溢れかゝる髪の艶、目付きなり、鼻筋なり、愛らしい口元、花のやうなる、其の顔を、惜し氣もなく日に爆して、襷紺の筒袖、麻の葉の、湯卷も對の、長閑に唄たう歌に合はせて、搗くや麥搗の其のあいまには、嫁菜を摘むで、町に鬻さいで、我れ

と妹の雛買うて戻る、今年十九のいゝ娘は、美人といふより稼ぎ人として、居村計りか近郷近在、八里四方に名代もの、雛買うて、花見は止めよと言ひ聞かされる、町家の娘の働きのないとは、共に同日に論ず可きではないのである。

女客ものもふなどゝ笑ひ込
誠にのいひくらをする女客
女どしどこからあらを見出し合
女客猫から先へいとま乞ひ
立さうにして又咄す女客

ものもふと惡戲ながら笑ひ込むだ女客も、主人が居るのに急に改まつて、誠に是れは、誠に何うもと、さも窮屈な挨拶振りを、氣の毒がつて主人の座を外



せば話は忽ち餘處の女房を引きあいにして、頭の先から爪先きまで、彼アの、係うのと批判して、さて思はずも長座して、三毛やさア卸りませんか、、、モウおいとまをいたしますと、立つかと思へば立つでもなく、左樣々々私は匆々かしい、肝腎の用事に伺つてと、繰り返へし、繰り返へし、是れからの談話が又、苧環いとゞ長々しいものになる。

仲人は鬼千疋をころすなり
仲人は小姑一人殺すなり
姑はぢき死ぬ樣に仲人いひ
ちつとべいものはあるがとお仲人
かへり咲仲人つぼみのやうにいひ

所謂これが仲人口、鬼千疋と比喩られた、小姑一人無い樣に

話す計りか、姑の壽命も縮めて仕舞うて、今にも直に沒くなるといふを、同じ仲人でも田舍者は、生家には田地の何町歩、高い見上ける生垣の上から、ヌッキリと見へる白壁の三戸前、以前は庄屋で筋目は正しい、其家の二番娘でこそあれ、生れ付が利發で、口數聞かよ、縫針仕事、琴、胡弓、藝といふ藝は全然仕込むで容貌も乃ち十人並、尤も少と計り痘痕はあるが、ホンのパラ／＼、目立つ事ぢやアありましねエと、何うでも一つ纏める氣で、出戻りの古手、小六月に咲く返り花さへ、蕾の花の花嫁のやうに言ひ拵ひる。

見合する迄はおんみつ二三人
恥かしき顏見世に行芝居也
見たり見せたり一兩十匁
そらつ茶を呑み／＼見たり見られたり
一生の顏を目出度あかめ合ひ
顏見世で見立御構で直が出來る

百年の苦樂を任かせうといふ大事の聟がね、固より仲人口は當てにならずとして、見合する前にも一人ならず、二人三人の隱密を派して、血統始め種々探りを入れて、いざ見合には格好な芝居見物、狂言も見、婿も見、自分も見せる、棧敷の代が昔は一兩十匁、或る時は又日を期し、時を定めて花壇の茶屋に、澁茶呑むでも、呑まないでも、互に見交はす顏と顏の、ポッと夕陽に茜色、あれなれば納得、是れなればいゝと、大圖目出度其の場を切り上げて、これから愈々お構の見分、内處の詮議に取りかゝつて、やるか、娶るかの直が出來る。

釣臺で娘に錠をおろしに來
花と花向つた中へ蝶二つ
めで度さは御座敷に舞ふ蝶二つ
女夫づれさらす後に比翼網
一生に一度男へ咎めてさし
島臺がないと亡者と施主のやう

さて結納の取り交はせ、酒とは言はずに家內喜多留、扇を末廣と緣起を祝うて、切ると歸るは忌み詞、其の品々を釣臺で運び込むで、聟と娘に卸す錠、愈々貢進

吉日を撰むで、玆に花嫁、花婿の、二つの花の揃うた中へ、女蝶男蝶の盃事、比翼の鯛も備ひ置かれて、是れが一生に唯一度、受けた盃嘗める樣にして、夫と定まる男にさすが、衣裳は白無垢、黒紋付、鶴龜遊ぶ島臺なければ、何うやら死人と施主のやうとは、互に百まで九十九迄、死むで行くまで添ひ遂ぐる、之れが固めの儀式とある。

一生に目出度家をはき出され

花嫁の供は家鴨と藥罐がし

うつくしい髮三日目にほどかれる

五日目もまだ我が家と思はれず

歸つて來るなの是れもまた緣起、花嫁の容貌を引き立たさう爲に、就中不格好な、歩く姿の家鴨の樣なる下婢と共に、藥罐頭の番頭を供廻はりに、いざ我が家を立ち出づれば、直ぐに箒で掃き立



られる、かくて三日目といふ三日目には、美しく結はれた髮を解いて仕舞うて、家と定まつた家ながらも、先づ當分は無我夢中、我が身が何處に居るやら知れず。

名も呼ばずモシとも言はれ内が花

糸を捲くやうにして嫁餅をくひ

折鶴にふいとふくれる嫁の顏

嫁の酌ちつとゝいへばちつとつぎ

羽子の子に嫁左利き目付られ

顏の墨嫁落ちたかへ〳〵

美濃へ穴あけて三河を嫁のぞき

歌がるた人のてうばを嫁あらし

夫の本名呼ぶにも呼べず、さればとてモシこなさんへとも言はれぬ内が花嫁御、口をすぼめて長く引く餅糸をまく樣に食ひ了つて、其の當座面ふくらます事などは、所在なさの折鶴、尻からフッと吹く時許り、嫁女のお酌と舅姑

のさゝ事、ちッとゝいへばちッと注いで、あまり曲がなさ過ぎると、笑はれるのも一興や、箸と筆とは左に持たねど、羽子つく折に左の勝手を見付られて、ハッと思うた其の機會に、受け損じた罰に處されて、額の上へ一文字、墨は早速拭き取つても、何んだか痕が殘つて居るやうな氣がされて、やがて逃げ入る納戸口、美濃紙の障子の穴から、あゝら目出度の三河萬歲、出るに出られず窺て居る後から、突然に姉さま今度は歌がるたよと、妹の聲に唆かされて若しや之れにも打ち負けて、また塗られてはの用心から、自然人の持ち場を侵畧してまでも、何うか負けじと一生懸命。

　智惠は捨て身に實を入れて嫁の孝

　鳩烏おしどり嫁の三傳授

女の智惠は轉び安し、其れよりも嬉しきは實、されば嫁たるものゝ心得は、鳩が三枝の其の禮儀と、烏が反哺の其の孝と、鴛鴦の契りの夫婦間、仲睦まじくする其れと、三ツの外に秘傳はない。

　嫁入の時もゐばたは荷が重し

　持參金疱瘡除の守りにし

　顏疵にして五百兩持參金

　持參金嫁なけなしの鼻にかけ

滿面の痘痕、輕石の如くにして、自ら是れ緣に遠ざかれば、衣服調度の一通りの外に、其の疱瘡除のお守は持參金、荷物をヅット重くして持せてやるも、親の情けと知るや知らずや、附け木の樣な扁平い、あるか無しかの鼻先へ、嫁は是れをばブラ下げて、頻りに御持參風を吹かせたがる。

△家庭要鑑　大日本淑女學會編

家事を取るに必要なる事柄を網羅したるものなり、育兒、衛生、經濟、手藝、禮法、料理、其他現時の家庭に粗々必要なる事柄を集めて完成したるものなれども百科字書の如くに綱目は繁からず、其代り一科についての說明は極めて詳密なれば學校教育の有無を問はず家政を取る人の爲めによき參考書たるべし。只記事を助くる繪畫の挿入なきと、說明の方法のあまりに平易なるは聊か遺憾とするのみ。(定價貳圓五拾錢　駿河臺南甲賀町嗣民書院)



# 一家の不平

＝主婦への御注意＝

東城

其一　主人の不平

妻もそれはよく働らく、經濟も可也うまい方だ、別にこれと云ふ批難もないが、何處までも自個本位で、何を云つても『はい』と云つた事がないには困る、それに女性の常かは知らんが、物に對して準備と云ふ事が少しもない、空が曇れば雨が降るに極つて居る、けれども降るまでは、矢張天氣の積りであるらしい、萬事がそれだ、かうすればかうなると云ふ明がない、雪降らぬ先きに窓を閉すと云ふやうな要意がないから、鼻風邪で居る間に養生すれば可いものを、三十八九度の熱が出るまで平氣で居て、さて熱が出ると、今にも死ぬやうな事を云ふ、だから萬事がそれで推されて、客の顏を見て茶を沸かす、正午の號砲を聞いて米を炊ぐと云ふ風だ、困つたものだ、これまで『お前には要意がなくて困る』と幾度云つて聞したか知らないが、一向耳を假さない、寧ろこの不要意を得意として居るものらしい、一朝災厄が一家を襲ふたら、什麼する積りだらうこれには實際閉口する、自個本位不要意、これを女の通弊としたら、成程古人の云つた通り訓へにくいものに違ない、良妻は獲難しとは能く云つたものだ。

其二　舅の不平

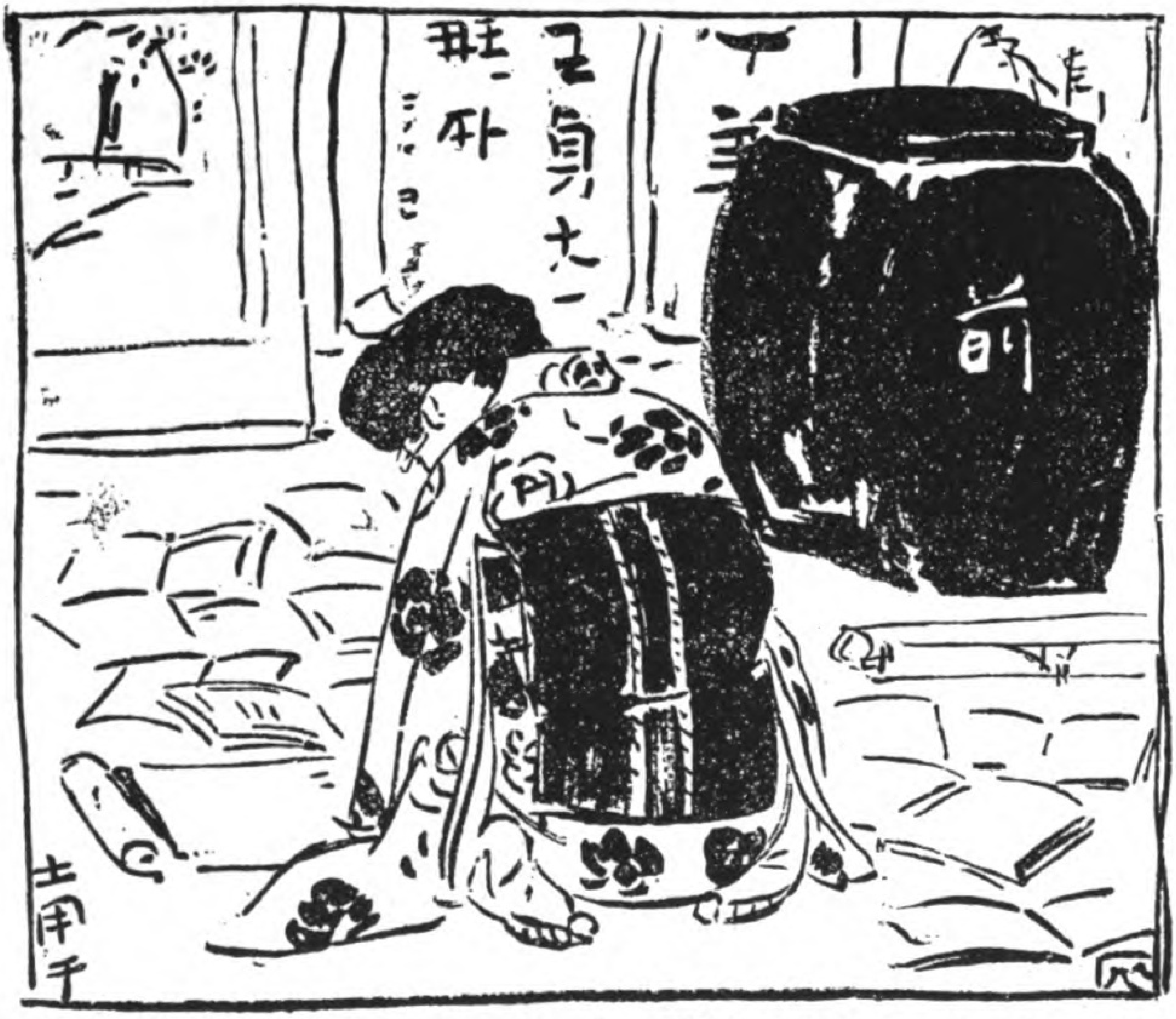
何と云ふ嫁だらう、第一舅を舅とも思はぬらしい、只三度の食事をあてがつて、飼つて置けばそれで嫁の役が濟むものと思つて居る、心得違ひだ、も少しやさしくしてくれても損は行くまい、茶菓子と云つて出すのを見るといつが日も煎餠だ、齒のないのを承知して、故爲とあんなものを出すのだらう、其癖何か孫が病氣でもするとなると、やれ祖父さん、それ祖父さん、醫師へ行つてくれ、藥を賴む、舅を捕へて小使あしらひ

ぢや、悴がまた鼻の下が長過る、あれを別に不埒とも思はんやうぢや、それに聞いて居ると何か英語で話しよる、調法な日本語と云ふものがあるに、英語を使ふとは能く〳〵不自由な事ぢや、惡い事を老人に聞かせまいとの沙汰なら格別ぢやが、さうでもないらしい、英語の側に老人は居られん、それも可いとして、時々妙なものを食はせよる、雪駄の干物のやうなビフテキとやら云ふものぢや、甘味いどころか、堅うて齒に合はん、それをまた悴は甘味がつて食ひよる、夫婦と云ふものは可笑しなものぢや『俺にはも少し軟いものを食はして貰いたい』と云ふたら翌る日から豆腐一式の料理ぢや、忍川か笹の雪へ毎日法會に招ばれて居るやうなものぢや、嫁の言草が可い『豆腐は牛乳や鷄卵同様の滋養があるさうですわ』滋養になるか知らんが少しも甘味くない、悴に嫁の後言を云ふと思はれても殘念ぢやから、別に不平も云はんが、いやはや世間舅になるものでない、神馬の飼秣しとは此事ぢや、情けない眼に遭ふものぢやよ。

## 其三　細君の不平

お舅があると云ふ事も承知で來た、良人が什麼云ふ人柄であると云ふ事も承知の上の結婚だから、今更不平なんぞ、勿體ないとは思ひながらも、つひ〳〵女の愚痴に返ると、零したくもなりますわ、それはお舅と云つても、あの通りの方、此方の仕向け次第で、什麼にでもなる硬いものは御免だと被仰るから、お豆腐ばかりつけて置いても小言一つ被仰らない、先づ〳〵世間のお舅から見たら世話の燒けない方でせう、良人もまた別にこれと云つて難のない人、これと云ふ道樂はなし、妾の云ふ事は乾度聽いて下さる、何の不足もないやうですが、只家の事を少しも關つて下さらない子供が病氣をしやうが、屋根が漏らうが、一切お關ひなし、障子張から、壁の修繕まで僕にしろと被仰る、餘りだと思ふ、そしていつかも此事を申上げたら『それは不可能だ、外務大臣と内務大臣とは兼ねられないとそれッ限り、何の事だか能くは譯らないが、御自分は外務大臣と同じだから、家の事は關はないと云ふ意

味なんだらう、だつてそれは少し理由が違ひはしますまいか、これが百人二百人の家内ならばそれでも濟むでしやうが、僅か十人やそこらの家内お役所の御用が多いにしても、少しは家の事も見て戴かなければ、儂一人で什麼手が屆くものでせう、子供の衣服を買ふにしても『今度は甚麼柄に致しませう』と相談すれば、『そんな事を知つて居る位なら、呉服屋を始める』萬事がこれですもの、儂を何と思つて被入るのだらう、萬能の神とでも想つてらしやるに違ひない、其癖やれ西洋料理の稽古をしろの、



それ内助の功を現はしてくれの、男が發展するだけ、其妻も發展せねばならぬの女の發展とは別でない、本を讀め、常識を養へ、交際をしろ、考へても譯りさうなもの、家政、育兒、裁縫近所の交際、冠婚葬祭の奉行、これで隨分儂の職責は重いと思ひます、其上、其上と重荷を脊負はせて良人はまた儂を何と思つて居るのでせう、このうへ來ると萬能の神どころではない、牛馬のやうに心得て居られるのでわありますまいか、牛にしろ、馬にしろさうさう重荷を背負はせられては倒れるでせう、それと丁度

同じです、僕が倒れたら什麼するお積りか知ら、餘り女權と云ふものを蹈つけたなされ方だと思ふ、こんな壓迫を受けてまで、妻は飽くまで良人に從はなければならないものでしやうか、女と云ふ者が損なと云ふ事は兩親からも、能く云はれ〲しましたが、今漸う思ひ當りました。

其四　小姑の不平

嫂さん程同情に乏しい人はありはしない、自分に好い衣服が着たければ、他人だつて皆着たいに極つて居る、それに自分ばかり流行の衣服を拵へて、僕にはお古ばかり下さるんだもの、稀には一枚位新らしいものを拵へて下すつたつも、よささうなものだらうと思ふこの分で行つた日にはいつ嫁入が出來る事かなんぼ兄懸りの身だからつて、さう〱お古ばかりの衣服でお嫁に行かれるものぢやアない、兄さんが餘り家の事を關はな過ぎるからこんな事になつてしまふ、嫂さんの氣ぢやアいつまでも僕を家へ置いて小間使同様に使ひ倒さうとするに違ひない、可厭な事、鬼千疋と云はれていつまで、こんな家に居る事があるものか、何うしてこう僕は不幸せに生れたらう、せめて阿母さんでも居ればこんな眼は見ないだらう、お友達のお雪さんもお嫁に行つた、お花さんもこの間婚禮したと云つて來た、お友達は皆嫁いてしまふのに、僕一人かうして娘で居る、何だか氣耻かしいやうだ、兄さんに謎をかければ、『今に伯爵を婿にする』なんて笑はれてしまふ、嫂さんはまた其場限りのお世辭を云つて『もう少しすると五荷位の仕度が出來ますよ！』何を入れたら五荷の仕度になるんだらう、異逆に炭や薪まで釣臺へ積むのでもないでせう、何も嫁に行かれないのばかりが不平ではないのですが、一事が萬事さう云ふ風だから、面白くはありやアしない、女學校を卒業した嫂さんにも似合はない、何と云ふ通りの悪い人でせう、僕は只あの嫂さんの側に居るのが、可厭！　可厭！　可厭!!

其五　書生の不平

僕は先生に養はれて、先生の御用を足すべく來て居るのだから、苟くも先生の御用とあらば、水火も辭

せん積りぢやが、奥さんの御用はちと恐れる、それも御用によつては、先生の奥さんぢやから、快よく勤める覺悟はあるが、第一子守は恐れる、『鳥渡これを護ておくれ』と來たが最後往生ぢや、意識のない我儘千萬な坊ちやんを、怪我をさせぬやう、泣かせぬやう、愉快に遊ばせねばならぬ義務があるのぢや、先きは愉快ぢやらうが、此方は苦痛ぢや、何となく此方の苦痛を洗濯して、先きの愉快に代へてやるやうな氣持ちがする、それも泣き出したら直ぐお小言頂戴ぢや、『お前が豫く護てくれないからさ!』人形なら兎も角、生きてる以上は泣きもしやう其責任を僕に嫁するのは酷だ、それも未だ可なりとして、中將湯の御用、紺屋へのお使者、女髮結の迎ひなど〻來たら、堂々たる男子を侮辱するの甚だしいものぢや、先生の德には服するが、奥さんの德に服し居らんのぢやから猶苦痛ぢや、一ヶ月に一度や二度書生部屋へ鹽煎餅のお土産ではとても勤まつた沙汰ではない、殊に吾輩の耳にかう云ふ事が屢々響く、『坊の悧口ッたら、家の書生なんか敵ひませんわ』三歳の童兒を當年二十歳の青年と比較して二十歳の青年三歳の童子に及ばんとあつては、其愚や寧ろ憫むべし、吾輩大に反省せねばならぬが、常識があつて、かうして先生の御用が足せる以上、坊ちやんに劣ける筈がない、試みに



坊ちやんを四方に使せしめよぢや、滿足に使命を全ふするや否や、これからして第一伺ひたいものぢや、蛟龍も地中にあつては螻蟻に劣る、奥さんよ、他日僕青雲の志を得たりとせんか必らず後悔する時が來るだらう、まづそれまでは不平の取置きぢや、嗚呼人世書生の身となる勿れぢや。

其六　下婢の不平

旦那樣は無論好い方、御隱居樣もお人柄、奥樣もこれと云つて難もない方だが、何故あゝ人使ひが荒いだらう、お使に行つて歸つて來る、直ぐに洗濯だ、洗濯をしてしまふと、また直ぐに煮物と云ふ調子で、少しの暇つてない、それもいゝとして、御自身臺所へ出て來ては、やれ薪の燃し方が烈しいの、それ醬油の出し方が多過ぎるの、茶碗の洗ひやうが惡いとか、箸が一本流元に轉げて居るとか、幕無しの小言と來ては遣切れたものぢやアない、下婢だつても人間だから、さうさう奥さんの云ふ通り出來るものぢやアない、奥さんにしても御自分でやつて見たら、さう滿足に出來るものぢやアない、旦那樣が好い方だから居るやうなものの、さもなければこんな家に誰が一日だつて居るものか、其癖勘定が細かくつて、少し物が高くつても、足駄をはいたやうに感ずるのだもの、遣切れたものぢやアない、そこへ持つて來て、旦那樣のお妹子、これがまた勿々の難物と來て居るから奉公人は往生さ、まアまア今に好い風も吹くだらう、それまでは辛抱することと！

其七　天下の主婦へ御注意

御覽あれ、僅かに一家十人に足らぬ家庭、而も先づ表面は至極平和に見える家庭にさへ其一家の人々の胸中を解剖したら、これだけの不平はあるのです、否、この位の不平は不平と云ふに足らぬので、いかなる狹い小人數の家庭にも、誤解、猜忌、嫉妬、陷擠、あらゆる煩悶が纒綿して、而もそれ等の不平が悉く主婦の上へ懸つて來るのですから、主婦たるものは餘程の注意と、餘程の忍耐と、また餘程の雅量がなければ不可ません、この注意忍耐、雅量、これ等は何によつて養はれるかと云ひますと、それは趣味の涵養もありませう、自個を信ずる力にもよりませう要するに主婦になつて、主婦たる資格を維持すると云ふ事は極めて六ケ敷い事と思ひます。



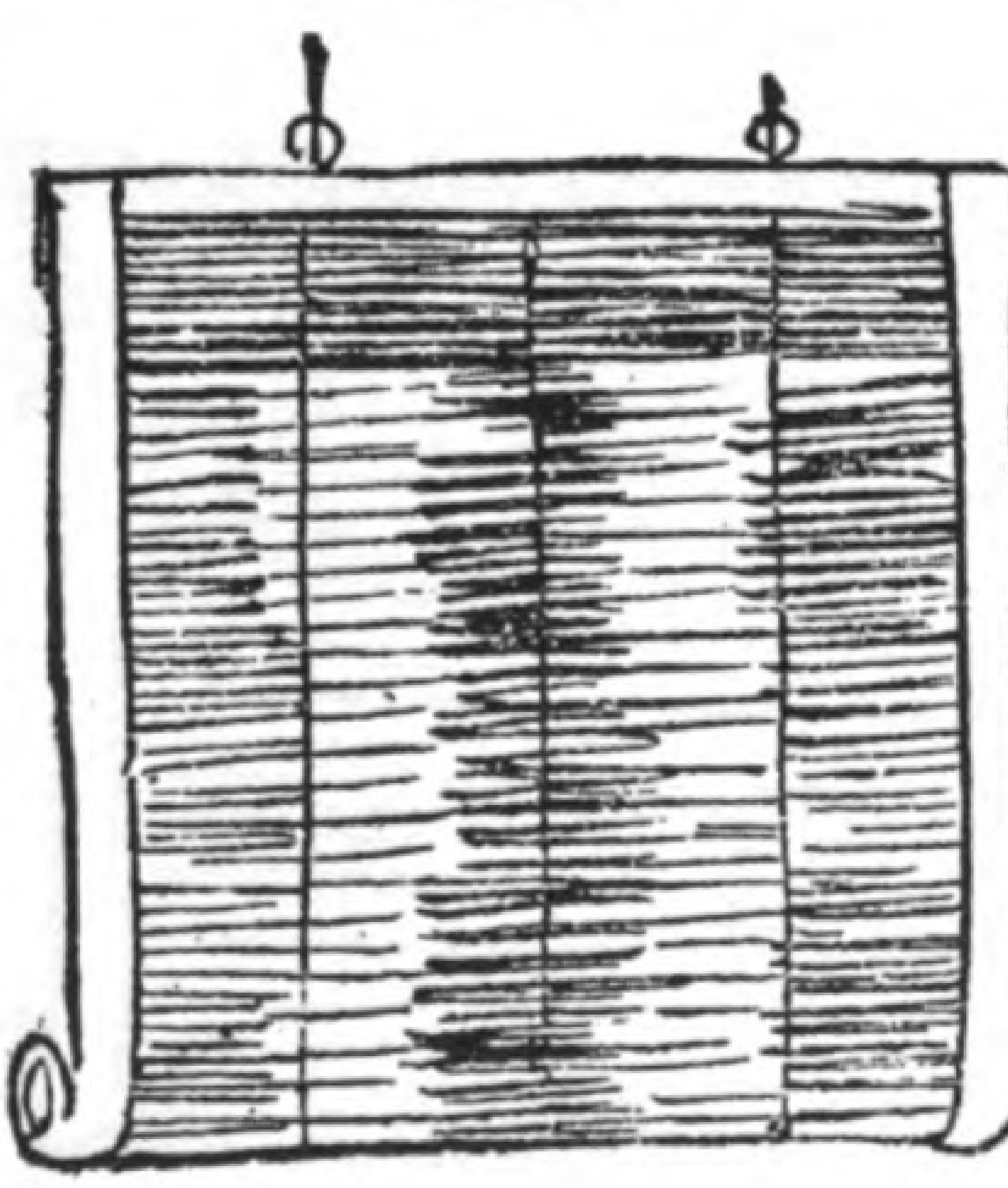
# 夏向 新流行の家具

日用の家具も季節に由つて嗜好が自ら異なつて來る、團扇手の忙しい今日此頃、納涼用に適する嶄新の流行家具を紹介しやう。

△新流行の簾類は何?

綠色濃き新樹の葉越に、風薫るてふお座敷では、普通編の葭簀垂や、大阪簀垂では配合がとれず爾うかと云つて萩簀垂は色が強いから、暑くるしい感は免かれぬ、所で高尙優美の簾と云つたら、關西から輸入される高等御簾である、單に御簾と云つたら誇大に亘るが、其の實は簀垂の一種で、御簾擬ひと稱しても克い、

元來御簾と簀垂の差は、原料の竹材の割方にあつて、御簾は角に割つて皮目を磨き、簀垂は身と皮を分て籤に製す、此籤で編だのが則ち高等御簾である、高等御簾の種類にも鹿の子簾、縮簾、皮籤、身籤と別れて居て、鹿の子簾は其の中の最優等品で、捻籤へ絹糸を捲てあるから鹿の子斑に見え、此原料の捻籤が則ち縮簾と云ふので、同品は化學作用で身籤を捻た體裁が、簀垂に製したら縮て見るので、自然此名が起つたとやら。



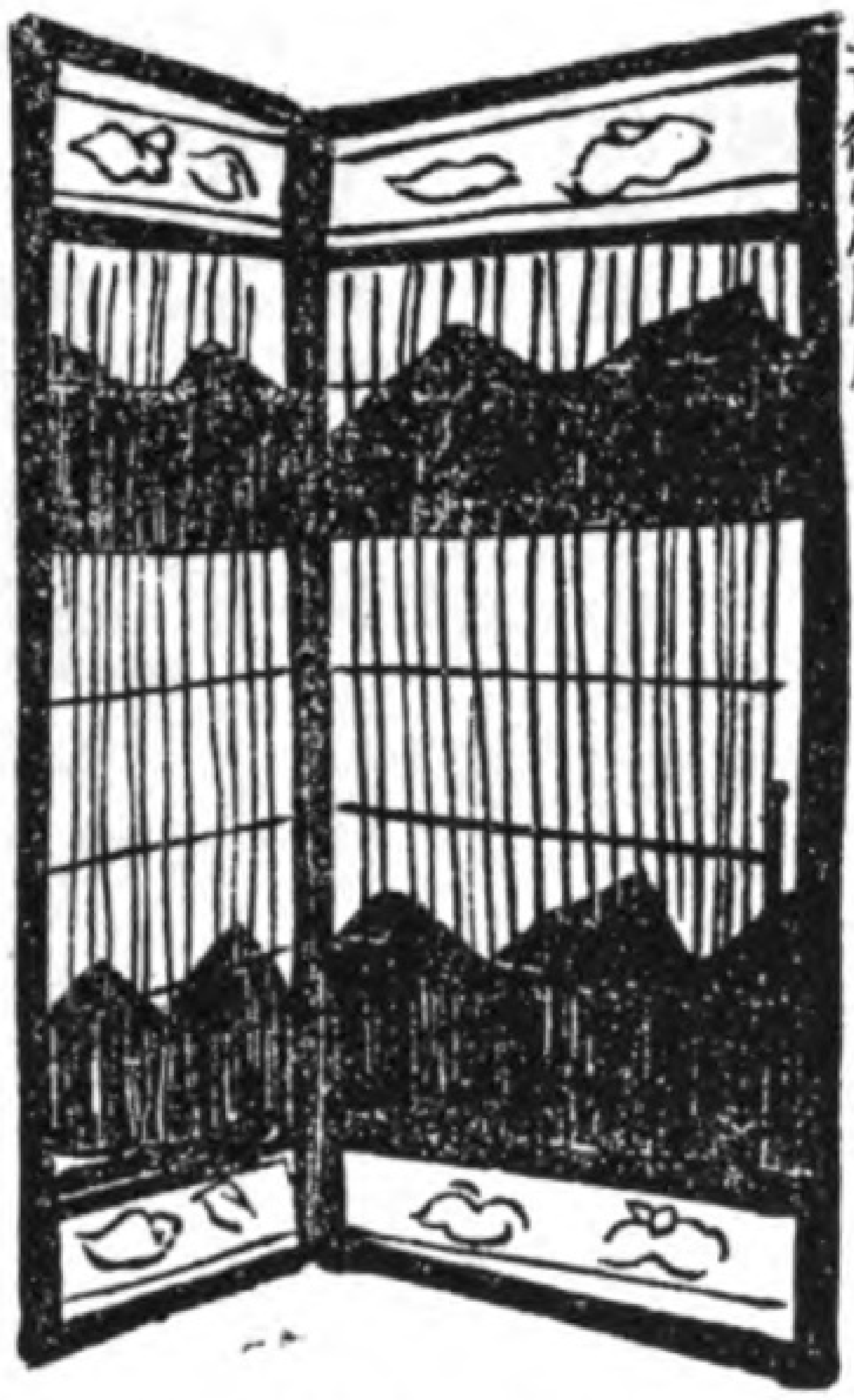

夫から皮籤……身籤であるが、皮籤とは皮竹で製し身籤とは身竹で製した者、此籤簀垂で模様を顯したのを、俗に丸拔御簾と云つて居る、身籤の側には染色で縞を編出した、風流好みも亦尠なからずだが、身籤は高等御簾中の最廉價であるさうな、併し簀垂の中で實際の廉價は伊豫簀である。

伊豫簀と云つたら胡蝶が飛んで、銀張りの心と云ふ字が聯想されるが、今日の伊豫簀は芝居に於るやうな

野卑なものでないから、地出來の葭簀は、之が爲めに壓倒された傾向である、此伊豫簀に反し最高價なのは茹蘭簀と云ふのだ、茹蘭と云つたら蘭の原料のやうに思はれるが。

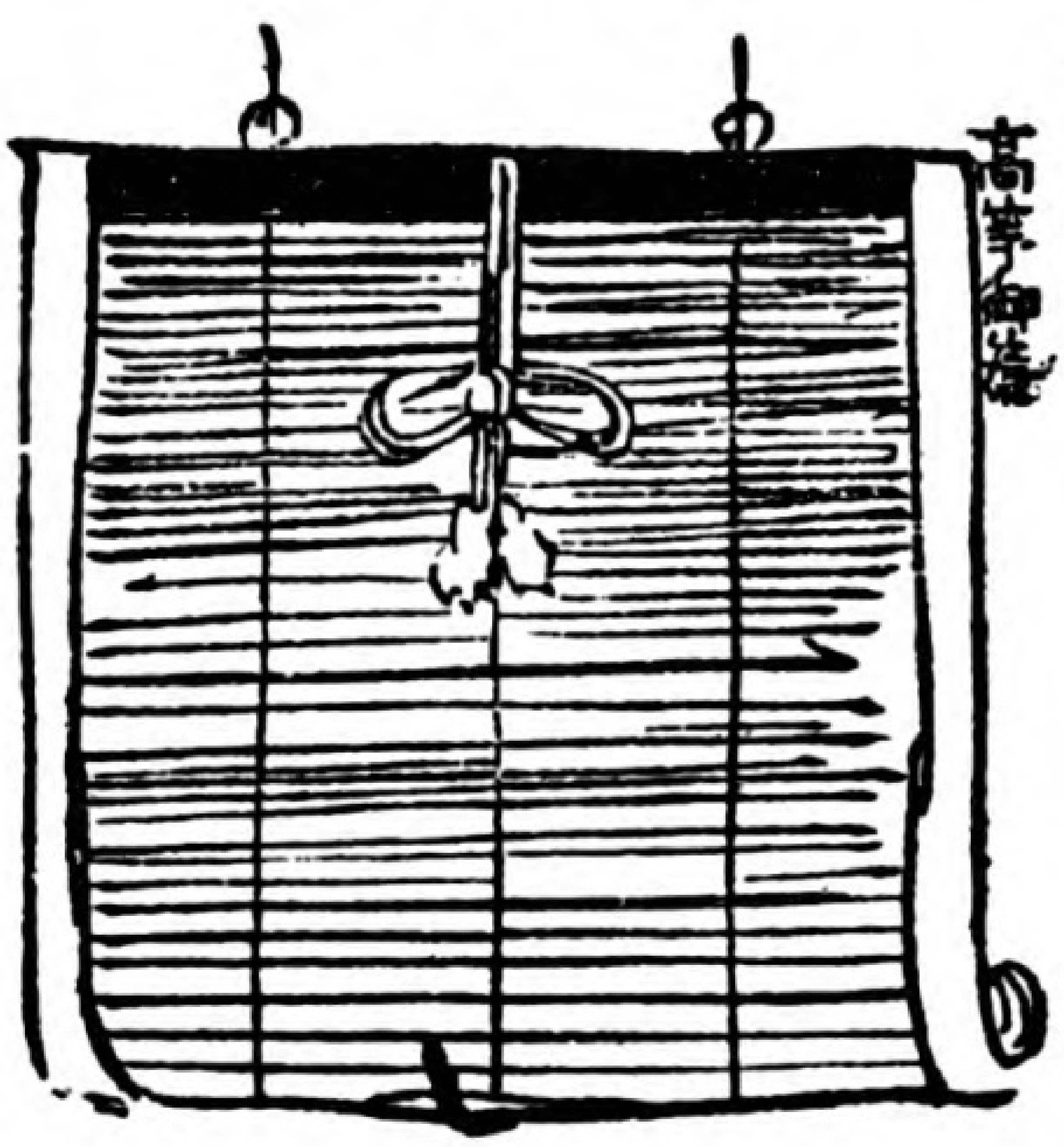
其の實は支那の高山植物で、蘭の一種ださうだが、習慣として昔から茹蘭と云つて居る、茹蘭簀は恐らく華族道具となつて居て、舊時は庶民の家庭では需用せぬとやら、夫に昨今では御簾屏風と稱する簀垂屏風が流行家具となつて來た、御簾屏風は四枚折……二枚折で、簀は御簾原料の竹籤を用ゆる。

芒御簾屏風



御簾屏風には竹籤類よりは、却つて芒の方が優美である、芒は穂の際が色變りとなつて居るから、揷畫のやうに天然の模樣が顯れ、何處やらに雅致があるのである、其の屏風の枠は、神代杉や蠟塗が流行となつて居る、又高等御簾の端廻りは金襴、純子と云つた裂地、乃で價格は最高等品の茹蘭御簾が、六尺に三尺巾一枚八圓内外、最下等の伊豫簀で同寸尺物が一枚七十錢内外。

高等御簾



細表は專門の商店に就てお問遊ばせ、此價格は高等御簾のみの代價で、裝飾の端廻りは別物となつて居る、其御簾の端は木綿巾一尺あつたら、一枚分に相當するとやらだが、端廻りの裂地代は一圓五十錢以下五十錢位まで、乃で御簾の產地は竹籤が伏見附近、伊豫簀が大阪の難波より木津邊、東京附近でも出來るさうだが、細工が兎角に粗末であるとやら

△新流行の敷物類は何？

夏の敷物と云つたら舊時は花莚に、殆と一定して居たやうなものだが、近年は衛生を重んじるので、花莚は室内の敷込みとなり、寢具の上敷や座蒲團の需用は減じた、先づ座蒲團には越後縮、壁織、秩父銘仙、麻布、綿麻混織と云ふので、上等は一枚四圓五十錢位で、下つて七十五錢内外迄あるのだが、之等は綿麻混織の置形ださうな乃で當年の流行は。

一般に辨慶縞と云ふ傾向であるが、此座蒲團の價格は綿に由つて上下があり、同じ地質の皮でも青梅綿と赤綿、打ち返し等の相違で價格が違ふから、同じ皮の座蒲團でも一應には云へぬさうだ、併し平民的には矢張り備後草の花莚なれど、蒲團仕立となつて居て、綿代用に毛屑が餡に詰込んである、恁う云ふ按排に上流社會では絹麻の地質を選むので、一時流行した皮座蒲團需用者が、メッキリ減じて來たとやらだ。

夏座蒲團



夫から室内裝飾用に敷込む花莚だが、近年は夏季の敷物として需用が嵩み、上流の家庭では夏季に花莚を敷込む向が多く、之も備後草で製造したので、模樣は惣模樣……飛形等であるが、嫌味のないのは無地に限るとやらだ、此花莚は三尺巾で丈二十間まであるさう

裾模樣の蚊帳



だから、如何な廣大座敷へでも、繼目なしで敷詰られるので、裝飾用に重く用ひられて居る、其の代價は一疊分に對し普通品は六七十錢だから、疊代用に花筵を遣ふので、今日では海外輸出のみでなく、內地の需用も嵩み增加をしたのである。

△新流行の蚊帳は何？

蚊帳の萠黃と一定して、別に流行はなかつたものだが、社會の要求は兩三年前より蚊帳に迄及ぼし、在來の萠黃一方の染色や細美の蚊帳では堪能しない、爾うかと云つて異形の蚊帳が流行するのではなく、蚊帳と豆腐は矢張り角形に限られて居る、乃で流行蚊帳と云ふは、蚊帳の地質と其の染色にあるのである。

だが、上等蚊帳は本紗を除く外は一般に麻蚊帳、之に次ぐのは近江織物會社で製造する、舶來龜甲紗の原料で織出した美好紗と云ふのだ、價格も本麻織より安値で體裁が克いから、却つて本麻織より歡迎され、當年の流行は先づ美好紗にあるやうな傾向、夫も之も價格の如何に由つて支配さる、然專忌憚なく云つたら格安で、體裁が克い物か流行するのである。

けれど實際に流行の勢力あるは蚊帳の染色で、新調するには必ず萠黃以外の染色を嗜好する、其の染色は草色、鶸色、水淺黃、水晒、裾ボカシ、裾模樣等で、無色は白晒と云ふのださうな、此染色や模樣に由り名稱を異にして居る、否名稱は染色や模樣より起つたので、裾ボカシを眞砂、白地を白妙、水淺黃を初霞、裾模樣を花霞、夫から萠黃地は若柳、常盤、高砂と稱して居る。

然う變り色の流行といふのも、强い色の萠黃地よりは色淡い方が、暑中には凉しく感じられるので、一般の嗜好が變り色となつて來た、夫に蚊帳の縫目なしが非常の流行である、筆の序でに在來の本濱手織蚊帳の名稱を記さう、宮村、本濱、沖風、卯の花、手織、本麻手織等である、此代價は日本橋の近江店には定價表が備附てあるから、價格は省略したのである。

# 良人を禁酒せしめたる妻の話



良人の禁酒するに至りし迄十ヶ年の辛苦を嘗めし某婦人の實話を得たり、名前はお預りの約束故茲には書きつ。(S、A生)

△大酒家の家庭

家庭の不幸を喞ちて面白からぬ日を送られる奥様方の御述懐を一々伺ひましたら、定めしさま〴〵の苦痛や煩悶が御座いませうが其の中には大酒家の良人へお嫁縁きになられたゝめ、常に人知れぬ涙を絞るお方もあらうかと思ひます。

酒屋の御用聞きが出入りします家庭の裏面を考へますと、私は唯何んとも云へぬ一種の怖ろしい悲哀の念が胸一杯になり、酒の爲には必ず奥様の御心配が絶えぬ事だらうと漫に御同情申すので御座います、と云ふものはお恥しい事ですが私の家庭にも是れと能く似た忌はしい時代のありましたので、其時は酒と云ふ惡魔が染々怨めしかつたからであります。

家庭の内幕をお咄しするのは誰しも好まぬ事で、成可く秘したいのが人情で御座いますのに、其人情に背いて自分の家庭の秘密を打明けると申すものは、私の痩せる程辛苦した時のやうに矢張りお酒飲みの御良人の爲め胸を傷める奥様もあるやうに見受けますから、良人の禁酒する迄苦心した内幕談を申上げたら又幾分か御參考にもならうかと思ふのです、良人に禁酒を勸めて家庭を圓滿にするのは、妻の天職を盡す道かともと考へますし、一つには良人の酒癖に落膽し世の中を悲觀するやうな心を苟且にも起さず、飽まで誠心を貫かうと云ふ御決心を願ひたいので御座います。

△疑惑の念

「貴郎の禁酒なすつた事を咄して呉れと云ふお方があ

りますが」と良人に申したら笑つて居ましたが、『咄しても宜いだらう、世間には酒で失敗する人は澤山あるし、家庭に迄飛んだ迷惑を逍ぼすから、自分の失敗咄しが役に立てば結構だ』と同意して呉れました。扨斯くは申すもの丶名前迄申上るに忍びませんから夫れ丈は…………。

私の嫁入りしますとき媒妁人が『那の方はお酒を飲らないからお仕合せですよ』との事に夫れは何より嬉しいと思ひましたが、實際嫁緣いて見ますと、嫌い處かお酒には目の無い大酒家でした、併し半年ばかりは愼んで決して杯を取りませんから私は眞實に下戸だと許り思つて御氣分の勝れない時など、御酒の一つも飲れると幾分か治りませうに』と夫れとなくお酒を勸めたことがありました。今から考へますと何故那んな早ない事を申したでせうか、けれども良人は頭を掉つて『酒は嫌ひだから飲まない』と云つて居りました。

處が或日曜日の事でした、遊びにお出たお友達と共を圍んで、夕景から御同伴に出懸けましたが何時になく夜を更かして十一時頃お歸りになりました。玄關へお出迎へしますと足元が蹌踉い許りか、熟柿のやうな息がプンと鼻を突いたので私はハッと思つたが、良人は無言の儘早くも臥戸に入つて前後も知らずお眠て仕舞ひました、翌朝になつても別段前夜の事は伺はず、全くお互に此咄しは出ずに仕舞ひましたが私は不圖疑惑の念が胸に浮んだのは『酒嫌ひの良人が何うして那んなに澤山召上つたらう』と云ふ事です。

△化の皮を顯はす

之れ迄は愼んで居たお酒も、一度訓を破ると最早自暴になると見え、又次ぎの日曜日には泥醉してお歸になり、火鉢の側に坐つてお茶を御所望でしたから、丁度能い機會とお茶を勸め乍ら『貴郎は御酒がお好きになりましたか』と夫れとなくお尋ねいたすと笑い乍ら『實は猩々だよ』とのお言葉ではありませんか、猩猩と云へば御酒が好き位は存じて居りましたから『マア眞實で御座いますか』良人『嘘を吐くものか、此通り良い心持ちで居るぢやないか』私は呆れて良人の顏

を見詰めますと、醉眼朦朧として『俺は跡引で困るがナ』斯う申されましたが、後で考へると之れは御酒を御催促の謎で、氣の利いたお方なら直ぐお燗でもするのでせうが其時は謎が解けませんでしたで何んだか不性不勝にお寢みになりました。

遠慮なく申すとモー之れで化の皮が顯はれたのですから夫れからは良人も憚りなく、酒の御注文をなさいまして、愈々酒屋の御用聞きが勝手へ這入りこむやうになり、酒の惡魔が家庭の親和を亂す緒を開いて、實に情ない事になつて參りました。

△晴着の典物



夫れからは晩酌二合と云ふ規定で、毎日酒屋から二合宛配達して貰ひましたが、驚いたのは二合位ひは少しも平生と異らず平氣なものですから、那時の樣に醉つては隨分召上る事と思ひましたが、其内に二合では不足だから一合增して三合、三合が五合になると云ふ譯です。

斯なると每日配達させるのも面倒だ、二升宛求つて置けと申付られましたが、良人の仰せを背く事もならず、其通りに致しますと、充分に飲めて斯んな愉快はないと喜ばれますがまだ最初の内は之れと云ふ家事向きの不都合もなく夫れに笑

ひ上戸でしたから、怒り上戸よりは宜いと諦めて居つたのです。

　良人がお酒を飲るやうになりましてから、酒の交際が段々繁て、日曜日には申す迄も無く、土曜日の晩や其外平日でもお客には何よりも先づお酒と云ふ事になりました、良人は面白く酒さへ飲れば結構だと云つて居ますが其實茲に一ツの困難が湧いて來て人様に御相談も出來ぬ苦勞の種となりました。

　夫れは外でもありません、酒屋への仕拂ひですが、月々其れが溜る許り、爾うなると酒屋からは嚴重な談判をされますが、良人は役所へ出勤すから、酒屋が何んな事を申して來るか存しませんで、何時も私が辛い思ひを致します、酒屋の方では嚴重に申すやうなものの酒は入れて呉れますから良人も夫れ程嚴しい談判とは思はない様子です、けれども餘り月々の勘定が滯りますので良人に事情を咄すと「夫れは困つた、今に何たか仕やうが夫れ迄衣類でも融通しやう」と月末には良人の晴着を預けて金を借り、酒屋の勘定丈は幾分か返濟したので、漸くホッと息を吐きましたが、又一ツ心配になつたのは晴着の一件です、那れは何したのかしらんと思つて金策の始末を尋ねますと良人は頭を掻き乍ら「ナニ質に入れたのさ」之れを聞いたとき何んとも云はれない淺間しさに良人の顔を見詰めますと、「爾う心配せずと都合さへ付けば又持つて來るよ」斯うは申さるゝものゝ一定の收入より外にありませんから、不足勝ちの經濟では迚も良人の申すやうには參り兼ねます、此の晴着問題は遂に私に迄飛火がして、共に簞笥の底が輕くなり、實家の親達に對し氣恥しい思ひも度々でした。

### △借財と病氣

　酒屋許りの借財でありませんのに、良人は相變らずお酒を止めず、嫁入りして五年目に一人の男兒を產けましたが、酒客の系統には酒毒が子孫に遺傳し、體質薄弱な、精神の痴鈍な小兒が產れ易いと豫て承知いたして居りますから、小兒の體格に就いても一つの心配が殖えたのです、去れど幸に健康でしたが、丁度小兒

が三歳の時に良人は不圖した事から病ひの床に就き、最初は左程とも思ひませんでしたが熱が高く、一週間經つても更に藥の効能がありません、其内に段々病氣は重くなるばかり、お醫者は首を傾げて膓窒扶斯と云ふ診斷が下りましたが、此の病氣は傳染しますので避病院へ送らなければならぬ悲しい境遇に陥りました、夫れでなくとも之れ迄酒の爲めに不義の借財があるのに肝腎な良人には病臥れ搗てゝ又入院させなければならぬ場合で其の心細さは却



却言葉に盡せません。

△二度目の禁酒

膓窒扶斯は輕症でもナカ〳〵油斷のならぬ病氣で御座ますが、良人は全快間際になつて何うしても醫師の見込み通りに癒りませんので醫者は不審に思ひ『酒はお好きですか』良人は此時面目なげに『好きの段ではありません非常な大酒家です』と自白しました、醫師は『道理で病氣が見込み通り早く癒らないが、今後は酒を止めないと健康を

害して全く醫藥の力も及ばぬ樣になります」と懇に酒害を諭されたので、良人も重き病氣にはなつたし、悟る所があつたと見え、斷然禁酒を誓はれ、私も良人の決心を聞き、此上の喜びはないと心に醫師の親切を拜みました。

良人は病氣全快後二ヶ月餘り禁酒しましたが、ナニシロ付いた癖は容易に癒らず、再び持病が出て盃を手に取るやうな譯になりました、是迄は度々御意見もし家事の不如意な事や、お醫者に伺つた酒の害をお咄し仕た事も幾度か知れませんが、折々は酒を禁めやうと仰しやつて下すつたし、今度は大分御辛抱でしたから眞實に禁酒して下さるかと嬉しう御座いましたのに又又飲上るやうな始末では、之れ迄の苦心も水の泡、モーモー決して御意見は申しますまいと全く斷念いたしたのです、其代り爾後佛教に歸依し、總て宗教の道に遵がつて一身一家を愛し、氣を永くして良人の禁酒する時機を待たうと夫れを樂しみに佛法を守つたので御座います。

丁度嫁入りして十年目、或日良人は何に感じたか改めて二度目の禁酒を決行しましたが、夫れから今日迄最早六ヶ年、盃すら手に觸れませんが過ぎにし時の事を思ひ、宗教の感化力は偉大なものだと今でも良人は折々申されます。（完）

## 正誤

本誌第七十九頁櫻井女史米國土産談中『スクールガールの給料、一週間五弗とあるは二弗位との誤り、隨ッて一ヶ月二十弗位云々は相違なり、即ち學婢は日本の食物並に一室を與へて一週間一弗半乃至二弗ハウスオーク又家庭の働きをすれば一週間五弗以上なり云々』と同女史より訂正されたり。

雑報

# 桑港に於ける同胞の迫害

世界文明の華を以て誇る合衆國内の一都市に於て下の如き野蠻的行爲ありとは驚駭の外なし。

五月二十日午後七時半の頃なりき桑　港第八街百二十九番なる獅子洋食店（愛媛縣人河合伊之太所有）の店頭に二三の勞働者立ち塞がりたり間もなく一人の男入り來り恰も食事中なる白人客を呼び出して何事をか私語くやうなりしが暫時して他の客は皆食事を中止して出で行きたり、何事ならんと思ひ居る間に三十名許りの勞働者らしき男店頭に現はれて頻りに街道を往來して洋食店の營業を妨げ若し入らんとする客あれば白人なると日本人なるとに關らず暴力を加へて制止したり依て主人は出て其暴行を訴へんとせしも邊に巡査も見えず且多勢を恐て其夜は其儘營業を中止したりき。

同月同日午後八時に近き頃なりき、豫め用意したるにや大凡五十名許りの勞働者數臺の荷車に昨年の震災に燒け殘りたる石塊煉瓦の類を積み來りて蝟集したり場所はフホルソム街千二百十三番なる馬　蹄洋食店（愛媛縣人中島守三郎所有）の前なり、何事ならんと思ひ居る間に漸次一百餘名の勞働者集り來り先の五十名と合して口笛を合圖に瓦石の一齊射擊を初めたり其勢猛烈當るべからず、爲めに表の窓硝子及び電燈は悉く破壞せられて跡を止めず既にして數名の暴徒食堂内に闖入し來り、恰も厨に逃げ込み居たる白人の客二名を拉し去る日本人の洋食店に行きたるのゆゑを以つて散々に毆打したり、此時同家の給仕人一名驅け寄りて其無法を責めんとしたる刹那煉瓦の破片胸邊に飛び來りて即倒したる儘翌朝に至るまで痛に堪へ兼ねて起床する能はざりき、形勢斯の如し、同家の者は營業を中止し主人中島初め一同擲棄せられたる二名の白人を援けて樓上の一室に身を隱し辛くも災害を免れたりき暴行の全く已みたるは同夜十時過なりしと、

フホルリム街湯屋の暴行　該湯屋は數日前多額の資本を投じて落成せるものにして廣島縣人永本要藏の所有なり、フホルリム一千二百十四番にて恰も馬蹄洋食

店の筋向なり、暴行の初まりたるは十時頃なりと云へば馬蹄洋食店の略ぼ片付きたる頃ならん、火夫は向側の暴行を見るより恐れて奥の一室に縮りゐたるに果せるかな波の寄するが如き人聲と共に瓦石の包圍攻擊初まりたり、表硝子、電燈等悉く破壞せられて其跡を止すめ、暴行の終止したるは十一時に近き頃なりと云ふ。

馬蹄洋食店迫害の慘烈は前記の如し、然るに同夜ヲイオン洋食店に加へられたるは比較的輕少なりしかば翌日又例の如く營業したり、晝の間は何等の暴行もなかりしが夜間大凡六時過ぎに至り例の暴徒と思ぼしきもの漸次店頭に立ち塞がりたり、頓て其數五十名計りとなりし頃頻に左右に往來して出入の客を妨げ若し强て入らんとするものあれば鐵拳を揮つて妨げしたり、追々暴徒の加はるに連れて種々の暴言を吐き剩さへ今にも瓦礫の雨を降らさんとする勢なれば主人は直ちに電燈を消して營業を中止したり、恰も七時頃なりき、此時居合せたる客の白人七名は恐る／＼戸外に出でたるに待ち構へたる暴徒は四方より蝟集し來り滅茶々々に亂打したり、依つて一名は悲鳴を揚げて家内に走り込み同家のものと辛くも厨の隅にて災害を免かれたりき

暴行の全く止みたるは九時半なりと云ふ、

以上の暴行の中ヲイオン洋食店は兩夜とも平常の如く收入無かりしまでにて他には差したる損傷なかりき馬蹄洋食店に至つては前後左右の表硝子のみにても三百餘弗（六百餘圓）に上り（尤も之は保險に附しあり）之は同夜及び今後舊に復して營業し得る迄の日子と收入高を合算すれば優に數千圓に上るべしフホルンム街湯屋も亦同樣なり。

右の通報に接するや桑　港協議會にては直ちに幹事を派し警察署長に面會せしめ適當の保護を求めたり領事館にても直に警察署に警告すると同時に松原領事官補は書記リチヤードソンを從へ桑滿幹事と共に實地視察を爲たり、其結果に依れば慘狀實に言語に絕せりと云ふ、一行は視察を終へ歸途警察署に立寄り署長ダイナンを訪ふて其狀を縷陳し應急の手當を要求したり、然るに同市は過般來電車運轉手の總罷工あり警吏の手廻りかぬる上に平常忽慢不規律なる警察署のことなれば宛然對岸の火災視して深く省みざるものゝ如し、依つて桑　港協議會は直ちに特別巡査を傭ひ今後の警護を爲さしめつゝあり。

# 世界漫遊奇談

私が旅行中にはいろ〳〵の奇談もありましたが、其中で世界旅行者に七八人も出會しました、中にも南米で出會つたのは面白い、それは亞米利加の娘が二人連で遣方が旨いです、娘といつても餘り年若ではありません、相當の年配です、中々娘では遣り切れぬのを大膽に敢行して智利の方を巡歷して紐育へ歸るのです、而して其の旅行記を書いて賣出し其の金で又旅行に出懸けるので、さう云ふ風にすれば旅行は五年でも十年でも出來ます、費用は普通で行けば大變ですが先づ二萬弗ですれ、それか最下等の程度で御座います。

此の旅行中高い山ではアンデスを踰えました、ロツキー山は二度越えました、私が旅行の器具ですか、器具と云ふものは着た儘です、尤も夏着は外に一つ持つて居た、夫れで洗濯などは自分が遣る、長く居る所は洗濯屋に掛けるが暇の無い時は總て自分が遣る、川があれば其處で洗ひ宿屋へ入れば宿屋で洗ひました、左樣氣着け藥は二三種持ちました、キナエンとか云ふやうなものです、短銃は持たなければいけない、尤も短銃を持たないと必要が起つて來るが持つて居ると却て其の必要が無い、私は軍事探偵と間違へられた事もあつた、近くは布哇に行つた時警察署に呼ばれましたが、布哇の巡査は皆土人で無教育であるから日本人と見れば猜疑心を起して幾ら辯解しても信じない、私は署長に向つて濫りた人を疑ふことの不都合を責めました所、どうも濟みません、實は此の地の裁判所や警察署を見て頂きたいのであるとごまかしました、私は又斯う言ふて遣つた、布哇では日本人と見れば軍事探偵の樣に思うが夫では日本人は迷惑だ、日本が若し亞米利加と戰ふ場合があつても布哇に軍事探偵を派遣する必要はない布哇の事は二千年以前にチヤンと相當の觀察が屆いてゐるから今更泥棒を見て繩を綯ふには及ばないといつて冷笑して遣りました。（漫遊者中村直吉氏談話の一節）

# 懸賞小說募集

本誌は左の規程により毎回懸賞を以て普く小說を募る

一　枚數二十枚乃至三十枚（二十行二十字を以て一枚とす）

一　原稿鐵傍カナ付の事

一　賞金は掲載せるものに限り左の等級に應じて呈す

一等　貳拾圓

二等　拾圓

原稿は博文館女學世界編輯局宛の事

一　〆切七月三十日限り

選外原稿は著者の希望により返却の求に應ず

但し郵税は自辨の事

二等　石見國邇摩郡大家村　岡　廣子

等外　さつき女史

今回は一等に上るべき作品なかりしに付き遺憾ながら二等より順に採る事にせり

# 懸賞美文募集

本誌は右の規程により毎回懸賞を以て普く美文を募る

一　美文の種類は廣く天然、人事の各方面に亘り、紀行文、寫生文、日記文、小品文、其他其種類の何たるを問はず文章優美にして觀察の奇警なるものを採る

一　枚數は十枚以上二十枚まで（二十行二十字詰）

一　原稿はカナ付の事

一　賞金は掲載せる者に限り左の等級に應じて呈す

一等　拾圓

二等　五圓

一　原稿は博文館女學世界宛の事

一　〆切七月三十日限り




## 和歌　塚越停春選

（天）郭公をきゝて　　神戸　三日月堂なみ子

またの音は河内あたりにそのかみの
　あはれ説くらむ山ほとゝぎす

評、餘所に聞く人の情に想到して、自家の感想を言外に說く。亦一種の作法。

（地）海上の月　　伊豫　珠川朋子

雲まよふ太平洋をゆく船の
　マストにかゝる夕月の影

評、何等の大景ぞ。

（人）旅の歌の中に　　大阪　磯まさ

舟歌の聲も瀬に下るなり
　刀根の川瀬の夏の曙

評、聲調暢快

### 秀逸

〇〇〇夏　　美作　みどり女

みどりこき葉も生ひしける山の上に月かげ淡し夏の曙

優麗愛すべし。

△〇〇折にふれて　　河内　竹内敬子

をさの音もしめりがちにぞきこゆなり露の玉しく夕顔の宿

窓下布を織りて誰にか寄せむとするぞ。

△〇〇郭公　　滋賀　飛き子

一聲は月に待ちしなほとゝぎす五月雨暗き空に啼なり

△〇〇夏の夜　　前橋　金山秀子

涼風にあめのなごりの露ちりて夕がほ棚に月すみ渡る

何等の好趣ぞ、花下に樂世の民なること知るべし。

、〇〇失題　　越前　島萬壽子

皐月窓ふとなつかしき匂ひして若葉そよぎぬ小雨の中に

△〇〇初夏の歌の中に　　大分　加納豊子

たそがるゝ池の小徑に蛙なきて三日月淡き葉ざくらの宿

下句殊に妙。

△〇〇水邊螢

みだれどぶ螢の影も流れ藻のながれて涼し川づらの宿　　三重　春田のぶ子

清麗。

、〇〇失題

さみだれは道ゆく人に黄昏れて片側町の小路を暗き　　備中　てい子

△〇〇四季戀人

花とこひ螢とこがれ露と消え雪とつもれる我思ひかな　　安房　和田きん子

情思一に何ぞ深き。

、〇〇逸題

心なくて勿忘草をおくりてし昔おもへばはづかしきかな　　伊勢　佐々木らく子

、〇〇折にふきて

つみの身を嫌つはちらふ人もあらんあまりに清く月すむ今宵　　桑名　しげ子

〇〇初夏

またれにし花も何時しかちりはててしのび音もらす山ほとゝぎす　　岩代　吉田千里

、〇〇かいきゆう

何事もむかしとなれば戀しけれかなしかりしもうれしかりしも　　岐阜　松江子

也人情。

〇〇失題

君見れば夏のまひるの極熱に射られてもゆるおもひす胸は　　東京　松本さかえ

結句力あり。

、〇〇逸題

つれ〴〵にまたも御文を取出でゝひとりなかむる葉櫻の窓　　東京　松尾節子

葉櫻の窓の一句春風吹暮の慨を歌ひて、言外に餘情あり。

〇〇逸題

つゆばれのよき朝あけを青葉若葉したゝる森にほとゝぎすなく　　姫路　柳田白百合

〇〇夕立

馬車おともとゞろになる神の雲の下ゆく坂こえの道　　麹町　朝田豊子

〇〇失題

初音よりなほ愛らしく思ふかな青葉の中の鶯の聲　　福井　片山千里

〇〇涼境

川添の我家の夏のすゞしとてしげくも來ます歌の友垣　　岡山　岡上濱子

〇〇夏夕暮

君がすむ里はいつくかしら雲のこゝろにかゝる夏の夕ぐれ　　前橋　宮内りき子

## 佳調

百合

かたぶきて立てるを見れば人知らず物をや思ふ姫百合の花　　神戸　足立あさ子

〇

洗ひ髪の乙女子ふたり行すぎぬ青葉の里の夏の夜の月　　能登　瑞倉すみれ

名所郭公

たち花の香をなつかしみほとゝぎす桂のさとに初音もらしぬ　　近江　植村むめ子

暮春の鶯

けさもまた青葉かくれに鶯の春の行衛を問ひ顔になく　　麹町　鈴田菊子

〇

うらぶれて病みて父母在さずなりて荒海の果に悶絶し身よ　　岩代　菅野廣子

友をたづねて

なつかしき君やいますとをとなへば琴の音涼し夕がほのやど　　福岡　是松英子

逸題

ゆかれては歸りゆるならいぞ父母のめぐみにむくへ世にいます間　　河内　田中入綱子

○

高龍の跡とこしへに君が世を守れとよびてわかれぬるかな　豐前　白川奈美子

○

こもり沼の青藻すべりし月かげになき人おもふ淋しさの夜や　下野　流藻の花

瀧下螢

ぬきとめぬ玉とも見へて白糸の瀧つ岩間をとぶほたる哉　名古屋　清水みさを

○

實香し花のあはひに火ともしておぼろにかすむ春の夜の人　讃岐　香川藤枝

螢

古庭の一むらたかき老松に三日月細く時鳥なく　神戸　科なだ子

○

少さき鉄少さきあるじにたはむれぬまゝごとあそびの春のこみちに　芝　新野壽枝子

折にふれて

旅衣あすたつ君をひきとめて月に別れをおしむ宵哉　肥前　壕野金子

○

夕立にまさるものなし夏の日は花ものかは月もものかは　牛込　平塚白百合

○

人呪ふ寶姫天降ると崑山に金鼓打ては笑や神の子　下野　桑谷德子

雲雀

暮れ行けば芝生のひなもまつらむと野邊に落ちくる夕ひばりかな　越後　すの野好

夏月

乳そへてまころぶまゝに窓押せばはやかたむきぬ夏の夜の月　下總　岩瀬不二野

有明の月を見て

山姫が朝の化粧のます鏡おきわすれしか有明の月　武藏　若林秀子

○

丘の家臺を妙なる琴のしぬ障子開けなばよき人見えむ　青森　小笠原貞子

○

たらちねのはじめたふときおしへ草葉みの露にさかえけるかな　大阪　吉田實德

○

月見草咲く頃日毎野に立ちて物思ふ身を君知るらしも　尾道　中尾みつる

百合

ちりの世を遠くはなれて岩かげにけだかくさけるしらゆりの花　廣島　花綱女

春雨

鳩のなく聲もしめりて入幡山宮路しづけく春雨のふる　武藏　青柳彌生子

小松大人の還暦を祝して

わがゝへる今日をことほく琴の音に小松の風も千代やしらべん　尾張　けい子

雀

鳥さしの吹く口笛にはかられてのきに子を呼ぶおや雀かな　京都　齋藤常子

夏の夜

おぼろ夜にみ歌使ひと出で見ればまきの戸たゝくくひななりけり　小石川　小笹千代子

夕立

まなし子の夢破らしと忍び音に影偏し居れは夕立のふる　北海道　中村小百合

都の君を戀ひて

人しれず思を西の空に走せてうらふれ立てり夕ぐれの窓　岐阜　松枝子

梅の實

五月雨に梅の木の實も色つきぬ花見し頃は昨日なりしを　廣島　友道愛花

扇

時のまもいかで忘れん涼しさにたのむ扇の風なかりせば　名古屋　登子

ほとゝぎす

雲低う五重の𡌛の影かくれ小雨淋しくなくほとゝぎす　韓國　原野みさえ

藤　羽後　波奈子

紫の色かをそへて年々にみぎはにたるゝ藤なみの花

折にふれて　秋田　清花

住みなれし故郷をあとに旅立ぬ濁り勝なるさみだれの頃

なでしこ　和歌山　植木梅子

あさな／＼露おきかふる撫子はおとめのゑまひそのまゝにして

暑中休暇前に　大阪　後閑八重子

母ひとりゐます青葉のふるさとの庭に水遣る日に近づきぬ

郭公　越後　楢　八重子

ほとゝぎす初聲きゝぬなき友のうつしゑ見たる淋しき夕

○　近江　宮城梅子

そぼぬれて手飼の鳩はよりくるよたちばな散りて灑ずる雨に

○　美濃　傍島みゆき

かへし綜へて馬に水かふ賤が家の坂井の上に藤の花ちる

郭公　青山　神代いと子

櫻井の里のあはれをつく／＼と偲ふなりしら郭公のなく

逸題　四坂島　渡邊梅子

梅さくら青葉若葉のしづくこそ花を惜むの涙なるらめ

野に白百合を見て　紀伊　佐田柳子

千草茂る野邊に咲けどもなか／＼に薫りも高し白百合の花

○　神戸　今西操子

さためなき世の波風とたゝかいて漂ふ果てぞいづこなるらん

○　印南郡　愛子

うき事に涙はかれぬさみだれになき父よびてほとゝぎす泣く

○　芝區　松本美枝

横笛は月に流れて池のほとり衣はうすしさゝやきの聲

○　東京　颯家幸子

栗垣の五月躑躅にたちましり紫匂ふ紫陽の花

靄　新潟　山崎玉子

うすくこく靄わたりぬ野も山ゝ峯も小島も見えわかぬまで

妾が家庭　伊豆　土屋孝子

まどひしてむつび語ろう妾が家庭にほゝ笑みもらす夕月のかげ

折にふれて　芝　新野喜枝

むらさめに濡れし柳のかげ清くこぼるゝ露を螢とやみし

○　神戸　綱島幸惠子

初夏や山の香せまる湖添の乳母の家にてほとゝぎす聞く

鏡　大阪　沖ふく子

朝夕にうつしてそみるますかゝみおのが心にくもりなきかと

折にふれ　本郷　英華

月たかく禪寺の木色音冴えて坊醍の水あふ御僧尊し

○　村　子

夕立の名殘は草の葉に止めて晴間涼しくもるゝ月影

梅雨　築地　境いく子

しめ／＼とさみだれさむき黄昏のうまや路をゆく老僧のかげ

○　姫路　中島とく子

霞晴れて露の朝風こぼれくる牧場に清き小羊のむれ

百合の花　駿河　喜代子

里遠き谷間にさける白百合の清きかをりをたれか知るらん

楽しきまとゐ　佐賀　吉岡小芳

初孫の帳祝ひに老人も笑ひとよめくまとゐゆかしき

○
たちられの木打つ庭の垣添ひに今盛りなり夕顔の花
　　　　上州　柳葉女史

五月雨
浮き沈む池の緋鯉は六寸になりける頃を五月雨の降る
　　　　神戸　船戸ゆき子

螢がりを思ひて
桐の葉に渡る凉風袖にうけ、螢がりせし夜中ぞこひしき
　　　　四谷　乙女椿

螢
草ふかきそともの澤のうもれ水よる〳〵みせてとぶ螢かな
　　　　岩代　岩野常子

あわれ月
美し月見ればかなしさ思ひ出とそとうつむけばまた池に見ぬ
　　　　岐阜　白梅子

兼題
我ひとり調ぶる琴の淋しみて亡き君戀ひし十六夜の月
　　　　竹原　宮西深雪子

○
待つ君はつひに來まさで欄干に物思ひ居れば小萩みだるゝ
　　　　伊勢　山路くに子

○
若みどりいよゝ茂れるかしの葉の梢にのぼる夏の月かな
　　　　大阪　雲政

○
とつぎゆく嫁が袂の長きにもつゝみかねらむ今日のうれしさ
　　　　三河　近藤しな

花嫁
美くしき花野を群に巻かれつゝ夢見心地に嫁く乙女かな
　　　　伊勢　山路くに子

○
三とせ昔泣きて別れし此夕君やいづこに何思ひます
　　　　越後　みつゑ

○
たそかれて青柳なびく川おもに靜にやとる六日月の月
　　　　本郷　三宅文

○
　　　　豊後　菅原芳子

おくれげに青風吹きぬほどづきの白き花さく夏の夕ぐれ
折にふれて
　　　　山口　酒白敏子

さよふけていもれぬかてに書よめばあなたの森に郭公なく
兼題
　　　　伊勢　市川露子

五月雨の芭蕉に調ぶ音を高みれさめかちなる我夢路かも
○
　　　　京都　白菊

いさゝ川流れにひるの月見えてみぎはにきよし山ぶきの花
雷
　　　　わかくさ

あなおとろ稲妻はしる黒雲の眞晝を闇にとゞろきわたる
○
　　　　下谷　越村靜子

子やはらかき假が手枕やすらかに稚兒よ船路をよき夢に入れ
○
　　　　近江　宮城梅子

蟲の音の清さに絵具のあまり水こぼす如所なき夏の夜の庭
蛙
　　　　麹町　樺山花子

朧夜の月影浮ぶ門川に聲もかすみく蛙なくなり
折にふれたる
　　　　河内　陸山醴子

へだてなく相見かたりてなつかしき夢やひたすらさめずもあらなん

# 短　文

## 海邊の夕暮

下野　栗谷德子

一日の業終へて今や正に沒せんとするあの夕陽紅の空紅の海山の七分は既に沒し殘る三分それが何とも言へない光景を洋上に現して居る水

に映れる紅光空に輝く金光そが中に風帆白帆の帆揚げて走る時時に急ぐ嗚呼美なる後世の人に見せたきは此の景色なり。(賞)

## 鯉

羽前　谷山たに子

隣りのお吉さんに手傳つて貰ひ。田植の晝飯を運んだ歸り道であつた。近路の田畦を踏れ越えたら。水が巴のやうに動き始めた。氣早なお吉さんはあらつと云ふ間もなく。履物を外して四つ手に取り掩いた。可笑味を忍びながら擦り押へて見たのに。現金掛値なしの一尺と二寸あつた。お吉さんの頓智で獲つた鯉を等分の配當を受けた。晩餐にはお父さんのいゝお笑ひ草となつた。(賞)

## 夕の逍遙

和歌山　植木操子

夕の濱やいかにと、弟を打ちつれ、草葉の露をふみつゝ、濱邊にと辿り行く。行手の木の間に、誰ずらとなく、烟のたなびくは。海士の妻の、ひとひつかれし夫を、なぐさめんとて、ものするにや、いと、いそがはしげなり。心にまかせて、ゆくほどに、いつしか、波打際に出でぬ。月は僅に木をはなれ、渺々たる海上、一面に漲くみちて、波の頭は、黄金の色に輝けり。(賞)

## 夏

和歌山　村田清子

梅雨晴れてまさし、夏となりぬ 障子開き簾を下ろして座すれば 窓外山青く白衣の人往來す 今日初めて蟬の聲を後山に聞きぬ 一聲さやかにして銀鈴を振れるが如し 涼は夕と共に生ず 外に出づれば川に釣る人あり談笑の聲あり笛の聲あり夏の季は始まりぬ。

---

新潟　岸房江子

お父様が戰死なされた時にも泣きなさらなんだ。お母様は氣丈だと人は云たけれども。妾が先月から給仕に出て今月初めて貰た月給。六圓をお母さんの前へ出しました時きに、妾の顔を熟と見て目に涙を一杯ためて居られました。(賞)

近江　安達まき子

雀が屋根の上で大變かしましく鳴きます何か來たのかと急いで庭へ出て見ますと大きな蛇が今にも雀の子を呑まんとして目を光らして居りますそれで大勢の雀が助を求めて居るのです マア大へん誰か來て頂戴と呼びますといち早く弟がかけて來て 姉さん僕が助けてやりますと手早く梯子を掛て上り蛇を棒で叩き落しました 數ちやんお手柄といひますと弟は大勝利と棒を振て居ります 同時に雀もチユーチユーと嬉しそうにちやうど禮をいふやうでした。

## 四季の月

豐前　伊藤不笑

春の月は十六七の田舍娘人に見らるゝが恥かしさに赤らむ顔に袖屏風掩ひしが如く夏の月は二十歳あまりの蓮葉なる女學生 其處彼處と浮かれあるき意中の男に逢たるが如く秋の月は世に鳴亘る名妓わざと聲低めて唄ふが如く みる人聞く人の心々にまかせ置む 冬の月は嚴正なる老女より風教上の談しきくに似たり。

## 庭の散歩

竹原　堂面幸子

春雨の漸く晴れし朝早く、妾と妹の妙ちやんと廣いお庭を散歩したのよお庭には青葉若葉の露おもたげなる樹、池の汀には目さむるばかり白百

合のけだかく咲けろに覺えず、知らず、見とれし折しも後にて、「ア、冷や」と可愛い聲、ふりむいて見れば、妹ちやんが、梅の實を取らんとしたのが、頭からくび筋へかけて露が一ぱい、そして頭のまん中に黄ばみかけた梅の實が一つ。

## 墓前

石狩　小川初子

親ほ去り果れし墓の淺に果しなき懷古の情の亂るゝにかなはぬ其昔偲ぶ折しも「君子、々……おゝ苦しい」と切れ〱に呼びつゞけ給ふ亡き母君のみ髣髴に。身に沁み胸にこたへてはいとゞ狂はしう、など先ちませしぞと、懷しき母上も恨しと斗り目を上れば、冷たき墓標となり給ひし御名すら影を隔る如くにて。

## お嫁さん

岩代　岸野常子

五月雨やめる古池の面。小島隠れの花菖蒲、風なきに一ゆれ、二ゆれ、弄が根に金魚數尾長閑に遊べり。先き程より萱弄うけて餘念なき靜ちやん、あはたゞしう物縫う妾が側に來り、「姉ちやん、アノー赤い金魚は黒い金魚のお嫁さんなの。」(賞)

## 凉み臺

靜岡　是松英子

籬には白い汚れない夕顔の花が咲いて居て、其處に設けられた凉み臺では、今しお爺様が、子供等を相手に、西南の役の戰功話、小供等は皆興に入つて居る、その骨の高いこぶしを、握りしめて、賊を切る眞似をされると、義雄は肩をいからし、精一は膝をのり出して面白がつて居る。三日の月影少さく、彼の森に入るも知らでなほ話はつゞく。焚く蚊遣火の煙もだん〱細うなつて、今に消えそーである。

## 親の慈悲

埼玉　岡浪子

家計困難で有りながら、私に學問をさせて下さる親の慈悲、つく〴〵と有難さが身に浸みます、月々、父上様や母上様が、額に汗を有しつゝ手足を勞して、やう〱に拵へし學資を、送くつて下さるたび毎に、私は恭じけなくて〱有難涙に袖をぬらさぬ事は御座いません、されば、甚麼辛ひ事や、悲しい事にも、辛抱して、一心不亂に勉强し私の目的を貫ぬきし上は身に、たからを付け古郷に歸り、父上様や母上様に厚く御恩報じを致しまする。(賞)

## 早百合

和歌山　山口文枝

研を爭ひし百花の色も、何處へやら、今は只見渡す限り青々として、そよ吹く風も心地克く覺ゆる頃節となりければ、妹の花子と直ぐ裏の山へ新緑の美を賞すべく打ち出でぬ、小暗き許りに生ひ繁りたる、松の木蔭に、暫し息ひて、ふと後をふりむくと、潺々たる清流の傍らに、一本の早百合咲き出でゝ、紛々たり、妹は早くもそれと、かけよりて、最早、手をふれんとするを見て、妾はあわたゞしく、おしとゞめぬ、どうしても妾は此可憐なるしかも貞々しい、姿の花を、無情にも、折り取る事が、出來なかつた。(賞)

## 橘花の香り

和歌山　山口文枝

騒がしかりし、桃櫻の美も、夜中の風と、散り去せて、青葉がくれに、若

鶯の名残惜しげに、鳴ふ頃など、何となう、あわれに戀しく、聞ゆる折柄、時を得顔の柑橘は、雪かと斗り咲き出でゝ、紛々たる香氣滿山に充ち、賤が伏屋の屋内にまで、床しき薫り、込め薫り、降るとしもなく、降る春雨は、さながら、香水の降り來りしとも、見えて床しく若し之花の盛りに、東風の吹くあらば、淡路の島の海岸まで、此薫風を送るとは彼地の人の、云ひ傳へなりとかや、實に此花程清く香ばしい、花はありますまい、遍く、天下の諸姉よ、果實は至る所に、販賣すれど、香花を未だ御存じのない、方は多いでしやう、どうか、紀洲蜜柑の花盛りも、一度御覧なさつては如何です。(賞)

## 滊車の乘合

河内　田中八須子

或る滊車の乘合に、四十前後の男が、あなたはどの邊の御方ですとの尋ねに。河内牧方ですと答へました、すると最と得意氣に、牧方に寺川といふ醫者が居りますネ。ヘイ居りますが御存じですか。知つて居り升とも、アノ醫者昨年私の家内の病氣に診ひましたが、隨分横柄な人の割合に、見立も下手なら、匙も廻らぬ本當の藪醫者ですネ、との言葉にヘ、そうですか、あれは妾の……と半ば言はぬに忽ち變る男の顏色。(賞)

## 思ひ出

大分　加納豊子

昨日の事でした不圖古簞笥の底から思ひ掛もない、私の生れました時亡父の拵へて下すつた一つ身の初着、永年の間何處にどう藏つてあつたか解らなかつたのがひよつくり出て來ました。げに思出多い此衣服ーア、もう夫から足掛十八年最早り物懷り懷しい お顏に私を抱いて下すつた亡父様も亡り 私も又希望に滿ちた青春の貴年を空しく病んで徒に運命

の手の弄ぶに任せて居る今日此頃嬉しい昔の此初着のみ無事に今迄殘つて居やうとは。(賞)

## 金魚

神戸　小林瑞枝

たーちやんが秘藏の金魚、今朝も亦水かへやらんとて取り下ろせば、二つともみまかり居たり。あはれなりし儘花園の片隅に埋めやりつ。花など手向くれば、「叔母さま、金魚を埋めておいたらまた金魚が生えるんですれえ」と。

釣るせし球には藻のみ殘りて若葉の軒端淋しくなりぬ。

## 首夏逍遙

尾張　けい子

妾、閑なる一日野路を辿りき、さすがに空氣の清げれば、樹々の緑滴らんづ若葉の夫よりも己が心のせい〲たるを覺えつ。と見れば左手に小川の清く澄みつるに何れの人にや破れ帽子頂きて魚をつれるもをかしく、そこ此處に蓮華草のいと可愛らしう春の跡を止めて咲き匂ふは、麗はしき紺青の天つ空との彩りよろし、右手は一面の畑、大麥小麥扨は裸麥等の我が身の丈程に伸びて穗のよく實れるは國の富むべき徴なりかし、蠶豆、油菜は青々として花の白に黄に咲き盛れるあり散れるありて、うれの寂らあじろの如くはた疊を敷けるが如く縱に横に、其間に男女の睦まじげに何やらん語らひ合へるは夫婦の樂しふ胸を明しつゝあるなめり、道の傍なる豌豆花、白赤打交れて美しき事いはん方なし、軸のいとゞ肥え太りて莢の數多附きゐるを老婆の出でそが中のよく實れるを選び〲て、もぎ取る事二ッ又三ッ、午餐に孫の笑顔を見んとて甘く味つけ與ふべき物ならめ、遠近に蛙の友よぶ聲聞ゆるもまた一だんの風情

な追へつ。あゝげに天然の美……、姿は言ひしらぬ感興にうたれつゝしばし恍惚として案山子とさし向ひしまゝに立ち眺めき。（賞）

## 螢狩

浅草 市村たか

螢こい〳〵そつちの水はかーらいよ、こつちの水はあまいよ。あら向の水にとまつたわ兄さんはやく。あーとんでしまつたわ。そらそこへ行つたじやないか、だれか取つちやつた。ぼちやん。やつだれかおちた。あらだれだろう姉さん！こゝにいてよ兄さん！僕なんか落ちるものかい。あじやーだれ。わしだ〳〵あらまあ一番おちるものかと威張てきた德ちいやだわ。

## 寸間の喜び

宇都宮 安達みさを

待つて居た女學世界今私の許に配達されました、開くも遲しと繙けば、どうでせう幸にも當つてるので御座いました、然も一等に、何と私は幸運兒でせう、お母様私に何がいゝでせう、博多帶がいゝでせうか。金指環がいゝでせうか、と云ふてると弟や妹が何時の間にか、私を圍んで、サア姉さんおごりなさい……。幸ちやんには紅色の幅二寸のリボンよ……四ツになる弟は英ちやんには靴とケンとラツパと買つて頂戴いよ子、二人が思ひ〳〵を並べてる間、シャリと考へて居た八ツの弟僕には自轉車がいゝや……と、全くこれには閉口！德ちやんのはあまり大き過ぎていけないわと、云へば、姉さんは當つたら何でもおごると云ふたんだもの、だから僕は毎朝學校へ行く時、お宮へお祈りしたんだよ、とは何と云ふ可愛らしい言葉でせう……と弟のを握手ろーとしますと、机上のランプに庇が焼かれてチリ〳〵と臭い匂ひがしました、氣が付きますと自分の今の喜は女學世界を枕にした、うたゝ寝の假に結んだ夢に過ぎなかつたのでした。

## 三輪田夫人

女子教育界に其人ありと知られたる三輪田元道ぬしの令夫人勢以子の君は肋膜炎にかゝりて、去月十二日其靜養地なる鎌倉の寓所に逝りたまひぬ、經へて十七日葬儀を青山なる式場に於て神式もて營まれき、會する者日頃の知人、教育界の人々無慮數百名、君が淑德に富ませたまへりし事は皆人の知るところ、病めの病とは言ひながら、幼き愛兒を捨てゝ斯く世を早めたまひしは猶惜みてもあまりありと、知るも知らざるも涙催ふさゞるはなかりき。

## 謎々

◎印は入賞

▲「銀貨の縮少」「長い手紙」「亂れた家庭」とかけて、

△銀……門閥の零落と解く、心は落栄(落貨)が殖れる　京都　藤田　靜枝

◎手……當世紳士の心中立と解く、心は委妻(詳細)につくす　同　人

△銀……すり込んだ紙と解く、心は實來(實價)が疑はしい　京都　たつ女

◎手……田舎芝居と解く、心は幕(卷く)に手間がいる　同　人

△亂……陶淵明と解く、心は菊に忍びぬ　失　名

△銀……里芋と解く、心は大きくても小くても値(根)は一つ　京都　宮島　一枝

◎亂……遠州灘と解く、心は始終波風が立つ　乙女椿

△銀……傷病兵と解く、心は實戰(十錢)は取のこまる　福岡　麻生　はる

◎銀……女の洋行と解く、心は暫くはたよりない　大阪　磯　政

△銀……物知顔する人の演說――、心は時々間違ふ事がある　下谷　井上　孝子

△手……論語と解く、心はいわくが多い　新潟　岸　房枝

◎手……うへ木屋と解く、心は種を入てかく　麻布　池田ゆり子

△銀……里方の零落ととく、心は身がつまる　下野　愛花女史

△手……みだれた家庭と解く、心は泣き言が多い　伊豫　谷川しづ子

△手……大阪の夏祭の遊び事と解く、心は將棊(縞枝)が多い　失　名

△手……小學の新入生と解く、心は今日は何曜(用)かしらぬ　越後　阿部　常子

◎銀……松王の首實檢と解く、心は檢めて見てうなづく　臺灣　大橋　眞雲

△亂……皐月ととく、心は降つたり照つたり　羽前　谷山たに子

## 來月の新題

「イルミネーション」とかけて

「美人の午睡」とかけて

「ビール」とかけて

## 一口噺

◎印は入賞

△嫁の考　青森　三浦　愛子

母「お前の亭主の氣質の善いには誰も感心してるが背が低いのは玉に疵だね」

嫁「アラおつかさん、私は背が高くて月給が低いのよりか、背はなくつても月給の高い方が好きですわね」

◎あわてもの　後志　黑澤　鳳子

一人の若者巡査の傍へ走り來り「只今年頃のぐりぐりした三十ばかりの目玉の、男を背負つた紺の風呂敷が走りませんでしたか」

消へぬ電燈　大阪　磯　政

奥樣「おさんや電燈を消したかへ」山出しの下女「なかなか吹いても消へませんでした」

蒔いても生へぬもの　下總　麗　子

母「花子や庭へ水をまいて頂戴な」花子「私もう蒔くのはいやですよ、いくらまいても何にも生へやしないもの」

白髮三千丈　岡山　濱　子

甲「隨分長い髮もあつたものだね、白髮三千丈とは」

乙「君それは頭の髮を皆んな繋いでの事さ」

時計の音　越後　石黑　ゆり

日本の時計とロシヤの時計とは音が違ふよ、なぜといつて、日本のはカツメ／＼と鳴るし、ロシヤの方はカメン／＼と鳴るぢやないか」

のぼせ屋　大阪　森　せん子

「姉さん今度の女學世界の夢二さんの畫はみんな眼付がわるいですねえ」
「それは大方木の芽立の時分にお書きでしたからそれでのぼせ眼なんだらうさ」

一口飲　　臺灣　大稻埕　眞零

甲「君このビールを一本息繼がずに呑んだら僕が其の代金を拂ふがやつて見ないかね」
乙「よろしい息繼かず呑んで見せる」とビール罎に口をつけて中分ほど呑んだ時「君こゝで一寸息をさせて呉れないか」
甲「息をしちやいかんぢやないか」
乙「よろしいそれぢや息をせずにやらう」といつて呑み盡してしまつた。

◎犬馬の勞　　上總　直枝子

息子「おとうさん昔の武士は軍に強かつたけれども其心は禽獸と同じかつたのね」
父親目を丸くして「何、馬鹿な事をいへ」
息子「だつてね、此本には君に犬馬の心を盡すと書いてあるぢやないかね」

蛙は蟲の藥　　失名

母親「あれ御覧なさい、坊はいけませんよ、蛙をつかまへてお藥を拵へて居りますもの」
父親「これ／＼そんな事をしてはいけない」
息子「でもおつかさんが蛙は虫の藥だと言ひましたものを」

## 萬物智慧くらべ

忠臣藏｛ピラミツト。決死隊。紙の財布｝｛酔漢。白虎隊。雪の梅。｝
紫式部｛寫眞小説。色紙。すみれ。｝｛藤の花。白粉の廣告。｝
金鵄勳章｛神武天皇。長壽庵。花嫁。涙。｝｛鬼の首。肉彈。天狗の羽扇。｝

## 來月の題

△統計表　△華厳の瀧
△避暑　△朝顏の花
△螢

## 米國の女大學

米國に於ては女權の發達に伴ひ自己の妻に對する父母の權利すら殆んど恃むべからざる勢ありて女子の主張は益々不實用的に趨むの傾向あり米國の一雜誌は此種教育法について左の如く勸告せり。

一、女は食物を調理することを學ぶべし
二、ボタンを縫付くることゝ自己の衣服を洗ふことは自己の手にて爲すべし
三、パンを燒く方法は是非學ぶべし
四、一弗は百仙なることを知り結婚後は亭主の收入と自己の出費とを計算すべし
五、借金を以て衣服を造るは恥辱なりと知れ
六、強て美人ならんとし肺病患者らしき姿せんよりは「健全は美人なり」との原則を忘るる勿れ
七、買物を爲す時に一個二個を爭ひながら無益に香料を費消する一弗二弗が金なるを知らざるの恥なりと知れ
八、一仙の財産なりとも[illegible]なる男子は百萬の富ありて一日を安樂椅子に暮す男子より貴きを知れ
九、音樂と畫と文學とは結構なれどもパンの方が大切なりと知れ
十、然りと否とは正直に云へ女の然りは否か或は「眞の然り」なるかを再考せしむべき不正直を知れ
十一、車行より步行の利益なるを知れ
十二、結婚は金と體裁とより運ぶべからず相手の眞價を知れ
十三、以上のことの出來ぬ妻は結婚後男子を苦しむる荷物にして已れは男子に嫁ぐ榮を得ざる不幸者と自覺し人道の爲め一生獨身にて哀れなる生涯を送るべし

# △人事活斷▼

石龍子

△深山のとし子へ——婚姻は其家と爲すに非ずして其人と爲すことなれば其人死したる後は必ずしも其家に行かねばならぬ義務無し、然れども貴女が獨身にて一生を終らんなどは面白からず、今年中を待つて來年早々他家へ緣附かる可し。

△玉の浦女へ——出產期は九月の中旬で男兒生るゝの卦見ゆ、けれども良人の目的は來年に非ざれば達し難し。

△深川伺度女へ——貴女の望は可なり、されば赤誠を籠めて御兩親に歎願せらる可し、赤誠の爲め遂に望を達することを得るなり。

△秋野の千草女へ——貴女は秋の紅葉なり、紅葉の樹は花として一顧の價値無きも萬木皆枯れ萎む時に至つて錦を飾る樣は到底他の及ばざる所、然れば行末を樂しみ、決して悲觀し給ふ勿れ。

△想夫つま女へ——貴女に子なきに非ずして良人に無きなり、良人若し快活なる樂天的の生活を營まるれば必ず二三人の男女生るゝや必せり。金圓借入の件は甚だ面白からず、若し纏まらば後日必ず禍來る可し。

△急婚女へ——貴女が望まるゝ所の人と縱ひ結婚せられても先方は貴女を愛せざるの結果を來し、貴女が望まざる人と結婚せられなば却て綢繆纏綿の情全かる可し、此心を以て婚を求むれば一年を出でずして幸運續々來るの兆あり。

△龍理一女子へ——見知り居らるゝ人即ち軍人の方を可とす、何となれば易斷の上は措置き古今の通則に依ても年長の人を夫とせらるゝこと道に協ふが故なり。

△とこなつ子へ——正義の勝つて邪惡の破るゝは天理の然らしむる所、然れば高潔なる御身等二人の樂しき家庭は五年を出でずして來る可し、何をか悶へん何をか歎かん。

△金子淸女へ——軍人の方は炎々たる猛火の燃え上るが如く、辯護士の方は數步の田地の旱に逢へるが如し、

而して貴女は一桶の水に似たり、前者に注げば功無く、後者に灌げば大に利あり。

△花ふゝき女へ‖貴女の御心は帶に短かく襷に長し的なり、之を長くせんとするは難けれども之を短かくして用に立てんとすれば事甚だ容易なり、故に此心掛を以て再婚を求められなば、三十四五の年輩なる商人と良縁あつて末甚だ樂しかる可し。

△南海の二十四女へ‖良人の意志は薄弱なる所あれども貴女を愛する情は深し、貴女は意志强けれども良人を疑はるゝの嫌あり、故に貴女は赤誠を籠めて仕へらるれば和氣藹々として福壽圓滿行末目出度かるべし轉業は必ず失敗の兆見ゆ。

△播磨のゆかり女へ‖糞地へ薄き板を蓋ひ其上に土を被せてあるをも知らず貴女は之を踏んで陷れるに似たり、我身の爲め人の爲めを思ふならば茲に糞地があるぞと大に叫んで其の醜を暴白するを可とす、然るに己れ之に陷りながら又蓋をして唯私かに己れの陷れるを喞つは大道を辨へざるものゝ處置なり、滔々たる世間の濡衣者は皆此の趣あり、余は貴女の手紙を讀みて切齒扼腕すること之を久うす、飽く迄も其の冤を雪いて再び入學せらる可し。

△長野縣の住人雪子へ‖結婚當時に仲善く暮さゞりし人が後に他人よりも一層緻密なる情合になる例尠しとせず、然れとも之は一方に於て捨てざる所あるが故に、其誠遂に通じて雙方相感ずるなり、然るに良人は貴女を虐待し、貴女は良人を怨み、互に厭で／＼ならぬ同志が相逢うてゐらるゝことなれば、日を經るに從ひ益々不幸の淵に沈まるゝこと鏡にかけて見るが如し如かず今の中に斷然退いて身を全うし、今を昔に語る時を待んにはそれとも貴女にして良人を感化せんとする勇氣有りや、恐らく無いでせう。

△麹町常子へ‖懺悔は罪を滅す唯一の德なり、懺悔せざるときは何時までも心の曇は除かれず刻一刻も早く其罪を詫びて曇り無き平和の愉快を得られよ、良人は益々御身を愛せらるゝこと火を見るよりも明かなり、一刻遲るれば千秋の悔あり。

△葉櫻女へ——貴女は一家の柱にも礎にも譬ふ可き身なり、而して今現に養子たらんとする方も亦接吻までなしたる人も皆其柱を折つて其家を覆さんとする所存が、縱し今在らざるも後に必ず生ずるの危き兆あり、然れば御身家を思ひ弟を思はるゝならば今七八年の間、男子とは假令親戚たりとも言葉一つ交へぬ位に身を固め、弟の獨立すべき時に至り堂々と他へ嫁せらるべし、年の行くを少しも掛念し給ふ勿れ。

△中國環子へ——尋ぬる人の乘れる汽車が將に出んとする姿なり、一刻も早く婚を結ばる可し、此の期を遲るれば好機再び得難し、早く〳〵。

△四日市心配女へ——波荒き渡場の船に乘れるに似たり、身を騷がず心を沈着にして居れば僅かの時間に安穩なる岸に到着す可けれど、悶へ騷げば船忽ち顚覆して身も亦危し、貴女にして此の道理を悟り平々淡々以て良人に仕へらるれば日ならずして安樂なる昔日の境遇に復するなり。

△悲しき現身女へ——既往は如何ともし難し、唯前非を悔いて其人を思ひ切り、今二三年を經つたる後、正正堂々たる媒介者を得て結婚する覺悟あるべし、此心にならるれば却て先方より御身を慕ひ來るなり。

△多里禮苦女へ——御身の心配は、恰も將來に天災があつて無慘の身になるかも知れぬと恐るゝ杞人の憂に似たり併し若しも其の天災否秘密の知らるゝ場合に遭遇したらば其時にこそ堂々と理由を辯明して若し聞き入れられずば佛の爲に盡すなり、尼になるなり、そは其時の處置で、今より心配す可き程の價値は斷然なし、此心になつて悠々身を處置せらるれば秘密の洩るゝことも亦決して無し。

△やまと愛讀者へ——毎度言ふことながら易道の奧義は正義なるが故に吉、不正なるが故に兇と判斷するに過ぎず、然るに糟糠の妻を去つて情合の冷たき者を迎へんとするは後に必ず禍あるを免れず、貴君の良心に訴へて如何と考へ給ふか。

△不幸落涙女子へ——互に意志の疏通せざる所より一時中絶するに至りたれど、再び確かなる媒介人に依頼

して平和克復の道を計らるべし、之を爲すこと早ければ早き程目出度けれど、貴女及貴女の御兩親が少しにても理を爭ふ心あらば纏らず、負けるは勝の諺は今や應用す可き時なりと知り給へ。

△大坂のぶ子へ――活斷に問はるゝよりも寧ろ「衞生顧問」に尋ねられた方が然る可しと信ず、醫師の說に依れば精神病は十中八九まで遺傳するものなりと、然れば之を避けて他の方と結婚せらるゝを吉とす。

△西海の一女へ――陰地の二木枯れんとす、故に之を日光の能く照す所に移せば繁茂するの卦なり、此卦に依れば御身等は遠地に移轉せられなば幸福從ふて來る可し。

△大阪須賀子女へ――惡氣未だ去らざるの兆あり、然れば來年四月より出席せらるゝことこそ望ましけれ。

△京橋失戀女へ――貴女の心底が先方へ通せざるが爲めに先方は左程に思はぬなり、故に堂々たる媒介人を以て先方へ貴女の意志を通せらるれば遠からずして琴瑟の調和實に目出度かる可し。

△賀津良女へ――獵人が同時に二鳥を獲んとする卦なり、一鳥を獲ば必す目的を達す可けれど、二鳥にては到底成功し難し、貴女は此卦に從ひ進んで裁縫のみを專修せらる可し、好運次第に來るや明かなり。

△芳子へ――敵軍は我の後方を襲はんとするの趣あれば進んで擊つよりも退いて守るに如かず、故に御身は此の心掛を以て良家へ見習奉公をなし居らるれば來年の夏頃には吉報頻りに至る可し。

△奧山のうもれ木女へ――天は正義に與するものにして正義に從へば暫時の艱難有つても他日の幸福は疑ふ可くも有らず、然るに貴女は不幸にして良人に死別れたりと雖も二人の遺子あれば何處〳〵までも之を養育するの義務あり、而して御實家は資產に豐かなり、然れば御兩親も亦貴女をして二子の犧牲たらしむ可きが正義なり、兩夫に見ゆるは敢て不德には有らねども、子無き者及び貧苦に迫れる人の巳むを得ざる道なり、貴女よ〳〵此の全文を御兩親に御目にかけて、養子或は他家へ再緣の事夢々有る可からず、終りに石龍子は

赤誠を籠めて一言申します、「草葉の陰に居らるゝ良人は如何せば喜ぶかと」御良心に考へて何事も處置せられたいと、嗚呼天は正義に與するものなり。

△信濃松子へ‖前者と同じく正義に依て判斷すれば何人も合點し得らる可し、何をか正義と云ふ、曰く國家の大法に從ひ、人間の常道を踏む可しと、果して然らば御身は弟の成長せらるゝまで家に在りて父上及び弟妹を世話し、然る後他家へ緣附かる可し、年の行くを毫も掛念し玉ふ勿れ、父上も亦四人の子女あれば繼母を迎ふるの必要更に無し、況んや資產有りて僕婢を自由に使はるゝ御家なるに於てをやです、此の全文を父上に御目にかけて能々御相談ありたきものなり。

△本鄕ふじ女へ‖三年間別居して再び相逢ふの策を取らる可し、夫は貴女を愛せざるにあらず、貴女も亦良人を惡しと思はざる可し、貴女〳〵よ赤誠を籠めて此議を良人に訴へられよ、人は木石に非ず必ず其赤誠に感ずるものなり。

△野州花子へ‖谿間の水の流るゝが如き卦なり、高きに遡らんとするは不可能にして低きに就けば遂に洋洋たる大海に注ぐ可し、御身も此心になりて御身の家よりも寧ろ以下の家に緣附かる可し、將來必ず幸福を得らるゝこと水の大洋に入るが如し。

△もだへ女へ‖障害は外に非ずして內に在るの兆あり、御身は神明に誓つて一點邪惡の念を挾ます、心をして平和春の如くならしめ、婚姻の事を一切念頭に浮べざるを可とす、浮べざれは却つて今年の暮御身の家と同職なる人と結婚有つて長へに目出度きなり、三度離緣云々の易は更に當らず。

△男の聲　生田葵山著

現時の文壇に嘖々の世評ある葵山氏の短篇數種を集めたるものなり、和蘭皿、鳩飼ひ、想はれ人、其他いづれも描寫の巧、妙と想の新たなるとを以て、一特色ある上品文なり、消夏の好讀物として推奬するを吝まざるものなり。（定價六十五錢　博文館發行）

# 福引當籤の披露

△六月十五日當り籤番號を發表してから同廿七日までに到着した籤數は約七百本に及びました其氏名は別表に記載してあります。

△景品は御指定の通り三越呉服店を始め其他有名の商店數ヶ所へ委托しそれ〴〵調達して小包につくり去月廿八日第一回分發送致しましたから御請取の方は御手數ながら御一報を願ひます。

△猶當り籤御持の方は至急に御送附を願ひます、品物を、調達するのに籤がまち〳〵では大變に手數がゝかりますから成可く一時に調達したいと思ひます、就ては右規限を左の通りに致しました。

▲内地は　八月三十日限り

▲臺灣、滿韓其他は　十月三十日限り

右期限を經過したものは乍殘念無効と致します、故に、當り籤御持の方は右の期限内に御送附を願ひます。

△景品中一等二等に書き出してある品物は豫定の値段では迚も買ひ求むる事が出來ないので、中には七八圓から十圓近くの代金を拂つたものがあります、實價の有る無しは右品物の到着次第正札を御覽になればよく分ります。

△一二等が既に豫定の價格に超過しましたから三等以下の物品も矢張り價を上げねば比較が取れませぬから自然豫定價格よりも二三割方はよい品が撰んでムいます、そこで總體の價格千圓と豫定したのは實際千四五百圓もかゝる事になりました、これは皆樣が多年愛讀の好意に酬ひるつもりでムいます。

△猶品物は御指定通り大概調達しましたけれども數多き物品の中に就て二三種は其店にて品切となつた物もあり、又其價格よりも數倍を要する物などがあつて調達上困難なものが二三種ありました、是等は價格を少し増して似寄の品物を買ひ求めましたから何卒其おつもりで願ひます。

# 福引當籤氏名披露

## 壹等

△節糸織 名古屋上園町 松木はな子
△奉書紬 大阪東區餌差町 北村靜江
△絹張洋傘 大阪北久寶寺町 奥田はる
△懐中時計 大阪泉北郡神石村 板原すみれ
△伊勢崎銘仙 東京麴町飯田町 酒井けい
△縞セル 東京下谷花園町 牧山治
△大島絣 越前敦賀郡敦賀 增田つれ
△博多帶皮 美濃關町 篠島みゆき子
△博多帶皮 仙臺同心町 伊藤香子
△金指環 靜岡縣田方郡韮山村小川いし子
△奉書紬 群馬縣澁川町 岩井はる
△縞セル 北海道小樽量德町 杉山八重子
△縞セル 大阪南區鍛谷四光町 五井久子
△女持懐中時計 東京牛込早稻田鶴卷町 小泉菊藤

## 貳等

△メリンス友禪 松山市唐人町 光野マス
△秩父縞 北海道岩内町高臺 原谷澄子
△絹張洋傘 下總古河町 關ふさ子
△メリンス友禪 茨城縣稻敷郡生板村 具峰たま
△秩父縞 高松市丸龜町 北村清子
△秩父縞 山口縣豐浦郡長府村内藤しつ子
△置時計 長野縣上田町 比田井しづ
△メリンス友禪 長野縣上田原町 伊藤いさ
△秩父縞 神戸市橋町 脇坂政子
△絹張洋傘 岐阜縣海津郡高須町 岩岡くら
△手風琴 橫須賀市小川町 酒井きく
△秩父縞 群馬縣山田郡相生村 森田親一
△新御召 筑前國若松町 梅村とよの
△夏ショール 越後南蒲原郡田上村 諸橋榮子
△木カシミヤ 東京府下大森町 北條みさを
△秩父縞 北海道函館青柳町 入谷はる
△秩父縞 東京京橋區茅場町 島田にへ子
△置時計 東京四谷區南寺町 服部たか子

## 參等

東京 稻木直吉▲廣島 齋藤賴子▲尾張 福山千代子▲東京 永島郁江▲東京 中川きみ子▲兵庫 岡本照子▲女持洋傘 大阪岡井藤子▲橫濱 竹内香代子▲指輪 大分縣 安藤アヤ子▲靜岡 寺松傳助▲淺草 森川英子▲淺草 飯田鐵子▲群馬 關とく▲下野 北山しげ▲栃木 吉川キヱ子▲韓國 池田クン子▲新潟 土田哲子▲福島 山田マス▲東京 田波鏡子▲東京 原正一▲北海道 久保田廣一

## 四等

東京 梅澤てい▲橫濱 東井りやう▲橫須賀 海老原エツ子▲大阪 中村弘治▲岡山 桑田治一▲兵庫 武田つま子▲東京 深川すみゑ▲神奈川 岡野しづ▲函館 大竹ハツ▲神田 福井喜兵衛▲東京 渡邊文子▲大阪 藤田松三▲神戸 高野かすの▲神戸 森田環▲兵庫 平林房子▲大阪 母田好次郎▲京都 戸津りよ▲山口 藤岡一峰▲靜岡 江河しげ▲奈良 二宮まき▲橫濱 小西たれ▲東京 玉井よし子▲千葉 武井いそ▲長崎 松崎ツ子▲信濃 川路房子▲新潟 柴野順子▲東京 勝田花子▲仙臺 龜ハマキ▲千葉 清水忠次郎▲佐賀 橫尾文千代▲橫濱 三輪みな子▲佐賀 上田キン子▲山形 磯部よし子▲下總 古谷新藏▲茨城 小林ギン▲大阪 永田春子

## 五等

東京 三坂章子▲石狩 佐こと▲北海道 神八ル▲東京 根岸榮▲東京 入舟小學校▲東京 平井貞子▲東京 莊野きの▲福島 綾部春▲東京 星とう▲但馬 下村かう▲千葉 飯坂のぶ▲愛知 水野恒子▲京都 渡邊藤七▲大阪 宗ヒデ▲石川 山岸美代吉▲兵庫 園賀メケ▲北

海道、池田テイ▲大阪 糸若柳枝▲神戸 木村
この▲京都 森よし子▲滋賀 井上しづ▲横濱
加藤初榮▲靜岡 根つよ子▲伊勢 廣田久次郎
▲澤村すみ▲龜スヱ▲四谷 矢野きむ子▲靜岡
若杉しづ▲神奈川 青木いさ▲群馬 厚木たけ
▲東京 深澤りき▲新潟 水島いくよ▲福島
橋本シノブ▲東京 成瀬とき▲仙臺 千葉わく
り▲長野 林しげ▲越後 富澤きん▲島根 若
林てい子 東京 藤田安子▲神奈川 加藤惣四
郎▲福井 下山きくえ

## 六等

北海道 村山千代子▲東京 三木英子▲東京
河野梅子▲東京 山崎敏子▲但馬 尾崎誠子▲
山口 中原幹▲三重 中津原重太郎▲京都 福
島シゲヤ▲大阪 池田谷ロ子▲北海道 吉澤マ
ザ▲北海道 布川ユキ▲京都 大橋房子▲播磨
高松トキ▲大阪 小松榮▲三重 村田遊戯子▲
千葉 安田きせ▲東京 秋本澄子▲靜岡 由良
玉枝▲伊豆 三須梅子▲山梨 矢崎よし▲東京
多田きく▲山口 多記信子▲東京 大木常▲横
濱 納崎あさ子▲千葉 島光なを▲千葉 藤木
小吉▲東京 土方とら▲東京 加藤豐▲越後
高橋るだ▲佐賀 矢野春江▲熊本 田尻喜彦▲
秋田 齋藤みよ▲東京 大柿とく子▲兵庫 大
谷華▲青森 高屋かよ▲新潟 桐田貞害▲長崎
小島井レン

## 七等

横濱 田中花子▲愛知 川村みれ▲愛知 桑田
靜枝▲新潟 若槻とみ▲廣島 尼子シヅカ▲東
京 金子佐枝▲東京 中野ふみ▲東京 稲垣よ
れ▲長門 松井タメノ▲東京 松木夏子▲神戸
清水末松▲淡路 服東キシヱ▲愛知 松井てふ
▲名古屋 伊藤輝子▲富山 内山ゆき子▲富山
櫻井圓子▲和歌山 道本ナヱ子▲丹波 正木文
助▲京都 深尾平次郎▲京都 中道和三郎▲大
阪 橋本あい▲北海道 渡邊みよ▲三重 中川
久兵衞▲北海道 清水吉藏▲伊豆 岩崎やす子
▲東京 川端ツキ▲石川 兒玉みつ▲新潟 安
藤ちよ子▲岩手 長野まき▲信濃 毛利典一▲
三重 水野きさ▲伊勢 杉本信太郎▲長野 竹
村けん▲岩代 木村芳▲長野市 中澤すい▲福
岡 武田濱子▲東京 谷合みき▲新潟 石津ま
さよ▲新潟 入田信太郎▲福島 西千代子▲長
野 北澤京子▲福島 高野梅▲栃木 村山せい
▲松岡 國井久次郎▲東京 中村りやふ子▲遠
江 平倉しづ

## 八等

横濱 坂本夏子▲東京 小川みよ子▲長野 宮
川あやじ▲名古屋 知波みい▲函館 貝堅よし
▲東京 岸本しん▲千葉 大木たつ▲東京 加
藤みな▲東京 宮崎きみ▲京都 鬼歌路子▲廣
島 長井梅子▲東京 加藤村木店▲東京 熊田
信▲大阪 山田清▲京都 中村ちさ▲近江 水
つれ▲大阪 小松虎三郎▲福井 渡部久子▲神
戸 古川米三▲神戸 千代子▲北海道 安達み
よ▲伊勢 黑川はつ▲京都 福井米子▲横濱
横山ちみ▲加賀 藤なを▲安藝 爲房直子▲越
後 大隈のぶ▲東京 小川たか▲東京 高橋せ
い▲福岡 我富あい▲廣島 溫田内▲福島 松
崎りき▲東京 細坂君子▲伊豫 白石登▲山口
吉富とよ▲東京 織部たよ▲東京 西島きみ
▲熊本 中村たま▲埼玉 大津もと▲青森 盛
田とら▲山口 田中春子▲武藏 栗原とよ▲福
岡 鵜飼てい▲千葉 菱沼わり子▲東京 今村
ふじ▲長野 矢守直平▲福島 島津やす▲茨城
橋本きん ▲新潟 阿部瑞枝▲福島 星野ゑ
よ▲横濱 加藤すみ▲東京 大迫廣子▲兵庫
下村なか▲門司 吉田つる▲山梨 矢崎範平

（以上六月二十七日までに到着の分九等以下省略）

# 八月號記事豫告

八月五日發行



來月の誌上には奇拔な懸賞の繪さがしがあります

---


## 毎月五日發行

### 定價表

一冊(紙數二百八頁)…金二十錢
四冊(三ヶ月分)……前金七十五錢
八冊(半ヶ年分)……前金一圓四十五錢
十六冊(一ヶ年分)……前金二圓八十錢
内(定刊數……十二冊 增刊四回…一、四、七、十月價格同一)

郵税 一冊 二錢

### 廣告料

| 二十四字詰 | 特等 | 一等 | 二等 | 三等 |
|---|---|---|---|---|
| 一行 | …… | 五十八錢 | 五十錢 | 四十二錢 |
| 半頁(卅二行) | 二十圓 | 十七圓 | 十四圓五十錢 | 十二圓 |
| 一頁(六十四行) | 四十圓 | 三十三圓 | 二十八圓 | 二十三圓 |

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

### 註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ





明治四十年七月五日發行　第七卷第拾號

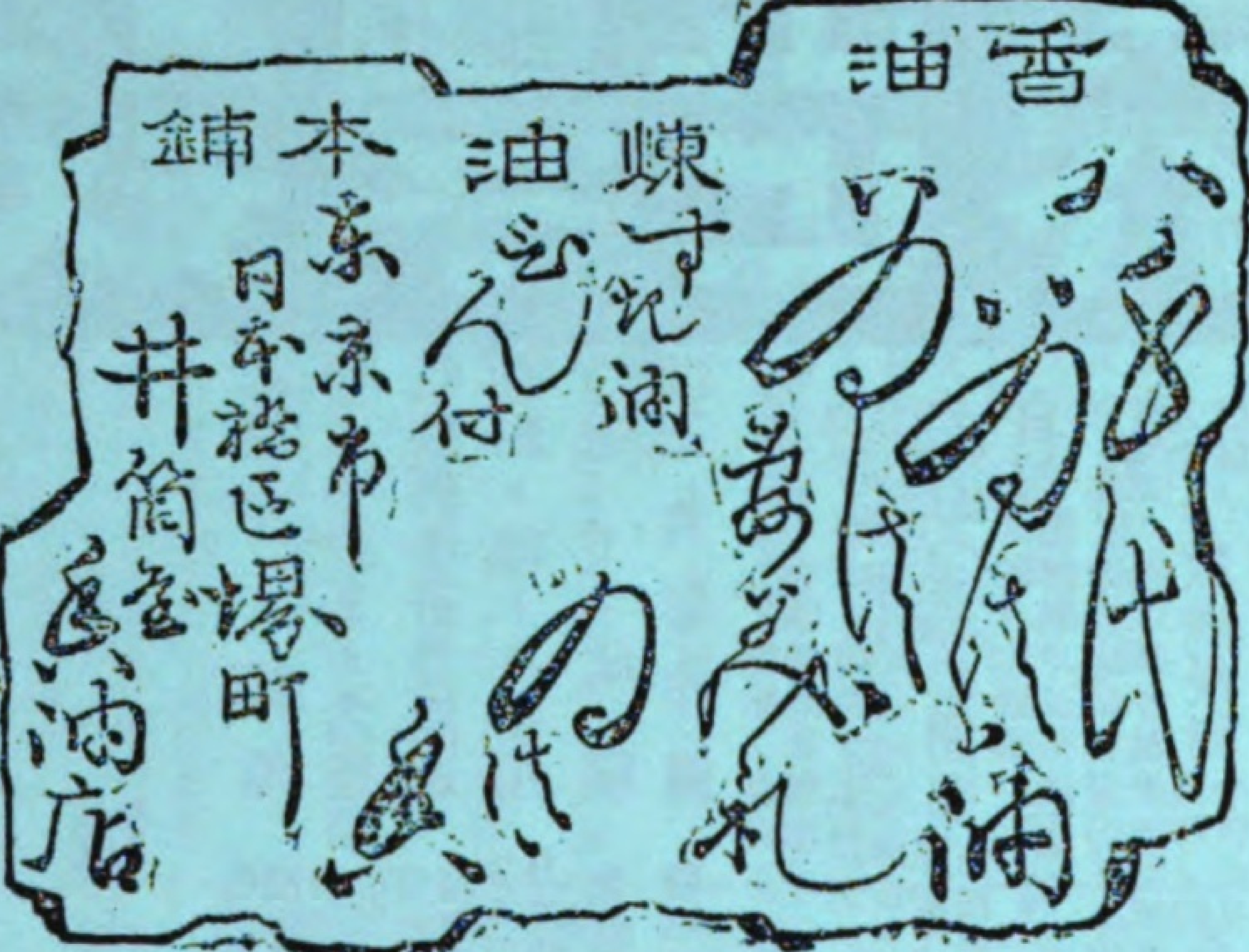
編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番



香油
煉油
本舗

(後付の二)

# 英語世界

▲第壹號四版

▲每月一回五日發行

年刊十二冊菊判紙數六十四頁
每號寫眞版及密書數頁挿入

## 第一號要目

發刊の辭
講讀＝▲英國史談…熊本學習院教授▲ウンベルト王…南日學習院教授▲名家逸話三則…増田早稻田大學講師▲笑話三則…深澤由次郎
講話＝▲英文中の否定語に就て…佐久間東京高等師範學校講師▲アルハベットの話…岸本早稻田大學講師▲英語と英文…畔柳第一高等學校教授
遊戲＝▲ベースボール用語…安部早稻田大學講師
發音及綴字＝岡倉東京第一高等師範學校教授
詩歌＝▲ラングテニスン等の名作評釋…太田太陽英文記者
時文研究
會話＝▲子供の對話▲會話資料…東京帝國文科大學講師アーサーロイド氏
文法及作文◉名家訪問◉懸賞文募集
口繪 ○第一高等學校並新渡戸校長○ケンブリッヂ大學○世界に於ける英語分布地圖
寫眼版 ○神田男爵の筆蹟○英國皇帝の肖像○ラングの肖像○其他英學名家の肖像九面

## 第二號要目

▲英國史譚…熊本學習院教授▲伊國在鄕兵ウンベルト王を迎ふ…南日學習院教授▲輪講會…長井氏最▲フース大將の演説▲英語を學ぶ心得…高島高等商業學校教授▲Alphabetの話…岸本早稻田大學講師▲發音及綴字…岡倉高等師範教授▲英習字を學ぶ心得…磯部國民英學會長▲詩歌評釋…太田文學士▲解釋練習…増田早稻田大學講師▲會話：ロイド文科大學講師▲桂月回顧錄英譯…武信早稻田大學講師▲野球用語…安部早稻田大學講師▲懸賞文二種▲日常用語（博覽會語彙、▲和文英譯…武信早稻田大學講師▲英和語法叢話…喜安雅太郎▲言葉の使ひ分け▲Dictationの練習▲時文研究▲英國新兵の滑稽談▲訪問（高商教授村井知至氏の會話熱達法）▲雜錄（英語會評判記、編輯餘錄）▲新刊紹介▲讀者と記者
口繪 東京外國語學校及高楠校長。エール大學。
寫眞版及木版彫刻畫 ストウンヘンジ―龜井戸の藤―高島捨太氏肖像―堀切の菖蒲―三高對早稻田野球試合―博覽會―共進會―ブース大將――村井知至氏肖像―早稻田英語會――慶應義塾同上―新兵練兵漫畫

## 第三號要目（既刊）

口繪 オックスフォード大學―第二高等學校及中川校長
寫眞銅版 熊本學習院教授―高橋ジャパン、タイムス記者―日比谷公園―ウォーターシュート―桑港南岸―オックスフォード端艇競漕―田植―シンガポール植物園―ポンチ畫二枚
▲英國史譚…熊本學習院教授▲異聞百種…深澤姫路中學教諭▲英譯桂月回顧談…武信早稻田大學講師▲輪講會…長井記者▲Alphabetの話…岸本早稻田大學講師▲英吉利の風俗…平田東京高等師範教授▲Rudyard Kiplingの詩…片上天弦▲會話（電車）…高橋ジャパンタイムス記者▲對話（臆病者は誰）…きし▲英詩評釋（ひかり）…熊本學習院教授▲同（小鳥の歌）…太田文學士▲解釋練習…増田早稻田大學講師▲受驗參考英語の公式…佐川正則英語學校講師▲日常用語（試驗語彙）▲英和語法叢話…喜安璉太郎▲言葉の遣ひ分ケ…S.K.▲時文研究▲萬年筆…長井青郊△懸賞文披露▲懸賞文課題▲雜錄▲新刊紹介

▲第貳號再版

▲正價金拾錢　郵稅壹錢

前金 十二冊金壹圓拾錢　六冊金六拾六錢外要郵稅

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（後付の三）

## 家庭整理の指導

當代第一流の女子教育家編著



# 家庭百科全書

全部五拾册——每月一回發行

和裝頗美本　◎紙數三百頁　◎石版彩色口繪一葉・挿畫十數個

△定價一册金四拾五錢——郵稅八錢

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、輙もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概ね理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過るか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須ゐざることながら、人ことに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は、最良なる家庭教師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

發兌元　東京

# 婦女必讀の大全書發行

## 第一編 新家庭訓

三輪田高等女學校長 三輪田眞佐子女史著

## 第二編 四季料理

宮中臣民兩流料理師範 大日本割烹學會々長 石井泰次郎君著

●緒論●春の巻みの字盡料理○春の西洋料理○豆腐と煉みそ○茄子料理○鷄卵料理 ○神武天皇祭料理献立●夏の巻蠶豆料理○鮎料理○南瓜料理○松茸料理○紅葉づくし料理●秋の巻栗料理○近江八景料理●冬の巻天長節料理○この頃の料理○紀念戰事料理献立○新年重詰拵方●附錄一月節の取合せ○二月節の取合せ○三月節の取合せ○四月節の取合せ○五月節の取合せ○六月節の取合せ○七月節の取合せ○八月節の取合せ○九月節の取合せ○十月節の取合せ○十一月節の取合せ○十二月節の取合せ○料理の名品○料理の習學法○日本料理を誤解したる事○第一料理を心なしに云ふ人○第二料理敎師を選む心得○第三家庭料理を習ふ時の心得

## 續刊

### 裁縫指南

女子高等師範學校敎授 喜多見佐喜子女史著

### 和洋菓子製造法

東京治庖會講師 龜井まき子女史著

本町 博文館

巖谷小波君 金子紫草君共編 全部拾貳冊

# 少年世界讀本

◎定價一冊金貳拾錢
▲郵稅四錢
●六冊金壹圓拾錢
●十二冊金貳圓拾錢
▲外に要郵稅

每卷紙數百四拾頁＝各國領地々圖及國旗、帝王旗、軍旗等の彩色刷一葉◎寫眞版數十挿入

口繪には國旗、帝王旗、軍旗、皇室、宮城其他。並に英國領地の地圖

再版

## 第一卷 英吉利

◎英吉利へ行くには幾日かゝるか
◎世界で何程の領地があるか
◎英吉利の皇室は何うか
◎何ういふ風に治められて居るか
◎軍港は何處にあるか
◎何處が偉いか
◎何うして國が富むか
◎陸軍は何うか
◎何んな學校があるか
◎何故英吉利を海上土と云ふか
◎英人は世界に幾何散つて居るか
◎英吉利人は何が好きか
◎各國との商ひの樣子は何うか
◎どんな國か
◎何うして之を自分の物にしたか
◎倫敦はどんな所か
◎一年に幾何の費用がいるか
◎英吉利には何が出來るか
◎海軍わいくらあるか
◎英國の少年敎育は何うか
◎英吉利の領地の有樣は何うか
◎上流の子弟は何をして居るか
◎英吉利の怖れるのは何國か
◎東洋では何をして居るか
◎何故日本と同盟したか
◎此後何をしやうとして居るか

(後付の六)

女，後付の七）

既刊

中學世界定期增刊

# 學府の東京

第十卷第八號

全一册洋裝菊判　正價貳拾錢　郵稅貳錢



▲敎育思想の發達、並に劇甚なる生存競爭の結果は、わが東京の學海をして一代の盛觀をなさしめたり。まことにこれ研究の絕好題目にあらずや。

▲數個の公私大學、十數個の各種專門學校、更に數十個の男女中學校を包藏せる東京は、今如何なる狀況を以て廻轉しつゝあるか。又數十萬の男女學生を容ひつゝある東京は今如何なる色彩を以て發展しつゝあるか。

▲即ち、學校の東京に及ぼす影響、學校の種別、學校の實質價値、敎育者の生活狀態等より、施ては學生其物の種類、思潮風俗、生活、嗜好苦樂の微に至る迄、凡て學海に關する事項は、一つもこれを洩すと云ふことなし。

▲附錄には學界十數名家の「現代學生觀」もあり。

▲乞ふ其努力を見よ。

發兌元　東京日本橋本町三丁目　博文館

# 恐るべき腦充血を根治す

◉神經をしづめ數年難治の腦病を全治す

腦病にて平常逆上し通じ惡く精神鬱ぎ●●●目かすみ耳鳴り不眠等の病症●●●めまひ、腦充血、腦膜炎を患ふる頭痛人又婦人血の道にて逆上する病症

神經症にて僅かな事を案じ過ぎ其れが爲め腦を痛め搐搦等を起す病症

逆上一切に用ひて數年不治の難病を全治する世界唯一の良劑なり

## 腦病全治新藥




偽物あり此商標に注意

◉健腦丸は實業家官吏神經家投機家學生僧侶其他常に腦髓を勞する人持藥として少量宛を用ひ賜へば胃を健康にし腦を強壯ならしめ血液の循環を能くす殊に大酒家には缺くべからざる藥にして婦人子宮病にて逆上する病症に用ひて大効ある既に實驗患者の熟知する所なり論より證據二三週分を試よ

◉本劑の販路盛大なるを羨み類似藥を販賣するものあり御購求の節は上部の商標と丹平商會名義に御注意をこふ

◉特約所は全國到る處の藥舖に取次販賣せり

◉本舖への御註文は郵便爲替又は郵券代用一割增の事

◉健腦丸は常に少量宛持藥として連服すれば逆上を引下げ殊に中風卒中を未發に防ぎ身體強壯となるは健腦丸特有の効なり

藥價表

| | 五週分 | 三週分 | 貳週分 | 壹週分 | 三日分 |
|---|---|---|---|---|---|
| | 金貳圓 | 壹圓廿五錢 | 八十五錢 | 四十五錢 | 貳十錢 |
| 郵送料 | 十錢 | 十錢 | 六錢 | 四錢 | 四錢 |

丹平

本家 大阪心齋橋八幡筋南 電話東特九百〇一番 丹平商會本店

支店 東京日本橋區箔屋町 電話本局六六七番 丹平商會支店

女學世界
(明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可)　第七卷第拾號　(明治四十年七月五日發行每月一回五日發行)




(定價金貳拾錢)

**監修**
小山静子　KOYAMA Shizuko
**京都大学大学院教授**

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版53
明治40年6月（第7巻第9号）、7月（第7巻第10号）

2008年12月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3508-0　C3321